源氏物語主要人物の紹介

…　源氏物語を彩る　十人の男と　十七人の女たち　…

１．光源氏　…Ｐ．２．

２．桐壷帝　…Ｐ．１２

３．朱雀帝　…Ｐ．１８

４．右大臣　…Ｐ．２４

５．頭中将（内大臣）…Ｐ．２９

６．夕霧　…Ｐ．３５

７．柏木　…Ｐ．４２

８．八宮　…Ｐ．４８

９．薫　…Ｐ．５４

１０．匂宮　…Ｐ．６３

１１．桐壷更衣　…Ｐ．７１

１２．藤壷　…Ｐ．７６

１３．紫上　…Ｐ．８４

１４．六条御息所　…Ｐ．９３

１５．葵上　…Ｐ．１０２

１６．朧月夜　…Ｐ．１０７

１７．空蝉　…Ｐ．１１４

１８．夕顔　…Ｐ．１２１

１９．明石君　…Ｐ．１２８

２０．玉蔓　…Ｐ．１３５

２１．朝顔　…Ｐ．１４３

２２．女三宮　…Ｐ．１４８

２３．末摘花　…Ｐ．１５６

２４．花散里　…Ｐ．１６４

２５．大君　…Ｐ．１７１

２６．中君　…Ｐ．１７８

２７．浮舟　…Ｐ．１８５

別項　脇役の人々　３１人

（光）源氏　（ひかる）げんじ

A．源氏の生涯

第一部

＊　誕生…桐壷帝の第二皇子として誕生。母は、桐壷更衣。（「桐壷」）

＊　三歳…母の更衣は、帝の余りにも厚い寵愛に、後宮女性の嫉妬迫害を受け、病を得て、死去。（桐壷）

＊　高麗人の観相。桐壷帝　光君に「源性」を賜り　臣下に降下させる（「桐壷」）。以後「光源氏」あるいは　単に「源氏」と呼ぶ。

＊　桐壷更衣に　瓜二つといわれる藤壷、後宮に入内。源氏、義理の母に　思いを寄せる。（「桐壷」）

＊　十二歳…元服。左大臣の娘　四歳年上の「葵上」と結婚。気位の高い葵上には、なかなか馴染めない。（「桐壷」）

＊　十七歳…「雨夜の品定め」。頭中将・左馬頭・藤式部丞らと　女性論を交わす。翌日「方違え」の為に訪れた紀伊守の邸で、「空蝉」と契る。（「帚木」）

＊　「空蝉」の奥床しさに惹かれた源氏は　再び紀伊守の邸を訪れたのだが、「空蝉」は、薄衣を残して逃げ去る。源氏は、「空蝉」と間違えて「軒端荻」と　契りを交わしてしまう。（「帚木」）

＊　病身の乳母を訪問した源氏は、隣に住む「夕顔」に　心を惹かれる。身分の違いを憚って　素性を明かさずに通う。（「夕顔」）

＊　ある夕方　源氏は「夕顔」を、「某の院」に連れて行くが、「六条御息所」の生霊かと思われる物怪により、「夕顔」は　頓死してしまう。（「夕顔」）

＊　十八歳…瘧病の治療の為訪れた北山で　藤壷とそっくりな少女「若紫」と、運命的な出会いをする。この少女こそ　後の「紫上」その人である。（「若紫」）

＊　病気の為　里に下がった藤壷を、あろうことか、源氏は　妊娠させてしまう。**「おほけなき物語」第一話の始まり**。（「若紫」）

＊　源氏、自分には「三人の子供が授かり　それぞれが、帝・中宮・太政大臣になる」という　夢占いを聞く。**物語ゆかりの夢判断**。（「若紫」）

＊　源氏は、育ての親である祖母を亡くした「若紫」を、理想の女性に育てるべく、関係者に断りも無く　密かに　自邸に引き取る。（「若紫」）

＊　貧しい中にも、品位を失わない　常陸宮の娘「末摘花」の暮らしぶりに　心惹かれた源氏は、契りを交わす。ある冬の朝　ふと見た彼女の　醜貌にすっかり驚く源氏ではあったが、その後も　生活の援助は　続ける。（「末摘花」）

＊　「藤壷」は、源氏との不義密通の子を　出産する。後の冷泉帝である。（「紅葉賀」）

＊　源氏は　宮中で、老いた女房の「源内侍」に想いをかけられ　頭中将と　滑稽な　恋の鞘当騒動がある。（「紅葉賀」）

＊　桜の宴の夜、政敵方の右大臣の六姫である「朧月夜」と　出会う。相手の素性を知らぬままに　契りを結び、扇を交換する。（「花宴」）

＊　「朧月夜」と再会した時には、相手が　東宮（後の朱雀帝）の許へ　入内する身　と知ってはいたが、惹かれる気持ちは　止められない。（「花宴」）

＊　「祭の帰さ」見物の混雑の中で、「源氏」の冷淡さを恨む「六条御息所」と、「葵上」との　車争いがある。「六条御息所」の　自尊心を傷つけたのでは、と　心を痛める源氏であった。（「葵」）

＊　源氏と「葵上」は、ようやく　長い冷めた夫婦生活から開放されて、心を通わしはじめたが、「葵上」は長男「夕霧」を出産した直後、「六条御息所」の生霊により、急死してしまう。（「葵」）

＊　理想の女性として　育ててきた「若紫」が、美しく成長した。新枕を交わし　結婚生活に入る。（「葵」）

＊　「六条御息所」は、源氏への　愛の未練を断ち切る為に、新たに　斎宮に選ばれた娘（後の　前斎宮女御・梅壷女御・秋好中宮）と共に　伊勢に赴く。「野宮」での別れ。（「賢木」）

＊　桐壷帝が崩御し、政権は、朱雀帝の外戚である右大臣家に移る。源氏は　いよいよ不遇の時代を　迎えることとなる。（「賢木」）

＊　源氏は　未亡人となった「藤壷」への恋慕の情に堪えきれず　藤壷の部屋に侵入、強引に関係を迫る。「東宮の　真の父親は　源氏である」ということを　世間に知られる事を恐れた「藤壷」は、皇太子の後見を　源氏に依頼し、突如　出家してしまう。（「賢木」）

＊　尚侍として出仕した「朧月夜」と　源氏との密会を知った右大臣から、事の次第を聞いた「弘徽殿大后」は、激怒し、源氏の　宮中からの追放を画策する。
　このような情勢を見　静かに判断した源氏は、自ら　須磨に退去する事を決意する。（「賢木」）

＊　二十六歳…愛する人々に　別れを告げ、須磨へ退去する。貴種流離譚である。（「須磨」）

＊　「弘徽殿大后」の権勢に恐れをなす人々からの手紙も、途絶えがちである。こうしたなか、頭中将は　わざわざ　須磨にまで会いに来てくれる。このような頭中将の友情に　源氏は　感涙に咽ぶのであった。（「須磨」）

＊　暴風雨の夜、父桐壷院が、夢枕に立ち、「早々に　ここ須磨を立ち去れ」と告げる。翌朝　同じような夢を見てやって来たという「明石入道」に請われて　明石に移る。（「明石」）

＊「明石入道」に懇願され　愛娘の「明石君」と結ばれる。「六条御息所」に何処となく

似る「明石君」に、次第に心が傾いてゆく。（「明石」）

＊　夢の中で、桐壷院に睨まれた朱雀帝は、以後　目を患い、ついに　源氏に　帰京の命令を下す。（「明石」）

＊　二十八歳…「明石君」を残し　二年ぶり　京の土を踏む。（「明石」）

＊　朱雀帝が譲位し、冷泉帝が即位する。源氏は、帝の後見として内大臣となり、一門は　政界に返り咲く。(「澪標」) **物語ゆかりの夢判断の実現、その一**

＊　「明石君」が　女児を出産する。源氏は　例の夢占いを思い浮かべ「将来　后になるべき女の子」と　密かに思う。(「澪標」)

＊　帝が代わって、斎宮の任を終えた娘と共に帰京した「六条御息所」は、「係累のない娘には、手を出さず、面倒を見て欲しい」と　遺言して　急逝する。(「澪標」)

＊　源氏は　多忙の中、「末摘花」の邸前を通り過ぎようとして、俄かに　訪問し、生活の困窮にも拘わらず　ひたすら　源氏の帰京を待っていた彼女の一途な純真さに　心をうたれ　面倒を続ける事を　心に決める。(「蓬生」)

＊　石山詣での途路、逢坂の関で　東から帰る　空蝉一行と再会、歌の贈答がある。(「関屋」)

＊　「六条御息所」の娘（前斎宮）に　思いを寄せていた朱雀院の意には添わないけれど、藤壷入道宮と語らって　冷泉帝に入内させる。前斎宮女御・梅壷女御（後の秋好中宮）である。(「絵合」)

＊　絵合わせがある。梅壷女御と弘徽殿女御との争いである。どちらも名画を揃えていて、勝敗が着かない。最後に　源氏が　須磨で描いた絵日記が　披露されて、梅壷女御方の勝ちとなった。源氏の絵を眺め　涙を流さない者は　居なかった。(「絵合」)

＊　源氏は、明石を出て　嵯峨の大堰の山荘に移ってきた「明石君」と再会。「明石姫君（後の明石中宮）と　初めて対面する。将来、后とするには、「明石君」の身分の低い事が　気にかかるのであった。(「松風」)

＊　源氏は　「明石君」を　心安からず思う「紫上」を　宥めつつ、明石姫君を、彼女の許で、幼女として育てることを　相談する。「明石君」も　娘の将来を考えて　手放すことを　了承する。(「薄雲」)

＊　重病に陥った「藤壷入道宮」は、見舞いに訪れた源氏に、看取られながら　死去する。(「薄雲」)

＊　冷泉帝は、ふとしたことから、自分が　源氏の実子である事を知る。源氏への譲位をも匂わすが、源氏にきつく誡められる。(「薄雲」)

＊　源氏は、少年時代から　思いを寄せていた「朝顔」が、父を亡くして　斎院を退いたのをきっかけに、再び　求婚するが　断られてしまう。（「朝顔」）

＊　源氏は、子息の「夕霧」を元服させる際に、学問、特に漢学の才を身につけて欲しい　との願いから、身分不相応に低い、六位という位を与え、世間を驚かす。（「乙

女」）

＊　梅壷女御が中宮（秋好中宮）となり、源氏は、太政大臣に昇進する。（「乙女」）

＊　源氏が　新しく造営した　六条院は、源氏・「紫上」を始め　「花散里」・「明石君」の住居となり、更に「秋好中宮」の里邸ともなる。（「乙女」）

＊　内大臣（頭中将）と夕顔との間に出来た娘（玉蔓）を　どうにかして見つけて　と源氏が考えていたやさき、女房の右近が、偶然　初瀬参りの折に　玉蔓一行に巡り合い、六条院に　迎えとり　養女とする。(「玉蔓」)

＊　源氏は、玉蔓に　恋文を贈る　貴公子たちを　煽て煽りつつも、自分の恋情を告白もし　玉蔓を困惑させもする。(「胡蝶」)

＊　源氏は　玉蔓の「髪上げ」の際　腰結の役を　「内大臣」に依頼する。その際　「玉蔓」は　「内大臣の　行方不明になっていた　実の娘である事」を　知らせる。(「御幸」)

＊　「玉蔓」は、冷泉帝の尚侍となることが決まっていたが、「鬚黒大将」が　強引に妻としてしまう。(「真木柱」)

＊　かって　「内大臣」によって、仲を裂かれてしまった、「夕霧」と「雲居雁」が、ようやく許されて　結婚する。(「藤裏葉」)

＊　「明石姫君」が、東宮（後の今上）に入内する。**物語ゆかりの夢判断の実現、その二**。源氏は「紫上」の意見を入れて、「明石君」を「明石姫君」の後見役とし　親子の再会をさせる。(「藤裏葉」)

＊　三十九歳…准太上天皇となり、臣籍を離れる。兄の朱雀院と　実の息子の冷泉院とが　揃って　六条院を　訪れる。六条院の栄華は　この上ないものとなる。(「藤裏葉」)

第二部

＊　病身の兄朱雀院を見舞った源氏は、娘の女三宮と　結婚して欲しい　と懇願される。母を失った娘を思う父朱雀院に同情したのと、更にまた「女三宮」が、今も　恋しく思う藤壷の姪であることに関心を抱いたのとで、結局は　承知せざるを得ないのであった。(「若菜上」)

＊　四十歳…「女三宮」と　正式に結婚する。「藤壷」とは、似ても似つかぬ　幼い「女三宮」に失望した源氏は　「紫上」への愛を　より確かなものとするのであった。(「若菜上」)

＊　「明石女御」が今上帝の男子を出産する。源氏一族の栄華は、極まりない。（「若菜上」）

＊　かねて　「女三宮」を妻に　と望んでいた「柏木」は、六条院で行われた　蹴鞠の遊びの最中に　ふとしたきっかけで、垣間見た「女三宮」の可憐な姿に　すっかり

心を奪われてしまう。(「若菜上」)

＊　「女三宮」の降嫁によって、正妻の座を奪われてしまった「紫上」の心中には　穏やかならざるものがある。ひたすら　出家を　と望むが　源氏が許すはずもない。(「若菜下」)

＊　朱雀院の五十の賀に先立ち、「紫上」・「明石女御」・「明石君」・「女三宮」による女楽が行われた。その夜　心労の溜まった「紫上」が　倒れる。(「若菜下」)

＊　「柏木」は、「落葉宮」と結婚していたが、垣間見た「女三宮」のことが忘れられず、源氏の留守中に忍び込み　「女三宮」と密通し、その後も　たびたび密通を重ね、とうとう懐妊させてしまう。**「おほけなき物語」第二話の始まり**。(「若菜下」)

＊　「紫上」は、病状が悪化し、危篤となるが、加持祈祷によって　奇跡的に恢復する。源氏は「紫上」を苦しめたいたものが、「六条御息所の死霊」と知って　愕然とする。「紫上」の願いを聞き入れて、五戒を受けさせるのであった。(「若菜下」)

＊　源氏は、「女三宮」が　妊娠したと聞き　不思議に思う。そして「柏木」が「女三宮」に宛てた、恋文を発見し、実は　柏木の子だと知る。自分を裏切った「女三宮」を　疎ましく思う源氏であったが、かって　自らも　義母「藤壷」を懐妊させ、父親の桐壷帝を　裏切った事を思い出して、因果応報の　恐ろしさを実感する。(「若菜下」)

＊　源氏は、「女三宮」に　冷たい仕打ちをせざるを得ない。朱雀院の五十賀の試楽の日には、酒に酔った振りをして、「柏木」にも、痛烈な皮肉の言葉を浴びせるのであった。「柏木」は、良心の呵責から　遂に　病に臥す身となってしまう。(「若菜下」)

＊　「女三宮」は、やがて　男子を出産する。「薫」の誕生である。(柏木)

＊　出家を望む「女三宮」を　源氏は、彼女への未練から許さない。出産後の「女三宮」を見舞った　父親の朱雀院は、娘から懇願されて　出家をさせてしまう。こうした突然の出家も、実は「六条御息所」の死霊のせいであった　と知った　源氏は、彼女の執念の深さを　恐ろしいもの　と　しみじみ思うのであった。(「柏木」)

＊　源氏は　「柏木」が亡くなった　との知らせに、「薫」を抱いて、「わが父　桐壷帝も、あるいは、「藤壷と自分との不義密通を　知っていたのではなかったのか」と、因果応報の感慨に　深く耽るのであった。(「柏木」)

＊　源氏は　息子の「夕霧」が　大切にしていた横笛を、どうするべきか相談され、いずれ「薫」に渡すこととして、預かることにする。「夕霧」は、更に源氏への謝罪をとりもつよう遺言された　と語るが、源氏は、「夕霧」が　この「おほけなき事件の真相」に　気づいている　とは思いながらも、何気ない風を　装うのであった。(「横笛」)

＊　「女三宮」主催の持仏開眼供養の折、源氏は、「女三宮」に対して、未だに執心し未練を残している事を語り　彼女を困惑させるのであった。(「鈴虫」)

＊　「明石中宮」が見舞いに訪れた際、「紫上」は、俄かに　病状を悪化させ、翌朝　死去してしまう。源氏は、「紫上」長年の願いを叶え、せめて亡骸をも、出家させようと思い、「夕霧」にその事を　依頼する。(「御法」)

＊　「紫上」の葬儀を終えた源氏は、改めて　出家を　と望むが、妻と死別した　悲しみの余りの出家では　と、世間のもの笑いになることを憚り、今少し　時を経てと思う。(「御法」)

＊　「紫上」の死後　人前に出なかった源氏ではあったが、「紫上」の一周忌も過ぎ、いよいよ出家をしようという直前、仏名の日に、人々に会う。以前と全く変わらない姿に　人々は　改めて　その美しさに感動する。(「御法」)

＊　源氏は　出家後　数年して　逝去した。(「匂宮」)

B．源氏のモデル　…古注釈以来　多くの歴史上の人物が指摘されてきた…

＊　高麗の人相見によって　帝王の相があると観相された挿話。

光孝帝…渤海の大使から、将来の即位を予言される史実にちなんだ　とする「河海抄」。

大津皇子が、新羅僧の「臣下にとどまるべき相にあらず」という予言を信じ、謀反に及んだ「土方洋一」。

＊「光源氏」の名。

仁明帝の皇子　臣籍に下り右大臣に至った　源　光　を連想させる「明星抄」。

＊　六条院。

源　融の河原院をモデルとしている「河海抄」。

＊　須磨明石までの源氏の生涯。

醍醐帝の皇子　源高明の生涯に酷似する。…多方面の才能に恵まれ、左大臣にまで昇り、安和の変で失脚して　大宰府に流された「河海抄」など。

＊　流離を強いられた高位の人物

菅原道真・小野　篁・藤原伊周　なども　源氏に通じる。・・・「花鳥余情」など。

＊「文王の子、武王の弟」のフレーズ（賢木の帖）。

桐壷帝の子であり　朱雀帝の兄であることの自負、周公旦についての記述からとられた「河海抄」。

＊　源氏と同様に　皇統の血筋をひく貴種で　須磨に流離した人物。

在原行平…「須磨」の帖の本文にも「行平」への言及がある。

弟　業平も、王権に関わる禁忌を犯した点で　源氏に似る。

＊「乙女」の帖…「良房の大臣と聞こえける、いにしへの例になづらへて・・・」「白馬の節会」を　行った、と　あること。

＊「御幸」の帖…冷泉帝の大原野行幸に　太政大臣源氏が同行　の記述。

藤原基経が　光孝帝の行幸に供奉した例を典拠とする「花鳥余情」。

＊　**帝位に就くことなく「院号」を受けた。**

草壁皇子・小一条院の例「河海抄」など。

＊　**即位はしなかったが、理想的帝王像を具えている。**

聖徳太子「河添房江」

＊　**伝承やフィクションの中の人物　との酷似。**

スサノヲ・かぐや姫「小島菜温子」。

オオクニヌシ「鈴木日出男」。

Ｃ．人物の特色

＊　**四つの物語を生きた人物…四通りの異なった生を　一人の人間が強いられた…**

１．出生から冷泉帝の即位まで…制度から外れた「神聖王者」へのみちのり。

源氏は、桐壷帝と桐壷更衣との「濃密な恋」の結果として生まれた。七歳の時に、高麗の人相見によって、次ぎのような予言を受ける。

「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天下を輔くるかたにて見れば、またその相違ふべし」。

この予言は　甚だ意味が取りにくく、古来　論議の的となってきた。ここでは、「謎の予言」として、確認して置くにとどめる。

この予言を耳にした　桐壷帝は、迷うことなく　即座に　源氏を臣下に降下させるのである。更に　源氏が　須磨に流離した際にも、桐壷帝は死霊となって現われ　源氏の帰京と冷泉帝の即位とに　奔走するのである。父桐壷帝の　源氏に対する　いわゆる「隠れた期待」を背負いつつ生きた　第一の人生であったのである。

２．その後　准太上天皇としての宣下を受けるまで…「制度外の王者」の「制度内の権力者」への変貌。

「帝の隠れた父」として特殊な境遇に由来する権力の、永続化と安定化の為に　費やされる人生であった。秋好中宮の立后・六条院造営・准太上天皇への昇格　など　外見的には、栄耀栄華の実りを思わせる。が然し　しばしば指摘されるように「摂関政治における権力者」の相貌を宿していて、こうした「成功した中年男の肖像」は、日本文学には、その類例を　他の虚構作品の中に　時代を超えて　見出し難いのである。

３．女三宮の降嫁から出家を決意するまで

准太上天皇となった源氏は、出家を覚悟した兄　朱雀帝から　その愛娘である「女三宮」を　正妻として迎えるよう、依頼される。この「女三宮」の降嫁をきっかけに、源氏の人生は暗転する。第三の生の幕開けである。

「女三宮」を受け入れた六条院は、朱雀帝への気兼ねなしには、何事も　運営は　不

可能となって行く。「紫上」との関わりすら、もはや　源氏の意のままにはならなくなってしまったのである。「紫上」の心労による発病。「女三宮」と「柏木」との密通事件の発生。この時代の「悩める源氏」の生そのものは、近代文学の主人公に　そのまま重なる感がある。

４．死後の物語

源氏の死後、物語続編世界における源氏は、政治的立場を異にする多くの人々から、揃って「二度と現われることのない　偉大な人物」として　賞賛される。紅梅大納言（頭中将即ち内大臣の子息）からも、玉蔓（頭中将・内大臣の娘）からも、朱雀院の子である今上帝からも、である。第一の生から　第三の生までの　どの源氏よりも　完全無欠である。続編世界を生きる人々にとって、源氏は、自らの存在を　正当化するための「偶像」であったのである。

まとめ

以上　四つの生を生きるべく、強いられて来た源氏の姿を追った。自らの意志を超えた予言と　父帝の願望とによって、決定づけられた「第一の生」。その成果を摘み取っているつもりで　何時の間にか、制度の罠に落ちていった第二の生。そのような第二の生における認識の誤りを　身をもって知ることとなる　第三の生。死後　生者たちの都合で、「偶像」としてある事を強いられた　第四の生。これら四つの生　いづれをもが、常人のスケールを　遥かに超えているのである。「神聖王者」にして「世俗の最高権力者」、そして「皇女の夫」であって「偶像」である人間に、全面的に感情移入できる人は　少ないのではなかろうか。しかし　それ程偉大で、多様な　源氏の　輝かしい生は、一貫して　当人の思惑ではなく、他者の意志によって領導される。父桐壷帝の意志に動かされた　第一の生。桐壷帝の霊的な後ろ盾を失しなって、偉大になるために動いた結果、却って　矮小化してしまった第二の生。兄朱雀院に支配されてしまった　第三の生。死後、生き残った人々の　思うがままになっている　第四の生。これらのことに対しては、殆んどの　読者が、感懐を催さずには居られないところであろう。

首尾一貫した「人格」によってではなく、全く性質の異なった四つの生に胸中の「不如意さ」によって印象を残す。こうした源氏のありようは、「人格的欠如」の為に、死に至るシエイクスピア劇の主人公よりも、「自己の運命」故に、破滅する　ギリシヤ悲劇の登場人物に似ている　と言えよう。

源氏は、「超越者」として語られながら、「人間的心理」に焦点を当てて分析されることが多かった。リアリズム小説の主人公のように、感情移入の可能な存在としてではなく、読者からかけ離れていながらも、人生の不条理を　ありありと感じさせる存在として、…神話の神々や　カフカの小説の主人公のような…評価されるべきなのであろう。

「心理」ではなく、意のままにならない「生の構造」に目を向けた　源氏論こそが、今後の研究として、待たれるところである。

Ｄ．人物評価の歴史

源氏物語続編の主人公薫とは対照的に、「無名草子」の　源氏に対する評価は、厳しい。そこには、源氏について論じるのは、今更という感じもするが、

「さらでも、とおぼゆるふしぶし、おおくぞはべる」

＝（こんな風にしなくとも、と感じられるところが、たくさんあります）

と述べられている。中世初頭の段階において、源氏は「理想の男」とは　いえなかった。

以後　１９６０年代に至るまで、源氏を統一的な人格として、論じることは　主流にならなかった。中世以来の　源氏物語の古注釈では、源氏を「複数のモデルの事跡を合成して　造られた人物」として理解する一方で、たとえば　桐壷帝を　実在の醍醐帝をそのままなぞった存在と解釈したりしている（河海抄など）。源氏物語の古注釈に「おいても、源氏は、とりわけ複合的・多面的な人物であると見られていた事が分かる。

近代に至っても　源氏の複合性・多面性に着目する評価が続いた。和辻哲郎氏は、そうした源氏像の分裂を　テクストの成立過程の問題と結びつけ、以後の研究の流れに先駆けた。戦後十数年を経るまでの、「光源氏論」は、和辻氏的な問題意識に基づく論（阿部秋生）か、古注釈的なモデル論（手塚昇）であり、源氏のキャラクターそのものは、殆んど議論されていない。岡崎義恵氏の論も、場面や状況ごとの心理に目を向けたもので、統一的な人格は　問題にしていない。

こうした状況は、薫の「人物論」が、大正期の斉藤衡氏によって　早くも書かれていたことと対照をなす。出生の秘密を抱え、「道心」を持つ薫は、近代小説の主人公たち～多くは「阻害された青年」～の中に置いても違和感がない。しかし　藤壷との恋に苦悩する一方で、末摘花や源内侍などと　笑劇を繰り広げる源氏は、性格を有するリアルな人間とは、言い難いのである。恐らく　この近代小説の主人公との距離の違い」故に、人物論の対象としての　源氏と薫の差異は　生み出されたのであろう。

１９６０年以降、源氏物語研究の主流は、「作者の構想」ではなく、「作品の構造」を論じるものに変った。同じ時期に、源氏の「人物論」も盛んになり始める。「作者の構想」を問題とする論が、源氏物語の外部（作者の頭の中）に帰着点をもつとするならば、「作品の構造」を論じた研究には、そのような帰着点はない。言い換えれば「作品の構造」をめぐる論は、源氏物語を他の事象から切り離した「独自の統一体」として　問題にする。そして「無名草子」的な、「人物論」とは、作中人物を　「独自の統一体」として語ることだ。源氏物語と源氏は、ほぼ時を同じくして、「独自の統一体」として扱われることとなったのである。

「独自の統一体」としての源氏は、「世俗の枠組みに収まらない、超越性の体現者」として語られる。秋山虔氏は、そうした超越者が抱える「異端者の悲哀」を、物語の行文に寄り沿って　きめ細かに描きだした。秋山氏の源氏像は、神話的なヒーローである一方で、世俗との葛藤故に苦悩する点で、英雄でありながら、近代文学の主人公と同質

の「文学的翳り」を帯びている。秋山氏の描くところの源氏は、以後の「源氏論」の主流となった。「卓越性」と「人間性」のあわいに、源氏の主人公たる所以を見る原岡文子氏、源氏の「禍々しさ」を　繰り返し語る小林正明氏、こうした近年の研究者の論にも、秋山氏の描く源氏は　影を落としている。

また、源氏の人物論には、「色好み」や「貴種流離譚」といった　折口信夫氏のタームが　大きく影響を及ぼしている。「色好み」とは、「他国の神に仕える巫女を恋人とすること」で、その国の宗教的な力を奪取する　という、古代首長の有り方を指す。「貴種流離譚」とは、「高貴な家系に生まれたものが、故郷を追われて流離う運命に陥る　という物語のパターン」を意味する。「色好み」も「貴種流離譚」も、古代的なものを論じる用語でありながら、「女を奪い合うこと」や「家族における疎外」といった　近代小説のメイン・テーマとも接触する（絓秀実）。したっがって、折口氏に影響された源氏像は、秋山氏的な源氏像と同様、古代と近代との交差するところに樹立される。鈴木日出男・藤井貞和・高橋亨各氏などが描き出す源氏像は、こうした　折口氏＝秋山氏的源氏の典型と言える。

１９６０年代末に、深沢三千男氏が、「制度としての天皇」を超えた「神聖王者」としての源氏像を提示した。以後の源氏論は、しばしば「王権」と結びつけられる。小島菜温子氏は、源氏の「王者性」を支える「負性」と表裏一体となった「聖性」を　追求した。河添房江氏は、源氏が　海外の文物を掌握する様を、「王者の外部性」の問題として分析する。源氏を「王権」と結びつけて語る　これらの論者は、同時に　源氏の「性」や「身体」についても　語る事が多い。これは「性」と「王権」を結び付ける「色好み」論的な発想をとるならば、必然と言える。その場合、源氏の「性」や「身体」は、両性具有的で、固体性と共同性を往還するものと位置付けられる。そうした立場による成果としては、小島氏や、立石和弘氏によるものがある。源氏を、「神聖王者」とするにせよ「性の超越者」として語るにせよ、そこには、秋山氏的な「超越者＝異端者の栄光と悲哀」という　枠組みが　見て取れるのである。

１９９０年代にはいると、日本文学の研究者は、社会全体に行き渡った「文学をそれ自身論じることへの不信」にさらされた。この「不信」は、バブル崩壊後の経済的停滞が齎した「価格が目に見えないものに対する排除」という風潮に由来する。その結果、源氏物語研究では、史実との対応を踏まえた立論が盛んになる。源氏物語は、再び「独自の統一体」ではなく、外部に帰着点＝参照点を持つ存在として扱われ始めた。（ちなみに　源氏物語を「独自の統一体」として捕らえるようになった時期は　高度経済成長の始まりと　ほぼ重なっている）。源氏論においても、こうした　研究動向の変化に伴って、源氏物語の古注的な準拠論が、復活した。その代表的なものとして日向一雅・浅尾広良・土方洋一各氏などの論がある。日向氏や浅尾氏は、「天皇親政」を目指し挫折した人々のイメージが結集された、反＝藤原摂関政治の理想を体現する者として、源氏を見る。土方氏は、複数の「不遇の皇子」の合成体として、源氏像を　析出する。これ

らの論は、古注釈的な「複合的源氏像」と、折口氏＝秋山氏的な源氏像の　統一を図るところに眼目がある。そこには、「独自の統一体」として、源氏物語が扱われてきた歴史を、新しい研究状況において、何とか、発展させようとする意志が　おそらく　働いている。

　他に「史実の関わり」という角度から、源氏に迫った　近年の成果として、三田村雅子氏の研究がある。歴史上の権力者多くは、文化的＝政治的正当性を創現するために、しばしば、自らを　源氏に擬えて振舞った。三田村氏は、そうした「源氏をモデルとした人物たち…「源氏のモデルになった人物たち」ではなく…に目を向ける。「三田村氏もまた　単なる「反動」に陥ることなく、研究動向の変化に対応しようと努めた一人といえよう。

　以上　見て来た通り、源氏の人物論が　どのように語られるかは、源氏物語というテクストを　それぞれの時代がどのように受け容れたかと　直結する。その意味で、あたかも、実在の人間に対してするように、「人格」を議論する人物論は、源氏にかぎっては、有効とはいえない。かといって、「源氏はさまざまな要素からなる複合体である」といっただけでは、源氏物語の古注釈からは、何ほども　踏み出したことにはならない。「独自の統一体」としての源氏と、「さまざまな準拠の合成体」としての源氏。この両者が　せめぎ合う　現在の研究状況は、源氏の人物論を展開する上で　実は「絶好の機会」なのかも知れない。

２．桐壷帝　きりつぼてい

Ａ．その生涯

＊「桐壷帝」は、多くの女御・更衣を差し置いて、それほど高貴の家柄の出身ではない「桐壷更衣」ただ一人を寵愛し、周囲から非難される。(「桐壷」)。

＊「桐壷更衣」は、第二皇子である「光君」を出産する。(「桐壷」)。

＊　桐壷帝には、弘徽殿の女御が生んだ第一皇子（後の朱雀帝）もいたが、桐壷帝が「光君」をのみ、偏愛するために、皇太子には「光君」がなるのでは、と　世評は専らである。(「桐壷」)。

＊　光君三歳　周囲の嫉妬・いじめによって　病気がちとなった桐壷更衣は、里に下がり　死去する。桐壷帝の悲嘆は極まりない。(「桐壷」)。
＊　桐壷帝は、光君を皇太子にと望んだが、身分の高い第一皇子をさしおいては　それも不可能であった。高麗の人相見の予言も考慮して、後ろ立てのない親王でいるよりは　と、臣籍に降下させることにし「源氏姓」を賜るのであった。(「桐壷」)。
＊　桐壷帝に、桐壷更衣に瓜二つ　といわれる藤壷が女御として　入内する。桐壷帝は、ようやく　生気を取り戻すのであった。(「桐壷」)。
＊　桐壷帝は、十二歳になった源氏を　元服させ、左大臣の娘である「葵上」と結婚させる。(「桐壷」)。源氏の子を
＊　藤壷女御が、身ごもったのは、実は　源氏の子である　とは知らず、桐壷帝は、藤壷の妊娠を、心から喜ぶ。(「若紫」)。
＊　桐壷帝は、藤壷の生んだ　第十皇子(後の冷泉帝)を寵愛する。源氏と第十皇子は、容貌がそっくりであった。帝は、「美しいものは、みな似通っているものなのだ」などと語る。その言葉が、源氏と藤壷両者の　罪の意識をより強くし　悩ませることとなる。(「紅葉賀」)。
＊　桐壷帝は、藤壷を中宮とし、第一皇子（朱雀帝）の後は、第十皇子を　即位させようと考える。(「紅葉賀」)。
＊　桐壷帝は　譲位し、朱雀帝が即位する。第十皇子が　皇太子となり、後見を源氏に託す。桐壷院は　愛妃藤壷と余生を楽しむ。(「葵」)
＊　病を得た桐壷院は、朱雀帝に　源氏と協力して政治を行い　皇太子を　わが子と思って慈しみ　目をかけるよう　遺言する。(「賢木」)。
＊　今は亡き桐壷院は、須磨に流離している源氏の　夢枕に立ち、「早く　この須磨の地を離れるように」と　告げる。(「明石」)。
＊　朱雀帝は、夢の中で　故桐壷院に睨まれたことから、眼病を病む。自分が父桐壷院の遺言を守っていないことを反省し、源氏を京に呼び戻すことを決意する。(「明石」)。

B．物語における位置　準拠

桐壷更衣との愛情関係について…古来、唐の詩人「白居易」の「長恨歌」に関係する言及が多くなされた。「帝王の悲恋物語」という共通項により、桐壷帝＝玄宗、桐壷更衣＝楊貴妃　という準えがなされているのである。「長恨歌」の引用は、源氏物語全般に亘っており　この物語の骨格を成す要因の一つとなっていることに注目すべきである。**(「源氏物語と白居易」**については、稿を改めて　記述・公開することとする。)

漢籍の関係では、同じ白居易の「李夫人」の引用を　桐壷帝と桐壷更衣との物語に認める説もある（藤井貞和　など)。これに従うなら、桐壷帝は　漢の武帝に、桐壷更衣

は　李夫人に擬えることとなる。南北朝時代の注釈書「河海抄」は、不義の子、冷泉帝の即位を、荘王から秦の皇帝となった「始皇帝」が、実は　臣下の子であったという伝承にならったものとする。また「宇多天皇の遺戒によって　高麗人を宮中の招く事を避けた」という叙述があり（桐壷）、更に「桐壷帝の治世には、漢文の才に優れた人が多くいた」とも語られていて、桐壷帝の治世が聖代であったことが、示されている、これらを根拠に、「桐壷帝のモデルは、宇多天皇の後継者にして「延喜の治」といわれるを齎した「醍醐天皇」という説が、「紫明抄」以来　提唱されてきた。この「紫明抄」は、系譜的な面から、「桐壷」＝「桓武帝」との説も唱える。「紅葉賀」の帖の、朱雀院行幸は、宇多帝五十賀に際しての醍醐帝による朱雀院行幸に準えられてきたが、近年は　そこに、嵯峨帝の事跡の投影を認める説も唱えられている（浅尾広良）。

桐壷更衣の人物像が、仁明帝の女御藤原沢子と重なることは、多くの論者が指摘するところである。そこから、桐壷帝を仁明帝に擬える説も提唱された。桐壷帝と桐壷更衣の死に至るまでの熱愛も、花山天皇と女御藤原祇子との関係を彷彿とさせる　ともいわれている。

物語の叙述を見る限りにおいては　桐壷帝は、一貫して　摂政・関白を置かず、政務に精勤したと思われる。周囲の反対を押し切ってまでして、皇族出身の藤壺を中宮にたてた。こうした姿勢に「天皇親政」を意志的に目指す帝王像を読み取り藤原摂関家の影響の排除を目論んだ宇多帝と桐壷帝との共通性を論ずる人もいる（日向一雅）。

桐壷帝は　源氏の父親であり、高麗人の観相の結果などを参考に、源氏を　臣下に下す決断をした。幼い源氏を　女御藤壷に　積極的に近づけて、二人が　密通に及ぶ　きっかけを与えた。源氏が　明石への流離から帰還の折にも、死霊となりながらも、決定的な役割を果たしている。桐壷帝が、主人公を庇護して導く「偉大なる父親」として　描かれていることに間違いはない。その準拠とされる人物は、後世から「聖なる帝」として　称賛を受けている帝王に限られるのである。このことは、桐壷帝が　物語において演じた役割の大きさを　多くの読者が認めているからに　他ならないのである。

Ｃ．人物評価の歴史

桐壷帝の　桐壷更衣に対する「熱愛」は、常識に照らすなら「帝王としての職務怠慢」に他ならない。ひとりでも多くの「皇位継承候補」をもうけ、皇統の安泰をはかるのが、帝位にある者の勤めであるはずだ。政治的後ろ盾を持たない桐壷更衣は、たとえ男児を生んだとしても、その子が即位し得る可能性は薄いのである。「皇位継承候補」を生めない女だけを、寵愛し、有力者と　つながりをもつ妃を顧みない、そんな桐壷帝に対し、多くの貴族が　批判的であった　と物語は語る。

桐壷帝の　この「非常識な愛」をめぐって　研究史上さまざまな評価がなされて来た。中でも、影響力が大きいのは、益田勝美氏の説であろう。本来タブーを越えた存在で

ある天皇が、数々の現世的な束縛との格闘に苦しむ姿を描くことで、源氏の生き方の原型を提示した　と益田氏は説く。つまり　禁忌を越えようとする「聖なる主人公」とそれに立ちはだかる世俗の掟、この両者の葛藤が　源氏物語のモチーフであり、そのことを明示するために、「非常識な愛」は　描かれた　とする。三谷邦明氏は、「性」には「死」や「犯し」が伴うという　物語の主張を発展させたものといえるのであろう。大朝雄二氏は、「非常識な愛」によって、政治よりも私的な心情を重視する人間的な天皇像が提示されているのだ　と主張する。この大朝氏の見解は、古代的な聖性との関連において、桐壷帝を捉える増田氏と　一見したところ対立する。しかし、敢えて「非常識」な行為に挑むところに、物語の独自性＝文学性を見る点で、両者は　意外なほど　近いのである。

近年では、「非常識な愛」に、桐壷帝の　政治的な意図が　関与していた　とする説が有力である。その代表的な論者である　日向一雅氏は、桐壷帝は、外戚に左右されない天皇親政の理想を抱いており、後ろ盾のいない桐壷更衣への愛も、この理想ゆえに貫かれたと述べている。

桐壷帝の治世には、外戚の姿がなく、藤壺の父である先帝と　桐壷帝の血縁関係は判然としない。藤壷が桐壷帝の后になっているのであるから、少なくとも　先帝は、桐壷帝の父ではないことは　間違いない。先帝の后腹の男皇子である式部卿宮は、即位出来ないまま終わっている。吉海直人氏は、これらの事実に着目し、桐壷帝は、政治的後ろ盾のない母から生まれ、本来　即位の見込みの薄かった皇族であった　と　推論する。何らかの政変のため、先帝の直系が　即位不能となり、先帝と　血の隔たった桐壷帝が、担ぎ出された　という訳である。史実に於いても　陽成帝が、殺人を犯し、天皇も皇太子も配位という事件の後に即位した　光孝帝とその子宇多帝は、摂関家と　縁の薄い母から生まれている。日向氏も、吉海氏と同様の推理に基づき、こうした政治的な状況が、桐壷帝の親政への理想と係わっている　と述べる。辻和良氏も、桐壷帝を　新たな皇族の創始者として捉え、桐壷更衣一族を　源氏であると判断した上で、皇族所縁の血で政権を固めようとする意志を　桐壷帝に見る。他にも　浅尾広良氏が、「非常識な愛」を、桐壷帝の政治的理想に結びつけて　論じている。

なお　桐壷帝と先帝との関係については、古くから、さまざまな議論があり、桐壷帝を醍醐帝に擬える「河海抄」は、先帝は、醍醐帝の祖父である光孝帝だと　主張する。先帝を桐壷帝の兄弟と推測する説（玉上琢弥）や　叔父と見る説（坂本共展）もある。

「非常識な恋」のほかに、桐壷帝をめぐって　繰り返し論じられる問題として　源氏を臣籍に降下するに当たっての　決断過程がある。桐壷帝は、源氏を　高麗の人相見に会わせ、その観相の結果を受けて　臣籍降下を決定した。この時　予言の言葉は、それ自体曖昧で、さまざまな解釈を呼んでいる。桐壷帝が、観相結果を　正しく受け取ったかについても　論議が多い。伊井春樹氏は、桐壷帝の解釈は正しく　それに基づく臣籍降下決定も　英断であった　と評価する。これに対し、森一郎氏は、予言は、源氏の「帝

王たる資質」と「藤壷との密通の危険」を　同時に示したものであり、臣籍降下という処置は　桐壷帝の誤解による　と説く。望月郁子氏は、桐壷帝は、観相結果から、源氏と藤壷の密通を予見し、「即位しないまま帝王の父となる」という運命の実現のために敢えて　臣籍に下したのだ　とする。

桐壷帝が、予言をどのように把握していたのかは、「明石」の帖で　死霊となって出現した際の「

われは、位にありし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その　罪を終ふるほど暇なくて」

＝（私は帝位にあった時、間違いをすることは無かったのだが、知らない内に犯した罪　があったそうなので、その罪を償い終わるまで、暇がなくて）

という発言に見える「犯し」の解釈に関わる。この「犯し」の内実は　作中に　明示されて折らず、古来、「醍醐帝が　菅原道真を　左遷した罪により、地獄に堕ちた」という伝説と関わらせて　論じられてきた。それを森氏は、「源氏と藤壷の密通の危険を見抜けず、無自覚に　これに加担した罪」と解釈し、望月氏は、「密通の危険を知った上で、意図的に、これを推し進めた罪」と見る。「犯し」の実態が、何であれ、「死せる桐壷帝が、罪を償わされている」＝地獄に堕ちている」という事実は　見逃せないのである。

「非常識な恋」で、物語を開幕させ、後に「聖代」とも称された治世を行い　死後には　地獄に堕ちた帝王。桐壷帝は、単なる「慈愛に満ちた父」」（理想的な天皇）に留まらない多面性・怪物性を帯びているのである。その在りようは、益田氏が述べるように、「生き方の系譜」として　源氏に引き継がれた。桐壷帝をめぐる研究史は、この帝王のそうした「一筋縄では解けない部分」が　明るみに出されてゆく過程でもあったのである。

D．人物の特色

多くの研究者が、桐壷帝を「聖なる帝」と評価する。確かに　桐壷更衣と死別した後の桐壷帝には、王者として欠けたところが　全く　見えない。だが、桐壷更衣との「非常識な愛」は、すでに　複数の論者（篠原昭二・伊井春樹など）が指摘している通り、明らかに「失策」と見るべきであろう。

桐壷帝は、死病を得た更衣の退出を　いつまでも許さず、いたづらに病状を悪化させた。数日で彼女は危篤に陥ると、今度は　取り乱して、分別を失ってしまう。更衣を愛した動機に、如何なる政治的理由があったにせよ、少なくとも　更衣の死に臨んでの桐壷帝には、「偉大なる帝王」の面影はない。

つまり　桐壷帝は、桐壷更衣の死を境にして、変貌した　といえる。それでは、この

変貌は　どういう性質のものなのか。この問いに答える鍵は、高麗の人相見の予言に対する桐壷帝の反応にある。

人相見の言葉は、「源氏には　帝王に昇るべき相があるが、その相が実現すると　乱れ憂える事件が起こる。臣下として天下を支える相としてみると、こんどは、相が違う」というものであった。この予言の解釈をめぐって　議論のあることは、先に触れた。「帝王でも　単なる臣下でもない相」と見立てられた　と見るのが妥当のようである。つまり　ここでの人相見の言葉は、整合的な解釈の難しい、両義的なものであるはずである。にもかかわらず、予言を耳にした桐壷帝は、全く迷わない。

「かしこき御心に、倭相におほせて　おぼしよりにける筋なれば、今までのこの君を、親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけり、とおぼして」

＝（賢い御心でもって、日本人の相人にお命じになり、考えて居られた方面のことであったので、今まで　この源氏の君を　親王にも　おならせになっていなかったのだが、高麗の人相見は、本当に賢かったのだ　と　お思いになって）

源氏を臣下に下ろすことを、即断するのであった。

この「迷いのなさ」にこそ、おそらくは、桐壷帝の暗部が、逆に露呈している　と見る。桐壷更衣との愛において、桐壷帝は、周囲の思惑を憚らず、自らの欲望を貫徹した。その結末が　更衣の無慚な死であったのである。このとき　桐壷帝は、俗な言い方をすれば、心底「懲りた」のだ。抵抗を押し切って　欲望の実現をはかることが、そそまま罪である　と感じるようになったのである。桐壷帝が　源氏の即位を望んでいた事は、物語の中で　繰り返し語られる。そして、源氏の即位に抵抗する勢力があることも示されている。更衣を失った桐壷帝は、源氏を帝位につけなかったからこそ、それを目指すことに　過剰な罪悪感をもってしまったのではないか。だからこそ、両義的であるはずの高麗人の予言を、躊躇うことな「臣下にすべき」という意味に、受け取ったのではあろう。

物語本文を見ると、桐壷帝の　源氏を即位させることへの執着は、異常なまでに深かったことがうかがえる。「明石」の帖で　死霊となって現れた桐壷帝は、当時の宗教上の常識に照らすならば、源氏と藤壷との密通を知っていた筈である。にもかかわらず、桐壷帝は、いっさい　源氏を咎めることをしない。一方　引き続き　朱雀帝の前に出現した折には、源氏追放の罪を非難して、眼病に陥らせるのである。桐壷帝は、冷泉帝が、源氏の子であると知りながら　源氏の召還と冷泉帝の即位の為に　死霊となって　働くのである。桐壷帝にとって　冷泉帝の即位とは、自ら名言するとおり　源氏即位の代償行為なのであった。

桐壷帝は、源氏即位への願望が　強すぎる故に　それを抑圧して　源氏を臣籍に下らせた。しかし　一方で、源氏と藤壷が密通し、その血が、皇統に残る事を、無意識には望んでいた。源氏は、桐壷帝の　無意識の願望に動かされて、密通へと走った…桐壷帝と源氏との関わりを、そのように　見ることも可能のようである。これは　望月郁子氏

の見解に近いが、すべてを　桐壷帝が意識的に行った　とするのが、望月氏の解釈である。

ここで想起すべきは、三島由紀夫氏が、ヤマトタケルの物語を評した言葉である。天皇には、神的かつ詩的な側面と、人間的かつ統治的な側面とがある。元来この二つを一人の天皇が体現していたが、ヤマトタケルの父景行帝は、これらが分離せざるえを得ない時代に遭遇した。そこで、「人間天皇」の役割を自ら引き受け、「神的天皇」の役割を　ヤマトタケルに託した　と述べているのである。

桐壷帝と源氏の関係は、三島氏の見るところの景行帝とヤマトタケルの関係に近い。「非常識的な愛」を生きているとき、桐壷帝は、禁忌に挑んで　自ら　神的側面を体現しようとする存在であった。それに挫折したとき、天皇の持つ「デモーニッシュ（Damonisch=悪魔的な・魔力的な・とり憑かれたような）性格」を放棄して、偉大な「人間天皇」となる道が選ばれたのであった。放棄された　全能の神的側面は、源氏に引き継がれた。そして　ヤマトタケルに対する景行帝の譲渡が　自覚されていなかったことに照らすなら、桐壷帝による源氏への委託も　無意識的なものと見るべきなのであろう。

死霊となった桐壷帝は、自分に過誤がなかったことを述べるときには、「あやまつことなかりしかど」と、直接経験過去の「き」を使っているのに対して、「犯し」があったことを口にした部分では、「犯しありければ」と　伝聞過去の「けり」を使っている。この点から見ても、桐壷帝が意識的に「犯し」を行ったとする望月氏の説には、疑問が残るのである。桐壷帝は、無自覚に、「犯し」を行い、死後にその事を指摘されたのだ。にもかかわらず、ヤマトタケルも源氏も、父帝の意識されざる願望を　見事に体現したのである。

桐壷帝が、「人間天皇」として亡くなった後、帝位はやはり「人間天皇」である朱雀帝に引き継がれた。死せる桐壷帝は、先に見た通り、この「人間天皇」を抑圧して、源氏に加担する。しかも桐壷帝の霊そのものは、地獄からやって来たのであった。桐壷帝と景行帝は、死後のありようにおいて大きく異なっている。霊となった桐壷帝は、再び「デモーニッシュな性格」を取り戻し、「神的天皇」に近づいたかに見える。桐壷帝から、「神的天皇」たることを委託された源氏は、須磨・明石からの帰還以後、「人間」としての側面を強めて　生涯を終わる。死霊となって現れ「デモーニッシュな性格」を　改めて示すこともない。桐壷帝は、「神的天皇」として生きることに挫折した後に、「人間化」した存在として、源氏の生き方の租型をなしている。しかし　その「デモーニッシュな性格」の強度は、ある意味で、源氏を凌駕している。桐壷帝の「デモーニッシュな性格」が　招き寄せた物語として　源氏物語を読み直す必要があるのかもしれない。

３．朱雀帝　すざくてい

A、その生涯

＊　父親の桐壷帝が、第二皇子の光源氏を　寵愛するが為に　危ぶまれた皇位継承も、母親弘徽殿女御が、右大臣家出身という高貴な生まれの故に、事なく、皇太子となる。（「桐壷」）。

＊　右大臣と弘徽殿女御は、左大臣家の娘「葵」を　皇太子の正妻に　と望むが、左大臣は、娘「葵」を　臣籍に下ることの決まっている源氏と結婚させる。（「桐壷」）。

＊　朱雀帝が即位する。（「花宴」）。

＊　朱雀帝は　伊勢に下る斎宮（後の　（前斎宮女御・梅壷女御・後に秋好中宮）に　心惹かれるが、別れの櫛を　贈るしかなかった。（「賢木」）。

＊　桐壷院から、源氏の意見をよく聞いて政治を行い、皇太子（後の冷泉帝）を　わが子のように慈しんで欲しい　と遺言された朱雀帝であったが、桐壷院崩御後は、母弘徽殿大后と　祖父の右大臣とが、朝廷を牛耳っている為に、心ならずも　父の遺言を守ることが出来ないでいる。（「賢木」）。

＊　朱雀帝は、寵愛する「朧月夜」と　源氏との密通が　表に現れた際にも、悲しみながらも、二人を許すしかなかった。源氏の「須磨流離」は　止められなかったが、朧月夜への愛は変わらなかった。（「須磨」）。

＊　朱雀帝は、夢の中で　桐壷院に睨まれ以来　眼病を病み　その後太政大臣（元の右大臣）が　亡くなったこともあって、母弘徽殿大后の反対を押し切って　源氏の京への召還を決意する。（「明石」）。

＊　眼病が直った朱雀帝は、冷泉帝に譲位し、第一皇子（後の今上）が皇太子となる。（「澪標」）。**冷泉帝即位＝物語ゆかりの夢判断の実現・その一**

＊　朱雀院は、都に戻ってきた斎宮を　妻にと望むが、斎宮の養父となった源氏は、密かに　藤壷中宮と謀って　冷泉帝の女御（前斎宮女御・梅壷女御・後の秋好中宮）として入内させてしまう。（「絵合」）。

＊　弘徽殿大后も亡くなり、念願の出家を　と考える朱雀院ではあったが、母を亡くした愛娘「女三宮」の将来を心配し　多くの求婚者を退けて、源氏に白羽の矢を　向けるのであった。（「若菜上」）。

＊　出家した朱雀院は、「女三宮」との縁談を　一度は断った源氏が、その結婚を承諾してくれたので、心おきなく、仏道修行に　精進することとなる。（「若菜上」）。

＊　朱雀院は、源氏の「女三宮」に対する愛が、「紫上」に対するほどではない　との噂を耳にし、心を痛める。（「若菜下」）。

＊　薫を生んだ「女三宮」が、衰弱して　父朱雀院に会いたがっている　と聞いた朱雀院は、お忍びで　朱雀院を訪れ「女三宮」から　出家の願いを訴えられる。源氏との

疎遠な夫婦関係に　心を痛めていた朱雀院は、源氏の意中を　慮ることなく、「女三宮」を出家させてしまう。(「柏木」)。

＊　朱雀院は、娘の「落葉の宮」が、夫柏木に先立たれ、「女三宮」も、出家してしまったことを思い、不幸な娘たちの人生を嘆く。(「横笛」)。

＊　朱雀院は、既に崩御している。(「宿木」)。

B．物語における位置・準拠

朱雀帝は、歴史上実在の朱雀帝と同じ呼び名をもつことで、特異な登場人物である。実在した朱雀帝は、醍醐帝の第十一皇子で、母は　藤原基経の娘の皇后穏子であった。穏子の溺愛の中で、育ち　病弱であったという、在位中には　天災や疫病が多く発生し、承平・天慶の　二つの乱が勃発するなど、社会不安が　広がり高まった。この事は物語中、朱雀帝が　母弘徽殿大后の圧倒的支配下にあったこと、更に明石の帖で、桐壷院の亡霊に悩まされて、以来　眼病を患い、天変地異もあい続いた為に　結局は　源氏を京に召還させざるを得なかったことに　通ずるようである。

また　歴史上の　醍醐→朱雀→村上　と続く天皇の系譜を、物語上の、桐壷→朱雀→冷泉　の系譜に　当てはめる考え方が、古くからあった。これは、単に　朱雀帝が同名であることによるのではなく、物語中で、歴史上の出来事や、風俗・人名を下敷きとして、桐壷帝を醍醐帝に、物語の時代設定を重ねる書き方がなされているが為である。

なお　本来「朱雀院」とは、朱雀（地名）にあった、嵯峨帝が造営した、上皇が退位後に住む邸宅の名称であり、朱雀院が、「朱雀」の名で呼ばれるのも、「乙女」帖の　冷泉帝の　朱雀院行幸以後のことである。

このように　朱雀帝が　実在の朱雀帝と　素直に重ねられる　その意味は、単に　物語に　事実らしさを与える為だけの工夫ではない。それは、歴史的事実に重ね合わせられる朱雀帝の　直ぐ後に、現実にあってはならない皇統を乱す　秘密の子である冷泉帝の即位を　語らなければならなった　その故なのである。歴史的事実を超えて、虚構の物語世界が自立する場面を、読者は、否応なく　目撃させられるのである。

朱雀帝は、歴史上の朱雀帝が、そうであったように、桐壷帝→冷泉帝の聖代に挟まった中継ぎ的存在とも言える。その間は、寧ろ　朱雀帝よりも、母弘徽殿大后の　源氏の敵役としての活躍が目立つ。だが、朱雀帝は、冷泉政権の樹立によって、その役目を終わるわけではなかった。寧ろ、大きな役目を演じるのは、その晩年においてである。「若菜上」の帖の巻頭において、愛娘「女三宮」の婿選びに悩む姿が、大写しになるに至って、俄かに源氏の晩年を悩ませる出来事の　火付け役となるのである。世間には知られない、柏木との密通事件の出来、愛娘の出家という形で　後始末をつけざるを得ない朱雀院　なのである。いずれにしても、源氏の兄としての　浅からぬ縁によって、源氏の運命に　大きく関わることになる存在が、朱雀院のあり方であったのである。

Ｃ．人物評価の歴史

朱雀帝は、物語の中の　創作人物とはいえ、皇位についた人物であるので、批評的な目にさらされるのは、近年になってからである。その本質的なものとしては、まず、今井源衛氏の論が上げられる。今井氏は、「若菜上」帖の　女三宮の降嫁を対象とし　平安時代の皇女たちの結婚状況を調査して、「皇女独身主義」の伝統が　崩れつつあった時代認識を確認する。その上で、女三宮を　源氏に降嫁させたのは、源氏に、「負け馬」意識をもっていた　朱雀帝の「錯誤」であった　と結論づけた。これに対して石田穣二氏が、反論を展開した。女三宮の降嫁は、源氏が「色好み」の心によって、承諾したことからであり、朱雀院の選択は　妥当であった　と述べたのである。

その後、秋山虔氏が、両者の論に触れながら、女三宮の降嫁決定の経過を詳細に分析した上で、登場人物の言動や心理の交渉が　新しい物語内の現実を生み出し、その現実がさらに　人物の言動や心理を継起してゆく　という「若菜上」の帖から始まる、方法的飛躍なのである　と説いた。したがって朱雀帝は、「錯誤の人」ではなく、朱雀院の選択は、物語の論理に沿った　必然であったことになるのである。これ以降、「若菜上」の帖から始まるとされた　物語展開の新しい方法の具体的内容について、議論が盛んになるのである。

母の弘徽殿大后自身が、「帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひおとしきこえて」＝（天皇とは申し上げるものの、昔から　人々　皆が軽蔑申して）（賢木）。と、言うように、朱雀帝の人物評価は芳しくない。阪上けい氏は、「無能」と評した。だが、そう設定された朱雀帝が、源氏を須磨から召還し、また　女三宮の降嫁で、紫上を苦悩させるという重要な役割を果たした　と論じた。白方勝氏は、「劣敗者」としながら、朱雀帝を、公的には、祖父の右大臣側にありながら、私的には、弟の源氏に味方する人物として、その二面性を明らかにした。三苫浩輔氏は、民俗学的立場から、桐壷帝の霊に守られた源氏に対する　一方的な敗北者としての朱雀帝を取り上げた。神話的発想からは、朱雀帝・源氏の兄弟関係の基盤に「日本書紀」に語られる海幸彦・山幸彦兄弟の対立と　弟の勝利の神話を読んだ　石川徹氏の論もある。

これらのどちらかといえば、朱雀帝への低い評価に対して、鈴木日出男氏は、朱雀帝の抱く父桐壷院の遺言を実現しようとする意志に着目して、桐壷王朝に繋がる志向を論じた。「賢木」の帖の　朱雀帝と源氏の対話の場面にみられる、桐壷時代への追慕の情の共有が、二人の間に　共感と連体の感情を齎している　とする。更に、朱雀帝のこの感情は　源氏の須磨からの召還まで、一貫しており、源氏召還と　その後の　冷泉帝即位の原動力となった　と論じた。朱雀帝のもつ二面性を　源氏の権勢確立の拠り所として　より積極的に評価したのである。高橋亨氏も、桐壷院の遺言を実現しようとする朱雀帝の意志を認めるが、その人の良い弱さの面を　無視出来ないとする。結局　朱雀帝は　一貫して、源氏に対する影のような脇役であり、現実の政治社会の論理と　恋の私

情を　架橋するところに、その機能があった　と論じた。また、深沢三千男氏は、凡庸で、底抜けに善良な朱雀帝は、決して　源氏の敵役ではなく、一貫して　心優しい兄であった　とする。そして「若菜上」の帖の朱雀院は、その人間的欠陥を示すものではなく、人間の限界を描く第二部の　源氏像の先取りである、と　一歩踏み込んだ見解を示した。森一郎氏は、「藤裏葉」の帖の　源氏の栄華極まる姿と対比的に、朱雀院の敗北的な姿を見出し　その朱雀院の姿に　焦点を当てた「若菜上」の帖の始まりが、新しい主題を示している　とした。

朱雀帝のもつ天皇としての権威を、「皇権」と名づけ、源氏の目指した「王権」との対立構造を　見出したのが阿部好臣氏である。源氏物語では、「桐壷」の帖の　高麗の相人の予言で述べられた　源氏が持っている「帝王の相」が　成就される過程を「王権」の実現だ、と考える阿部氏は、宮中での源内侍との情事や　朱雀帝の実質的妻である朧月夜との情事の継続により、朱雀帝の「皇権」を侵犯するところに、源氏の「王権」が、朱雀帝の「皇権」を上回る　物語の世界観を見たのである。

三谷邦明氏は、「賢木」の帖から「澪標」の帖に至る　源氏の須磨謫居の経緯から　朱雀帝を　弟の源氏に負けていることを快楽とする「マゾヒスト」である　と述べた。そして「明石」の帖の朱雀帝の姿に「怯え、戦く、病む天皇」像を見た。その上で、「若菜上」の帖の　娘女三宮の降嫁の決断を、源氏を　二十五歳も年齢の違う女と結婚させて、家庭崩壊を招くことで、朱雀院は、弟の源氏に復讐を果たしたのだ、という独自の見解を　披露している。

山下義実氏は、朱雀帝は、物語の根幹を担う重要な脇役である　とし、源氏の　一片の敵意も悪意ももたず、良心の呵責に堪え得ない　善良な性格であったとする。そして、劣敗者として描かれる朱雀帝に　敗北者としての意識が全くないことに　注目する。その事実から、源氏物語の本質を、人物間の対立葛藤をこととする闘争の文学ではなく、穏やかな人間愛の中に展開される恋愛と　人間の内面的な苦悩を追及する「あはれ」の文学である　と指摘した。また「若菜上」の帖以降においては、女三宮の身分的権威を後見者として、具体的に実感させることで、源氏・紫上夫婦に　内面的な圧迫を与える役割を果たして、六条院の危機的状況を　促進している　とする。

朱雀帝の人物に関す評価は、その性格の弱さを　人間的な欠陥とするか、物語展開上有効に働く要因とみるか、また、「若菜上」帖以降の有り方が、源氏にとって　良否　どちらに働いているか　によって、大きく分かれるもの　と考えられるのである。それは　朱雀帝の存在自体が、源氏との関わりを離れては　存在し得ないものであることを示しいることとなる。

D．人物の特色

朱雀帝の不幸は、彼個人の資質の問題にあるというよりも、父の桐壷帝が、母の弘徽

殿の女御よりも　身分の低い　桐壷更衣を愛した　というところにあった。桐壷帝が敢えて　宮廷秩序を逸脱する行為を行った為に　彼が就くはずであった東宮の地位の不安定さが　際立つこととなる。そして、弟の源氏が誕生してからは、　桐壷帝は　その弟源氏を　溺愛する。朱雀帝は　父に愛されていなかった息子なのであった。一方で右大臣家の命運を掛けた外戚であり、母の弘徽殿女御にとっては　憎むべき源氏から守らねばならぬ一人息子であった。それらが朱雀帝の生を不安定にする。父の桐壷院は、愛する息子たち、朱雀帝からすれば弟二人について、適切な待遇を与えるように言い遺して死去する。即ち　東宮に冷泉帝を、その後見役に源氏を　ということである。父に愛されなかった朱雀帝は、その遺志を忠実に守ることによって、自分の　父に対する愛情を　表明しようとするのだが、母の弘徽殿大后によって源氏は　須磨に謫居せざるを得なくなる。源氏召還の宣旨を出せたのも右大臣が亡くなり　母弘徽殿大后が　病床に臥したためであって、朱雀院の弟の源氏に対する　奇妙な親近感と尊敬の念は　父の桐壷院の遺言を　守れなかった罪悪感から　生まれたものであった　といってよい。

朧月夜をめぐる関係も同じ根に発する。朱雀帝が、朧月夜に執着するのは、朧月夜が源氏に愛されているからである。源氏が　須磨へ謫居した後、蟄居していた朧月夜の参内がゆるされた記事で、熱愛されていた名残で、今も寵愛が深い旨が　記されているが、この場面以前に、朱雀帝が、朧月夜を熱愛していたという記事は見られない。むしろ「賢木」の帖で、源氏が　参内した時には、源氏と朧月夜との仲が　昔から続いているのだから　今更　咎めることでもない　と考えているほどであった。朧月夜を相手に　源氏への親愛の情が　綿々と語られる。その言葉は、まるで　やむを得ぬ事情で、離れ離れになってしまった親友の源氏を　懐かしく思い起こして　共通の友人に語る趣がある。続けて、朧月夜に対して、源氏との愛情関係に絡めた　嫌味を述べるのであったが、それすらも、秘密の共有を確認することを喜びとする言葉として　受け止められるのである。以降、源氏の存在を通してこそ、朧月夜を愛し得る、という朱雀帝の愛情の有り方は、一貫しているのである。源氏帰京後の「澪標」の帖で、譲位間近い朱雀帝が、朧月夜に語る、譲位後は、源氏との結婚を許す旨の発言も、朧月夜への執着と　源氏への嫉妬が　入り混じっての上での発言ではあるが、源氏に愛された朧月夜を愛している朱雀帝　という立場が　鮮明に表れた場面であった。

朱雀帝の　源氏に対する　そのような愛情が、源氏から報われるかというと　事はそう簡単ではない。「澪標」の帖で、六条御息所の遺児　前斎宮の入内を望みながら　冷泉帝への入内を謀る　源氏と藤壷中宮とによって、無視されてしまう。「乙女」の帖で、朱雀院への　冷泉帝の行幸が源氏同道のもとで行われるが、上皇への敬意を表わす意味合いよりも、冷泉帝の威勢を顕示する趣が強い。「藤裏葉」の帖も　冷泉帝と連れ立っての六条院行幸では、影の薄い自身の治世を嘆く和歌を詠む。「負け馬」と評される　所以である。

源氏への女三宮の降嫁は、源氏・朱雀院共に　判断を誤った出来事であった。だが。

そこには、判断を誤らざるを得ない　必然があったのも事実である。朱雀院は、未成熟な愛娘の後見人として　紫上を薫育した源氏の実績に　頼らざるを得なかったし、源氏であるからこそ信頼し　頼りたかったのである。源氏は　若き日に薫育した紫上の再来を　女三宮の上に　夢見たのである。いずれも　苦い現実と対峙することになったのではあるが、女三宮が、源氏に愛されると　朱雀院が期待していたとは　考え難い。内親王・准太上天皇正妻としての地位に　相応しい待遇を受ければ　満足したはずである。その点で　源氏の行動に遺漏はない。「柏木」の帖の女三宮出現の場面で、源氏の女三宮に対する接し方に　心中不満を漏らす朱雀院が描かれているが、それは　女三宮・柏木事件が起きて以後の　源氏に対してであり、降嫁当初とは、状況が　全く違う。ただ一点　源氏が　それほどまでに紫上を愛していたことは、朱雀院にとって、予想外のことではあっただろう。だが、それが直接に　女三宮の待遇に問題を生じたわけではなかった。

　全ての問題は、柏木がとった　驚天動地の行動にあった。朱雀院が、女三宮の失態を知り得ていたらしい記述がある。「若菜下」の帖で、女三宮の懐妊の知らせを聞いた朱雀院が、最近の　源氏の　女三宮に対する疎遠の様子を　不審に思って、あれこれ考慮をめぐらす場面である。

「その後なほりがたくものしたまふらむは、そのころほひ便なきことや出できたりけむ」

＝（その後も　元通りにならずにいらっしゃるらしいのは、その頃に、不都合なことがおきたのだろうか）

「よからぬ御後見どものこころにて、いかなることかありけむ」

＝（良くない世話役の女房達の考えで、どんなことがあったのであろうか）。

　源氏が　病む紫上の看病で、離れていた間に、何か不都合なことが、起こったか、仕える女房の不心得があったのでなないか、殆んど真相に迫る推測が成されているのである。これが「柏木」の帖で、女三宮の出家を許す要因となった　と考えられるのである。女三宮出家の実現は、父朱雀院自身の手によることで、源氏がその責任を負わずに済む形になっている。源氏も　女三宮の懇願を聞いて、むしろ出家させたほうが　今後の扱いが楽になる　と考えていた。だが　朱雀院から預かった手前　責任を放棄するようなことも出来ず、苦慮していたのである。そこで、好都合にも、朱雀院が、源氏の窮地を救うこととなったのである。即ち「娘の不都合の責任を　親に取らせた」ということになったのである。源氏に　女三宮に対する監督不行き届きの責任は　現に存在するのだが、朱雀院は、その責任を問わなかった。兄の朱雀院は　弟の源氏の　援護者であり続けるのである。（姥沢隆司）。

4・右大臣　うだいじん　後の太政大臣

A．その生涯

＊　右大臣は、長女を　桐壷帝の後宮に入れた（弘徽殿女御）、その後、六女の「朧月夜」を、皇太子（後の朱雀帝）に入内させようとするが、源氏と朧月夜との関わりによって、中止せざるを得なかった。(「花宴」)

＊　右大臣は、正妻の「葵上」を亡くした源氏と「朧月夜」との結婚を望むが、弘徽殿大后の叱責を浴びる。(「葵」)。

＊　右大臣は　桐壷院亡き後、朱雀帝の外祖父として、弘徽殿大后と共に、権力を欲しいままにする。(「賢木」)。

＊　「朧月夜」が尚侍となって出仕し、朱雀帝の寵愛を受けるのを　右大臣は喜ぶ。然し　彼女が　里下がりしていた　ある夏の一日、源氏と密会しているのを目撃した右大臣は、激怒する。弘徽殿大后にも報告し　対応を考える。(「賢木」)。

＊　右大臣は　太政大臣にまで昇進したが、間もなく死去する。(「明石」)。

B．物語における位置

右大臣は、そもそもの物語の始まり桐壷帖の最初から　右大臣であった。第一皇子（後の朱雀帝）に対しても、十分な後見が出来ること、更に、やがて、帝の外祖父として、時の政治を取り仕切る　という存在であり続けた。「桐壷」帖の右大臣は、摂関家の典型として位置づけられ、このような勢力に対して、何らの後見を持たない源氏が、自らの能力と魅力とによって、宮廷に生き、例の高麗人の予言の「帝王でもなく　臣下でもない」という　不可思議な運命を、どのように実現させて行くのか、物語を読み進む読者にとっては、甚だ興味深い　大きな牽引力となっていくのである。

右大臣は、古注釈などによって、「二条太政大臣」と目される。二条は　晩年の藤原兼家の邸のあったところで、後に、長男の中関白藤原道隆が、法興院として寺に造り変えている。また、中宮「定子」の里邸も、当初は　二条北宮（単に二条宮とも）称せられ、兼家と中関白家本拠地でもあった。源氏物語の中でも、当初　源氏の邸宅も　二条院といわれているので、二条は、貴顕の集うところであったといえる。

太政官では、左大臣が上位ということもあって、左大臣から摂政太政大臣の例は、史実にも見えるが、歴史上　天皇の外祖父として、右大臣から太政大臣になった例は、源氏物語成立期までには、清和帝の即位に際しての　藤原良房と、一条帝即位に際しての、藤原兼家の例のみである。

特に　藤原兼家以降の　後期摂関政治の時代は、紫式部にとっては、身近な史実であり、彼女の父藤原為時の官人生活も　この時期に重なる。右大臣のような藤原摂関家の

典型は、実は　作者紫式部が、身近に仕えた　藤原道長や兼家周辺ということになる。現実の摂関家のあり様を　鋭く観察した紫式部が、それを超える　理想的な一世源氏の生涯・行き様を　虚構の世界に　創り出したのが、「源氏物語」なのである。

C．人物評価の歴史

朱雀帝の外祖父であり　右大臣であるという地位が、おのずから源氏との　対立関係を紡ぎ出さずにはおかない。物語前半の　源氏にとっては、最大の敵対勢力の長でありながら、長女の弘徽殿大后（弘徽殿女御）に比べると、今一つ影が薄い。その為　物語内の政治的構図を描く中で、「右大臣は　物語の人物としては　特に論ずるに足りるような存在感も魅力もないのであるが、源氏物語の背景になっている政治世界・現実の政治との関係を考える上で、重要な存在となっている（田中隆昭）といった　人物評が、一般的になっている。そんな右大臣ではあるが、「花宴」の帖と、「賢木」の帖では、否定的な語り手の姿勢はあるものの　その個性が描かれている。

「花宴」の帖は、書名の由来ともなった桐壷帝主宰の宮中の花の宴と、右大臣が自邸で催した藤の花の宴が描かれる。後者の藤の花の宴では、右大臣家全体の家風が、華美で、当世風な目新しさを好むとされ、由緒や品格を重んずる桐壷帝周辺の尚古趣味とは合わなかった。この宴は、「花鳥余情」（室町時代・一条兼良）が

「おほやけ事になずらへて、

＝（宮廷の公式行事にならって）」

と　評しているように　桐壷帝の親政と皇威を象徴する宴の直後に、藤原氏を代表する「藤」の宴で　抵抗したものであった。右大臣が　初めて自己の政治的意図を明らかに示し、官人の統合を図った催しとして、重要視される（倉田実）。

その場に　源氏を呼び寄せようと、宮中で要請して無視され、当日　改めて、息子の四位の少将を　使いに立て　物語の中では　唯一　右大臣の詠歌とともに招待するのであった。

「わがやどの花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし」

＝（私の家の花が　平凡な色香ならば、どうしてこの上　あなたのご来訪を待つでしょうか。並みでなく、見事な花だからこそ　名高い源氏の君に来て欲しいのであす）。

その詠歌には、あからさまな自負が篭められている。源氏物語の古注釈書でも、

「おごりたる歌、」

＝（奢り高ぶった詠歌だ）」（花鳥余情）。

という評価とともに、

「是、右大臣の自慢とはみるべからず。源氏を請し申さむとの計略と思ふべし」

＝（これは右大臣の花の自慢と詠むべきではない。花の美しさにかこつけて、光源氏の来訪を請い願うための計画と考えるのがよい）（花鳥余情）。

との評価もあり、源氏を敵視するばかりでなく、提携の可能性をも探っていた事がうかがえるえる。そのため、愛娘六君（朧月夜）と源氏との関係を知り　怒るものの、葵上の死後に　正式に婿に迎える事を申し込むが、源氏には相手にされなかった。

「賢木」の帖では、右大臣は気が短く、せわしない人物と評され　新しい帝の即位とともに　実験を握った外祖父の性格に、臣下が不安を抱いた　と語られる。こうした描写は、具体的には「賢木」の帖の巻末の場面の　伏線ともなっている。

その「賢木」の帖の巻末では、二条院での　源氏と朧月夜との密通を見つけた時、右大臣が怒りに駆られて　弘徽殿大后に　夢中で告げたところ、大后は、実妹の朧月夜を犠牲にしても、醜聞として公表し　源氏を抹殺しようと、策謀する。朧月夜の身を心配する右大臣は、何とかして事を収めようと　大后を　宥め賺すのである。このあたりは、

「のたまふけはひの舌疾にあはつけき」

＝（ものをおっしゃる様子が、早口で、せっかちなのを）、

「げにいりはててものたまへかしな」

＝（本当に、せめて　部屋に入ってから　物をおっしゃればよいのにね）。

「大臣は、思ひのままに　籠めたるところおはせぬ本性に、いとど老の御ひがみさへ添ひたまひにたれば」

＝（右大臣は、もともとが、思ったままを口にしてしまい、胸にしまって　黙ることが出来ない御性格の上に、老年の僻みさえ加わって）

というように　物語の中で　盛んに　語り手が　右大臣の短所を、あげつらっているのである。

源氏が　須磨退去の後は、彼に対する　強硬な処置の主役は　弘徽殿大后であって、右大臣は　特に　登場しない。源氏が都を去った後、謹慎の身であった朧月夜を　可愛がっていた右大臣は、弘徽殿大后や朱雀帝に　再三願って　処分を解かせている。その後、「須磨」の帖の　巻末の、大嵐の夜、桐壷帝の霊が　宮中に現れて　間もなく、病気の為　世を去った　とされる、その死が、強情な弘徽殿大后にも　衝撃を与え　朱雀帝から　再三に亘って要請されながらも、同意しなかった　源氏の召還を　承諾せざるを得なくなった、そのきっかけとなったのである。

Ｄ．人物の特色

右大臣は、その性格の短所や　源氏への横暴な振る舞いが、語り手から　たびたび攻撃を受けるのでるが、それは　源氏側に偏った価値観や立場からの批評・批判である部分も　少なからずある。長女の　弘徽殿大后（弘徽殿女御）との　二人三脚で、政治を運営す際には、むしろ　男勝りの　大后に　引きずられる感があり、敵役の筆頭というには、それほどのことはしていない。むしろ　その有り方が、物語の背後の政治や現実

を　読者に意識させる役割を果たしているのである。
　右大臣が　個人として、描写されるのは、「花宴」の帖と、「賢木」の帖に限られるが、そこでは、極めて人間臭い一面をもつ人物である。
　藤の花の宴で、右大臣が、政治的野心を顕わにして　殿上人を呼び集めたことは、倉田実氏の指摘の通りであるが、この時点では、源氏や桐壷帝は、余裕を持って　この政治的示威を　揶揄している。宴が始まってからも　源氏を呼び寄せようと　やっきになるさまは、桐壷帝の苦笑と同情さえも買っているのである。ようやく　桐壷帝の口添えを得て、右大臣家に、恩を着せるカタチで、源氏は　参席する。多くの殿上人が、衣冠を正した中で、一人だけ　私服直衣で参席した源氏は、右大臣に対抗する気概を誇示している。さらに　源氏は、男性達の宴を見物する　右大臣家の女性たちをも　魅了し、他の男性は入れない御簾の近くまで　行き来するのであった。その中に、かって　弘徽殿で契った　朧月夜を見つけ出す。後に　彼女は　予定されていた東宮への入内を　御匣笥殿としての出仕に　変更せざるを得なくなったが、それは　この藤の宴で、源氏との仲を、周囲の女房や姉妹たちに　気取られて　噂になった為　と考える事が出来よう。右大臣は　その威勢に花を添えようと　源氏を招待し、しっぺ返しを受けた形となってしまったのである。そのようなところにも、一件　間の抜けた人間臭さが　感じられるのである。
　「賢木」の帖では、右大臣は　朧月夜と源氏との密会に出会って　大いに怒るけれども、そのきっかけも「瘧」を病み　その上　雷雨にあった娘を　見舞おうと　前触れも無しに訪れ、近々と　顔などを覗き込んだことによる。たとえ親子であったも、礼節と深慮を旨とする　貴族社会にとっては、たしなみのない振る舞いであり、語り手も
「我にもあらでおはするを、子ながらも恥づかしと思すらむかしとさばかり人は思しはばかるべきぞかし」
＝（朧月夜が、茫然自失の状態でいらっしゃるのに対して、たとえ我が娘であっても、「さぞ恥ずかしい思いをしておいでだろうに」と　気づかうぐらいは、このくらいの地位の高い人（右大臣）ならば、考えて　憚るべきであろう）
　と　批判し、娘の個人としての領域への　無遠慮さを詰るが、右大臣としては　娘を愛しての　父親ぶった行動であったのだ。それ故に　源氏への　怒りも　大きかったのである。弘徽殿大后が、妹の　朧月夜も　源氏と同調して　朱雀帝を軽んじた　と、非難する際には、右大臣は、朧月夜は　あくまでも　源氏に　弄ばれた被害者なのだ　として　かばい続ける。その右大臣には　源氏や藤壷のように　心に罪を認めながらも栄華を守り通す　したたかさや陰影は　見えない。この場面は、金田元彦氏が、「この賢木巻の最後を飾る「密事の発見」の章段で、もっとも見事に　描写しているのは、朧月夜内侍や光源氏、弘徽殿大后　ではなく、右大臣その人であるのが　興味引かれる。しかも、このあたりの描写と　一番　よく似ているのは、常夏巻における　内大臣（頭中将）の描写である」と　指適している。

右大臣の　確かにこうした　あけすけで、強引な性質は、物語後半になると、　夕霧と雲居雁を　怒りに任せて引き離した　内大臣（頭中将）にも見られる。これを　金田氏は　頭中将が　妻の右大臣四君を通して　右大臣家の家風に　感化された故　と見ている。但しこれは、個人的な家庭事情ばかりとも言い切れない事であろう。冷泉帝即位後、かっての右大臣家の　政治勢力は、頭中将と東宮（朱雀帝の息子）の側に　結集していた。これは　後に　源氏と頭中将とが、宮廷の二大勢力として　対立することからも明らかである。つまり　頭中将は、左大臣家と右大臣家という物語に描かれた　藤原摂関家筆頭となったのである。その仲で、頭中将が、今度は　源氏の敵役に仕立てられてゆくことは、指摘がある（伊藤　博）。

具体的には、頭中将には、果断や男らしさに　強引さや軽率さも加わって、現実性や当世風の華やかな美意識も　前面に押し出されて来る。それが描かれるのは「絵合」の帖・玉鬘十帖であるが、源氏の尚古趣味・漢才重視といった気質と対抗する形になっている。その中でも、右大臣が持っていた強引さ・性急さ・華やかな現代趣味　も受け継がれた　と見る。その意味では、必ずしも　史実とは一致しながら、物語の中の「摂関家気質」を、右大臣から頭中将が　継いで　源氏に対抗した　ともいえるのであろう。

5・頭中将（後の内大臣・太政大臣）とうのちゅうじょう

A．その生涯

＊　蔵人少将（後の頭中将）は、右大臣の娘・四君と結婚するが、馴染めないでいる。（「桐壷」）。

＊　昇格した　頭中将（後の内大臣）は、妹「葵上」と結婚した源氏と親しくしている。ある五月雨の夜、宮中の宿直室で、源氏・左馬頭・藤式部丞らと、女の品定めをする。「雨夜の品定め」である。その際、頭中将は、かっての愛人「常夏の女（後の夕顔）」、と、彼女との間に生まれた娘（後の玉蔓）が、行方不明になってしまった事を語る。（「帚木」）。

＊　頭中将は、源氏に負けじと「末摘花」を得ようとするが、源氏に　先を越されてしまう。(「末摘花」)。
＊　源氏への競争心から、好色の老女「源内侍」に　ちょっかいを出し　源氏と共に　彼女の好色を　笑いあう。(「紅葉賀」)。
＊　頭中将は、妹である　源氏の妻の「葵上」の死を　心から悼む。(「葵」)。
＊　桐壷院が崩御し、以来　頭中将の　左大臣家は、右大臣家におされ　不遇続きである。(「賢木」)。
＊　宰相（頭中将）は、弘徽殿大后の圧力を恐れず、須磨に流離した源氏を見舞う。(「須磨」)。
＊　冷泉帝の御代となり、権勢を取り戻した権中納言（頭中将）は、長女を「弘徽殿女御」として入内させる。(「絵合」)。
＊　冷泉帝が、「梅壷女御（後の秋好中宮）」に　執心していると聞いた権中納言は、「梅壷女御」の後見をしている　源氏へのライバル心も手伝って、「絵合」に向けて　名画の収集に熱を上げる。「絵合」の当日、中々決着のつかない絵合わせの争いは　夜遅くまで続けられる。が、最後に登場した　源氏が須磨に流離していた際に、描いた須磨の絵日記によって、勝敗は明らかとなる。(「絵合」)。
＊　権中納言は、内大臣となって、政務を任かされるが、「弘徽殿女御」が、中宮になれなかったことに　落胆し、次女の「雲井雁」を皇太子（後の今上）に嫁がせようと思うが、「雲井雁」は、既に　幼馴染の「夕霧」と通じていたのである。権中納言の嘆き憤懣は尽きない。(「乙女」)。
＊　内大臣は、娘の「弘徽殿女御」と「雲居雁」二人の不運を嘆き、行方不明になっている娘（玉蔓）を、何とかして探し出したい　と考える。そんな折、「自分の娘が　他人の家で養われている」という夢占いをうける。(「蛍」)。
＊　内大臣は、自分の子だと名乗る「近江君」を引き取るが、その余りにも無教養なのに、うんざりする。(「常夏」)。
＊　源氏から「玉蔓を　養女として育てている」と聞いた　内大臣は、感謝しつつも、源氏と玉蔓の仲を疑う。(「行幸」)。「玉鬘」への　貴公子たちの関心は　中々である。
＊　玉蔓と鬚黒の結婚に、世間は愕然とする。内大臣は、玉蔓が尚侍となって、娘の「弘徽殿女御」のライバルになるよりは、将来性のある鬚黒の妻になったことを、安堵するのであった。(「真木柱」)。
＊　かって「雲居雁」と「夕霧」との間を裂いた内大臣は、「雲居雁」の処遇に困っていた。内大臣は、「夕霧」に　縁談のあるのを知り、二人の結婚を認めることとする。(「藤裏葉」)。
＊　太政大臣（もとの頭中将・内大臣）は、長男「柏木」が、「女三宮」を妻に　と望むのを　後押しするが、「女三宮」は、父　朱雀院の意向により、源氏に降嫁してしまう。(「若菜上」)。

＊　源氏から、朱雀院の五十賀の試楽に招かれた「柏木」は、「女三宮」と　密通した後ろめたさから、出席を断ろうとするが、事情を知らない父親の致仕大臣は、出席を勧める。試楽の後の宴席で　源氏がら　痛烈に　皮肉られた「柏木」は、痛恨の余り、どっと重い病の床に伏せることとなる。致仕大臣は、柏木の妻「落葉宮」の邸から　強引に「柏木」を　自邸に引き取り看護する。(「若菜下」)。
＊　致仕大臣の　懸命の看病も空しく、「柏木」は、死去してしまう。(「柏木」)。
＊　致仕大臣の死は　源氏と　ほぼ同じ頃　とみられる。(「匂宮」)。

B．物語における位置・準拠

頭中将は、「桐壷」の帖に登場する　左大臣の嫡男である。同じ「大宮」腹の「葵上」との　年齢の上下は、明確には語られていない。「紅葉賀」の帖　源内侍に関わる条の「二十の若人たち」という記事をもとに、源氏と彼との年齢が　極めて近い　ということであれば、彼は「葵上（源氏より四歳年上)」の　弟ということになる。

頭中将の登場が、「桐壷」の帖から　「御法」の帖にまで及び、まさに「源氏物語」正編の全体に亘っており、重要な役割を担う人物であるといえよう。しかし、彼の子息「柏木」や　源氏の子息「夕霧」に見られるような、彼を中心に据えた　独立した「帖」は存在しない。あくまでも、源氏を主人公（シテ）に、影の如く寄り添う（ワキ）としての存在なのである。

モデル論としては、「明石」の帖までの　頭中将を　藤原隆家に、「澪標」帖以降を、藤原公任・公季と見る説がある（手塚昇)。和琴のつながりから「若菜上」帖における、夕霧主催の「源氏四十賀」の記述などを根拠に　藤原忠平の名をあげる人もいる（河内山清彦)。藤原氏の領袖である　頭中将は、概して　当時の藤原北家の為政者と　イメージの重なりを持つ。王朝物語的観点から　捉えるならば、

「よしあしきけぢめもけざやかにもてはやし、またもて消ち軽むることも、人にことなる」即ち、

＝（善悪の区別もはっきりとつけ、人を褒め上げたり　また貶め軽んずることも、人一倍激しい」

と語られているのである。先駆として、「落窪物語」における「蔵人少将」の存在は　見逃せないところである。「宇津保物語」との関連においては、涼・兼雅といった人物からの投影が指摘されている。(片寄正義・石川徹)。次いで　以降の物語を　みるならば、「宇治十帖」の「薫」に対する「匂宮」、「夜の寝覚」の　男君に対する「宮宰相」、「今とりかへばや」の「女中納言」に対する、「宰相中将」などは、皆　頭中将の　末裔である　といえよう。

C．人物評価の歴史

現存する最古の物語評論の書「無名草子」（鎌倉時代初期成立）は、「頭中将」に対して　極めて好意的である。

「大内山の大臣（頭中将）は、いとよき人なり。・・・まして須磨へ訪ねおはしたるほどなど、返す返すめでたし」

と、絶賛している。「夕霧」と「雲井雁」との仲を　いったん引き裂いたことについても、むしろ彼の側に　同情を示す。逆に　源氏を論じるにおいては、その「さらでもとおぼゆるふしぶし～」として、頭中将への対応を　第一に挙げているのである。即ち、青年時代　あれほど親しかったにも拘わらず、「澪標」の帖での、政界完全復帰の後は、養女「六条御息所の遺児　前斎宮」を入内させてまで、頭中将の娘「弘徽殿の女御」に対抗したことへの非難である。「無名草子」の人物評価は、当時　この物語が、どのように読まれたいたか　を示す、重要な資料ではあるが、やはり　印象批評の域を出るものではない。

頭中将に関する近代的研究は、物語におけるその性格と　機能の関係を論じた　早坂礼吾氏で始まる。「源氏の生涯に陰の形に添うように、常に寄り添って、しかも　一足下がって、ついてゆく頭中将は、確かに　この物語の中では脇役ながら、最も重要な人物の一人　であり、源氏が、「宇津保物語」の「仲忠」「涼」などよりも　血の通った人間性をもつのは、この　頭中将の存在に負うところが　少なくないのである。頭中将の性格は、貴族社会において、上流貴族のもつ階級意識と、名家における　長男的性格であって、いわば　一般的なものであるが、さらに、特殊な要素として、源氏に対する激しい競争心が、付加されているのである。頭中将は、その性格により、源氏との間に、繰り返し対立関係を生じさせるが、その後には、必ず和解が用意されている。最終的には、「紫上」の死をもって、源氏が、一切を放棄したことにより、対立の契機はなくなり、頭中将は、物語における存在意義を失ったのである。以上が、早坂氏の主旨である。

早坂氏が、頭中将の性格に、一貫性を見るのに対して、「人物像の「変貌」を強調したのは　森一郎氏である。森氏は、「須磨」の帖では、「人柄のいとよければ」と、言われていた頭中将が、「絵合」の帖では、その性格描写が「悪しざま」であることを指摘する。「須磨」の帖では、源氏の無二の味方、「絵合」の帖においては、敵役　というように大きく変貌している　とする。「源氏物語」では、ある人物の必然を追求するのではなく、主題の設定に随伴して　人物造成が成されている　というのが　氏の結論である。

末摘花・柏木など　多くの人物の具体的事例をあげて　論証するこの森論に対しては、「変貌」という判断の妥当性を問う以上に、「源氏物語研究」とは、どのようなものであるべきか、というところで、本質的な論争が生まれた。秋山虔氏は、森論に対して　一定の理解を示しながらも、主題の変化に応じて人間像が変えられることなく、人間像を

そのように変えてゆく事を要錆するよう主題（物語世界の論理・方法）が変ることこそ問題意識を持つべきである　と主張し、大きな反響を呼んだ。しかし　森氏が指摘した源氏の須磨・明石への流離を境とす　頭中将像の「変貌」という問題が、その人物論を考えるにおいて、重要な意味を持つ事は、紛れもない事実であった。以後の頭中将論は、この「変貌」問題を　どう受け止めるかを軸に　展開してゆく。

その人物造型に　最も　厳しい評価を下したのは、松尾聰氏である。松尾氏は、この問題を、頭中将に　源氏の協力者と競合者の、一人二役を背負わせながら、なお脇役としての比重の軽さを、堅持させようとした為に起こった矛盾・作者の手落ち　とする。それに対し　武原弘氏は、その「変貌」の相を、本質的に変化のない源氏像との関係において、捉えることにより、そこに、一定の合理性を見出そうとする。

また「真木柱」の帖で、「二条の大臣」と呼ばれる　頭中将は、「澪標」の帖以降、旧右大臣家の権力を継承したのであり、旧左大臣家に立つ　藤壷＝源氏とは、政治的対抗関係に　立たざるを得なかった　と見、その限りでの　彼の人物造型の「変貌」は、当代の政治関係を知悉している人々からすれば、むしろ必然的　と　捉える向きもある（野村精一）。

「変貌」問題に関わる作品評価については、以上のように　諸氏見解の分かれるところであるが、頭中将の人間像や役周りについては、およそ共通理解が得られているといえよう。彼は　太政大臣にまで昇りつめる、優れた政治家であるとともに、舞楽や詩作にも　秀でた才持つ　といわれた。とりわけ楽については、和琴名手とされている。しかし　彼の理想性は、あくまでも現実社会の人間として存在可能な範囲に留まるものである。聖的・超越的主人公である源氏に対しては、何事においても、一段低所に　甘んじることとなる。頭中将とは、その生涯を通して、源氏に　繰り返し　挑みながら、結局は、彼の引き立て役に　終始する人物なのである。彼を　常に　源氏の後塵を被る者としての記述を理解するのには、何としても　彼は　源氏の弟（正妻であった葵の弟）である　という　人間としてのしがらみの事実に　着目しなくてはならないのである。

源氏の　最も近い所に居ながも、彼が感知し得る源氏の秘事は、醜女（末摘花）や老女（源内侍）との関わりに　限定されている。后である藤壷との密通事件はおろか、自身のかっての恋人夕顔と関係についても　知るところではなかった。長男柏木の死についても、彼には　息子が、そこに至った経緯を知る由も無かった（伊藤博）。一貫して事態の本質からは遠ざけられ　物語の表面的なところで、踊り続けさせられた　生涯であった。

D．人物の特色

この項においては、物語が　頭中将を語るに際し　どのような形容詞・形容表現を用

いているか　という観点から　その人物像の　特色を見ることとする。

その一　「かしこし」

「野分」の帖において、源氏が内大臣を腐す文脈においても、

「いとかしこき人の　末の世にあまるまで才たぐひなく」

＝（まことに頭のよい人で、この末の世には、おさまりきいれぬくらい学問も無類である）。

と　語られているように、かれは、当代きっての賢人・才人である。帝の外戚でないにもかかわらず、太政大臣となるまで栄達を遂げたことの背景には、家柄以上に　その政治家としての　実力を見るべきであろう。

彼が　内大臣に昇進した「乙女」の帖においては、

「心用ゐなどもかしこく・・・公事にかしこく」

＝（心づかいなども、しっかりしていて・・・政治の実務に有能で）

と、この語をもって　彼の能力の高さが　賞賛されている。しかし、一方　同じ帖には、夕霧と雲居雁の関係に気づかないことについて、

「かしこがりたまへど、人の親よ」

＝（いかに賢いつもりで　いらっしゃっても、やはり　親ばかというものですね）

と　女房に　陰口を叩かせる場面もある。

その二　「男々し（ををし）」

源氏物語の　十二例中　三例が、頭中将を　そう評したものである。

１．いと男々しうあざやかに・・・「葵」帖。

２．すこし男々しくあざやぎたる御心・・・「乙女」帖。

３．人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて・・・「野分」帖。

文字通り　男らしいこと　が原義ではあるが、主人公源氏が　「女にて見たてまつらまほし＝（女にして　拝見したい）」と　周囲が思う女性的美をも兼備する　この物語において、「男々しき」ことは必ずしも　肯定的な評価とは結びつかない。２．３．はそれぞれ、勝気に過ぎて　角が有り　情に欠けている事を難じているのである。また以上の三例が、「はなやか」・「あざやか」・「あざやぐ」という　はっきりと際立った事を示す語を伴っている点も、彼の性格を考える上で　重要である。

「藤裏葉」の帖に於いては、夕霧を婿として迎える事を決心した頭中将が、夕霧が父の源氏よりも「心用ゐ男々しく」あること、つまり　性格的に　自分に近い事を持って、彼を高く評価し、一方、源氏が　夕霧への訓戒において、頭中将を

「下の心ばへ男々しからず

＝（内心は　男らしくない）

と　非難している事は、興味深いのである。このエピソードは、子供たち（夕霧と雲居雁）の結婚をもって、源氏と頭中将との対立関係が　解消したわけではない事を、雄弁に物語っている。

その三　「きらきらし」

「源氏物語」十四例中　三例が　彼に対するものである。

１．人柄いとすくよかにきらきらしくて・・・「乙女」の帖。

２．きらきらしうものきよげに…「行幸」の帖。

３．あなきらきらしと見えたまへるに…「行幸」の帖。

１．はその人柄を、２．３．は、その容貌を　堂々としていて威厳がある　と賞賛したものである。また、唯一の女性に関する用例が、玉鬘に関するものであることは、重要視すべきであろう。その他　柏木の言葉使いに対し、「きらきらと」の用例がある事を踏まえ　針本正行氏は、この語を　頭中将一族の血脈を象徴するもの　と見る。

以上は　全て肯定的な意味合いで用いられたものであるが、この語は、源氏を中心とする他の主要人物に用いられる事が無く、逆に故大宰の少弐・常陸の介といった　受領階級に対する用例がいくつか見られる。それを合わせ考えるならば、頭中将家に対し多用されている「きらきらし」は、やはり　本物語が目指した美的世界を表わす語とは見做し難いのである。なお、頭中将一族に　用いられている語としては　他に「けざやか」などがある（佐伯雅子）。

その四　「人にはことなる」

これは「紅葉賀」の帖において、源氏と共に青海波を舞う頭中将が秀でた人物であることを示す表現である。しかし、以下

「立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり」

＝（源氏と立ち並んでは　やはり　花の傍らの深山木といったところである）

と　続く。他にも、

「ひとよりはことなる君たちを」（若紫）。

「この君も人よりは　いとことなるを」（紅葉賀）など。

同様の表現は多く、いずれも　彼が常人を抜きん出た存在ではありながら、源氏には到底及ばないことを語る。以上は　語り手及び交際相手の女性（源内侍）による評価ではあるが、最終的には、「藤裏葉」の帖で、六条院行幸の際の、

「我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりける」

＝（自分も常人よりはすぐれた身ではあるものの、やはり　源氏の　准太上天皇という身分は　この上もないものであった）

という　自己認識へたどり着く。

ちなみに　源氏に対して用いられた類似表現の一例として、「ひとにことなり」（花宴）がある。そこには「は」の文字は無い。江戸時代前期に　北村季吟が記した注釈書「源氏物語湖月抄」に、「たとえば、一字にて人の行状をほめそしりたる也。此物語にても、てにをはの一字にて如此（かくのごとく）の類あまたあり」

＝（例えばある一字をもって、人の行状を誉めたり　けなしたりするのである。この物語においても、「て・に・を・は」の一字により、それを行っている類は　多く存在す

る）
と、あるのは、このような例を指すのであろう（星山　健）。

6・夕霧　ゆうぎり

A．その生涯

＊　夕霧の母「葵上」は、夕霧出産後　間もなく「六条御息所」の生霊（物怪）によって、急死してしまう。夕霧は　三条邸で、祖母「大宮」によって育てられる。（「葵」）
＊　十二歳となって　元服し、二条東院に引き取られ　学問を重視する源氏の意向により　家柄に相応しくない低い位　六位を賜り　大学で学ぶこととなる。（「乙女」）
＊　夕霧は、大宮の許で　一緒に育った従姉の「雲居雁」と、慕い合っている。娘の「雲居雁」を皇太子妃にと　望んでいた内大臣は、夕霧との関わりを知り、怒って　自邸に引き取る。その際　夕霧は　雲居雁の乳母に、「六位という低い位であること」を侮辱され　後々まで、恨みに思うこととなる。（「乙女」）
＊　失恋して落ち込む夕霧は、五節の舞姫（後の藤典侍）を見て　心惹かれる。五節の舞姫の父・惟光は、娘を　宮中に出仕させようと考えていたが、夕霧と結婚させるのも悪くないと　喜ぶ。（「乙女」）。
＊　父源氏によって決められた　母親代わりの「花散里」に会った夕霧は、美人ではないが　穏やかな人柄に惹かれ　後々まで　大切に接する。（「乙女」）。
＊　台風の日、夕霧は、父源氏の愛妻「紫上」の姿を、垣間見る。この世のものとは思えない　美しさに　すっかり　心を奪われる。日ごろから　父が、自分と「紫上」とを決して会わせないようにしていたことに、合点が行くのであった。（「野分」）
＊　源氏と連れ立って、実の娘だと聞かされていた「玉鬘」の許に、台風見舞いに訪れた夕霧は、部屋の中で　父源氏と　姉の玉鬘の睦まじい姿を見て、これが　実の親子なのであろうか　と、奇異に思う。（「野分」）
＊　夕霧は、父源氏から「玉鬘」の　実の父親は「内大臣」である事を　打ち明けられる。寄り添って臥していた　あの野分の日の　二人の姿を　納得するのであったが、美しい「玉鬘」に　惹かれて行くのであった。（「行幸」）
＊　祖母の「大宮」が、死去する。夕霧は　同じ喪服を身にしていることに託けて「玉

鬘」に　恋心を　打ち明けるが、色よい返事は無かった（「藤袴」）
＊　夕霧に　右大臣の娘や　中務宮の娘との縁談が　持ちあがるが、夕霧は、「雲居雁」を　深く思い続けていて、初恋を引き裂かれて六年目にして、ようやく内大臣の許しを得、幼い時から　二人が育った　三条邸で、新婚の生活を始める。（「藤裏葉」）
＊　夕霧は、朱雀院から、愛娘「女三宮」との縁談を仄めかされ、関心は抱くが、「雲居雁」を　悲しませては、と思い留まる。（「若菜上」）
＊　六条院で「蹴鞠」が行われた　その日、猫が　御簾を引き上げた為に、「女三宮」の姿が　顕わになる。夕霧は　心中　密かに　端近に立っていた「女三宮」の　不注意を　批判する。同時に　「女三宮」に　思いを寄せている「柏木」の心中をも　推し量るのであった。（「若菜上」）
＊　大納言となった夕霧は、「雲居雁」「藤典侍」との間に、それぞれ　数人の子供が居る。宮仕えで忙しい「藤典侍」は、子供を、「花散里」に育ててもらっている。（「若菜下」）
＊　夕霧は、六条院での女楽の際の、「紫上」の和琴の素晴らしさに　心を奪われる。その夜「紫上」は　急病に倒れ、夕霧の心配は　格別である。（「若菜下」）
＊　大納言昇進の祝いを兼ねて、重病に臥した「柏木」を見舞った夕霧は、「柏木」から、父源氏への謝罪と　「柏木」の妻「落葉宮」の世話を　遺言される。（「柏木」）
＊　「柏木」の死に、悲しみ暮れる夕霧は、「女三宮」が出家したのは、「柏木」との不義を　清算する為であったのだ　と思い至る。（「柏木」）
＊　夕霧は「柏木」の遺言を守る為に「落葉宮」の弔問に　訪れるが、奥床しい「落葉宮」に恋心を抱くようになり、正妻の「雲居雁」を激怒させる。（「柏木」）
＊　夕霧は、「落葉宮」と琴で　想夫恋を合奏した夜、宮の母「一条御息所」から、「柏木」遺愛の横笛を　譲り受ける。（「横笛」）
＊　夕霧は　夢枕に立った「柏木」から「あの横笛は、わが子に伝えたかった」と聞く。六条院を訪れた夕霧は　「柏木」の面影に似た「薫」を見て、「薫」こそが「柏木」の実の子であり、横笛を伝えるべきは、この子だ　と確信する。夕霧は、源氏に「柏木」の夢のことを話す。源氏は「その横笛は、私が預かる」と言う。死の床で、「源氏に謝って欲しい」と言われた事も話すが、源氏は　何にも語らない。（「横笛」）
＊　夕霧は、病の「一条御息所」を見舞った折、「落葉宮」に　恋心を告白し、拒まれつつも、彼女の傍で一夜を明かすが。無理無体なことは避ける。（「夕霧」）
＊　「一条御息所」は、娘「落葉宮」と夕霧が、契りを交わしたのだ　と　思い違いをし、将来を悲観して　夕霧に　文を送るが、「落葉宮」からの恋文と勘違いして　嫉妬知る「雲居雁」に　その手紙を隠されてしまう。（「夕霧」）
＊　夕霧は、ようやく「一条御息所」からの文を見つけ出し　急いで　返事を認めるが、「落葉宮」が、一夜の慰み物にされた　と　勘違いして　絶望した「一条御息所」は、容態が急変し、死亡してしまう。（「夕霧」）

＊　夕霧は　ますます「落葉宮」に心を尽くすが、「母の死は　夕霧の誠意のなさであった」と恨む「落葉宮」の心は　中々解けない。(「夕霧」)
＊　夕霧が　迫った為に、「落葉宮」は、塗篭に　難を逃がれる。空しい一夜を明かした夕霧であったが、翌日　女房の手引きで　ようやく塗篭に忍び、遂に「落葉宮」との契りを交わす。(「夕霧」)。
＊　「落葉宮」との結婚に、怒って　実家に帰ってしまった「雲居雁」を　夕霧は、連れ戻そうとするが、果たせない。(「夕霧」)
＊　「紫上」が　死亡した際、夕霧は　源氏から、「紫上」の亡骸を出家させる事を依頼される。源氏と共に、「紫上」の美しい死顔に見入り、彼女への　長年の思慕に　涙に暮れる。(「御法」)
＊　源氏亡き後、夕霧は、右大臣となり、長女を今上帝の皇子である皇太子と、また　次女を、二宮と接近させ、「落葉宮」の養女にした「六君」を、「匂宮」と結婚させようと考えている。(「匂宮」)
＊　左大臣となった夕霧は、「匂宮」が「中君」と結婚したのを　不満に思い、「六君」と「薫」との結婚も考えるが、「薫」と「女二宮」との縁談を知って　思い直し　異母妹の「明石中宮」の助力を得て、「六君」を「匂宮」と結婚させることに　成功する。(「宿木」)

B．物語における位置・準拠

「澪標」の帖の「**宿曜」の占い**で、「中の劣りは　**太政大臣にて、位を極むべし**」と　予言されたように、夕霧が　位人臣を極めることは、源氏の栄華の象徴であった。(**物語のゆかり（宿曜の夢判断）の実現　その三**）源氏が　実質的な政治の表舞台から身を引き、あるいは　源氏亡き後は、源氏一族の要として位置づけられ　有能な実務的な政治家として、または　人間としても　危なげのない「まめ（誠実）な人」として　夕霧は造型された。

夕霧は　誕生後、母方の祖母「大宮」の許で、養育され、物語の前段では、幼なじみの「雲居雁」との恋と結婚、「乙女」)・(「藤裏葉」)。　六条院を吹き荒れた　野分の翌日　垣間見た「紫上」への思慕（「野分」)。　物語の中段においては、「柏木」と「女三宮」との「ものの紛れ」の観察者として（「若菜上」・「下」)・(「柏木」)。また更に　後日談として、「落葉宮」との恋物語の主人公として、(「夕霧」)。源氏亡き後の終段では、貴族社会の権力の中枢にある者として　宇治の物語を支える。

物語を　源氏王権の物語として読み解くとき、「冷泉帝」や「明石中宮」に比し、ややもすれば、地味な役割を担わされているようではあるが、「紫上」への垣間見では、後の「柏木」・「女三宮」との密通を予感させるような構想上の役割をも担っている。それでいながら　それは「密通の可能態として終わり、実現せず、最後まで、源氏の栄華

と退廃の観察者として、物語では　位置づけられているのである。
　源氏の実質的な長男としての夕霧の準拠としては、道長の長男「頼通」が指摘できる。源氏の六条院時代の準拠として、道長がある　といわれる。九九二年の生まれの「頼通」は、「六位宿世」と疎まれた夕霧とは異なり、長保五年（一〇〇三）正五位下、寛弘三年（一〇〇六には、正三位と、藤原氏の氏の長者道長の後継者として、順調すぎるほどの出世の道を歩むのだが、彼が　具平親王の娘の隆姫と結婚するのは、寛弘六年（一〇〇九）で、　第一部が書かれた頃には、まだ結婚していないことになる。後に「三条帝」の「女二宮」との縁談があり「栄華物語」では、父道長から、「男は、妻は、一人のみやは持たる、痴れのさまや」と、その「まめ人」ぶりを　諫められている。「紫式部日記」でも、
「年の程よりは、いとおとなしく、心にくきさまして、「人はなお、心ばへこそ難きものなれ」など、世の物語　しめじめとしておはするけはひ、をさなしと　人のあなづりきこゆること　悲しけれど、はづかしげに見ゆ」
＝（お年の割りには、ずっと大人びて　奥床しいご様子で、「女性は、やはり気立てがよいということになると、滅多に居ないものなのですね」などと、男女にまつわる話などを　しんみりとしておいでになるご様子は、まだお若い　などと、人々が　お侮り申していることなどは、本当にいけないことだ）
　と　評されてもいる。源氏による　夕霧評は、
　「みづからのあざればみたるかたくなしさをもて離れよと思ひしかど、なほ下にはほのすきたる筋の心をこそとどむべかめれ。もてしづめ、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」
　＝（私の遊び好きの愚かしさを、見習わぬように　と思ったのだが、やはり、心のどここかに、遊びの分かるところを持っていた方が　よさそうだ。取り澄まして、上辺ばかり　生真面目にしていている　というのでは、扱い難い）（「初音」）
　と、あるのも、多分に「頼通」を意識してのこと　だと言えそうである。
　「落葉宮」との恋愛悲喜劇に関しては、物語中の準拠として、「玉鬘」を引き取るときの「鬚黒」一家の悲喜劇を　指摘する事が出来よう。女性のことで、乱れた振る舞いのなかった、「名にたてるまめ人」＝（有名な　真面目人間）の「鬚黒大将」が、すっかり　有頂天になって、これまでとな別人のように、好色者のようになっていること、（「真木柱」）に　比することが　出来よう。

C．人物評価の歴史

　夕霧は、物語の人物としては、面白みが全くない。しかし　当時の　官僚貴族としては、典型的な、また理想的な人物であったということ（阿部秋生）であろう。おおかたの研究者の一致した夕霧に対する評価である。例えば「雲居雁」との結婚について、「無

名草子」で、
「まめ人の大将、若き人ともなく、余りに麗はしだちたるは、さうざうしけれども、づしやかなる方は大臣にもまさり給へり。さきざき聞ゆることどもにも靡かで、藤の裏葉のうち解け給ふを心長く待ちつけ給へるほど、ありがたし」
＝（真面目人間の夕霧の大将は、若い人という風でもなく、余りにも　きちんとしている所は　物足りないが、落ち着きがあるという点では、父大臣の源氏の君にも　勝っている。あれこれと　周囲が申し上げる結婚話などにも、耳を傾けないで、雲居雁との仲の　お許しが出るのを、気長に待って、本望を遂げるあたりは、滅多にないことだ）
　と　その評価は高い。
　そういう外面的な輪郭に対する評価とは別に　河内山清彦氏は、「野分」の帖以来、義母の「紫上」に対して、あってはならない幻想にとらわれ、危険な衝動の虜になりそうな誘惑に駆られた恋心を　抱き続けたとして、この禁じられた対象を、熱狂的に求めようとする　底深い情念こそが、彼の根源的な欲求なのだが、彼は「まめ人」という人格仮面と　本然の自我との　矛盾を、認識しない存在であった　という。氏の視点は、「紫上」垣間見に　既に　後の「落葉宮」への恋物語の　彼の心の中の兆しを読み取るものである。
　「落葉宮」との場面で、「無名草子」も、
「いと思ふやうに住み果て給ひにたる世の末になりて、よしなき落葉の宮まうけて、まめ人の名を改め、さま変り給ふぞ、思はずなるや」
＝（たいそう思い通りに　夫婦生活を送った晩年になって、何とも理解出来ない落葉宮愛人問題を起こして、真面目人間の名を台無しにし、さま変わりになってしまったのが、意外な事だ）
と　言っているように、今まで　少なくとも　外面的には、世の中の観察者に徹していたはずの夕霧の行動に対して、評価は　大きく分かれるのである。
　秋山虔氏は、夕霧が、誠実に賢明に生きながら、逆に　そのことが女性の運命を狂わせ　その生命を　残酷に蹂躙するが、その事に　気づいていない、夕霧という存在は、「女が女であることの無慚さを　際立たせる理不尽な現世というものの　人格化である　とさえ思われる」という。「落葉宮」の物語は、それ自体　紫式部の嘆きの物語化に他ならない　とする藤村潔氏の見解も　また　秋山氏らの評に　添うものであろう。
　伊井春樹氏は、夕霧の「まめ人」性について、今更涙を尽くしての　若々しい懸想は相応しくないと考え　既に　母宮に　許されていたのでということにして、「落葉宮」を迎え取る。それは、彼女の母宮に　罪を着せての策略で、悪辣といってもよい。清純な「雲居雁」との恋の姿は消えて、欲望を　現実させるための、手段を選ばない謹直さという意味では、「まめ」ぶりを示しており、中年の打算的な態度だ　と批評する。
　そういう手厳しい夕霧評とは別に、石田穣二氏は、今まで現われなかった、新しい恋の物語が書かれている　ということ、また後見ということが本質的な重い意味を持ち、

その恋が、夕霧固有の「深く悲しむことの出来る　悲しみを知る心の優しさ」とでもいい得る「人間的美質」としての　精神性に　本質的に規定されていて、そういう精神性への傾斜を持った夕霧の中に、「宇治における薫の前身」を　見ようとする。

作者紫式部は、「夕霧」の帖で、初めて　女の身辺に近づきながら、何事もなく、一夜を明かす男を描く。後の「堤中納言物語」の「逢坂越えぬ権中納言」のような例もあるけれど、影響といったあとの文学現象とは　無縁のところに　この物語の　独自の問題があるのである。「人性の普遍に根ざした男同志の友情」を基礎として、「深く悲しむことの出来る、悲しみを知る心の優しさ」とでもいい得る性質は　源氏にも賦与されていた人間的美質であったけれども、そういうものを、恋を　本質的に規定するものとして、物語の中に、持ち込んだところに、作者紫式部の「夕霧」の帖の中で　踏み出した新しい一歩があったと、石田氏はいう。

小西甚一氏は、まめ人の大将夕霧の　真摯で野暮ったい恋愛は、一緒のユーモアがあって、「女三宮」の降嫁以来、源氏の身辺に　引き続き起こった　不幸な事件の連鎖から　読者の緊張を解放している　といい、夕霧の恋を「柏木事件のパロディーParody=風刺作・劇作)」として　捉えているのである。

D．人物の特色

「御法」の帖では「紫上」の死が、また「幻」帖では、「紫上」亡き後の源氏が、描かれている。「夕霧」の帖を　第二部から　外してしまっても、物語全体の流れからはたいした障害にはならない。夕霧の人物像については、あれほど　緊密に　重苦しく営まれてきた　六条院解体の物語と　全然無関係に　突如として　語り始められる「夕霧」の帖での「夕霧」・「雲居雁」・「落葉宮」の三角関係を、どう読み解くのか、それが鍵となる。

「夕霧」の帖の物語は、六条院に「女三宮」が降嫁して、「紫上」が、六条院の女主として、一身に　その矛盾を受け止めなければならなかった、「女三宮降嫁の物語」のパロディなのではないか。

第二部の発端は、朱雀院の「女三宮」の　婿選びから始まる。院の迷いの紆余曲折を経て、結局「宮」を引き受けてしまう源氏側の要件として、彼の「色好み」が　指摘される。

一方　夕霧は、「真木柱」の帖で、「まめ人」と評され、「女三宮」降嫁の折にも、「もとよりいとまめ人」として、婿君の候補からは　外されていた。(若菜上)　彼の「まめ人」たる所以のところは、少年の頃「雲居雁」を見初め、太政大臣の反対にもめげず、他の女性に心を移すことなく、遂に　「雲居雁」を　正妻として迎えるという　女性関係の実直さによる。六条院と、二条東院に、数多くの女性を　据え置く源氏とは、明らかに　対照的である。

「まめ人」を主人公とする物語の歴史としては、「宇津保物語」の　源実忠や、藤原仲頼、「源氏物語」の中では、「鬚黒」が　指摘出来る。実忠や仲頼は、「あて宮」中心の物語の　数多くの　求婚者の中の一人として　語られるのであり、また「鬚黒」も、「玉鬘」をめぐる求婚者の一人として登場するのである。「夕霧」の帖では、初めて「まめ人」が、主人公として、登場する物語が、源氏の　アンチ・テーゼ（antithese＝テーゼ（肯定的主張・生の命題に対する否定的・負ほ主張）として、せり上がって来ているのである。

「紫上」と「「雲居雁」も、対照的である。「紫上」は、少女時代に　源氏に引き取られ、「雲居雁」も　夕霧と幼馴染みの恋を実現させたことで、共通点はある。然し「紫上」の場合は、後見人も無く、天蓋孤独の身で、源氏に引き取られた。源氏の多彩な女性関係にも、人間として、また女性として、自分を磨くことで、源氏の愛情を繋ぎとめるしかなかった。一方の「雲居雁」は、父の太政大臣という有力な後ろ盾があり、子供のない「紫上」とは　対照的に、数多くの子供にも恵まれている。さらに「まめ人」夕霧が、夫であるが故に、夫の女性関係で　悩む必要も無かった。夕霧は　そういう所帯じみた「雲居雁」に　不満を覚えている。

語られる物語の舞台について、「女三宮」が降嫁する先は、権力と栄華の象徴としての六条院であり、一方の「小野」は、そういう都の世界からは隔絶された山里であり、出家者・遁世者の住む　比叡山の入り口である。そこは、伊勢物語の「惟喬親王」の地でもある。

「まめ人」夕霧の恋ために　物語を語るために、作者紫式部は、いくつかの手法を駆使する。一つは、恋の場面に相応しく　豊かな自然を描写する。二つには、「伊勢物語」以来の　和歌的手法を遺憾なく使用して、人と人とを　情的に結び付けようとする。「伊勢物語」の「昔男」のモデルとされる「在原業平」の世界を、物語が再び獲得して行こうとするのである。

「六条院と小野の山里」・「夕霧の恋」この二つの描写について、これらは、和歌的・叙情的手法を許さない　重苦しい散文の営みから、必然的に「女三宮」の六条院降嫁を導きだした「若菜」の帖の方法とは　やはり異質であった。しかしながら　これら二つの方法は　夕霧の「落葉宮」に対する行動を　援護するものではない。「まめ人」の夕霧が、「業平」の行動を　模倣すればするほど、読者には、それが　滑稽に見えてくる。結局　夕霧は、律師の諫言と　「落葉宮」の　母御息所の誤解を　逆手にとって　宮との恋を　事実のものとして、世間に　納得させようとする。自らの「まめ人」たる事を強調しつつ　宮に近づくしかなく、宮の心を解放することはないのである。

「女三宮」を迎える「紫上」と、「落葉宮」を　一条邸に迎えようとする「雲居雁」の　それぞれの対し方も　甚だ　対照的である。六条院の正夫人として、降嫁してきた「女三宮」を相手に　無言の中に　必死に持ちこたえていた「紫上」の苦悩に対して、「おとなしく　死になさい。私も　死にます。見れば憎らしいが、あなたを残して死ぬ

のはきがかりだ」とくってかかる「雲居雁」の、あからさまな嫉妬は、彼女が　真剣であるだけに、よりいっそう　ほほえましいのである。

夕霧の恋の悲喜劇が　一段落したとき、物語では、「紫上」が、「女一宮」の将来を案じて、「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」＝（女ほど、身の処し方が。窮屈で、痛ましいものはない）と、思う。

源氏物語の主題を　五十四帖の　最初から存在するものとして、把握するというのでなく、物語が、段階的に　成立しているのだから、そのぞれの段階に沿って、主題を動的に把握しようというのは、近代源氏学の成果である。この物語の作者は、一寸先をも見通すことの出来ない　虚構の営みを通して、六条院世界を　重く苦しく解体していった。その六条院世界の崩壊の苦悩を、もっとも主体的に　担わなければならなかったのは「紫上」である。作者は　夕霧の恋物語を書くことで、「紫上」の「生」を、もう一度　明確な「物語意識」として、手軽に　構築して見せた　のである。夕霧の　恋物語は、源氏の物語が閉じられる　直前に　掴み直された。「女三宮降嫁の物語のパロディ」ということが出来る。

夕霧の人物像についても、源氏物語第二部の主題性に　従属するものとして、位置づければ、数多くの妻妾を抱えた「色好み」の源氏の「陰影」として　夕霧の「まめ人」性を考えることが　出来るのである（中　哲裕）

7．柏木　かしはぎ

A．その生涯

＊　柏木は、恋慕していた「玉鬘」が、実は　異母姉であると知って、嬉しいような、悲しいような、複雑な心境である。(「行幸」)

＊　柏木は、父の内大臣に頼まれて　探し出した妹・近江君の　無教養ぶりに呆れ、自分の行動を　後悔する。(「行幸」)

＊　柏木は、出世の為に　皇女を妻に　と願い、「女三宮」の降嫁を、叔母の「朧月夜」

から、朱雀院に頼んで　願い出るが、「右衛門督」という　身分の低さが障害となって、断られ、落胆する。（「若菜上」）
＊　「女三宮」が、源氏の許に降嫁してからも、彼女を諦められない柏木は、源氏が出家したら　宮と結婚しようと思う一方で、「女三宮」の乳姉妹である「小侍従」に、「女三宮」との逢瀬の機会を作るよう　懇願する。（「若菜上」）
＊　六条院で「蹴鞠」が行われた日、柏木は、夕霧と共に、猫が引き上げた御簾の奥に立つ女「女三宮」の姿を垣間見　更に恋心を募らせる。（「若菜上」）
＊　柏木は、「女三宮」の兄である　皇太子を通じて、蹴鞠の日に　御簾を引っ張った猫を　手に入れ、「女三宮」の　身代わりのようにして　可愛がり、そのことにより　慰めを得ている。（「若菜下」）
＊　柏木は、「女三宮」の姉「女二宮」と結婚する。蹴鞠の日から　既に　六年という月日が過ぎたのにも拘わらず、「女三宮」のことが　忘れられない柏木である。遂に、小侍従の手引きによって　密会を果たす。その夜　例の猫の夢を見る。妊娠の兆しであった。この世に並ぶもののいない源氏の正妻を犯してしまった罪に　おののく柏木ではあったが、「女三宮」への慕わしさは　募るばかりである。（「若菜下」）
＊　柏木は、妻の「女二宮」を見ては、同じ　朱雀院の皇女の姉妹の内でも、素晴らしい「女三宮」でなく、落葉のような姉を拾ってしまった　と　後悔する。（若菜下）
＊　柏木は、源氏に「女三宮」との密事が知れることを、極度に恐れつつも、密通を重ねるのであった。（「若菜下」）
＊　「女三宮」に宛てた　自分の恋文を　源氏に発見された　と聞いた柏木は、絶望して　沈み込んでしまう。（「若菜下」）
＊　源氏に会わせる顔がない　と悩む柏木ではあったが、朱雀院の五十の賀の試楽に是非に　と呼ばれる。罪の意識と恐れから　一旦は　欠席を　と思う柏木ではあったが、父の勧めもあって、六条院に　出向く。（「若菜下」）
＊　試楽の後の祝宴の席で、酒に酔った振りをして、皮肉な言葉を浴びせる　源氏の目に　射抜かれたような気持ちになる。遂に　重病に倒れ、正妻の「女二宮」の邸から　親元の致仕大臣邸に引き取られる。（「若菜下」）
＊　柏木は、「女三宮」の出産が近づいた頃、彼女に文を贈る。返事を受けた柏木は、「死んだとて　私は　あなたの傍に居る」という内容の　最後の文を送る。（「柏木」）
＊　「薫」を出産した「女三宮」は、罪の重さに堪えかね　俄かに　出家をしてしまう。その知らせにショックを受けた柏木は、俄かに　重態におちいり、最期に「女二宮」に会いたいと希望するが、宮の身分の高さ故の　壁があって、許されない。（「柏木」）
＊　柏木の　大納言昇進祝いと　病気見舞いとを兼ねて、病床に駆けつけた夕霧と、最後の対面をし、自分が死んだ後　源氏への謝罪と　「女二宮」の世話をしてくれるよう遺言する。（「柏木」）
＊　柏木が大切にしていた「横笛」は、「女二宮＝落葉宮」の母一条御息所によって、

夕霧に託される。柏木は　夕霧の夢枕に立ち「横笛を伝えたいのは　他に居る」と告げる（「横笛」）
＊　長い時を経て、柏木遺愛の「横笛」は、一たん　源氏の手を経て、柏木の遺児「薫」に伝承される。（「宿木」）

B．物語における位置・準拠

柏木は、物語の第一部では、「乙女」の帖に、左少将として登場する。兄妹とは知らずに「玉鬘」に　思いを寄せたり（「玉鬘」）、何処からか　行方の知れなかった　近江君を探し出してきて、その無教養ぶりを　もてあましたり（「常夏」）、明石の姫君の裳着の前夜に　管弦の遊びの席で　和琴を弾いたり（「梅枝」）、夕霧と雲居雁との婚儀には、夕霧を雲居雁の部屋に導いたり（「藤裏葉」）、などという役割を演じている。なんといっても、物語の表舞台に出てくるのは、第二部の「若菜上」の帖以降である。朱雀院の愛娘「女三宮」の婿選びに、候補の一人として登場し、六条院の蹴鞠の折に、「女三宮」を垣間見、そのきっかけを作った猫を手に入れて　これを猫可愛がったりする。「紫上」の病気で　六条院が手薄になったその隙に、遂に　宮と密会を遂げてしまう。朱雀院の五十の賀の試楽に　舞楽を手配し、事を知った源氏から　強い皮肉の言葉を浴びせられて、発病してしまう　などなど（「若菜上」・「下」）。夕霧の見舞いを受け、源氏に詫びて欲しいと遺言して　亡くなる（「柏木」）。柏木遺愛の横笛が、柏木の妻「落葉宮」の母、一条御息所から、夕霧・源氏を経て　遺児「薫」に手渡された、（「横笛」）、など。以上、「女三宮」の降嫁にともなう　「紫上」の苦悩と、六条院の解体の経過と並行しながら、その駄目押しとして「女三宮」との密通という　最も劇的な事件の主人公として登場した柏木である。

その歴史的準拠としては、藤原時平の子　保忠と敦忠が上げられている（藤河家利昭）。保忠は、藤原基経の弟子で、笙の名人として二代目を継いでいるのみならず、和琴の名手でもあった。延長四年（九二六）の花宴では、琵琶を弾き　延喜十六年（九一六）には、宇多法王の五十の賀の試楽で、催しの全般を取り仕切っている。「河海抄」は、前者を「花宴」の帖の、後者を「紅葉賀」の準拠として　指摘している。延喜二十年（九二〇）十月の清涼殿での舞楽では、数多くの舞を演奏している。これらは、物語では、父大臣の和琴の才を継承し、六条院の折々の管弦の遊びに　その才能を発揮し（「篝火」）・（「梅枝」）。源氏・四十の賀では、夕霧と共に　入綾を舞い（「若菜上」）、朱雀院・五十の賀の試楽では、この方面で、深い造詣を示した夕霧　などと　深い一致を見る。

保忠と同様に、敦忠も　管弦の名手で、「河海抄」によれば、醍醐帝から、直に　和琴の手を伝授されたという。延長七年（九二九）、踏歌後宴の御遊で、また承平二年（九三二）、の清暑堂の神宴の大嘗会でも、笛を吹き、その名声は　後世に轟いた　という。

遺愛の「横笛」が、　後に　遺児「薫」に伝えられたという柏木の姿には、そうした　敦忠の姿が、準拠として　あったのであろう。

保忠は、平素から　菅原道真の祟りを　極度に恐れ　「物怪」に取り憑かれて死んだという。源氏に睨まれて　自滅してゆく柏木の姿に重なるものがある。物語の中で、保忠の死を悼んだ紀在昌の詩「右将軍が塚に草はじめて青し」と　夕霧は口ずさむが、それは、柏木の死を　悼んでのことであった。本居宣長の「玉の小櫛」でも、柏木の死に、この保忠を　準拠とみている。

その他　「伊勢物語」の在原業平に、あるいは「宇津保物語」の「あて宮」への求婚者たち、更には、「芹積み説話」などに　準拠を求める説も多い。

C．人物に関する評価の歴史

柏木について、鎌倉時代の物語評論「無名草子」は、次ぎのように言う。

「岩漏る中将などと、言われた頃から（「胡蝶」）、「藤裏葉」の巻で、父大臣が、夕霧と雲居雁との中を許したときにも、あれほど機転を働かせていた柏木が、女三宮のこととなると、

「さしも命に換ふばかり思ひ入りけむぞ、もどかしき」

＝（生命と引き換えになる程に　思い込んでしまったのは、非難されるべきである）

という。六条院の蹴鞠では（「若菜下」）、「まめ人」の夕霧は、柏木と共に、女三宮を垣間見たけれど、「軽率だ」としか思わなかったのに、柏木が

「さしも心にしめけむぞ、いと心劣りする」

＝（あれほど夢中になったのには、がっかりする）

という。野分の翌日　「紫上」に　女性としての最高の美を見たこと（「野分」）、を　対置しての　夕霧の「女三宮」に対する　感懐と比較されている。

臨終の間際に、

「あはれとだに宣はせよ。心のどめて、人やりならぬ闇に惑はむ道の光にもし侍らむ」

＝（せめて「かわいそう」とだけでも仰ってください。その言葉を頂いて心を鎮め　自ら求めて彷徨う死出の闇路を照らす光と致しましょう）

と「女三宮」に歌を贈る。その間の柏木の様子には、

「あはれにはべれ」

＝（しみじみと心を打たれる）

という。しかし　それも　恋の最初から　身分を案じて　みっともないほどであったのだ（「若菜上」）が、それほど　身分を気にしなければならないことなのか　と批判的である。

本居宣長は、「玉の小櫛」でも、柏木の　最期の場面や　女三宮との歌の遣り取り（「柏木」）について、

「ことにあはれ深し」＝（特に　感動的である）
とし、「煙ばかりは」という言葉を頂いて「この世に生きていた思い出だ」といっているあたりなどは、読んでいていても、ひたすら涙が零れそうになる」　と言っている。柏木の恋について　次ぎのように述懐するのである、即ち「光源氏という夫のある女三宮との密通という不義の事件があって、その上に　自分の生命までも亡くしてしまうというのは、どんなに「よき人」と言っても、世の中の常識的な論理で言えば、柏木を可哀そうだというほどのことではないけれども、このように、特別に感慨深い書き方で「良心のみならず」世間の人に惜しまれて　それどころか　当事者の　光源氏の君までも、その死を深く哀惜しているようすが　何度も書かれている。それは、恋の道の「もののあはれ」の深さを、「よき人」は　知っておるという　深い意味を源氏物語は言っているのであって、物語の本意は、とにかく、「もののあはれ」を描くということを、一番大切なこととしている。と　「玉の小櫛」は、柏木一人の人物評価に留まらず、物語の本質論に及んでいるのである。

近代・現代の物語研究は、その成立論を出発点として、構想・構造・主題論を主軸に第一部から第二部にかけての　柏木の人物像の変貌に焦点を合わせながら　展開される。　冷静沈着な性格、抜群に恵まれた音楽の才能、大臣家の長男として、「世の固め」となることが期待される　豊かな将来性を担った柏木が、第二部に入って　突然　朱雀院の皇女「女三宮」を望み、叶えられず独身をとおすという　野心的な青年として　物語の前面に迫り出して来る。この異様な「心高さ」という新要素を付加された変貌の中に、後の密通事件を見据える　伊藤博・河合山清彦　両氏の論がある。両氏は、(「野分」)の帖の　夕霧による「紫上」垣間見に、物語の構造上での可能性として　柏木・女三宮の密通を認める。

森一郎氏は、「女人の受難の悲劇」という、第二部の主題性に　おのおのの人物造詣が　奉仕させられているとして、柏木についても、六条院の蹴鞠から、正常で冷静な人物から、異常な人物へと　矛盾的変貌を遂げる。この変貌こそが、「主題性に参与する、人物の描き方という物語の方法」である　という。

「伊勢物語」の「むかし男」が、柏木の前例であることを　指摘する研究者も多い。（野村精一・石田穣二・高橋亨・土方洋一など。野村氏は、「異常な野望と執心」をもち、外的状況を　感覚で表出してしまうような体質を持った柏木に、在原業平との「人類的類同性」を指摘している。柏木と業平との一致点として、「反逆と挫折」「絶望の人間像」という共通項がある一方、業平が、「抒情の英雄」として作者や読者に　深い共感がもたれるのに対して、柏木には、抒情詩人としての要素は、なく、その生き方に共感する人物もなく、作者の同情も　その死後初めて得られる　とする。

石田氏は、柏木に付いて　次ぎのように評する。「柏木は　致仕の大臣の長男で、蹴鞠の名手、音楽に堪能という以外　その人間的輪郭は　読者の印象に　極めて薄い。それが、殆んど　唐突に　畏怖とうらはらになった「女三宮」への　絶望的な情熱にとり

つかれ、やがて、奇妙な　ひたむきな懊悩が始まる。冷たい、大きな過酷な目に　見据えられたような・・・。彼を死に追い込んだこのイメージは、私の見る限り　最も力強く　最も透徹した文学的創造の一つである。未開人の畏怖にも似た　いわれなき畏怖の虜となり、ために破滅してゆく柏木という人物の生は、その極限的な苦悩において　しかも　みずみずしい生命観に充溢している」とする。この印象には、異様に　なまなましいものさえある

D．人物の特色

柏木は、左少将として　物語に登場して以来、玉鬘に求婚　近江君を　何処からともなく探し出してきて　それが　とんでもないはずれで、逆に　それをからかうことで、内大臣家の「烏滸」ぶりが　描かれたりする（「乙女」・「行幸」）。明石の姫君の裳着の前夜に　和琴を弾いたりする（「梅枝」）。そうした　楽の名手でもあり、夕霧を妹雲居雁の部屋に案内したりもする。内大臣家の長男として、自覚を持った　落ち着いた青年貴族であった。第二部になって、突然　舞台の面に　迫り出して書かれるようではあるが、彼が、弘徽殿女御の四君腹である事を思えば、幼い頃は、父方でなく、母方で養育されたであろうから、嫡妻腹の少納言（後の　紅梅大納言）とは違って、物語に　登場する場面の少ないのも　理由のあることであった。「若菜上」の帖に入って、高貴な血筋の内親王を望む野心家としての　青年貴族像は、特別　唐突感があるということではない。その

「いたくしづまり思ひあがれるけしき」

＝（すこしも焦らず　、落ち着いていて　志を高く持ったいる様子）

は、内大臣家嫡男としての　当然の志向性であり、第一部と矛盾のない柏木像といえる。それが　権力から恋への野心を抱く人物へと変貌するのは、言われるように、六条院での蹴鞠に「女三宮」を垣間見てからである。

すでに「野分」の翌日、至上の女性「紫上」を垣間見るという経験をしていた夕霧（野分）は、端近な所に立っていて　御簾越しに見られる　という不用意さを批判するが、柏木は、「事実を見ず、正確さからは無縁のところで、幻想を自己増殖させる」（高橋亨）。蹴鞠の垣間見の後、「女三宮」から、「あはれ」と思われたい　と願いながら、「女三宮」とは　かけ離れた身の程に　絶望する。皇女を望んでいながら、柏木は、「女三宮」に一歩近づきえたことによって、二人の間隔の大きさを　逆に　思い知らされるという構図が繰り返されるのである（藤原昭一）。

「紫上」の病気で　手薄になった六条院に　小侍従の手引きで　忍びこみ、遂に「女三宮」と　関係を持ってしまう。「あはれ」＝（不憫な者）という言葉だけを求めて　忍び込んだのだが、ただ

「なつかしく、らうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思

ゆること」
＝（如何にも　優しく可愛らしくて、ただ　なよなよとばかり感じられる御物腰が、たいそうお美しく思われることで）、
　自分を抑制する分別心を失って、関係を持ってしまうことになる。「女三宮」と逢ったからといって、宮から「あはれ」という言葉を頂く事は出来ず、帰って直ぐに、源氏への恐れに　慄くこととなる。
　「女三宮」への恋文が　源氏に発見されて、柏木の破滅への意識は　決定的なものとなる。朱雀院五十賀の前日　源氏に請われて　楽の手配をする。その後の宴席で、源氏に
「過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門の督心とどめてほほ笑まる、いと恥づかしや。さりとも、今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり」
＝（寄る年波につれて、酔い泣きの癖は　どうにも止められなくなるものですね。衛門督が、目ざとく見つけて　笑みを浮かべて居られるが、何とも決まりの悪いことですよ。何　それも今暫くのことでしょう。逆さまには流れぬ年月というもの、誰しも　老いは逃げられないのだから）
　という　痛烈な皮肉の言葉を受けて、柏木は、生きる望みを失うのであった（「若菜上」・「下」）。その間の　柏木の人間像について、石田穣二氏は、次ぎのように言う。
　柏木の懊悩・畏怖は、必然に　彼に死を齎したが、彼の懊悩・畏怖は、何のいわれもない物であった。即ち　彼の死には、外的要因は　全く求め得ない。事は全て　彼の精神の世界の必然として起ったのである。「女三宮」も柏木も、かれらの内的生の事情においてしか生きない。殆んどあり得べからざるものが、人間の肉体の形において、生きる…。文学としての、比類ない高さのしるしを、ここに認め得るように思う。最も高度な純粋度において、思想的なもの、観念的なものの刻印が　この二人の生には、打ち出されている。
　小野村洋子氏は、物語の精神的基底を、「あはれ＝愛」と「宿世＝運命」の二つの軸によって、支えられているとし、柏木にとっては、究極には　自分の救済なき死も問題ではないので、一筋の「女三宮」への愛が、彼の死に臨んでの光であった。明らかな自意識をもって、愛の為に　身を滅ぼし、愛によって　死後の暗黒をも　安んじて受けようとする。これは　完全に　宗教的境地と言える。人間的愛の為に　かかる境地に到達するものは、源氏物語の中には　他に例を見ない。その愛と深刻とによって、彼はやはり高い価値を獲得している　という。
　こうした　柏木に対する人物論を踏まえて　そういう人物造詣が、何故になされなければならなかったのか、柏木の「女三宮」との密通と死は、源氏にとってどういう意味があったのか、という、源氏の物語の一環として、源氏の晩年における物語の主題の中に、位置づけられなければならないのである。

「薫」誕生の「産養」で、源氏は、
「この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや」＝（自分が　つねづねいつも恐ろしいと思っていた罪業の報いが　これなのであろう。この現世で、このように、慮外の応報を受けたのだから、後生の罪も軽くなるだろうか）
と思う（「柏木」）。源氏は　「藤壷宮」との密通という、自分の存在の根底に秘められた事件の　明確な応報として　柏木を見るに至ったのであり、源氏の晩年の救済の課題を　物語の意識として据える為に　その物語はあったのである。

８．八宮　はちのみや

Ａ．その生涯

＊　宇治の八宮は、桐壷帝の第八皇子で、母は女御（大臣の娘）である。源氏の異母弟にあたり、大君・中君・浮舟三姉妹の父である（「橋姫」）。
＊　八宮は、世間から忘れられた　不遇な老皇子であったが、北方との深い愛だけを頼みとして　老残の身をかこっていた（「橋姫」）。
＊　愛する北方が、中君を出産した直後に　死去してしまったので、八宮は、世をはかなんで、出家を願いつつも、幼い姫君たちを　愛育していた（{橋姫}）。
＊　八宮は、かって、源氏方の皇太子（後の冷泉帝）に　対抗しようとした弘徽殿大后に利用されて、皇太子候補となったが、源氏の全盛時代には、宮廷社会から脱落していたのである（{橋姫}）。
＊　八宮は、京都の邸宅が焼失した後、宇治の山荘に移り、宇治山の阿闍梨に師事しながら、在俗のまま　仏道修行に　余生を送っているのである（「橋姫」）。
＊　冷泉院の宮廷に参上した阿闍梨から、八宮一族の事を聞いた「薫」は、八宮を　仏道修行の師（法の師）と仰いで　親交を重ねる（「橋姫」）。
＊　冬、八宮は、宇治を訪れた「薫」に対して、自らの出家の志を打ち明け、姫君達の後見を依頼する（「橋姫」）。
＊　八宮は、六十一歳の重い厄年を迎え、出家への願いを一層強くする。宇治を訪れた「薫」に　姫君達の後見を重ねて依頼する（「椎本」）。

＊　八宮は、晩秋、姫君たちに　決して浮ついた心で、結婚してはならないこと、軽薄な男の口車に乗って　宇治の地を離れてはならないことなどを　遺言し、宇治山の阿闍梨の寺に篭もって、遂に　往生を遂げる（「椎本」）。
＊　八宮は、生前　中将君との間に、三女の浮舟をもうけたが、自らの行動を悔いて、認知しようとはしなかった（「宿木」）。

B．物語における位置・準拠

「橋姫」の帖で、その存在が　詳しく語られた「八宮」は、桐壷帝の第八皇子で、朱雀院・源氏の異母弟であり、冷泉帝の異母兄に当たる人ある。その前半生を「橋姫」の帖の叙述から遡ってみると、桐壷帝の許に入内した母は、大臣の娘の女御であり、八宮は、東宮（皇太子）ともなり、帝位につく可能性をも有した　有望な親王であったことに　留意される。その婚姻も　北方の父大臣が、一門の運命を　この八宮に托し、わが娘の立后をも期待していたことが　想定されるのである。

しかし、冷泉帝が、東宮となり、その願いは　潰えたわけであったが、八宮は、再び皇太子候補として、擁立されるこことなる。朱雀帝の時代、源氏の須磨退去と　時を同じくして、東宮廃立の企てを画策した　弘徽殿大后一派に　担ぎ出されたのである。然し　その計画は失敗に帰し、冷泉帝即位の後　源氏体制が確立し、また　朱雀帝のもとに、皇太子が誕生すると、八宮は　完全に　無用の親王となり、政治的失脚者として、孤立していたのであった。

浮沈の極まる境遇の中で、八宮の精神的より所となったのは、政略的な結びつきを超えた　北方との愛情生活であった事は、後の　八宮発心の経緯を考える上で　見逃すことが出来ない。ひっそりと寄り添うように暮らすものの、北方は　大君に続き　中君を出産した後、急逝してしまう。京の邸も焼失という不運に見舞われ　遂に　八宮は、宇治の山荘に　引き篭もらざるを得なくなるのである。都との交流を一切断ち、幼い姫君たちを　愛育しつつ　仏道修行に　専心するこことなる。

その八宮と、源氏の子である「薫」との　接点を作り出す為に、物語は　両者を繋げる重要人物として、宇治の「阿闍梨」をもってする。「俗聖」と称される八宮の暮らしぶりが、冷泉院の許に参上した阿闍梨を介して「薫」の知る所となる。自らの出生に大きな疑いを抱き　仏の道に傾倒する「薫」は、八宮を「法の師」と仰ぎ、宇治へ　頻繁に足を運ぶこととなるのである。

若かりし頃の　自らの立場を　どの程度まで、具体的に「薫」に語ったか　物語には、詳述されていない。密通の罪を　結果的に負う「薫」には、自らの　反聖性において、王権からの背反者である八宮の中に、自身に共鳴する　暗鬱な精神世界を感じとっていたのであろう。両者は、都に背を向けた　宇治の時空を共有することになるのである。八宮の存在の特異性は、「道心」のみならず、「恋」という　本来は　あい容れ難い二つ

の心的世界において、「薫」の在り方に係わるところにあるのである。

出会いから　三年が経過した頃、八宮は、わが娘達の将来を案じて　「薫」に自分の亡き後の　姫君たちの後見を依頼し、娘たちには、宇治を離れてはならない　と訓戒を遺し、山寺に篭もり　亡くなる。後を託された「薫」は、姫君たちとの係わりを　婚姻関係を踏まえた　父宮の許諾と考え　「大君」へと傾斜してゆく。然し「大君」は、父の訓戒を、「薫」の求愛を拒む盾とし、両者の係わりは　決して交わらないまま、悲劇的な結末へと　展開してゆくのである。

そもそも「法の師」という　精神的事由による関係とは、次元を異にした時、冷泉院・明石中宮・そして右大臣夕霧といった　後ろ盾をもち、世に厚遇される「薫」と、「世に数まへられたまはぬ古宮＝（世間から忘れ去られている古宮」との　世俗的結合は、現実的にはあり得ないものであり、後に　今上帝が、皇女を降嫁せしめる貴紳の「薫」に対して、わが娘の結婚を　八宮が、どの程度の本気で　望んでいたかは、疑問の残るところである。八宮の遺言は、「宇治十帖」において、重要な意味を持つが、それは　不徹底な要素を持つが故に、あやにくな人間関係を紡ぎ出す契機となり、宇治十帖の主題に係わる意味をもってゆくのである。

「花鳥余情（一条兼良著）」は、弟（後の冷泉帝）に、東宮を越され、宇治に隠棲した八宮の準拠として、兄に帝位を譲り　自殺した宇治の菟道稚郎子（うじのわけいらつこ）を引き、「古今集」の喜撰の和歌以来の「世を憂し」とする厭世観とも結びついた「宇治」の地が　物語の舞台であることの必然性を指摘した。一方　本居宣長は、「玉の小櫛」で、惟喬親王を八宮に擬え、「薫」に小野に惟喬親王を訪ねる「伊勢物語」の在原業平を重ねた。ともに、王権喪失と異境を流離う者の悲哀を　共通要素として　見出す事ができるという（高橋　亨）。

Ｃ．人物評価の歴史

「橋姫」の帖で、初めて明らかにされた「源氏物語」正編における　立太子にまつわる政治闘争劇は、物語が　それまで　触れなかった須磨流離当時の源氏の裏面史　即ち藤原氏に対する東宮（後の　冷泉帝）への当然　起こり得た、廃立の策謀を明るみにし、第一部の世界に於ける　王権奪取の闘争にはじきだされた、人々の怨念を、リアリティーをもって、逆照射した（藤本勝義）。「花鳥余情」が擬えた菟道稚郎子（うじのわけいらつこ）の説話は、「日本書紀」によると、以下のように展開する。「応神天皇が、かねてから　菟道稚郎子（うじのわけいらつこ）を慈しみ、年長の大鷦鷯尊（おおささぎのみこと）・大山守命（おおやまもりのみこと）をさしおいて、菟道稚郎子を皇太子にと考えた。大山守命は、菟道稚郎子を亡き者にしようと　企み、宇治に攻め入るが　逆に滅ぼされる。応神天皇崩御の後、大鷦鷯尊の補佐のもとに、即位することとなった菟道稚郎子は、兄を帝位に即かせるべく、自ら　命を絶つ。菟道稚郎子は、宇治の地に葬ら

れ、大鷦鷯尊は仁徳天皇となり　浪華王朝が確率した、のである。
　「日本書紀」に語られる　父帝に愛されつつも、自ら帝位を譲り　自殺した、菟道稚郎子の物語と、東宮への夢破れて宇治に隠棲した八宮の人生とは、相違点があるものの、摂関政治体制下で　埋没してゆく敗北の親王の人生を　より現実的に構築した「源氏物語」の背景に　菟道稚郎子の神話的な　王権喪失の物語が、「宇治」の世界を媒体に響くことによって、正当なる王権継承者としての八宮の誇りと　宮にまつわる悲劇性が、奥行きをもって　浮上してくるのである。
　そのような八宮の人物像を　特徴づける「俗ながら聖」と表現される人物像は、従って、一筋縄では理解し得ない内実をもつ。八宮は、
「世の中をかりそめのことと思ひとり、厭はしき心のつきそむるも、わが身に愁えある時、なべての世も恨めしう思ひ知るはじめありてなん道心も起こるわざなめる」
＝（世の中を　仮初のものと悟り、厭わしく思う心が生じるのも、自身の身に、不幸がある時、世の中のすべてを　うらめしいものと思い知ることがあって、初めて　求道心が起こる）
と述べ、仏道への志向は　自らの不本意な経歴の体験が、現世全体への判断・認識へと敷衍したときに生じてくるものだ　とする。宮は、不遇の最中に、最愛の北方を失い、
「いとどしく　さびしく　よりつかむ方なき」
＝（いよいよ寂しくなり　頼りとすべきものもない）
状態となり、持仏を据え、明け暮れ勤行を始める。俗世への未練が、消えたのでは　決してなく、寧ろ愛する者たちと共に、望むべき親王としての社会的待遇を　掌中に収めることを切望しつつ、それが　叶えられない悲嘆を　静める方法が　仏道への精進となったのであった。そのような八宮にとって、「絆し」は、断ち切るものではなく、寧ろ生きる支えであった　と言えよう。
　失脚の後も、北方を残しての出家断行を思い留まり、また　妻亡き後は、「みゆづる＝（後の世話を任せる）人」もない姫君たちが、絆しとなって、本意が遂げられずにいることが　再三に亘って語られる。が、
「おのおのおよづけまさりままふ容貌（かたち）の、うつくしくあらまほしきを明け暮れの御慰めにて、おのづからぞ過ぐしたまふ」
＝（姫君たちが　次第に大人になられるにつれて、姿や顔形が、申し分のない成長ぶりなので、それを朝夕のお慰めとして、日々過ごしておられる）
と、姫君たちの存在こそが、かけがえのないものであった。
「経を片手に持たまひて、かつ読みつつかつ唱歌をしたまふ」
＝（片手に経を持ち　読誦しつつ、また一方で　唱歌する）
わが身を　半ば自嘲的に反芻しつつも、若かりし頃からの音楽に秀でた自らの才能が、大君の琵琶・中君の筝の琴の音色に　確実に受け継がれてゆく様を、感じ取るとき、ささやかながらも、無類の喜びをも　感じていたものと思われるのである。

それにつけても、八宮は、親王の姫君に相応しい「かひある」生活を送らせてやれない事を　不本意に思う。「椎本」の帖で、八宮は、匂宮が初瀬詣での帰途、遊戯の別荘に　中宿りをし、華やかに　管弦の遊びに打ち興じる様を　対岸のわび住いにあって耳にする。

「かやうの遊びもせで、あるにもあらで過ぐし来にける年月の　さすがに多く数へらるるかひこそなけれ」

＝（こうした管弦の遊びなどもせず、生きている甲斐のない有様で過ごしてきた）

ことへの悔恨をあらたにし、

「姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山ふところにひきこめてはやまずもがな」

＝（姫君達の身の上が勿体なく、このまま山里に埋もれさせたままで　終わらせたくはない）

と、親としての　哀歓をかみしめるのであった。

貴顕の公達が、供にと馳せ参じ　華美な宴を催す　今上帝の皇子「匂宮」の存在は、都の風を八宮に齎す。自らを　彼らと対極にある境遇と認識したとき、八宮は、この日の楽の音に、触発されて、「薫」を、

「近きゆかりにてみほしげなる」

＝（近い縁者（娘の婿）にしたい）

という願望を　胸の内の言葉として　発するのである。八宮は、匂宮と共に　夕霧の山荘に滞在する「薫」に挨拶の和歌を贈り　それを契機に　公達一行は、「薫」と共に、舟で　宇治川を渡り　宮の山荘へ赴くのであった。身分柄から　気軽に行動し得ない「匂宮」は、八宮からの「薫」への消息に　自らが　返歌を贈り　姫君たちとの交流を求める。八宮は、中君に　「匂宮」への返歌を認めさせ、ここに、「薫」のみならず、宇治の姫君への好色心を、働かせる「匂宮」をも、また　八宮一家へ　係わる人となっていくのである。

「八宮」には、仏道修行と「かひある」生活への願望は、あい対立するのものではなく、いわば、表裏の関係で、意識されてきたということが、確認されるところである。宇治十帖の物語の方法からいえば、そのような宮の特異なあり方が、「薫」「大君」「匂宮」「中君」の四角関係を、作り出す為に　そのように定位されていったのだ　と換言し得るのである。「源氏物語」全体にいえることではあるが、ことに宇治十帖における人物造型は、始めに　登場人物の性格や特色が存在しているのではなく、物語の展開と、その場の情況が、登場人物の性質を　物語内に要請して行くのである。

D．人物の特色

八宮の遺言は、

「去りなん後の事知るべきはあらねど、わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏に軽々しき心どもに使ひたまふな。おぼろげのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたらん契りことなる身と思ひなして、ここに世をつくしてんと思ひとりたまへ」
＝（死んだ後のことは、私の手の及ぶはずのないことではあるが、亡くなった母の不面目になるような、軽々しい心を起こさぬように。しっかりとしたよりどころもないままに、人の言葉につられて、この山里を　うかうかと、離れてはいけない。ひたすら　こうして　世の人とは違った前世からの因縁と諦めて　ここで　生涯を終える身なのだと、お諦めなさい）

というものであった。亡くなった北方までも　引き合いに出して　諌める八宮の真意は、親の面目をつぶすな　というものであり、そのためには、宇治に隠棲したままで　生涯を終える覚悟を持て　というものであった。

この八宮の肉声による訓戒は、姫君達、ことさら姉の大君を　呪縛することとなる。八宮は、薫との結びつきに懐疑的な思いを残しつつも、やはり「薫」をおいて他に　これ以上の婿はいないことも　当然意識していたのであり、八宮の心の内では、その言葉は、薫以外の男に向けられていたものと、考えられる。姫君達を皇女に相応しくない世俗の世界に、引きづり下ろす男、そしてわが娘の劣位を、高みの位置から突きつける男、前者は、仕える女房たちが、生活の安泰を謀って、姫君達にもたらす縁談、そして後者は、匂宮のような貴顕に対して　向けられたものであり、もはや、現実には、屈辱的な婚姻しか想定し得ない、落胤の親王が、高い家柄意識を貫くためには、都との係わりりは　断たなくてはならないものであったからである。その裏には、あり得べき親王家の姫君として、配偶される「かひある」結婚観があったのである。挨拶という儀礼的なコミニュケーションに過ぎないという理由で　韜晦されるが、中君に対して、「薫」に琴の演奏を聞かせるように仕向け、「匂宮」の消息には、返事を認めさせる八宮の言動は、やはり　相当に　屈折しているといわざるを得ないのである。結婚拒否を貫いた大君が、世の中を憂き世と見做し、胤の断絶も厭わない父宮の　高い家門意識を受け継いだとすれば、中君は、八宮が　切望して止まなかった「かひある」生活を、中君の内面的苦悩を度外視すれば、結果的には、実現した「幸ひ人」といえよう。

八宮の最期は、阿闍梨の山寺で、参篭中のことであった。父の亡骸への対面を望む姫君たちを、阿闍梨は、厳しく戒め、親子の執着を断ち切ろうとした。「俗聖」たる八宮の修養は、結局、二十数年に及んだが、聖・俗いずれにも徹しきれない不徹底さにおいて、仏道は　生前のみならず死しても　なお八宮の精神を救うものではなかった（坂本和子）。死後も　その魂は、娘達の行く末を案じ、冥界を彷徨っていることが、八宮の一周忌を迎えた「総角」の帖で、語られる。故八宮は、中君の夢枕に　悲痛な面持ちで立ち、続いて　阿闍梨の夢にも現れ、まだ俗体のままで、臨終の間際に　現世への思いに心乱れた故に　本願の極楽浄土は、遥かに遠い　と訴える。大君は、父の往生を阻む

自分たちの罪業を悔やみ　中有の闇を彷徨う父の魂に寄り添いたい　と願う。八宮の憂いのとおり、宮亡き後の姉妹の境遇は　不幸であった。大君は、「薫」を遂に受け入れないまま、やがて　枯れるように衰弱死し、姉を亡くした中君も、「匂宮」と結婚した自身を　苛むのであった。

　八宮という人を　客観的に評価すれば、生きる道筋を　自身で切り開いてゆく術を持たない、弱さ・女々しさを持つ親王ぶりが　否めない。が、一方　その人となりは、愛する者を包み込むような優しさがあったのであろう。八宮の生前　姫君たちは、寂しい山里の暮らしながら、父親の慈愛に満ちた庇護のもと、心静かな日々を過ごしていたといえよう。「薫」も　宇治に通い始めた当初　八宮の人柄に付いて、

「やうやう見馴れたてまつりたまふたびごとに、常に見たてまつらまほしうて、暇なくなどしてほど経るときは、恋しくおぼえたまふ」

＝（だんだんお近づきになるたびごとに、始終お目にかかりたい気持ちになって、忙しく会えない日が重なると　恋しく思う）

と感じ、息子が父を慕うように、八宮に対峙したのであった。その父性愛が、「橋姫」の帖以降、宇治十帖の前半部の物語において　重要なのであった。

　しかし「宿木」の帖になると、その八宮の性質が、「浮舟」の登場に絡んで、矛盾や不統一の印象を与えつつ　描かれるのである。北方の没後、八宮は、再婚の話があっても　見向きもせず、「北方」一人を愛し続け、その死を嘆いたのであった。しかし、その中にあって　北方の姪にあたる上臈女房「中将君」との間に、女児を儲ける関係になっていたことが、「宿木」の帖において、初めて明らかとなる。その女児こそが「浮舟」その人であった。「北方」と「女房」の格差は考慮すべきではあるが、八宮は、この女児を認知せず　冷遇し、浮舟母子は、宮邸を去る。中将君にとって、八宮は、

「心憂くつらかりし」

＝（情けなく薄情な）人であり。

「つらう情けなく思し放ちたりし」

＝（私たち母子を、冷たく無情に　お見捨てあそばした）

人であった。

　しかし　浮舟は　その父を慕い、父の幻影を抱いて都に上り、異母姉「中君」の許に身を寄せるのであった。が、彼女が辿りついた運命は、姉達を翻弄した「薫」と、「匂宮」との愛に苦しんだ末の　宇治川入水であった。浮舟は、自らの辛い過去を振り返りわが身の　そもそもの不幸の根源が、

「親と聞こえけん人の御容貌も見たてまつらず　遥かなる東国をかへるがへる年月をゆきて…」

＝（父と申しあげたお方のお顔も拝見したこともなく、遠く東国に月日を送り…）

と、実の父八宮に見下され　認知されないままに東国に下り　義父に不当な扱いを受けたことに　思い至たるのである。源氏の裏面史の　一端を担う八宮であったが、更に

その八宮の裏面に追いやられた中将君と浮舟母子の物語が、宇治十帖後半に語られてゆくことになるのである（鷲山茂樹）。八宮の人物の特色とは、源氏物語の主題が求める人物たちを　物語内に定位させる役割を担って、物語のその展開、その情況によって、人間像が構築し直され、八宮の言動・人生が語り出されてゆくところに、見出されることが、再認識されるのである

９．薫　かおる

Ａ．その生涯

＊　源氏の正妻「女三宮」と「柏木」との密通の結果　誕生した「薫」は、世間的には、源氏の子息として　育てられる（「柏木」）。

＊　源氏は、生まれた時は、疎ましかった「薫」を抱き　その高貴な美しさに、愛情を感じるようになる（「柏木」）。

＊　「薫」は、源氏亡き後、母「女三宮」に頼りにされ、冷泉院や秋好中宮に可愛がられ　世間からも信頼される。が、自分の出生についての疑問を抱き続け、出家したい　との思いもある（「匂宮」）。

＊　「薫」が、生まれつき　かぐわしい香りをもっていることに対抗して、「匂宮」はあらゆる香をたきしめている。二人を讃えて、世間では、「匂う兵部卿・薫る大将」と呼んだ（「匂宮」）。

＊　「薫」と「匂宮」の　どちらかを娘の婿に、と望む者も多かった。が、厭世家の「薫」は、結婚など考えてもいない。が　冷泉院の皇女である「女一宮」や　玉鬘の長女には、心惹かれている（「竹河」）。

＊　「薫」は、在俗のまま　明け暮れ仏道修行をしているという叔父「八宮」の生活に憧れ。宮と文通するようになる（「橋姫」）。

＊　「薫」は、しばしば八宮の住む　宇治の山荘を訪ね、親交を深める。晩秋の頃、八宮の留守と知らずに訪ねた山荘で、月光の下に、琴と琵琶を演奏する　八宮の姫君・大君と中君を垣間見て、二人の　思いもかけない美しさに　息を呑む（「橋姫」）。

＊　「薫」は、大君と中君に、挨拶を　と望むが、世慣れない二人が　戸惑った為に、代わりに「弁尼」という　老女房が　対応する。「薫」は、弁尼から、実の父柏木の遺言を　託されていると聞くが、人目を憚り　次ぎの機会に　話してもらうことを　約束

して　帰京する（「橋姫」）。
＊　「薫」は、弁尼から、自分の出生の秘密を聞いた上で、柏木と女三宮　二人の間に交わされた手紙を受け取り、感慨にふける（「橋姫」）。
＊　「八宮」は　自分の亡き後を考えて、「薫」に　娘と結婚して欲しい　と願うが、「薫が」が　出家を志していると知っているので　言い出せない。後見だけを頼むのであった（「椎本」）。
＊　「薫」は、八宮の突然の死に驚き、悲しみに沈む大君と中君を弔問する（「椎本」）。
＊　「薫」は、「大君」に心惹かれ、大君に「匂宮」が、中君との結婚を　望んでいる事を伝えた際に、自分の恋心をも打ち明けるが、応じてもらえない（「椎本」）。
＊　生前　父の八宮から、男性の誘いに乗って　落ちぶれることのないように　と遺言され、一生独身で　宇治に住む決意の大君は、妹の中君を、好色な「匂宮」とでなく、誠実な「薫」と結婚させたい　と願う。大君を愛する「薫」は、八宮の一周忌の日に、大君に求婚するが、やんわりと　拒絶されてしまう。その後、強引に大君の部屋に忍び込むが、喪服を着た大君には、手が出せずに　朝を迎える（「総角」）。
＊　八宮の喪が明けてから、「薫」は、大君と契りを結ぶべく、再び　寝所に忍ぶが、それと察した大君は、そっと　寝所を抜け出してしまう。後に残された中君と　無為な一夜を明かすしかなかった（「総角」）。
＊　「薫」は、「匂宮」を中君の部屋に　手引きしたうえで、大君を口説くのであったが、自分の意向を無視して、中君に「匂宮」を縁づけた「薫」を恨む大君には、拒絶されるしかなかった（「総角」）。
＊　「匂宮」と　夕霧の愛娘「六君」との縁談を聞いた「薫」は、自分が　中君と結婚すべきであったのでは、と　心が揺れるのであった（「総角」）。
＊　「薫」は、心労から　重い病に陥った大君を　献身的に看護する。が、その甲斐もなく、大君は　息を引きとる。「薫の」の悲しみは尽きない（「総角」）。
＊　「薫」は、中君に慰めを見出し、今からでも　大君の意志通り　中君を妻に迎えよう　と思う　が、「匂宮」が　中君を　自邸に引き取ることを知り、二人を会わせたことを　後悔する（「総角」）。
＊　「匂宮」と「六君」との婚約に悩む「中君」を　慰めていた「薫」は、遂に「中君」に対する恋慕の情を　告白してしまい、契りを結ぼうとするが、中君の腹帯を見て　彼女の妊娠を知り、思い留まるのであった（「宿木」）。
＊　「薫」は、中君から、異母妹・浮舟が、大君そっくりである　と　聞き、自分の横恋慕に困った末の発言　とは思うものの、浮舟に　大きな関心を寄せずにはおかなかった（「宿木」）。
＊　「女二宮」が、「薫」の許に降嫁し、帝から皇女を託された幸運を　世間の人々は羨むが、「薫」は、素直に喜べない（「宿木」）。
＊　「薫」は、宇治で　初瀬詣での中宿りの浮舟を　偶然垣間見る。その浮舟が、大君

に瓜二つであることに　驚きつつも　大きな喜びにも包まれる。大君の代わりに浮舟を、と思う（「宿木」）。
＊　浮舟の母は、「薫」の申し出を　ありがたいと思いつつも、身分の違いから　躊躇する。しかし、中君を訪問した折に「薫」の素晴らしい姿を垣間見て　浮舟を　傍に置いて欲しい　と思うようになる（「東屋」）。
＊　「薫」は　浮舟の隠れ家「東屋」で、突然　浮舟の部屋に忍び込み、契りを交わし、宇治の八宮の山荘に連れ去り　隠し据える（「東屋」）。
＊　宇治の山荘で　浮舟は、「匂宮」とも契りを交わしてしまい　苦悩する。裏切られたとは　夢にも思わない「薫」は、浮舟を　京に迎えるべく　準備を進める（「浮舟」）。
＊　京からの「薫」の使者と「匂宮」の使者とが　鉢合わせをする。そのことから、「薫」は、「匂宮」と「浮舟」の密事を知ることとなる（「浮舟」）。
＊　浮舟が死んだ　との知らせを受けた「薫」は、衝撃を受け、そのショックから寝込んでしまった「匂宮」を見舞う。さすがに　耐え切れずに　あてこすりの言葉を吐く（「蜻蛉」）。
＊　「薫」は、かねてから　思いを寄せていた「今上」と「明石中宮」との間に生まれた「女一宮」を垣間見て　心を奪われ　妻の「女二宮」に「女一宮」と　同じ衣裳を着せたり　手紙の交換を勧めたりする（「蜻蛉」）。
＊　「薫」が　浮舟の母を慰める為に、浮舟の異母弟たちの世話をする事を申し出たので、小君が「薫」の傍に仕えるようになる（「手習」）。
＊　「薫」は、浮舟が　生きている　と聞き、手紙を託して　小君を使いに立て　小野に迎かわせるが、人違いだ　と言われ　返事ももらえない。「薫」は、他の男が　浮舟を　かこっているのではないのか　と疑心暗鬼で居る（「夢浮橋」）。　（上田尾・西沢）

B．物語における位置・準拠

「薫」は、表向き　女三宮と源氏との子ということになっているが、実は、柏木と女三宮との　密通によって生まれた子である。その誕生は「柏木」の帖である。源氏亡き後の「宇治十帖」における　主人公の一人である。

「薫」は、冷泉院と秋好中宮に　寵愛されながらも、幼いころから、仏事に専念する若い母「女三宮」の姿に、自己の出生についての疑義を重ね合わせて、屈折した気持ちを抱き続け、世俗的な出世や、女性関係には背を向け

「善巧太子（ぜんぎょう）のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」

＝（善巧太子が、自身に尋ねて出生の謎を知ったというが、そのような智恵を身につけたいものだ）

と思う（匂宮）。

この「善巧太子」については、源氏物語の古注以来　諸説がある。

「善巧太子（せんけう　とも）」太子は、河内本や別本などでは、「くい」「けうゐ」となっているところから、「瞿夷（くい）」太子で、釋迦の子の「羅睺羅（らこら）」のことであろうという。即ち　藤原定家自筆の「奥入」では、「七陀太子は、是れ釋迦仏なり。耶輪陀羅（しゃしゃだら）の子、羅睺羅尊者なり。仏、出家後　六年を経て誕生・すなわち大臣らこれを疑う。耶輪陀羅、児を抱えて、火に投入するも、まったく燃えず」としながら、この文の真意については　分からない　としている。「花鳥余情」では、「法華経」の「人記品」で、「われ太子たりし時　羅睺は、長子となれるをもって、われ、今、仏道を成ずる時も、法を受けて法子となるなり」と　偈文に説かれたから、釈迦の子として定まったことをいうか　とする。「岷江入楚」や「花屋抄」などでも、羅睺羅が、母親の胎内に　六年間居たために　父を知らなかった　という伝承を指摘する。

山岸徳平氏は、「或は、蘇婆陀羅、即ち　善賢のことであろうか。善賢はまた善見とも記す。聡明多智で、五神通を得、又、仏の涅槃を聞いて、仏の所へ行き　遂に羅漢になったという。ただし　太子でなない」と　明解を避けている。

志田延義氏は、山岸氏の「善見」が、「せんけう」と表記し得るという見解をふまえて、「涅槃経」の「羅閲耆（らえつぎ）＝王舎城王、頻婆沙羅（ひんばしゃら）。その王の太子、なづけて「善見」といふ」をあげて、善見太子は、頻婆沙羅王の太子、即ち　阿闍世太子の別名であるとする。母の　韋提希（いだいけ）夫人が、懐胎した時、古い占師から、「この子によって　頻婆沙羅王が、害されるであろう」と聞き、王とともに　高い楼上から　阿闍世を産み落とす。それで　阿闍世は　指を損しただけで　無事に成長する。阿闍世は別名「未生怨（みしょうおん）」、生まれる前から　怨みを抱く　という意味である。その阿闍世に、悪友の提婆達多（だいばだった）が、「父王を殺し　代わりに王になれ」と唆す。阿闍世に　害意が生じたのは、出生の秘密を聞かされ、父母に裏切られた　という思いからであった。彼は両親を幽閉し、父を餓死させてしまう。罪の子「薫」とは　意味合いが違うが、出生にまつわる黒い霧を感じていた　といえば、両者には、共通するものがある　という。「阿闍世王問五逆経」に、この阿闍世が、いったん堕ちた地獄から「辟支仏（びゃくしぶつ）」＝（独覚、師なくして独力で悟り、他人に教えを説かない聖者のこと）になる。「問ふべき人」もない「薫」が、求める「わが身に問ひけん悟り」とは、この太子阿闍世（善見）の悟りの意である　とする、

「夕霧」の帖が、「薫」と大君の物語の前例である　とする見方も多い。（藤村潔・石田穣二）。小穴規矩子氏は、「まめ人」夕霧と「薫」とを比較して、「二人のまめ人の差は、その前提が、道心から説明されたか否かの相違で、これが「得恋」と「不得恋」との結末の　分岐点であり、「薫」の方が、より精神的・理想的に、すべて　夕霧を一歩進めているのが　注目される　という。

C．人物評価の歴史

「無名草子」に「薫」は、
「はじめより終はりまで、さらでもと思ふふし　一つ見えず。返す返すめでたき人なんめり。すべて　物語の中にも、まして現人の仲にも、昔も今も、かばかりの人はありがたくこそ」
＝（初めから終わりまで、欠点と思われる点が一つも見えず、本当にすばらしい人のようだ。すべて、物語の中でも、ましてや現実の人の中でも、昔も今も　これほどの人は、めったにない）
　と　絶賛される。その一方、
　「け近くまめまめしげなる方は、おくれたる人にや」
　＝（親しみがもて、女性に対する熱心さ　という点では、劣った人か）
　と　評されてもいる。
　三谷栄一氏は、源氏が　藤壷・葵上・空蝉・紫上・末摘花・朧月夜・明石君　というように、先へ先へと　恋をあさり　次ぎから次ぎへと移動してゆく　いわば放胆な「複線的愛情の容相」で描かれるのに対し、「薫」は、「大君のゆかり」によって、「単線的純一な愛情」の型で描かれており、源氏物語以前の物語の主人公は　源氏型であるのに対して、それ以後は、「薫」型に変る　という。「無名草子」の評は、薫型を　理想的な物語の主人公と認める　時代相に支えられた人物評なのであろう。
　物語第三部の　主要人物である「薫」と「匂宮」とが、対照的に描かれているということは、諸家の指摘するところである。藤岡作太郎氏は、「薫」と「匂宮」とともに　源氏の性質の　一面を得ただけであって、欠陥の多い人である。薫は幽静、匂宮は浮華、薫は仏法に進み　心長くして　我が物になる筈の女性を失い、匂宮は、情け深いけれど軽々しい　という。武田宗俊氏は、薫が　理性型であるのに対して、匂宮は衝動的である　とする。岡一男氏は、そういう対照的な性格が　遺伝ばかりでなく、環境によって形成されている　という。
　薫の道心に付いて、岡部秋生氏は、宿世の故に　あいがたき仏法にめぐりあうべき機縁を与えられていながら、一方では、同じその宿世の故に　世の絆しに係わらざるを得なくなって、仏法に入って行けない。宇治の物語についても、作者は　この恋愛を描く事を狙ってものではなく、むしろ、その情熱と道心との間に　翻弄されていく薫の宿世を描く事を　念願としていたのだ　という。岡崎義恵氏は、源氏の一生が　どのようにして道心を得るか　の経路を描いたのであるとすれば、薫の一生は、道心のある者が、どのようにして　それが妨げられるか　を描いたものである　という。柳井滋氏は、当時の浄土思想と結びつけ、世俗の生活を、全面的には否定せずに「願生浄土」を　第一義とする　薫の退嬰的な生活は、「往生要集」など　当時の浄土教の教えるところである　と説き　現世を思いながら、後世に向かうのではなく、後世を思いながら　現世に

対する薫の生き方があるのだ　とする。

薫の性格描写について、斉藤清衛氏は、「表現上の統一」と「性格内の葛藤」の描写という　具体的な視点から、宿命的天賦・性質と、大君に対する思慕の情を基調にして描かれるが、性格の葛藤の描写という点では、深みがなく、自然な展開をしていない。理性と感情の間で、葛藤し　分裂してゆく姿も、「厭世的な超俗的な心」についても　描かれ方が　不徹底である　とする。

物語は　道心を持った薫と　宇治の女たちの恋愛という、一見　本来全く矛盾したことを描き続けるのであるが、それがどのように描かれ　何を結果したかを　めぐって、薫の人物評価は、極端に分かれる。

小穴規矩子氏は、薫の　源氏に見られなかった　唯一の新しい特色は、「道心」を持っていたことであり、これは彼の暗い出生の秘密に対する　漠たる疑惑に由来し　源氏物語第二部未解決の主題の　直接的継承を意味し、この道心という問題を、具象性を離れてはあり得ない　物語の展開や主題と、常に関連を持たせるために　体臭としての「芳香」という感性的・象徴的な　文学的方法を考え出した　という。権門の娘に接近しながら、「栄華」を避ける、というよりも　彼が　規範や愛着、一切のものに捉われる性質に　警戒するからである。そして、そういう薫の大君への恋は、１、道心深い人故に　唯一無二の恋であり、２、その仕向け様も、その精神性の故に　相手の精神性（人柄・意志）を認め、同意なしには結婚すまい　という思いやりのある出方となり、３．思いやりは精神上のみならず、物質上・生活上に及ぶものであるから、厚志は　具体的には　後見の実意に訴える形を取る。これらは申し分のない「まめ人」の形成であり、女性にとって　完全無比の新たな男性の理想像である　という。

清水好子氏は、世俗の栄華に背を向け　世間的欲望を持たぬ薫は、権門の女性に近づこうとせず、反世俗の姿勢を保っている。それは、従来の物語に見られなかった内容で、大君との恋も、方法としても、題材としても、独創的で、新しい物語の萌芽を見る事ができる。しかし、薫の地位は、その反俗的な精神とは無関係に高くなり、八宮や姫君たちに、物質的な援助をしてゆく。薫には、そういう「俗物性」がある　という。

岡崎氏や小穴氏らが、大君も浮舟も、薫の担う仏教的主題を描く為の脇役で、　薫を宇治十帖の主人公としてみるのに対し、清水氏は、薫が与えられるべき人物として、何ら　否定的な面がかかれないなら、大君・中君・浮舟と移ってゆく間に、薫の意味が　積極的に　深められ展開しゆくことは　考えられない。むしろ、「そういう人間造型によって、周囲の者を　動かしてゆくという方法」であったから、彼を囲む人々は、現実には、厳しく、彼らは　修飾されず、真剣に生きるのである　という。

秋山虔氏は、清水氏の論をさらに進めて、「薫の中では、観念であった恋愛が、八宮の死によって、薫の道心と恋愛との均衡が崩れ、生身の男の恋愛として自立する。恋心を、道心を志す者同志の共感として意味づけ、八宮の遺託に帰して　割り切ろうとした薫は、単身直入な愛の告白が出来るはずがない。相手の心を　傷つけまいとする優しさ、

慎み深い考えであるかもしれないが、同時に　愛情に自己を解放し切れない、無用な俗物的配慮、自分が　失敗し傷つくことを恐れる　小心卑屈さをも見ることが　出来る。八宮の戒律を　生き方の規範とする大君の心の内奥に、薫が　如何に優しく誠実であり、献身的であろうとも、全く立ち入る事が出来ないばかりか、そういった大君の心情が軸となって　物語の世界が領導されていくようになっている。もはや、物語の世界の焦点は、薫その人に　求めることは出来なくなっている」という。

一方、千原美沙子氏は、まず薫の新しさを、女性尊重と宗教心の二点である　と押さえた上で、空蝉・朝顔斎院・明石君・晩年の紫上　などを通して、女の生涯をつき動かすものの正体を　究めようとした作者が、もっと　それを突き詰める為には、薫が必要であったのであり、その為に　薫は、生身の人間から遠ざかり　現実味を喪失したが、薫を媒材として　大君の獲得した迫真性故、　その点は　マイナスになっては居ないという。

また「かをり」についても、中君との場面に　顕著に現れる薫の芳香を、助川幸逸郎氏は、「愛欲の象徴」としていて、小穴氏の見解とは　対極に位置する。

D．人物の特色

源氏は　数多くの妻妾を抱えている六条院に　さらに女三宮を迎える。その六条院解体の悲劇は、女主人公である　紫上が、一身に担わなければならなかった。それをパロディー（戯作・風刺作）として、公人としても有能で、正妻以外の女性には　脇目もふらなかった「まめ人」夕霧の、家庭の悲喜劇として、描く。それは　もう一度　紫上の視点から、女の身の「宿世」の問題として、物語の主題を支える明確な「認識」として、掴み直したのが、夕霧の帖であった。そこでは夕霧の「まめ人」性は、決して美徳としては描かれていない。（夕霧の項　参照）。

最愛の女性　紫上を喪って、源氏は、

「人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく、常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに来し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな」

＝（尋常の人には抜きん出ていたわが身とはいえ、幼い頃から、人の世の悲しく無常であることを身にしみて思い知るようにと、仏などが、お勧め下さったこの身であるのに、気強く素知らぬ振りをして、過ごして来て、挙句の果てに　前後に例の無いような　大きな悲しみを抱えてしまった）

と　思う（「御法」）。そして　中将君を相手に　今は、

「宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに、今なんつゆの絆なくなりにたる」

＝（宿運のつたなさや　器量の程度にも　すっかり見極めがついて、心が落ち着き、此

の世に　執着しなければならないような　人間的な絆も無くなってしまった）
　という（「幻」）。
　一方薫は、冷泉院や秋好中宮に寵愛され、元服して　近衛中将となり、官位の昇進も目覚しい。今上帝や中宮、夕霧からも大切に扱われながら、自己の出生にまつわる疑惑に苦しみ、この世の恋も栄華も虚しく、父母の罪障を思い、出離の心を抱いている（「匂宮」）という。薫という人物は、むしろ夕霧に　その前例を求めるのではなく、源氏の晩年の人生観や、人間認識に基づいて、新しく物語に主人公として、造型されたのだ　といえよう。
　新しい物語の主人公は、源氏晩年の精神性を継承するものでなければならない。物語作者が、そのように考えていた頃、花山院が、寛弘五年（一〇〇八）に崩御する。花山院は、出家、退位の前後に、二十五三昧会に深く関わり、花山院の出家には、三昧会の有力メンバーの厳久（ごんく）が手引きしている。院の死去の　前後の事情から、二十五三昧会に思想的基盤を求めて　作者は　大君物語の基本構想を作ったのであろうと考えられる。（大君の項　参照）。「往生要集」の「厭離穢土・欣求浄土」＝（穢れたこの世を厭い離れ、清らかな永遠の国を求める）の思想を　社会的に実践した念仏集団の三昧会を踏まえて　初めて、作者は　薫と大君の具体的相を　イメージすることが出来たのではないか。源信の天台浄土の念仏思想のもとに、男女の恋が描かれるとすると、それはどういうものになるのか、というのが、大君物語の主題であったのだ。「道心」を抱いていている薫という人物の創造につて、小穴規矩子氏が、「女性にとって、完全無比の新たな男性の理想像である」といわれる主人公の誕生である。そういう女性にとっては、理想的な人物であれば、身を委ねることができるのか。物語の主題は、薫ではなく、大君に転嫁され、担われることとなる。
　それでは、浮舟物語における　薫の人物造詣は　どうであろうか。八宮は、北方の死後以来　仏道修行生活に　身を打ち込み、世間並みな　後添いを迎えようとは思っていなかった。（森岡常夫）。また「宿木」の帖で、帝が薫に「女二宮」を仄めかすのは、大君生前であったが、「総角」の帖では、そういう話を　無視した言動にでていることは、彼に　高貴な正夫人の予想すらなかった事を前提とすることなどから、浮舟物語の構想は、大君死後のことだと思われる。新しい物語の構想に基づいて　新しく人間関係が設定し直される。
　薫は、弁尼から　出生の秘密を知る。そのことから、自分の出生にまつわる　存在の不安と　彼の道心へと突き動かす情念が　消滅したということ、また、浮舟物語にむけて、女二宮の降嫁を迎えて　もはや　世間的な栄華や　権門の女性に対する無関心ぶりではなくなっている。即ち　物語史上特筆される「道心」という面からは、薫という人間を　説明出来なくなっている。「道心」もそれを　支える具体的な場である三昧会の前提が無くなれば、彼の人物像の独自性は、なくなる。「後見」の問題について、二十五三昧会の「定起請（じょうきしょう）＝起請第十二箇条」の第五条に、「この二十五

三昧に結縁した人たちは、互いに永く父母・兄弟のような気持ちでいなければならない」と規定している。大君物語において、八宮が、大君・中君らに対しては、厳し過ぎるほどの遺訓を残しながら、薫に後見を依頼するのも、それは八宮の錯覚によるのではない。落魄の八宮に対して、潤沢すぎるほどの物質的援助を行うのも、薫の打算を　そこに読み取るのではなく、やはり結衆は、「お互いに家族同然の人間関係なのだ」という三昧会の規定の細則を念頭において考えれば、当然のことと理解されなければならないのである。（大君の項　参照）。しかし　道心とか三昧会という前提を抜きにしての　薫の中君や浮舟への物質的援助は、都の権門の青年貴族の　単なる俗物的な打算としてしか機能しなくなる。かくして、薫は、「夕霧」の帖で、揶揄的に描かれた　恋愛喜劇の当人の夕霧と、変るところが無くなってしまった。物語の男主人公の造型とう視点からみれば、それは、「夕霧」の帖までの　退転である。

浮舟に対する薫の恋は、あくまでも大君の「形代」への恋であり、権力的であり、経済的・物質的に　浮舟一家を押さえ込む「力まかせ」の恋である。それは「まめ人」を売り物として、柏木の死後、悲嘆に暮れる落葉宮を　強引に世間的に我が物にしてしまった夕霧と、本質的に変ることはない。入水から救われて　横川の僧都の妹尼の草庵で、ミニ薫ともいうべき某中将の愛を　拒否する浮舟が、薫からの手紙を見て　再び薫の許に帰るとは思われない。言ってみれば、物語の主題を切り開いてゆく鍵は、浮舟と横川の僧都に委ねられていて、もはや薫の手の中にはないのである。

女一宮を思いながら、大君・中君・浮舟と　いずれも失うしかなかった八宮との因縁を　振り返る薫は、退嬰的であるかもしれない。しかし、世間的な立身出世と権門の女性を妻として迎えることが、おそらく当たり前であった平安貴族社会そのものから見れば、そういう世俗的願望に食傷気味で、「道心」を抱く薫こそ　退嬰的である。その薫が、大君との恋を経験して、初めて出生の秘密に関する　自らの存在の不安から解放され、今上帝の女二宮を迎え、貴族社会の中で、権力中枢にある有力な青年貴族として自立してゆくということであるとすれば、大君との恋は、薫にとっては、一種の通過儀礼のようなものであったのではないか。　　（中　哲裕）

１０．　匂宮　におうのみや

A．その生涯

＊　匂宮は、今上帝と明石中宮の第三皇子として生まれた。源氏の孫に当たる（「若菜下」）。
＊　幼い頃の匂宮は、病身の紫上から、彼女が愛した二条院に将来住み、紅梅と桜を見守って欲しい　と遺言される（「御法」）。
＊　両親の愛を　一身に受けて育った匂宮は、将来の皇太子と考えられて居り、紫上の願い通り、二条院で暮らしている（「匂宮」）。
＊　生まれつき芳香を放つ薫に対して、様々な香をたきしめている匂宮は、源氏の死後薫とともに、宮廷社会の　評判の貴公子として「匂う兵部卿・薫る中将」と、揃って　讃えられている（「匂宮」）。
＊　薫から　宇治に住む八宮の娘たちが　素晴らしい、と聞いた匂宮は、いたく心をひかれ、いつか会わせて欲しい　と薫に依頼する（「橋姫」）。
＊　匂宮は、かねてから　夕霧の娘六君との結婚を申し込まれていたが、耳を貸さない。八宮の娘・中君に恋慕していて、文通は続けているものの、色よい返事が　中々もらえず　仲介役の薫を　責めている（「椎本」）。
＊　匂宮は、薫と謀り、ついに中君の部屋に忍び込み　契りを交わす（「総角」）。
＊　匂宮は、中君との結婚三日目の夜、母明石中宮の反対にあって、御所に足止めされてしまうが、薫の助けもあり、何とか中君に会うことが出来る（「総角」）。
＊　なかなか宇治に行けない匂宮は、薫の助言で、紅葉狩りに託けて中君に会うことを計画するけれども、母明石中宮に阻まれて果たせない。匂宮の浮気な性分に不安を抱く中君と　その姉大君を、たいそう　悲しませてしまう（「総角」）。
＊　大君の死の知らせを聞いた匂宮は、雪の中　宇治に行き　中君を　心から慰める。薫が　中君に　心を移しているのに気づいたこともあって、中君を　京に迎えたいという希望を　本気で叶えようと思う匂宮は、ようやく　明石中宮の　許しを得る（「総角」）。
＊　匂宮は　中君と　二条院で、新婚生活を始める。が、薫の　中君への横恋慕も、心配の種である（「早蕨」）。
＊　夕霧の娘六君との縁談を断り続けていた匂宮であったが、将来のことを考えると、左大臣夕霧の後見は　大事な事　と考え直し、六君を　妻に迎えることにする（「宿木」）。
＊　中君が、匂宮の長男を出産する（「宿木」）。
＊　二条院に　たまたま滞在中の浮舟を発見した匂宮は、浮気の虫が動くままに　浮舟を　抱きしめる。が、浮舟の乳母に見張られていた為　意のままにすることが出来ない（「東屋」）。
＊　浮舟のことが忘れられない匂宮は、その浮舟が　今は　薫の愛人として、宇治に匿

われている　と知り、宇治に行き　薫と偽って　浮舟の部屋に忍び　契りを交わしてしまう（「浮舟」）。
＊　翌日も　宇治に留まり、愛を誓う匂宮の情熱は、冷静沈着な薫の　数少ない訪問を、待つ　という寂しい生活をしていた浮舟の心を　大きく揺り動かす（「浮舟」）。
＊　薫への嫉妬と　浮舟恋しさに堪えかねた匂宮は、雪の中　宇治に行く。橘の小島の常盤木を見て、彼女への永遠の愛を誓い　宇治川向こう岸の小家で　逢瀬を持つ（「浮舟」）。
＊　匂宮は、薫が浮舟を京に迎える準備をしている　と知り、その前に　浮舟を引き取って　京に隠してしまおうと計画する（「浮舟」）。
＊　匂宮の使者と、薫からの使者が、偶然　宇治の山荘で　鉢合わせをする。このことによって、匂宮と浮舟の密会のことが、使者の報告で、薫に知れてしまう（「浮舟」）。
＊　浮舟の死を聞いて　病に倒れてしまった匂宮は、見舞いに訪れた薫と、浮舟について　思い出を語りながら、複雑な気持ちで　お互い　相手の心の内を探り合うのであった（「蜻蛉」）。
＊　匂宮は、妻の中君に、感づかれてる事を承知の上で、浮舟との浮気の事実を告白する（「蜻蛉」）。
＊　匂宮は、一旦止めていた　色々な女性に言い寄ることを　再開し、浮舟を失った心の隙間を埋めようとする（「蜻蛉」）。　　（上田尾・西沢）

B．物語における位置・準拠

匂宮は、今上帝の第三皇子・母は明石中宮で、幼少の頃は　紫上に養育され　二条院に住み続けた。源氏の死後、時代を代表する貴公子として、薫と　並び称され「匂う兵部卿・薫る中将」と　世間に　もてはやされる青年へと成長した。薫が道心深く　現世に対して懐疑的で　内向的な性格を有するのに対して、匂宮は、刹那的で、自らの感情の赴くままに　行動する好色多情な性格を持つ貴公子である。八宮を「法の師」と仰ぎ、宇治へ通う薫から、八宮邸の姫君姉妹の話を聞き、強く心を惹かれる。初瀬詣での帰途、宇治に逗留した匂宮は、八宮邸へ恋文を贈り　以後妹の中君と　文通が続く。姉の大君は、
「人の言にうちなびき　この山里をあくがれたまふな」
＝（甘い言葉に誘われて　この宇治の山里を　うかうかと出てはならない）」（椎本）。
と　言い残した父の言葉を、薫との関係をも含めた　全ての結婚を拒否するもの　として把握した。だが、八宮訓戒の真意は、その時　中君へ　急接近しつつあった　匂宮を牽制するものであった　と考えられる。女房が齎すような縁談に乗るような事は　言語道断だが　一方　貴顕になびき　高みの位置から宮家の劣位を突きつける結婚によって、姫君たちが傷つくことを　八宮は　懸念したのである。皇位継承の闘争に巻き込

まれた　苦い過去を持ち
「世に数まへられたまはぬ古宮」
＝（世間から、忘れ去られた古宮）
　となった八宮にとって、栄華権勢に支えられた皇統に連なる匂宮は、まさに現在の八宮の位境と対極にある存在であった。だが　結局、匂宮は　再三の働きかけの後、薫の手引きにより、遂に　中君と結ばれる。身分柄から、宇治通いがままならぬことは、当初から　自明のことであった、が、匂宮は、母明石中宮の叱責を受けつつも、中君の許に、無理を通して　訪れようとする。そこに　匂宮の　彼なりの努力と　自らの恋愛にひた向きであろうとする　純粋性は　認められる（稲賀敬一・森一郎）。「匂宮」の帖に、
「わが御心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬべき御気色なめり」
＝（自分の気持ちから出たことでなければ、意味がない　と思っているご様子であった）
　とあるように、時の権力者の意向に則った婚姻に　反旗を翻すところに、匂宮の本質があった。匂宮が、既成の秩序に抗う表れとして、都の宮廷社会から　はじき出された八宮家の　中君への傾倒があったのだ　と　いい得る。そこに若き日の源氏や　禁忌の恋に身を窶す「伊勢物語」の業平に通じる「一途さ」を　うかがうことが出来るのである。
　しかし　父亡き後、親の如く　妹の中君の結婚に対処した大君にとって、匂宮は、「いとすきたまへる親王」という　不誠実なだけの男と映り、やがて　大君は、宮の態度に憤慨しつつ　病没してしまう。匂宮の人物像は、自己の感情を最優先するところに　色好みの　美質を見ることが出来るものの、翻ってみれば、それは利己的な動機・衝動的な言動を貫くものであり、女の側　心の痛みに添おうとする態度は　誠に希薄であった。女の身体を求め　女の心を看過する　匂宮の存在と　その言動は、観念的な愛のあり方に固執する大君の内面を　逆照射する。そういった女との　心の接点を持ち得ない匂宮の人間性は、対大君・対中君を経て　浮舟物語に至って、より明らかに提示されてゆく。匂宮は、中君を　都の二条院に迎えるものの、夕霧の六君との婚儀も拒めず、正妻として迎える。中君への夜離れが重なり　彼女を苦しめるが、中君は、やがて妊娠したことで、その後、相応の安定を得ることとなる。
　宇治十帖の前半部分、橋姫物語における匂宮は、大君からは「あだ人」と評されたが、中君が　世間からは「幸ひ人」との評価を得るにいたったことを考慮すれば、彼の性格は、破綻を齎すものではなかった。が　後半部・浮舟物語においては、彼の色好みは　より偏執的なものとして変貌する。中君の許に　身を寄せていた浮舟を　垣間見した匂宮は、新参の女房かと思い違い　早速に懸想する。その後も、薫が宇治に匿う浮舟を探し出し、薫に成りすまして　浮舟の部屋の忍び　契りを結んでしまう。薫との競争心が大きく作用し　情熱的に浮舟に溺れてゆく匂宮の　官能的で、直情径行の生き方は、結果的に　浮舟という薄幸の女性の運命を　翻弄しただけのものになった。だが　皮肉なことに、自殺に追い詰めるほど　女を翻弄した　という事実が、成立したところに、実は

匂宮の　物語上の役割の重要な意味合いがあった　とも言えるのである。

Ｃ．人物評価の歴史

源氏亡き後の「源氏物語」の年立（年譜）は、薫の年期を軸に作成されており、第三部の主人公は　薫であり、匂宮は、対比的脇役とするのが、大方の捉え方である。が、一方で、薫その人の人物像には、かって源氏が有していたような、その存在自体が、物語世界を開示して行く　という絶対的な牽引力が、不足していることは　否めない。むしろ、続編の世界は、個別的な　一人の人物を中心に、物語が展開するのではなく、薫・匂宮・大君・中君そして浮舟　といった人物の相互の諸関係が、物語を成立させ、また物語が織り成す環境、その折々の局面が　登場人物たちの行動や思考を要請または規定しつつ　当該人物の性格を　形作ってゆくのだ　といえよう。そもそも、物語の作中人物とは、必然的に　そのように造型されてゆくものではあるが、続編は、正編に比べて、そういった物語の方法が、より明確に　かつ　自覚的になってきている。その中で、「匂宮」の帖の冒頭で、

「光かくれ給ひにし後、かの御影にたち継ぎ給ふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり」

＝（源氏亡き後、その面影を継ぐ者は　大勢の子孫の中にも　なかなかいない）

と語られ、かろうじて匂宮と薫が、

「げにいとなべてならぬ御有様どもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし」

＝（評判通り、並み一通りのご様子という訳ではないが、全く見るも眩いというほどでいらっしゃるものでもない）。

という表現のもとに　紹介されたことが　改めて留意されるのである。薫・匂宮は、源氏には　到底及ばない・・・それは、源氏没後の物語は、唯一無二の主人公を創出し、その生涯を辿るような展開を　もはや目的とはしていないことが、ここに　名言されているのである。然し、薫や匂宮が、源氏と比べて　不完全なる存在であるということは、彼らの　卓抜性は、常に源氏が築き上げたものから、自由ではあり得ず、源氏の残光ないしは影響力に　支配されるということも　一方で　物語は明かしている（大朝雄二）。

源氏が　既に不在であるにも関わらず、彼が　絶対の比較基準として　なおも言及されるということは、彼らは　源氏を継承しつつも、そこから「ずれ」を見せ、差異化されてゆくほかない人物なのである。彼らは、源氏に比べて　見劣りがする　という意味で、より現実的で　相対化された人間にならざるを得ないのである。しかも　匂宮と薫という対照的な二人の人物が、併立されることにより、物語は　常に　二極の構造を持つこととなった。その双方が絡みあって、初めて実質を持つという第三部の物語は、結果として、彼らが身をおく情況を　丹念に摘出することに、重きが置かれる。物語の展開は、そういった人間が　絡み合って生じる事件が中心になり、不信・対立・齟齬・争

い・隠蔽・誤解・懐疑などが、渦巻く世界になって行く。
　匂宮は、理想的な源氏がもっていた「まめ（誠実）」と「あだ（浮薄」・「聖心」と「花心」とを、薫と共に分有する　といわれてきた。慎重で、内省的な薫に対し、世間の規範に逆らい、自らの恋心を優先し　一途に恋にのめりこむ姿勢が　匂宮の性質を顕在化する。しかし、匂宮の生き方、その恋の行く方は、常に　薫の存在及び言動と連動し、また薫に係わる、薫の圏内にある女達に向けて始まるところに　続編の世界の人物　匂宮たる　所以がある。「匂う」「薫る」と　並び称されても、薫が天然の香りを　超越的に発するのに対し、匂宮の香りは、人工的に　焚き染められたものであり、挑み心が生んだ　「似非」の香りである。薫に対して「似非」であるという負性が、コンプレックスという形で、匂宮に内在され、そのコンプレックスに根ざした猜疑心が生まれ、匂宮の嫉妬心が　顕わになるのである。と共に、そのコンプレックスを　跳ね除けようとするエネルギーが生じるところに　第三部の屈折した物語は　形成されてゆくのである（鈴木康恵）。
　そもそも　匂宮と中君との関係も、薫が語る宇治の姫君の噂話に　飛びつくような形で、端を発し、薫における　対大君への慕情に巻き込まれつつ　同時進行したのであった。また、中君を　京に引き取った後の夫婦関係も、薫との三角関係によって、複雑化することで、匂宮の　執着心は　燃え上がるのであった。大君を亡くした薫は、其の面影を宿す中君に　新たな執心を抱くようになる。ことなきを得たものの、迫られて　染み付いた芳香に　匂宮は、
「かの人の気色も　心あらむ女のあはれを思ひぬべきを、などてかは、事の他にさし放たん。いとよきあはひなれば、かたみに思ひかはすらむかし」
＝（あの薫の様子も、心ある女なら　きっと心が動くに決まっているのだから、どうして　女の側で　はねつけることができようか。全く　似合いの間柄なのだから。互いに思いを交し合っているのだろう）
　と責め、
「わびしく腹立たしくねたかりける」
＝（情けなく、腹立たしく、妬ましい）
　と、その心情を　激しく吐露するのであった。匂宮の嫉妬心や　挑み心は、女たちは皆　薫に靡き、薫にだけは　心を開くのだ、という　薫の持つ美質への強い劣等感と表裏をなす。しかし　実は、その当の薫もまた、匂宮に対し、劣位の感情を　抱え持っていることを、彼は　全く気づいていないのである。罪の子として　わが誕生に　暗い思いを抱く薫にとって、源氏の直系の孫である匂宮は、確かに　源氏の血脈を受け継ぐ人であり、実父母の帝と中宮から　溺愛されている　屈託のない眩いばかりの存在である。と共に、東宮候補になり得る皇子（匂宮）と　直人（薫）　という関係であり、二人の差は　到底埋められるはずのものではないのだ。薫の宇治通いの背景には、匂宮の優位には、到底及ばない都から　遠く離れた宇治こそが、自己を解放できる唯一の場である

という無意識裡の思考が作用していたのである。そんな薫が

「すいたまへるやうに人は聞こえなすべかめれど、心の底あやしく深うおはする宮なり」（椎本）。

と　匂宮を評価し、無責任な好色者と批評する世間の見方とは異なる目で、匂宮の心の底にある魅力を　見て取ろうとしたことも　彼は周知し得ないのであった。ただ一方的に強まる　匂宮の薫に対する競争心は、その究極の成り行きとして、遂に　友人の恋人を　盗み取るという行為へと向かわせるのであった。それを物語は、

「心をかはして隠したまへりけるも、いとねたうおぼゆ」

＝（薫と中君が共謀して、浮舟を隠しているのが、憎らしい）、

と述べ　匂宮の　疎外感・薫と中君への懐疑・嫉妬の　反動として、定位している。匂宮の浮舟への情熱は、　薫の浮舟に対する

「いまいとよくもてなさんとす。山里の慰めと思ひおきて」

＝（その内　それ相当の扱いをしてやろう。宇治に出かけたときの　慰みの為に　浮舟を置いた）

という　悠長さと　対照的にあいまって、より激しいものとなるのである。宇治川を小舟で渡り　対岸の隠れ家で、浮舟に　惑溺した匂宮は、その後　薫に突き止められ会えなくなると、

「いづくにみをば棄てむと白雲のかからぬやまもなくなくぞ行く」

＝（どこに身を棄てようかと　白雲の懸からぬ山とてない山路を　泣く泣く帰ってゆくことだ）

と　破滅的な嘆きに浸るのであった。

しかし　匂宮の激しい恋心は、以上述べたように、薫との関係を　始発とする故に、匂宮は、自分と薫との板挟みになって、自ら命を絶つ　女側の精神に踏み込み、その苦しみを分かち合うような発想は、持ち得なかった。浮舟失踪後、匂宮は、病気に臥すほどの落胆ぶりではあったが、まもなく　別の女へ　心を動かしてゆく。そしてその後、浮舟が　生きていたことが判明しても、薫と浮舟との関係が　復活することが、物語には示されていない以上、匂宮の浮舟に対する言動も、一切　語られることはない。匂宮は、源氏の　花心（好き心）を受け継いでいるとはいうものの、源氏が　空蝉や末摘花などに対して　そうであったように、一度熱中した女たちに対して、終生面倒をみるような　情愛の持続性は、持ち合わせていないのである。また女三宮の降嫁後の源氏の紫上への気遣いのように、仮令　傷つけてしまっても、その精神的関係を　何とか修復すべく　心を砕くような誠実さも　看て取ることは出来ないのである。所詮「まめ」の本質を伴わない「あだ」は、一時の異様な、あだの偏執ぶりを示す「あだ花」でしかなかった（森一郎）。という評価が　導かれてくることも　肯定し得るのである。

D．人物の特色

紫上の

「おとなになりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに　心とどめて、もて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にもたてまつりたまへ」

＝（大人になっても　ここ二条院に住んで、西の対の紅梅と桜を愛で、仏（私）にも花を手向けてほしい）（「御法」）

という遺言に　涙を零した幼い日の匂宮は、遺愛の木々に心をかけ、「まろが桜は咲きにけり」と喜び、散らすまいと、木の周りに　帳台を立てて、風を防ぎたい　と　無邪気に願った（幻）。その愛らしい姿に　紫上追慕の悲しみにくれる源氏も、思わず微笑み、その成長を見届けてやれない　わが命の残りの少なさを　噛みしめるのであった。源所物語正編の終末部に　点綴された、幼少の匂宮の姿は、読む者に、源氏という一つの終焉を、鮮やかに印象付ける役割を果たした。「無名草子」の匂宮評は、

「けしからんほどに、色めき好きたまふさまこそふさはしからね。紫の上のとりわきたまへりしゆゑ、二条院に住みたまふことこそいとあはれなり」

＝（常識を逸しているほど　好色がましい振舞をなさるのはふさわしくないが、紫の上がとりわけ目をかけていらっしゃったなあ。ゆかりの二条院に住まはれるのはたいそう心がうたれることだ）。

と記されている。成人後の匂宮の色好みの性情は、非難しつつも、紫上との関係をことさらに「あはれ」と述べるのは、やはり「御法」や「幻」の帖の描写に　依拠した感想なのであろう。

匂宮の母・明石中宮は、養母紫上が　匂宮を慈しんだこともあり、この第三皇子に　格別の愛情を注いだ　その母の存在が、匂宮には、叔父の　右大臣夕霧と並ぶ　煙たいものとなっていたが、薫と対比される匂宮がもつ「明」の部分は、その成長過程および　後見者との関係に　何ら翳りがないことが　大きく作用している　といえよう。匂宮の父今上帝は、「若菜下」の帖で、即位するが、実に「夢浮橋」の帖で　物語が閉じられるまで　三十年にわたって在位し続けるのである。その不自然さの中で　確認し得ることは、明石中宮が、まだ　現役であるということである。即ち、東宮にも、明石中宮腹の皇子が　順を追って　即位することが予想され、夕霧の政敵もいない中で、源氏が敷いた　明石中宮をめぐる権力構造は　磐石であるということなのである。実際のところ物語は、遂に　最後まで、何らの　政治的波乱も、生々しい闘争も起こらない。もはや　第三部の物語世界は、譲位という変革によって生じる　社会的緊張感とは、別次元のところで進行するということが判明する。そういった安定した政情の中で、宇治十帖の主人公たちが、晩婚であることも看過出来ない（大朝雄二）。「宿木」の帖で、匂宮と薫が、正妻を迎えたのが、それぞれ　二十六歳と二十五歳であったことは、十二歳で　左大臣

家の姫君「葵」と結婚した　源氏の場合とは　大きな相違を見せる。彼らにとって、宮廷社会を生き延びるために　確固たる後見を得る事を目的とした婚姻は、実は　急務ではなかった。晩婚である事は、自ずと、次世代を抱える年齢も先延ばしされるということで、匂宮も薫も、差し当たって、子孫繁栄の為に　深謀遠慮をめぐらす政治的努力は要求されないのである。権力奪取の政争と　直面するわけでもなく、かつ　次なる世代への具体的な責任も　未だ負っていない青年を中心に　展開する物語の主題は、自ずと、彼らの個人的な事由による精神的葛藤に　照準を合わせてゆくことになる。そういった情況の中で、考慮すべき問題は、現実世界で、極めて微温湯的立場にあった匂宮が、係わった女たちの運命を　激しく揺さぶり、次々に　精神的苦悩の淵に追い詰め、やがては　現世と隔絶したところで、精神的救済を希求する　思索的な女人像を　導き出していったということである。後半部の浮舟物語に見られる　浮舟の　昇華する魂の奇跡を描く物語は、匂宮の　極めて自己本位な生き方が、可能な者のみが持つ　天性の明るさと、理屈では否とされても、感性の部分では、熱く受け止められる　分かりやすい情熱が、女をつき動かす媒体として、重要な意味を持っている　とするのである。大君は、匂宮を許せなかったが、中君は、その情愛を受けた後、

「男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、この世のみならず契り頼めきこえたまへば、思ひ寄らざりしこととは思ひながら、なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしさよりは、とおぼえたまふ」

＝（匂宮の姿が　限りなくみずみずしくおきれいで、この世ばかりか来世までも変らぬ夫婦仲を一途に約束されるので、思いもかけなかった縁とは思いながらも、なまじあの中納言（薫）のような、気骨の折れる方よりは、と　思わずにはいられない）。

　と堅苦しい薫にはない　匂宮の魅力に　開眼しているのである。同様に　浮舟も、匂宮の情熱に惹かれ、明らかに　薫よりは、匂宮の方に　心が傾いて行ったのである。彼女は、絶望の淵に陥り、自ら命を絶つ間際まで、匂宮を思い詰めている。恋に酔い痴れた宇治の隠れ家での一夜、匂宮が

　「常にかくてあらばや」

　＝（いつもこうして居たいものだね）

　と言いながら描いた「いとをかしげなる男女もろともに添い臥したる絵」を取り出して、浮舟は　その折の、

　「描きたまひし　手つき、顔のにほひなどの向ひきこえたらぬやうにおぼゆれ」

　＝（お描きになられた時の　その手つきや　顔の美しさなどが、今真向かいで、相対しているように思われた）（「浮舟」）

　と　匂宮の姿を　思い起こした。この時の絵が、性的ないわゆる「おそく（匽息）づの絵」かは断定し難いが、浮舟は　睦み合う男女の絵を介在させつつ　官能的な匂宮像を　瞼に結んでいた　と認められよう。その夜　浮舟は　失踪したのであるが、結局入水までには至らず　救出された。その後の苦悩の日々の中で、浮舟の価値観や「生きる

為」の姿勢は、大きな変革を遂げる。浮舟にとって、匂宮の存在は、薫と同様、ただ疎ましいものになってゆき、もはや　逢いたい人では　なくなっていった。しかし、修羅場を通り抜け　出家後の　少し安らかになった精神状態で、手習いをする時、彼女が再び　匂宮を、懐しい人として、静かに回顧しているのである。浮舟は、

「袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの」

＝（袖を触れて香りを移した人の姿はもはや見えないけれど　匂ってくる春の明け方であるよ）（「手習」）

と　甘美な独詠歌を詠む。これは　その前に

「閨のつま近き紅梅の色も香も変らぬを、春や昔のとこと花よりこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみけるにや」

＝（奥深い閨の軒場に近い紅梅が　色も香も昔に変らず、咲き匂っているのを、「春や昔の」と　他の花より　とりわけこの花に　心惹かれるのは、いつまでも　飽きることの無かった方の匂いが、忘れ難いものとなっているからであろうか）

とあることにより、思いうかべている対象は　匂宮である　蓋然性が高い（後藤祥子）。紅梅・匂い、「伊勢物語」所載の在原業平の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」という題材は、それぞれ匂宮に結びつく。この時　浮舟にとって、全ては　思い出の彼方に　客観視得るものとなっているのである。即ち　浮舟は、その死を覚悟したぎりぎりの段階と、月日が経ち、全ての欲情も執着も　棄て切った　出家後の静かなる境地に至った時の　その双方の瞬間に置いて、匂宮を想起しているのである。浮舟の波乱の境涯の　始発と、その終着点に　定位された匂宮という人は、その人自身は、苦しむ女の心に寄り添うことが出来ない「あだ花」でしかなかったものの、精神的に　大きく変貌していった女の心の軌跡を、そして傷ついた心を癒す月日の力を、読む人に　実感させる、到達の境地を　計る存在であった、とも言えよう。結局　匂宮が担っている物語的な役割とは、大君・中君・浮舟といった、宇治十条の女性達の　それぞれの人生を　照らし出す媒体であったのだ　と、改めて　思いを致すのである。

１１．桐壷更衣　きりつぼのこうい

A．その生涯

＊　桐壷更衣は、桐壷帝の後宮に仕え　出自が、それほど高い家柄ではなかった、が　帝から、格別の　寵愛を被っている。(「桐壷」)
＊　更衣は、今は亡き父大納言の遺言によって、母（大納言の北方）が、苦労して　入内させたのである。(「桐壷」)
＊　更衣は　出自が、高い家柄でなく、しっかりした後見者もいない中での　帝の寵愛であった為に、後宮の　他の女性たちの嫉妬と憎悪に晒されて　病気がちであった。(「桐壷」)
＊　桐壷帝は、そのような更衣を　不憫に思って、ますます深い愛情を注いだ結果、玉のように美しい　第二皇子（後の源氏）を　生む。(「桐壷」)
＊　右大臣家出身の　弘徽殿女御は、第一皇子（後の朱雀帝）の母であったが、素晴らしい第二皇子が　東宮に立てられるのでは　と　疑心暗鬼に陥っている。(「桐壷」)
＊　更衣は、帝に召される時には、多くの女性たちの部屋の前を通るので、度々　意地悪な　また　悪質な妨害を受けるのである。(「桐壷」)
＊　第二皇子が　三歳の夏、更衣は　心労が重なって、とうとう重病に倒れ、実家で養生することとなる。帝に　別れの歌を贈り、宮廷を退出する。(「桐壷」)
＊　更衣は、帝の心配の中、幼い皇子を残して　死去する。(「桐壷」)
＊　愛する更衣を失って　桐壷帝は、悲嘆の余り、政治を怠り　国政を憂える人々を酷く　心配させる。(「桐壷」)
＊　桐壷帝は、側近の女房を　亡き更衣の実家に　慰問に行かせる。しかし、悲しみを癒すことは出来ない。(「桐壷」)

B．物語における位置・準拠

桐壷更衣は、源氏物語の主人公源氏の母であり、古代物語の常套として、主人公の両親から語り起こされる物語の　最初に登場する　ヒロインである。

桐壷更衣は、故按察使大納言の娘であった。父の故按察使大納言が　若しも存命であれば、物語の始発時には、大臣だったと想定される（高橋和夫）。斜陽の大納言家も、もともとは名門の家柄であったと思われるが、この一族の系統が　どういうものであったかは、物語に明らかでない。故按察使大納言の兄は、後に登場する明石入道の父で、大臣でもあった。また　六条御息所の父大臣や、入道の妻の祖父中務宮と　血縁関係にあったのでは　ともいわれる（坂本和子）。大納言家が、外戚として栄華を極めること

などあり得ない　とわかっていながら、それでもなお　桐壷更衣の入内に踏み切ったのは、故按察使大納言の遺言が、没落した名門一族の　再興の遺志だったからである。そのような家の遺志を担って、どこまでも可憐な　果敢なげない女性として描かれる桐壷更衣は、入内したのであった。

桐壷更衣の準拠としては、仁明帝の女御で、光孝帝の母である　藤原沢子（たくし）、村上帝の尚侍であった藤原登子（とうし）、花山帝の女御であった藤原恁子（きし）などが上げられる。桐壷という呼称と　急死という類似からは、三条帝の女御　藤原原子（げんし）（定子の妹）が指摘されるが、更に注目されるのは、漢文学との関わりであろう。「桐壷」の帖は、その冒頭から

「楊貴妃の例（ためし）もひき出でつべく」

＝（楊貴妃の例も　引き合いに出しかねない）

とあり、その構想や表現を「長恨歌」や「長恨歌伝」によるところが多い。玄宗皇帝と楊貴妃の悲劇に擬えることで、桐壷帝と桐壷更衣の悲恋は、創造されているが、桐壷更衣の人物造型は、楊貴妃のイメージには　重ならない。

新間一美氏は、桐壷更衣の人物造型が、「漢書」の外戚伝の「李夫人」の記事によっていることを明らかにした。李夫人もまた、しかるべき権門の後見はなく、みずからの美しい容色によってのみ、帝の寵愛を獲得していた女性である。その関わりを踏まえる時、桐壷帝との別れの場面において、桐壷更衣が　言い遺したことが、源氏の将来について　の依頼であった事が読み取れるという。さらには、李夫人の魂を　反魂の術によって、呼び戻そうとした、武帝の願いと、更衣の血縁で、源氏と、更衣によく似た　藤壷の登場が　対応し、その血縁と類似の方法こそが、物語の長編化に繋がってゆく　とする。

源氏の母の桐壷更衣の夭逝が、藤壷の登場を促すことになり、いわゆる「紫のゆかり」の物語が　始発してゆくことになるのである。桐壷更衣と桐壷帝の悲恋は、親から子へと「生き方の系譜」を　形成したのである（益田勝美）。

Ｃ．人物評価の歴史

桐壷更衣と桐壷帝の悲恋物語は、それだけで　美しく完結している。帝王の愛は、女の身分相応に与えられるべきである　という後宮の規範に違反し、周囲からの糾弾を受けてもなお、桐壷帝は、更衣への愛を貫いたのである。

父の按察使大納言は　既に亡く、後見もない不遇な身の上ながら　入内した桐壷更衣は、ただひたすら桐壷帝の愛情だけに縋り、他の妃たちからの、嫌がらせにも　ただ黙って耐え忍ぶ。そのけなげで、いじらしい姿が　また　帝の偏愛に拍車をかける。そのような　二人の稀有な関係性は、

「前の世にも御契りや深かりけん」

＝（前世からのご宿縁がふかかったのだろうか）
　などと、前世からの　宿命づけられた結び付き　として語られるのである。その結果、更衣は善として、弘徽殿女御は悪として　位置付けられることとなる。
　しかしながら、「桐壷」の帖は、愛情の問題だけを、悲劇的に語っていたわけではなかった。更衣の死にも繋がってゆく桐壷帝の寵愛と　弘徽殿女御による迫害、源氏誕生などは、政治世界と密接に関わっていたのである。
　前世からの宿命とはいうものの、更衣が入内を決行したのは、故按察使大納言の遺言があったからであった。自分が亡くなった後にも、必ず　娘の宮仕えの宿願を遂げよという遺言の真意は、不可解ではあるが、更衣に皇子の誕生を期待し、新しい源氏家としての　復興・再生に賭けた　ということなのであろう。桐壷更衣に担わせられた　家の遺志の主題は重い（日向一雅）。
　更に　桐壷帝には、決まった　外戚が見当たらないことも、「桐壷」の帖の政治を考える上で重要なことである。中宮も、皇太子もまだ　未定なのである。六条御息所の夫であった　前東宮や　藤壷の父である先帝を　どのように系譜づけるかによって、より詳細な　政治状況に対する読みが提示されてこよう（吉海直人・日向一雅・辻和良）語られざる政治的問題が　源氏の両親の悲劇に関わっていることは、間違いなく、語られているのは、桐壷帝の　桐壷更衣への愛という　私的な関係性でありながら、有力な後ろ盾のない女性を　好んで愛してしまう　桐壷帝の政治姿勢が　自ずと照らし出されてくるのである。桐壷更衣の　帝の寵愛独占も、先帝の皇女で　后腹の藤壷への思い入れも、外戚政治を嫌う　桐壷帝の天皇親政への　強いこだわりと意欲からのもので、桐壷帝の王権安定の為には　有効な策であった　とも考えられるのである。藤壷の登場をめぐっても、故桐壷更衣の面影を求めて　と表面的には語られてはいるが、そう単純なものではなかったかもしれない（三田村雅子）。女の物語とされる源氏物語に　始発から、政治性が内包されていることには　注目すべきである。
　愛情の問題が、そのまま政治社会に直結してしまう後宮社会において、桐壷更衣も弘徽殿女御も、家の遺志を背負って入内し、桐壷帝の寵愛を得る為に　戦っていたことに変りはない。桐壷更衣は、本当に　か弱く　可憐なだけの女性であったのか。
　桐壷更衣の　人物造型について、吉海直人氏は、「更衣は、自らの　最大の欠点である「か弱さ」を、むしろ最大の武器として　帝の寵愛を勝ち取っている」と指摘する。多くの読者の　同情を誘う　桐壷更衣の　弱々しげなイメージに　異議を唱え　後宮で、したたかに生きる桐壷更衣像を　新たに提起したのである。
　桐壷更衣論は、宮中から退出する時に詠んだ辞世の歌、及び　続けて発した
「いとかく思ひたまへましかば」
＝（本当に　このようなことになろうと、わかっておりましたならば）（桐壷）
　をめぐる理解が、最大のポイントとなるのであろう。吉海氏は、この箇所をめぐっても「更衣が、一芝居をうっている」と読むのである。一方　上野辰義賜は、「果敢なく

弱かった桐壷更衣が、臨終に際して　自己の人生を悔い、否定して　初めて　主体性をもった女性になった」とする。

桐壷更衣が、源氏の立太子・即位を願っていたのか　どうか、彼女の思いを　桐壷帝が　どのように受け止めていたのか。桐壷更衣の遺言？　の解釈は、源氏の臣籍降下問題にも　影響を及ぼす。源氏の運命と王権の主題を　描き出す問題である。長編物語の始発としての意味を踏まえ、その後の　源氏の　王権獲得のあり方も　展望する事が必要であろう。

つまり、桐壷更衣は、単なる　純愛物語のヒロインとだけ捉え得ない部分がある　ということである。そもそも、桐壷更衣を　語る語り手自体が　極めて主観的なのであるという指摘もある。作者紫式部は、桐壷更衣の　理想的な女性美を　客観的に描写することを避け、主観的・婉曲的に語り、類例のない　絶対的女性として、造型しているのだ　とする（神尾暢子）。

桐壷更衣の　声にならなかった思いは、母の北方によって、父の按察使大納言の遺言と共に　代弁される。桐壷帝もまた、桐壷更衣の　可憐さの背後に隠されていた　並々ならぬ野心・執念に　気づかざるを得ないのである。後宮を　したたかに生き抜こうとして　挫折し、夭逝した女性の　無念の思いを知った桐壷帝は、生前の桐壷更衣の儚げな像と重ね合わせつつ、源氏の処置に　頭を悩ますことになる。言葉にならなかった遺言は、いわれた言葉よりもむしろ重いものとして、桐壷帝を　呪縛していくことになるのである（三田村雅子）。

Ｄ．人物の特色

源氏の母の「更衣」という身分は、もともとは　天皇の衣替えを手伝う女官であったと考えられる。いわゆる「キサキ（妃）」より下で、女官よりも上　という境界に位置する　曖昧な存在である（増田繁夫）。故按察使大納言の一族は、本来名門ではあったが、父が既に故人であり、しかるべき後見のないことから、桐壷更衣は、そのような身分になったのだ　と考えられる。

前述したような　桐壷更衣の人生は、別段珍しいものではない。親が亡くなって零落する女性の物語は、沢山ある。源氏物語においても、空蝉や　紫上の母が　そうである。源氏と　一夜限りの逢瀬を持った空蝉は、当初　桐壷帝に入内する予定であったという。然し　父の死で、計画は頓挫し、年老いた伊予介の後妻におさまって　受領階級に　身を落とすことになってしまった。一方　紫上の母である故姫君は、入内が望まれていたものの、父の按察使大納言が死去したために、その夢を果たすことが出来ず、兵部卿宮（藤壷の兄）が　通うようになった。そして　宮の北方の激しい　嫉妬を受けて　病むようになり　幼い　紫上を残して　死去してしまったのである。

また　夕顔は、三位中将の娘であった。入内予定であったかは語られないものの、両

親に早く死別し、頭中将が通うようになって　玉鬘をもうけるが、頭中将の正妻である右大臣の四君に　脅かされて　失踪したのであった。五条の宿に　身を隠していた夕顔は、源氏が通うようになり、やがて、廃院で　物怪に襲われて　急死する。夕顔の　内気な性格や　か弱く　儚げなイメージは、桐壷更衣にも重なるものがある。

桐壷更衣と同じように、家の遺志を担いながら　挫折した彼女たちからすると、桐壷更衣の辿った軌跡は、ある程度　望ましい人生であったと言えよう。桐壷更衣自身は病に倒れたとはいえ、長編物語を展望すれば、桐壷更衣の背負った家の遺志は　源氏によって実現されたからである。

桐壷帝が、桐壷更衣だけを偏愛して、周囲の非難を浴びても、なお愛しぬいたのも、彼女の不遇な立場故のことであったのかもしれない。桐壷帝は、美しく　可憐な　儚げな女性を　愛し　庇護してゆくことの　ロマンチシズムに　目覚めたのである。例えば弘徽殿女御のように、権門の後見に頼ることのない桐壷更衣を　庇い、愛してゆくうちに、桐壷帝自身が、縛られている政治的・世俗的な論理から　解放されていく感動を、覚えたのではないか（藤原克己）。ところが、桐壷帝が、彼女を　愛すれば愛するほど、桐壷更衣は、周囲からの虐めを受けて　苦しみ続け　とうとう　死へと　追い詰められて行くことになる。

それでは、桐壷更衣自身は、どのような思いで、こうした逆境の中でも、宮仕えを辞さなかったのか。桐壷帝に対する愛情は無論としても、そこに少なからずの家の遺志が働いていた事は間違いない。臨終に詠まれた辞世の歌に、桐壷更衣の　源氏の東宮即位の願いが篭められていた（藤井貞和）とする見方は、もはや定説となっている。桐壷帝の本心としても、愛する桐壷更衣の遺児を　皇太子にしたかったに違いないのである。ところが　その可能性は　初めから　低かったのである。源氏が皇太子になれば、母の桐壷更衣と同様に、迫害され、困難が待ち受けている事は、目に見えていたのである。源氏物語は、「皇位継承者」と　なることの出来なかった皇子の物語でもあるのだ。

母の死後　桐壷の御殿は、源氏が　自分の曹司として使用していた（桐壷）。桐壷とは、淑景舎（しげいしゃ）の通称で、中庭に桐の木が植えてあったことから　桐壷と呼ばれる。やがて、源氏の一人娘であり　桐壷更衣の孫に当たる　明石の姫君も、今上帝に入内して、この桐壷に　住むこととなる。この明石姫君の立后と　所生の皇子の東宮即位が、源氏の　王権獲得の証明であるとともに、桐壷更衣の　家の遺志の達成ということにもなるのである。

その明石姫君は、桐壷更衣とは違い、栄華を極めた源氏のただ一人の娘として　華々しく入内する。欠点といえば、田舎の明石で誕生したということ、実母の明石君の身分が低いこととであったが、それも　紫上の養女となることで、カバーされた。血の繋がった実の母娘の絆よりも、源氏の思惑で、秩序づけられ　組み合わされた養女関係なのである。母娘の仲を裂く　冷酷な処置も　后がねの姫君の将来の為こそであった。

そもそも　須磨・明石の地に、源氏が退去したのも、明石姫君をもうけるためであっ

た　といえる。実は、桐壷更衣の父按察使大納言と明石入道の父の大臣とは　兄弟であり、　桐壷更衣と　明石入道は　従姉弟の関係であった。「桐壷」の帖の時点では、桐壷更衣一族の係累は分明ではないが、「賢木」の帖では、桐壷更衣の兄の律師の存在が明らかとなり（更衣入内の折には　既に　出家していたのであろう）。更に、桐壷更衣の家と　明石入道の家とが、明石姫君において　合流するのである。もっとも　源氏には　そうした　同族意識は　見られない。

お腹を痛めた娘を奪われ　身の程意識に苦悩し続ける明石君の忍耐を犠牲にして、桐壷更衣の　家の遺志は　ようやく実を結ぶのである。いわば、故按察使大納言家と明石入道の家と、没落した元同族同士が、結託して　再興を目指したということになるのであろう。（三村友希）しかし、女御・中宮・国母となる明石姫君には、「明石」と冠する呼称は見られず、「桐壷御方」・「淑景舎（しげいしゃ）」と呼称される意味は、決して軽くはない　と思われるのである。

１２．藤壷　ふじつぼ

Ａ．その生涯

＊　藤壷は、桐壷帝に懇願されて入内し、女御として寵愛を受ける。帝は　藤壷が、今は亡き桐壷更衣と　生き写しのように美しい　と聞き入内させたのである（「桐壷」）。

＊　幼い源氏は、義理の母に当たる藤壷を　亡き母の代わりに慕う。帝の寵愛は、源氏と藤壷に深くそそがれ　「光る君・輝く日の宮」と並び称された（「桐壷」）。

＊　藤壷は、義理の息子に当たる源氏が　元服して　葵上と結婚した後も、自分を　女性として　恋慕するのに　悩む（「桐壷」）。

＊　源氏は、藤壷とそっくりに美しく、彼女の姪にあたる幼い若紫（後の紫上）を垣間見て、愛の叶わぬ藤壷の身代わりに、心の慰めにしたいもの　と思う（「若紫」）。

＊　藤壷は　ある夜　突然侵入してきた源氏と　心ならずも　逢瀬を持ってしまう。その後の　度重なる密会に、ただ惑乱を重ねるばかりである（「若紫」）。

＊　藤壷は　源氏の子を懐妊する。参内して　何も知らない桐壷帝に、嘘の　受胎告知をする（「若紫」）。

＊　藤壷は、桐壷帝の　朱雀院行幸の試楽の日、源氏の美しい舞姿を見て、感動と苦悩

に　心乱れる（「紅葉賀」）。
＊藤壷は、源氏に酷似している皇子（後の冷泉帝）を出産する。藤壺は、罪の意識に苛まれるばかりである（「紅葉賀」）。
＊　藤壷は、生まれた皇子と共に　参内するが、桐壷帝が、我が息子と思って　寵愛するのを見て、いたたまれない思いのなかで、ただ慄くばかりである（「紅葉賀」）。
＊　桐壷帝は、自らが譲位した後に、藤壺の生んだ皇子を皇太子とする為に、弘徽殿女御を越えて　藤壷を　中宮とする（「紅葉賀」）。
＊　藤壷は、二月の花宴で、素晴らしい詩才を示す源氏を　見るにつけ、自省する（「花宴」）。
＊　桐壷帝が譲位し、朱雀帝が即位したことにより、藤壷は、離れて住む　わが子皇太子を思いやりながら、桐壷院と共に、穏やかな日々を過ごす（「葵」）。
＊　十月、藤壷は、重態に陥った桐壷院を見舞う。わが子の皇太子と　久しぶりに対面する。が、何となく　頼りなく思う（「賢木」）。
＊　十一月、藤壷は、桐壷院崩御によって、悲嘆に沈み　四十九日の法要の後、三条院に移る（「賢木」）。
＊　藤壷は、皇太子の後見として、源氏を頼らざるを得ない。が、彼の度重なる求愛に苦慮する（「賢木」）。
＊　藤壷は、ある夜　思い余った源氏が、突然　寝室に侵入してきたので動転して倒れる。源氏は　驚きの余り　塗籠に隠れ、一夜を明かす（「賢木」）。
＊　藤壷は、求愛を強く拒否する自分を　深く恨んだ源氏が　出家してしまうのでは、と心配し　皇太子の為には、自分が先に　出家せざるを得ないのだ　と決意する（「賢木」）。
＊　出家を決意した藤壷は、わが子皇太子との別れを惜しみ　東宮御所に参内した源氏に　皇太子の将来について　心にかかる事を語る（賢木）。
＊　藤壷は、今は亡き桐壷院の一周忌に、源氏と歌を　詠み交わし　共に　昔を回想する（「賢木」）。
＊　藤壷は、法華八講の最終日、突然　出家してしまう。人々は　動転したが、中でも茫然自失の源氏に「子供（皇太子・後の冷泉帝）故に　親心の闇に迷う」という歌を詠んで贈る（「賢木」）。
＊　藤壷は　須磨に退去する源氏に、一人で　皇太子を守らなければならない不安を訴える。その後　須磨の源氏と　手紙を交わす（「須磨」）。
＊　源氏が　須磨から帰還後、藤壷の皇子である皇太子が、冷泉帝として即位したことにより、藤壷・源氏一門に　春がめぐって来る。藤壷は、太上天皇に准じて　給与を受けることとなる（「澪標」）。
＊　藤壷は、朱雀院から　入内の要請のあった　前斎宮（六条御息所の娘）を、源氏と相談して、冷泉帝に入内させようと　画策する（「澪標」）。

＊　藤壷は、源氏の意向として、前斎宮を　冷泉帝の女御（斎宮女御、後の秋好中宮）として、入内させる（「絵合」）。
＊　藤壷の御前で、斎宮女御方と弘徽殿女御方とで、絵合が行われる。藤壷は　源氏から、「須磨の絵日記」を貰い　懐旧の情にひたる（「絵合」）。
＊　藤壷は、三十七歳の春の初め頃　病を得、三月　容態が急変、源氏の見舞いを受けた後、死去する。源氏は　深い悲しみに沈む（「薄雲」）。
＊　藤壷は、源氏が、彼女のことを　紫上に語った夜、源氏の夢枕に現れ、二人の密事の漏れてしまったことを、怨み訴える（「朝顔」）。
＊　源氏は　紫上に　女性の名筆を語る中で、藤壷の筆跡が　優雅で　深みがあるものの、弱々しく　余情に欠けていた　と語る。（「梅枝」）。　　（吉野・西沢）

B．物語における位置・準拠

幼くして死別した母桐壷更衣の顔を　源氏は、よく覚えていなかった。おぼろ気な記憶の中に、一人の女性の面影が　ぴたりと重なる。その女性こそ、源氏永遠の憧憬の人、藤壷である。決して愛してはならない　源氏が　禁断の恋を捧げる藤壺は、先代の后腹の四宮で、父　桐壷帝の寵愛する妃であり、わずか三歳で、実母を亡くした源氏の前に現れたのである。故桐壷更衣に　生き写しの容貌であるという継母である。

藤壷を　苦悩の人生に導いたのは、源氏誕生以前の桐壷帝と桐壷更衣の悲恋であった。周囲の反発と　批判を招き、帝として守らなければならない後宮の秩序を、敢えて　乱してまでも　愛しぬいた桐壷更衣を、その愛の深さ故に　死なせてしまった桐壷帝の、絶望の中で　見出した希望の光が　藤壷であった。先帝の后腹の内親王である藤壷の入内は、天皇親政の実現をもくろむ桐壷帝の　政治的な戦略であった　とも見ることが出来る。一方で、桐壷更衣の二の舞になる事を懸念していた母后に　逆らって　入内に賛成した兄の兵部卿宮（紫上の父）の　密かな思惑が　あったのかも知れない（吉海直人）。

源氏の女性遍歴は、藤壷への　決して満たされることのない　禁じられた恋に始まる。この上ない帝の寵愛を受けながら、源氏と密通し、不義の子（冷泉帝）を懐妊・出産する藤壷の運命それ自体が、源氏の栄華を形作ってゆくのである。藤壷は、紫上ほど長期にわたって登場し続ける訳でもなく　その心理が　つぶさに語られるのでもない。しかしながら、彼女は、源氏物語の核であり、源氏の物語を長編化させる　原動力であるのだ。桐壷更衣―藤壷―紫上　と連鎖してゆく「**紫のゆかり**」は、源氏物語の根幹をなす系譜であるが、とりわけ藤壷は、そのキーパーソンとなるのである。

藤壷と源氏の　密通事件からは、「伊勢物語」の昔男と、二条后や斎宮との　禁忌の恋が　想起される。しかし「伊勢物語」を踏まえつつも、源氏物語は　紫上という女主人公を　もう一人登場させ、いわゆる「紫のゆかり」の物語を展開し、冷泉帝の誕生に

よって、源氏に栄華が齎されるという　新たな世界を　生み出したのである。三角関係という意味では、「万葉集」における　額田王をめぐる天智帝と天武帝の　三角関係も、そこに重ねられる。

藤壷の仏教帰依・女院宣下などと、醍醐帝の中宮藤原穏子とが対比させられる。穏子は、僧籍に入ることはなかったが、多くの仏事を主催し、菅原道真の怨霊を恐れる時代の雰囲気の中で、醍醐帝の菩提を弔った。道真を左遷した醍醐帝の罪障を思い、祈ったのである。「明石」の帖に、現れた桐壷帝の霊は、贖罪の為に　極楽浄土ならぬところにいる　桐壷帝の罪が、いかなるものであったかは、明らかではないものの、「賢木」の帖で、法華播八講を営んで、桐壷帝の為に祈った藤壷と、穏子のイメージを　参照することが、新たな読みを　喚起する事となりそうである（後藤祥子）。

さらには、藤壷が、太上天皇に准ずる待遇を受けて　女院となったことの背景には、一条帝の母　藤原詮子が、太上天皇に准ぜられ　東三条院の称号を得たという歴史的事実がある。紫式部の仕えた中宮彰子（藤原道長の娘）も、「うつほ物語」の女主人公「あて宮」も、「藤壷」と呼ばれ、中宮・国母となった点で、藤壷に通じている。

C．人物評価の歴史

藤壷を論じる場合　まず踏まえておかなくてはならないのが、清水好子氏による、藤壷は、決して「女」・「女君」とは、呼称されなかったという指摘である。いうまでもなく、藤壷と源氏との関係は、禁忌の恋であったわけであるが、清水氏は「その戀があくまで秘密であるならば、文章もまた息をひそめ、ひそひそと少ししか語らない。すると、読者は、藤壷の存在を、対象としてでなく、源氏の心情を通して、ある力ある影響力として　感じとる。それは　言葉にされた以上の重さを持って　言葉にされたもの全てを、背後から覆う力として　読者に伝わってくる」と説く。この理解は　なんといっても重い。

物語の構想を支え、突き動かす重要人物であるはずの藤壷は、しかしながら、とりわけ立后以前の部分において、不明確な語られ方をしており、その人物像は　極めておぼろげなのである。語られないところにこそ　意味があるのであるが（原岡文子）、読者は、源氏の心理を通して　藤壷を感じとるしかない。ところが、詳細な描写の少なかった藤壺は、罪の子（冷泉帝）の出産を契機に、冷泉帝の父と母として、源氏と共に政治の表舞台に、引きずりこまれてゆく、その結果、次第に、政治家としての顔を見せ始め、「変貌」を遂げるのである。その変貌は、物語の要請であったのか（清水好子）。

若宮（冷泉帝）の母として生き抜こうとする決意には、藤壷の　したたかなまでの強さが、立ち表れている。懐妊中の苦悩と孤独こそが、藤壷を鍛錬したのである（斉藤暁子）。登場人物の「変貌」の問題は、藤壷に限ったことではないが、生前　一度たりとも「女」と呼ばれなかった藤壷が、「朝顔」の帖で、源氏の夢枕に立ち　初めて「女」

としての情念を、述べ（伊藤博）、紫上との睦言に　名を上げられた事を恨み　往生叶わず　罪を背負い続けていることを吐露することは、源氏の栄華獲得の物語の中に　取り込まれて　政治的人物へと、「変貌」しつつも、そこに包摂されることの出来ない、藤壷物語の複雑さを窺わせるのである。彼女は、自分の身代わりでもある紫上に対して、明らかに嫉妬しているのである。「作者の筆が　藤壷の側に立って、その心情を　深く追求するや、たちまち　藤壷は、誰とも重ならぬ、誰も受け入れぬ、強烈な一個の人物となってしまう」（清水好子）。

臨終の迫った藤壷は、

「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心の中に飽かず思ふこともひとにまさりける身」

＝（前世からの優れた宿縁に恵まれ、中宮から国母にまで、なって、並ぶもののないほどの栄華を極めたけれど、心の中では、また　源氏との関係に悩み、嘆きも人にまさる身であった）、

と　生涯を　振り返る。その思惟が、晩年に差し掛かった源氏の

「心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば」

＝（心に飽き足らない思いの　付きまとった身の上として　過ごしてきたのですから）、

と、符合する点に　作者の意図を、汲み取るとすれば、藤壷と源氏とは、冷泉帝を中心とした、運命共同体であった　と捉えられる（森一郎）。そう考えるとき、その運命共同体の主導者は、藤壷である。彼女の変貌は、やはり　冷泉帝への母性愛のなせるものではなく、それ以上に、源氏に対する愛による　内発的な力に導かれてこその「変貌」であったとも理解されよう。藤壺が、冷泉帝の為に生きることを　繰り返し主張し、積極的に政治的役割を担う事が、そのまま　源氏に対する愛の告白ともなって行くのである。

源氏と藤壷との密通の罪は、近親婚のタブーに触れるものではなく、源氏の　王権侵犯に関わる禁忌が問題なのだ　といわれる（藤井貞和）。藤壷の思惟の中に、王権侵犯をめぐる罪意識は希薄であり、そもそも「罪」の語の用例も少ないことも問われている（野村精一）。命をかけて冷泉帝を守り抜く覚悟の背後には、桐壷帝に対する二人の負い目があり　桐壷帝の信頼を　裏切ってしまった呵責から、なんとしても、冷泉帝を帝位に就かせ、せめてもの贖罪となさねばならなかったのだ　と読むとき、藤壺の変貌は、また異なった意味を持ってくる。藤壷を　政治的言動に　駆り立てていたものは、桐壷帝の悲願であった、冷泉帝の即位と　冷泉聖代の実現の為なのであった（今井久代）。そのように考えれば、源氏の　父性愛、藤壷の母性愛　あるいは二人ならではの過酷な愛の位相も、それ以前に、右大臣一派に対抗する、桐壷帝の意志こそに　導かれていたことにもなるのである。

いうまでもなく、藤壷は、源氏物語の根幹をなす「禁断の恋」の　女主人公である。即ち　義理の息子にあたる源氏と　密通し、不義の子を懐妊、出産し、源氏の罪までもその身に　引き受けるかのように落飾し、一人　死んで行く。ならば、彼女は　悲劇の

ヒロインなのか　と問えば、そうはっきりとは言い切れないであろう。その歯切れの悪さは、罪の子冷泉帝を　桐壷帝の息子と偽ったまま　帝位に就かせたことの　後ろめたさと　したたかさにある。

藤壷は、源氏を愛していたのか、いや　桐壷帝を愛していたのか。本文を読む限りにおいて　藤壷の心情は　実に掴みづらいのである。藤壺は　源氏を愛していなかったのだ　と見ることも出来る（阿部秋生）。あるいは、冷泉帝の存在を介しての特異な愛の有り方を　見出すこともまた可能である（斉藤暁子）。そこに　桐壷帝に対する呵責を、いかに読み解いてゆくべきか。

近年の　藤壷論において、懐妊・出産・病気という　身体の苦しみの問題から　アプローチした石坂昌子氏の功績は大きい。苦難の人生の中で　抑圧された藤壷の内面が、彼女の身体的な問題として立ち表れ、付きまとって行くという。更に　石坂氏は、藤壷の発病と死は　明らかな仏罰であり、冷泉帝の安泰と　源氏の須磨からの帰還と復活を見届けたことの　引き換えである　と位置づけ、「見る」ことによって、「宿世」に　抗おうとした女性　として彼女を捉えているのだ。そして、藤壷は、源氏を愛していたのだ　と結論付けている。

D．人物の特色

源氏物語には、そっくりな顔立ちをした人達はいる。例えば、源氏と冷泉帝が　よく似ているのは、秘密の父子であるからだ。葵上の生んだ夕霧が、源氏と　冷泉帝に　瓜二つであるのも、夕霧もまた　源氏の息子であるからである。血縁関係が濃ければ、いくら　似ていても不思議は無い。しかし、似ていることが、わざわざ指摘されるには、何か意味があるに違いない。明石姫君が　源氏に似ているとか、秋好中宮が　六条御息所に似ているとかは　いわれない。親子・兄弟などの　血の繋がりがあることが、正式に認められて居る場合には、似ていることを　語らないもので　ある　という（池田節子）。

藤壷は、桐壷更衣に　生き写しであったが為に　桐壷帝の要請を抜けて、入内し、源氏もまた、彼女を思慕するようになる。その藤壷によく似ているが為に、若紫（紫上）は、源氏に見出されたのである。女三宮は、藤壷の姪であることが　源氏の感心をよび、降嫁する事となった。宇治十帖で、薫の恋愛対象となる大君・中君・浮舟は、姉妹であるから　容姿も似通っていた。藤壷と紫上も　叔母・姪の血縁関係にある。桐壷更衣と藤壷は、血の繋がりはなく、他人の空似に過ぎない。それだけに、その容貌の類似は　奇蹟的である。桐壷更衣は、その出自の低さにもかかわらず、破格の帝の寵愛をうけたことから、恨みを買い、夭折することとなった。先帝の后腹の内親王という　最高の生まれである藤壷には、その心配は無いのである。

ところで、藤壷自身、その入内の経緯からすると桐壷帝にとっての自分が、故桐壷更

衣の身代わりだということを、自覚していたことになる。物語の本文には、
「思しまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり」
＝（帝は、故人への御思いがまぎれるというわけではないけれども、自然と藤壷にお心が移って、この上なく　お気持ちが慰められるようなのも、人の世のならいというものなのであろう）。
　とある。その愛の激しさ故にも、桐壷更衣を　死なせてしまった桐壷帝の　尽きぬ悲しみが、藤壷という新しいヒロインの登場を促したのだったが、桐壷帝のその哀惜は、案外に　すんなりと　いくらか　そっくりな容貌の為とはいえ、簡単に癒されてしまうのである。
　身代わりを生きる　とは　どういうことなのか。藤壷にしても、紫上にしても、あるいは浮舟にしても、容貌が似ていることを　第一条件に、故人　または　近づくことの出来ない人の身代わりとして　愛そうとする　男の思惑から、物語世界に登場させられる。いかに　寵愛を受け　栄華を極めても、その背後に　大きな空虚と矛盾を　隠し持った存在として、彼女たちは　描かれているのだ（三田村雅子）。
　自分が　藤壷の身代わりなのだ　ということを、紫上自身が、自覚していたかどうかは、定かではない。が、自分の身代わりとして　姪の紫上が、源氏の妻となり、愛されている　ということを、藤壷は、無論知っていたはずである。生前の藤壷は、自分の血を引く姪が、恐らくは　その血縁の故に、源氏に愛されていることを、どのように思っていたのであろうか。その姫君（紫上）は、自分に　似ているのであろうか　と　ふと想像しなかったであろうか。
　藤壷の死後も、彼女は、源氏の憧れであり続ける。紫上を悲しませてまでも、源氏が朱雀院の溺愛する内親王女三宮と結婚したのも、女三宮が、藤壷の姪にあたる姫君であったからに他ならない。紫上は、藤壷の同母兄・兵部卿宮の娘であるが、この女三宮は、藤壷の異母妹の娘であった。
　藤壷には、実は　異母妹がいたのであった。兵部卿宮は、しばしば登場して活躍するが、彼女の存在は、「若菜」の帖の冒頭まで、明らかにされなかった。しかも、その時点で既に　彼女は死んでいるのである。この人物の存在によって、藤壷―紫上―女三宮といういわゆる「紫のゆかり」の連鎖が　繋がるのであるから、極めて　機能的な役割を担わされている　といえるのである。
　女三宮の母もまた　藤壷と呼ばれる。姉宮の藤壷が、后腹であったのに対して　こちらのもう一人の藤壷は、更衣腹で、不遇な人生を送ったようである。朱雀帝も彼女を気づかってはいたものの、朧月夜尚侍の威勢に圧され　男皇子をもうけることもなく、中宮の座を得ることもなかった。
「世の中を恨みたるやうにて」
＝（不遇なわが身を恨みながら）、

恐らくは　藤壷よりも早く、幼い女三宮を残して　早逝した。その悲劇的な死故に、朱雀院は、女三宮を　とりわけ鍾愛するのだ　と理由付けられるのである。

もう一人の藤壷は、朱雀帝が　まだ皇太子であった頃に入内したらしいから「花宴」の帖までの間に入内し、「澪標」帖の始め　朱雀院の譲位の後、間もなくの死であったか　と推定される。「世の中を恨みたるやうにて」の死とは、尋常ではないが、源氏が、「容貌も、（藤壷の）さしつぎにはいとよしと言はれたまひし人」
＝（ご器量も　姉宮に次いで　とても美しくていらっしゃるとの　ご評判だったお方）。と言っているから、藤壷には劣っているとしても　やはり美しいと噂されるほどの女御だったのであろう。女三宮には、藤壷に似たところなどなく、源氏は、落胆するほかなかったが、この藤壷はどうであったか、物語は　何も語っていない。

注目されるのは、女三宮誕生の時期である。金田元彦氏は、「女三宮を十三・四歳とすると、藤壷女御が、女三宮を身篭った時期は　丁度　朧月夜の内侍が、「わらは病」のため、里邸に退出して　朱雀帝の後宮に居なかった、足掛け二年の間と　符合する」と　指摘している。朱雀帝の　承香殿女御が、東宮を懐妊し、出産したタイミングとも微妙に重なり、「若菜上」の帖の冒頭の時点で、「十三・四歳ばかり」になる女三宮が、十三歳になる東宮よりも　わずかに早く生まれたのであろう。藤壺の方が、先に　懐妊の兆しを見たものの、期待に反して　生まれたのは、皇女であったことになる。

朧月夜が　後宮を留守にしなければ、朱雀帝の寵愛は、朧月夜のみに向けられて、藤壺に　懐妊のチャンスはなく、女三宮の誕生はなかったかもしれない。姉宮（藤壷中宮）に比べて、日陰の身だった　藤壷が、束の間と決めていた　数年間は　つまり　源氏と朧月夜との密会が露見して、朧月夜が　謹慎していた時期に当たるのであろう。

つまり、姉妹をめぐる光と影は、見事に対照をなしていたのである。もう一人の藤壷の人生は、むしろ　源氏の母の桐壷更衣や　紫上の母である故姫君と重なるのであるが、語られなかった藤壷の物語を復元し、補完すると、「紫のゆかり」の物語は、もう少し複雑に浮かび上がってくるのである。源氏が　須磨・明石に流離ったのは、表層的には朧月夜との密会が露見した為であったが、深層的には、藤壷との罪を償うためであった。そう考えれば、姉の藤壷の波乱の人生と、妹藤壷の不遇の人生が、奇妙に交錯しているのである。源氏のスキャンダルと失脚を案じ、ひたすら源氏の無事を祈り、その帰還を願っていた藤壷の試練のころ、千載一遇のチャンスを得た　もう一人の藤壷は、男皇子（みこ）ではなかったものの、女三宮を出産したのである。そして　その女三宮は、やがて、源氏に降嫁し、柏木との密通や　罪の子の懐妊・出産という、藤壷物語の再現を齎し、源氏に　その罪の報復を　突きつけるのである。

それにしても、もう一人の藤壷という人は、過去から不意に　よみがえるようにして、物語に、その名と失意の過去が　語られた。紫上以外に、藤壷の血を引く　いわゆる「紫のゆかり」が居たとは、驚愕の事実といってもよいであろう。朱雀帝の女御となっていたこの藤壷と、源氏が密通する　という展開もあり得なかったわけではない。そうなる

と、源氏の　最愛の伴侶となる　紫上の地位も　揺さぶられて来る。源氏と朧月夜との密事もなかったかもしれないし、姉宮の藤壷の人生もまた　異なっていた　とも考えられるのである。　　（三村友希）。

１３．紫上　むらさきのうえ

Ａ．その生涯

第一部

＊　十八歳になった源氏は、わらわ病を治す為に　北山の僧都の僧坊を訪れ、垣根越しに　十歳くらいの　可愛らしい少女を垣間見して、明け暮れ側において、理想の女性に育てたいと　思うようになる（「若紫」）。

＊　源氏は、少女が　藤壷女御の兄の兵部卿宮の娘で、藤壷の姪に当たることを　僧都から聞き、ぜひ　後見人として、彼女を引き取って育てたいと申し出るが、祖母の尼君と僧都は　少女の幼さを理由に　辞退する（「若紫」）。

＊　幼い若紫（後の紫上）は、秋になり北山から尼君と共に、京へ戻る。源氏は　病気の尼君を見舞い、翌日　尼君に　若紫への恋心を手紙で伝える。その後、母代わりの尼君は　九月二十日頃に亡くなる。源氏　弔問（「若紫」）。

＊　若紫の父　兵部卿宮が、若紫を　自邸に引き取ろうとしている　ということを知った源氏は、略奪するかのように　若紫を　自邸である二条院に　引き取る。幼い若紫は、次第に　源氏に懐き　時には　祖母尼君を思い出し泣くこともあったが、父宮を思うことはなかった（「若紫」）。

＊　若紫が　可愛らしく　優れた性格であったから、源氏は、心を癒し、このような若紫をおいて　先に　死出の旅路に赴くことは出来ない　と思う（「紅葉賀」）。

＊　源氏は、紫宸殿の花宴の後　二条院の若紫の許を訪れ　理想に叶う女性として成長していることを、嬉しく思う。（「花宴」）。

＊　若紫は、源氏の正妻葵上の死後、源氏と新枕を交わし　結婚生活に入る。源氏と紫上（若紫）、二人の愛は、一層深く確かなものとなって行くのである（「葵」）。

＊　紫上は、源氏との　幸せな結婚生活を、世間の人々から羨ましがられる。父の兵部卿宮とは　自由に文通もするようになる。しかし　継母の北方は、彼女を妬んで、心中穏やかでないのである（「賢木」）。
＊　源氏は　愛する紫上を　気がかりに思いながらも、須磨へ退去する事を　決意する。出発を前に　互いに別れを嘆く（「須磨」）。
＊　紫上は、源氏が　須磨への出発の準備として、荘園など所領の一切を　一任される。須磨からの源氏の手紙を読み　悲しみに　起き上がれない紫上である（「須磨」）。
＊　紫上は、激しい風雨が続き　生きた心地もしないので、須磨へ使者を遣わす。その後、明石に移住した源氏は、紫上に　心の篭もった手紙を送る（「明石」）。
＊　紫上は、源氏から　明石君との関係を仄めかされ、辛く遣る瀬無く思うが、お互いに　日記絵を交換し　心を通い合わせる（「明石」）。
＊　紫上は、源氏から　明石君が、姫君を出産したことを　告白される。彼女を恨むけれども　源氏の執心も　無理からぬこと　と思う（「澪標」）。
＊　紫上は、二十歳の前斎宮（六条御息所の娘、後の　秋好中宮）を、冷泉帝に入内させたい、と源氏から相談され、その準備を進める（「澪標」）。
＊　紫上は、「絵合」の準備の為、源氏と共に、鑑賞に堪ええるような　素晴らしい絵を選ぶ。源氏から須磨や明石での　流浪中に描いた日記の絵を見せられ、その当時を悲しく　思い出す（「絵合」）。
＊　源氏から、嵯峨の大堰（おおい）の邸に居る　幼い姫君（明石君の娘・後の明石中宮）の後見を託された紫上は、喜んで引き受ける（「松風」）。
＊　二条院に迎え入れられた姫君は、次第に　紫上に馴れ　親しんでゆく。紫上は、明石君の居る大堰に通う源氏に、心穏やかではいられない、が、側に居る姫君の　あまりの可愛らしさに、明石君への不快な気持ちも　和らぐのであった（「薄雲」）。
＊　雪の降り積もった夜　源氏は　紫上に　女性評を語る。紫上は　嫉妬癖が難点であるが、洗練された教養が　深く身につき　優しく　おっとりしているところなど、藤壷中宮に　そっくりである　と評する（「朝顔」）。
＊　六条院が完成する。紫上は　源氏と共に　東南の町＝東の御殿に　移り住む。その町の風情は、春の花の木を植え、秋の草花も少し添えて、春の風情中心に造られている（「乙女」）。
＊　正月　新春を迎えて六条院は　極楽さながらの様子である。紫上と源氏は、共に、末永い夫婦の絆を約束する歌を詠み交わす（「初音」）。
＊　五月の長雨の頃、紫上は、明石姫君に、見聞きさせる物語への注文に託けて、源氏と一緒に物語を見、その良し悪しを論じる（「蛍」）。
＊　野分が　例年になく激しい日、夕霧は　六条院に　見舞いに訪れ、南の御殿で、紫上を、初めて　垣間見てしまう。彼女は、春の曙の霞の間から、咲き乱れる樺桜のような風情である　と感慨に浸る（「野分」）。

＊　紫上は、明石姫君が、東宮への入内の際に、母明石君を　姫君の後見にすることとする（「藤裏葉」）。
＊　紫上は、明石姫君の入内の儀式に付き添い　三日を経て　退出し、母の明石君と入れ替わる。初めての対面にも拘わらず、お互い　うちとけて　親しく　交流するようになる（「藤裏葉」）。

第二部

＊　紫上は、源氏が　朱雀院の皇女女三宮の婿となる噂を耳にするものの、前齋院（朝顔の姫君）のことが、杞憂に終わった過去から、気に留めずに居たが、源氏から　それが　現実になる事を告げられ、正妻の座を奪われる　そら恐ろしさと　悔しさ、そして深い　悲しみの本心を隠し　さりげなく振舞う（「若菜上」）
＊　紫上は、六条院に　女三宮が迎え入れられたことから　内心　平静ではいられない。源氏が　三日の間、毎晩欠かさず　女三宮の許に通うにつけても、辛く　情けなく思う。源氏と　詠み交わす歌に　精一杯の抗議の気持ちを詠み込むのであった（「若菜上」）。
＊　源氏は　紫上の夢を見る。その夜更けに、心配になった源氏が　紫上の許に　急いで帰る。結婚後間も無い　幼い女三宮に比べて、優しく　奥床しい紫上の心遣いに　深く感動する源氏であった（「若菜上」）。
＊　三月十日過ぎに、明石女御が、皇子（後の皇太子）を出産する。子供好きの紫上は、母親のように皇子を抱き　世話をする。明石女御の実母明石君に　抱いていた　嫉妬心も　皇子誕生で薄らぎ、大切な人　と思うようになる（「若菜上」）。
＊　冷泉帝から　今上への譲位があり、明石女御腹の皇子が、皇太子になる。紫上は、源氏との夫婦仲は、円満にいっていたが、時々は、出家したい　と　真剣に思うようになる。そのことで、源氏の許しを得ようと　申し出るが、源氏は耳を貸さない（「若菜下」）。
＊　紫上は　出家する事を　許されず、源氏の愛情も　何時かは衰えるのでは、と寂しく、明石女御の生んだ女一宮の世話に没頭して　夜な夜な　心を慰めている（「若菜下」）。
＊　年が明けて　一月二十日頃、二月の　朱雀院五十賀に先立ち、女楽が催される。紫上は、和琴を演奏したが、その様子は　艶やかで美しく、花に譬えるならば　桜であろう　と　源氏に評される（「若菜下」）。
＊　女楽終了後、紫上は、源氏と　女楽演奏に付いて語り合い、特に　紫上の和琴の演奏が　賞賛される。源氏は、全ての点で　優れた、理想的な女性である紫上に対して、三十七歳という厄年の故に、厄除けの祈祷を　特に　念を入れて行うよう　勧める。苦悩を深める紫上は、再三　出家の事を申し出るが、源氏には、固く拒まれる（「若菜下」）。
＊　紫上は、源氏から　昔の女性関係について、論評を聞く。その夜の明けるころ、突然に　胸の痛みを感じて　倒れる。知らせを聞いた源氏が　女三宮の許から　急いで駆

けつけ　看病するが、紫上の　病状は変わらず、二条院に移る。紫上は、看病に駆け付けた　明石女御に、先の長くないことを語り、日に日に　衰弱して行く（「若菜下」）。
＊　紫上　危篤の知らせに、源氏は　病の女三宮をおいて、二条院に駆けつける。紫上は、懸命の　加持祈祷により、息を吹き返す。が、六条御息所の死霊が現れ　源氏への執着から　紫上に取り憑いた　と告げる（「若菜下」）。
＊　紫上が、頻りに出家を切望するので、源氏は、受戒の功徳により救いたい　と彼女に　五戒を受けさせることにする（「若菜下」）。
＊　紫上は、五月になっても、物怪が　一向に　立ち去ろうとしないので、法華経を読誦して　供養させ　六月には、時々頭を上げられるほど恢復する。十二月の　十余日に行われる朱雀院の五十賀の試楽の為に、紫上は　六条院に移る（「若菜下」）。
＊　紫上は、大病で　危篤に陥って以来、病状も重く、仏道修行に専念したいと出家を強く望むが、源氏は、彼女との別居を悲しんで、許可しない。「御法」）。
＊　紫上は、三月十一日より　病床に臥し、今日が見納め　と、法華経千部供養の法会に集まった人々の顔を　しみじみと見つめ、花散里と　歌を交わし　別れを告げる（「御法」）。
＊　紫上は、夏に入る頃から　衰弱が一層ひどくなり、見舞いに駆けつけた明石中宮に遺言し、更に　孫の匂宮に　二条院の紅梅や桜を大切にし　仏になった自分にも供えて欲しい　と依頼する（「御法」）。
＊　秋に入る頃、紫上は、源氏や明石中宮と歌を詠み交わす。その後　、急に容態が悪化、明石中宮に　手を取られながら　四十三歳の生涯を閉じる（「御法」）。
＊　その日の内に　紫上の葬儀が　執り行われた。源氏は、出家をしようと思うが、人々の非難を考えて　出家出来ずにいる。最愛の紫上を失った源氏の悲しみを　癒すべき手立ても無い。呆然自失の日々を過ごす源氏であった（「御法」）。

B．物語における位置・準拠

晩春の北山　わらわ病みの為　高僧の許を訪れた源氏は、夕暮れ時、近くの山荘で十歳くらいの　あどけない　美少女を垣間見る。年端もゆかない少女に、何故に　こうも心を惹かれるのか　と、源氏は　自分自身の気持ちを　訝るのであった。が、少年の日から　憧れてい続け　思慕して来た　藤壷に生き写しなのだ　と　気づき、感動の涙に浸るのであった。

「雀の子を逃してしまった」と　泣いている少女の　頑是なさを、嘆く祖母の尼君は、どうやら　重い病気であるらしい。頼るべき人も居ないまま、孫娘を残して死んで行く悲しみに暮れる尼君に、源氏も同情しつつ　藤壷の身代わりに　このあどけない少女を、明け暮れの　慰めにして過ごしたい　と思うのであった。その　ひそやかな願望は、少女が　藤壷の姪である　と知ってからは、なおも高まってゆくのであった。少女は、藤

壷の兄兵部卿宮の娘であり、藤壷の姪に当たる。たまたま　垣間見た少女「若紫」との偶然の邂逅であった。いわゆる　物語の根幹をなす「**紫のゆかり**」の　一人であったのである。やがて　結婚する二人は、互いの　愛情と信頼とによってのみ結ばれた　理想的で、稀有な関係性を　構築してゆくのである。

源氏の女性関係は、藤壷への　決して満たされることのない恋に始まった。母桐壷更衣→藤壷→紫上　と連鎖してゆく「紫のゆかり」は、源氏物語の根幹をなす系譜であり、物語を長編化させる原動力である、が、とりわけ　紫上は、その中心にあるのである。この上ない帝の寵愛を受けながら、源氏と密通し　不義の子（冷泉帝）を懐妊・出産する藤壷の運命それ自体が、源氏の栄華を形作ってゆくのであるが、紫上は、源氏の終生の伴侶として、実質的な支えとなって　源氏の理想的世界を　共に作り上げて行くのである。

紫上が登場する「若紫」の帖の構造は、伊勢物語に負うところが大きい。源氏の少女垣間見の場面と、「伊勢物語」初段、また　四十九段の　兄妹の近親相姦的な恋を結びつけて読むと、その影響は　紫上の初期の人物造型全体に及ぶ。「昔男」の恋を背景に源氏の幼い少女に対する　欲望は、誘発されてゆくのである。

祖母尼君と死別して、孤児同然の身の上となった若紫が、もしも父兵部卿宮に　引き取られていたとすれば、尼君や乳母の少納言が心配していたように、継子いじめの災難に、遭っていたかもしれない。源氏物語成立当時に流行した　継子いじめ物語との類似点は、玉鬘物語において　より顕著ではあるものの、鬚黒と別れて　実家に戻ってきた兵部卿宮（式部卿宮）の娘の、母である大北方、即ち紫上の継母は、紫上についても、悪態をつくのである。源氏の須磨流離に際しては、紫上との関わりも断ったことから、兵部卿宮の　もう一人の娘、王女御入内に　源氏は　援助せず、源氏の後見する　秋好女御に　中宮の座も奪われてしまうのである。紫上物語の　継子いじめ的要素は、玉鬘の結婚とからみ、その射程は、案外長い。しかし、その初期段階に限っては、欲望のままに　幼い若紫を　強引に　自邸に引き取る源氏の行為を、予想される　継子いじめからの　救済策であるかのように、正当化する（神野藤昭夫）。

紫上自身の　魅力や才覚が、源氏に評価されなかったわけではない。発揮される紫上の美質によって、藤壷の身代わりを求める源氏物語は、不毛や破綻を免れている。女三宮という　もう一人の「紫のゆかり」の登場は、その論理自体を問い直し、紫上という存在を、改めて　相対化する契機となった。誰かの身代わりを求める側と　求められる側の見えざる葛藤のなかで、源氏は、問い続けなければならないのである。藤壷の身代わりとして紫上を愛しているのか、それとも　紫上　その人を愛しているのか　と。

また　紫上の死をめぐっては、八月十五夜の葬送や　源氏による消息文の焼却などに、かぐや姫の昇天を重ねて読むことが出来る（河添房江）。

C．人物評価の歴史

源氏と関わった女性のなかでも、最も長く　登場し続ける紫上ではあるが、物語に登場した　初期の紫上については、統一的な内面が　見られないという印象が否めず、（池田亀鑑）、紫上が　登場の初めから　女主人公と言えるのか、紫上が　女主人公の役割を担うようになるのは、女三宮の降嫁後のことではないか、という問いが発せられた（松尾聡）。断片的に語られる紫上の造型に、生き生きとした魅力を発見するのは、案外に容易ではなかった　ということであろう。

必然的に、紫上の「妻の座」に対して、問いかけが続く彼女に　無条件に与えられている女主人公の座に　初めて　揺さぶりをかけられるのは、「朝顔」の帖であり、その試練を経て　正真正銘の「妻の座」を獲得するのだ　という図式が、まず提示された。正妻の地位にぬくぬくと安住する紫上に　打撃を与えた原動力は、作者紫式部の作家的反省である　という（森藤侃子）。紫上という作中人物は、あまりに　作者に庇われ過ぎているのだ　という論理である。それに対して、秋山虔氏は、源氏と紫上の世界が、いかに　脆弱なものであったか　を　照らし出し「朝顔」の帖の　試練を、乗り越えた時に、紫上は、藤壷から自立し、普通一般の夫婦と同じ　表層的な感覚でのみ　源氏と繋がり　物語の現実世界に　根付いた存在へと　変貌していくのだ　と論じた。

紫上の　「妻の座」を巡っては、所詮　源氏の正妻とはなり得ない紫上が、ひたすら源氏の　愛情と信頼に縋り、遂に　正妻格の立場を獲得して、努力と忍耐とを重ねて、それを守り続けていった　とする解釈（中野幸一）、紫上は、妾に過ぎない　として、一夫一正妻多妾制を主張する（工藤重矩）。居住の問題と呼称から、紫上は　正妻である　とする説（胡潔）。などがある。

紫上に　実子のなかったことは、藤壷の身代り的存在であった　という内面的な問題に加えて、源氏の妻としての立場を揺るがす　外面的要因となろう。朱雀院の皇女であり、今上帝の妹という　身分の高い女三宮の降嫁に　決定的なダメージを受けたのには、紫上が、源氏の子を産まなかった点に　大きな原因があった　とされる（藤本勝義）。

その一方で、子という世俗的な結び付きによらず、紫上の　輝く美質によってのみ築かれてゆく　源氏と紫上の　稀有な関係性こそを　評価すべきではないか　という読みも　成立する。源氏もまた、王でもなければ、摂関でもなく、そのどちらでもあり、紫上は、その矛盾と曖昧を抱えた源氏の　伴侶に相応しく　やはり　矛盾と曖昧を生きるのである（今井久代）。そうした　紫上の　存在感の危うさ自体が、負から正へと　揺らぎつつ、紫上物語を、生成するとともに、源氏物語を支えてゆくのである。

問題となるのは、源氏の正妻である　と断言出来ない位置にある紫上が、源氏の愛情を　ほぼ独占する状況を　設定する　源氏物語の固有の論理である。それは、源氏の愛情に支えられ、紫上の美質によって、裏打ちされているのだが、厄介なのは、彼女が　藤壷の形代的存在だ　ということなのだ。

「若紫」の帖において、「雀の子を逃がしつる」と　泣いていた少女を　垣間見た源氏は、彼女に　視線を奪われる。「成長した姿を見て見たい人だ」と　思ったのも、あの藤壷に似ているからだ　と気付いて、源氏は　感動の涙を流すのであった。源氏の捩れた欲望構成は、極めて　主観的な眼差しによって、若紫の少女から　藤壷を反照し、若紫の少女の　未発達の身体に、藤壷の成熟した身体を投影しているのであった。（石坂晶子）。一人の少女の身体に　大人と子供の　両義性を見出し　描いているのは、「うつほ物語」の　犬宮への垣間見も同じである（三田村雅子）。

母の桐壷更衣→藤壷→紫上→女三宮　という系譜は、源氏の恋愛遍歴の中でも　特別な意味を持っている。桐の花・藤の花は　紫色、紫草の根による染色の色は紫色であり、「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」
＝（紫草の一本があるために、その武蔵野の草すべてが、そのゆかりのものとして、懐かしく思って見る）（古今集）

を　引歌にして、その繋がりを「紫のゆかり」と呼ぶ。血縁関係以上に（桐壷更衣と藤壷には　血縁関係はない）その容貌が　似ていることも、重要な条件となっている。藤壷も　紫上も、奇跡的な容貌の相似を　最大の理由に　桐壷帝や源氏に　見初められ、愛されるようになるのである。寵愛を得たといっても、彼女たちは、言い知れない空虚を抱えながら　同一性と差異の狭間に生きる　矛盾した存在であった。

走り・泣き・訴える　という鮮烈な登場場面には、まだ幼い若紫の無邪気な　少女性があふれ、如何にも愛らしい。どうやら　彼女は、実際の年齢よりも　殊更に幼く造型されているようである（藤井貞和）。北山の自然の中で　のびのびと遊ぶ若紫は、何にも支配されない　反秩序のエネルギーを　力強く　たたえていた（原岡文子）。そして、ただ可愛らしいだけではなく、尼君が　涙ながらに心配するように、父の兵部卿宮から疎外されている若紫には、病身の　祖母尼君の他には、頼れるものも居なかった。無心に振る舞い、遊ぶ少女も、実は、父なるものに対する　渇望を抱いていたのである（石坂晶子）。

若紫（紫上）は、ゆっくりと成長する。藤壷へのままならない思いの　息苦しさや　葵上との窮屈な結婚生活などの、大人の女性との　厄介な関係からの、源氏の精神的な解放の為に、世俗社会から隔絶された所にこそ、源氏と幼い若紫が、ともに遊ぶ空間は意味をもってくる（川名淳子）。夫婦でもなく、兄妹でもない、そのどちらでもあるような、奇妙な二人は、擬似的な父娘関係を演じていく（倉田実）。即席の父娘が、雛遊びなどに興じながら、やがて結婚という制度に導かれていくことになる。その経緯からしても、紫上の妻としての立場は、特殊のものとならざるを得ないのであった。

究極の問題は、紫上が　救済されたのか否か、ということに尽きる。阿部秋生氏は、最期まで、愛欲と仏法の間を、さまよい続けた人として、紫上を捉えた。一方で、原岡文子氏は、紫上が、出家を断念したのは、自己犠牲的な忍従というよりも　主体的な判断であったとする。女三宮の降嫁以後、紫上と源氏の間の齟齬は　決定的でもあったが、

それでもなお、源氏に向けられてゆく　紫上の心理の揺らぎには、注目しなければならない。藤井貞和氏は、物語は、確かに紫上の救済を志向している　と読んでいる。

紫上の晩年の苦悩は、宇治十帖の大君の結婚拒否の物語へと、そのテーマを　紡ぎ出していのである。

D．人物の特色

幼い　若紫は、世に名高い貴公子の源氏を、少女が好む遊びの世界を通して受容する。

「幼心地に　めでたき人かな」

＝（幼心に、なんて　素敵なお方か）

と見て、

「雛遊びにも、絵描い給ふにも　源氏の院と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ」

＝（雛遊びにも、絵をお描きになるにも、これは　源氏の君というようにお作りになり、綺麗な衣装を着せて　大事にしておいでになる）

のであった。そこには、若紫が「幼心地」なりに抱いた　源氏に対する憧憬が、確認されよう。少女らしい発想と、愛着の方法において、まずは、偶像としての源氏を　受容してゆくのである。また、少女を庇護しようとする源氏には、一方で、少女に　藤壷幻想を投影し、藤壺の身代わりとして　愛して行こうとする目論見がある。源氏と若紫が、共に　雛遊びに興じる様子が　しばしば語られるが、雛遊びのミニチュア世界を、采配する若紫と、その若紫を、あたかも愛らしい人形「人形・形代」のように、養育する源氏という、奇妙な二重構造が見られるのである。

もう一人の幼女といえば、女三宮である。女三宮は、その幼稚さという方法によって、源氏の理想的世界を崩壊させていく。不吉な影のように　物語世界にまとわりついていく女三宮の幼稚さは、源氏を苦悩させ、六条院を解体に導く為の　エネルギーとして機能するのである。

女三宮の降嫁に際し、紫上は、冷静に振舞い

「なほ　童心の失せぬにやらむ、我も睦びきこえてあらまほしきを」

＝（まだ子供っぽい気持ちが抜けきらないせいか、私から仲良くさせて頂きたいのですが）、

と　言っている。これは、「若い宮と　道心に帰って遊びたい」という言い方の裏に、「自分の余裕を　女房たちに示めそう」とする意識もあろう（小学館新編古典日本文学全集・源氏物語・「若菜上」の頭注）と　理解される。動揺を隠しての　強がりに違いないのであるが、紫上の自負心が、「童心」で対処していきたいという方面に向かっていることに　注意しなくてはならない。　ところが、周囲が期待するのは、紫上の「童心」ではなく、未熟な女三宮を、源氏と共に擁護し、教育していく　いわば親役割であ

った。朱雀院は、　わざわざ手紙を送って、紫上に　女三宮の後見を　依頼しているのである。
　聡明な紫上が、六条院の安定の為に　自らの役割を果たさぬわけがない。紫上は、女三宮に対面する事を望み　源氏は　その気遣いに対し、
「いと幼げにものしたまふめるを、うしろやすく教えなしたまへかし」
＝（宮は、如何にも幼いご様子ですから、安心のいくように　よく教えてあげてください）
　と、要請する。朱雀院だけでなく、ほかならぬ源氏もまた、女三宮に対する　教育的配慮を　紫上に求めるのである。悪意があろう筈も無いが、二人とも　何とも、虫のよい事を　いうものである。
　女三宮の　余りにもの不甲斐なさに、落胆している源氏は、対面への用意として、女三宮には、
「（紫上は）まだ　若々しくて　御遊びがたきにもつきなからずなむ」
＝（紫上は、まだ若々しいご様子で、お遊び相手としても、不似合いではないでしょう）
　と　助言している。源氏は、どうやら　紫上の母役割のみならず、その「童心」をも同時に期待しているようなのである。本来ならば、逆のベクトルに向かうところの二筋…大人性と子供性…を、紫上は、同時に要求され、それを見事に体現してゆくことで、彼女は、この苦難を乗り越えようとする。
　実際には、女三宮に対面して、紫上は、それほど緊張せずに　済んだかもしれない。女三宮が　とても幼稚に見えたので、
「心やすくて、おとなおとなしく　親めきたるさまに」
＝（気兼ねもいらず、如何にも　落ち着いて、母親のような態度で）、
「やすらかにおとなびたるけはひにて」
＝（穏やかに落ち着いた様子で、）
　絵や雛遊びについて、「若やかに」話しかけた　とある。無邪気な女三宮は、紫上にすっかり打ち解けてしまった　らしい。
　紫上が、女三宮に　歩み寄って　若々しく振る舞い　幼さを演じることが出来たのは、彼女の　生来の性質であるとともに、大人としての余裕があったからであろう。こんなに幼い女性に　嫉妬するわけにはいかない　という自尊心も　かすかな優越感もあったかもしれない。大人の分別が、紫上の　空虚な役割演技を、支えており、その「童心」が、大人のプライドを、辛うじて支えている。女三宮の幼稚さに接したときの紫上の「心やすくて」は、看過し難い。子供好きの紫上にとっては、相手が、女三宮ならば、若々しさを武器に　歩み寄るのは、案外た易いことであった。
　紫上の　母親役割は、養女である　明石女御（後　中宮）に対しても　機能してきた。その明石女御の出産に際しても、紫上は、積極的に　母としての役割を模倣している。
「白き装束したまひて、人の親めきて若宮をつと抱きゐたまへるさまいとをかし」

＝（如何にも母親といった様子で、若宮を　しっかりとお抱きになっていらっしゃるお姿は、本当に　美しくみえる）、

と　ある。生まれたばかりの若宮を抱いている様子は、「親めきて」あるいは、

「みづからもかかること知りたまはず」

＝（ご自身には、このような出産はご経験がなく）

と、語られる。女三宮に対する母親役割の振る舞いと、何ら変わることのない言葉で語られてしまうのである。

紫上の母としての役割は、その虚構性が、残酷にも暴かれていよう。明石女御を、心から可愛いと思い、若宮を愛しく思う故に違いない振る舞いをも　何処か　ちぐはぐな語られ方をしている。

「児うつくしみたまふ御心にて、天児など御手づから作りそそくりおはするもいと若々し」

＝（幼い子をおかわいがりになるご性分で、天児などを　ご自分で　お作りになり、忙しそうにしておいでになるのも、とても　若々しい感じである）

と　あり、宮中から遣わされた乳母の視線を通して、紫上が　若宮を奪い　独占しようとする行為は、「若々し」と評されているのである。実年齢に左右されない幼さ、若々しさは、紫上の美徳であると思われるものの、これは　決して好意的な評価とばかりは言い切れないに違い無い。

源氏世界では、血の繋がった実の親子の情愛よりも、理想的な親と子の組み合わせが選択されてきた。紫上と明石女御との　母娘の関係も、源氏の政治的計算によって、あてがわれた　組み合わせに過ぎなかった。紫上の　母親としての役割の振る舞いは、演技以上の愛着が　如何にあったとしても、子を生むことのなかった欠点を　補完する代償行為に　他ならないのである。

かって、お腹を痛めた明石君から、奪い取った姫君を、胸に抱き　出るはずのない乳房をふくませた事があった「薄雲」。授乳の真似事の戯れは、この可愛らしい姫君は私のもの、手放したりしないのだ　という　無言の主張である。これは、単なる演技ではもはやなかった。紫上の母としての役割は、源氏の身勝手な要求に応じたものではあったが、そこから　微妙に逸脱していかざるを得ない。紫上は、本当の母になりたかったのである。実母　明石君の悲しみや痛みを、理解するのは、紫上には、もう少し　時間が必要であった。母の身体を模倣する紫上は、このとき、独りよがりで、傲慢ではあっても、育てる母としての　身体感覚を　獲得していたのである。

演技以上の　母親としての役割りを　自ら引き受け、母を模倣する紫上ならでの　配慮や思いやりは、女三宮の無心の依存の前に　相対比されざるを得ない。大人として母としての役割りを　演じることと、「童心」を最大限に発揮して、無邪気に　女三宮に歩み寄っていくこと、その相反する美質を、器用に同時活用している内に、アイデンデティのかけらを　繋ぎ合わせたような、脆弱な紫上の自尊心は　砕けていくのである。

源氏は　もう、紫上を慰撫することすら　出来ない。大人でもあり、子供である　紫上の　自己分裂の痛みこそが、源氏世界を　本当の意味で　解体するのである。（三村友希）。

１４．六条御息所　ろくじょうのみやすどころ

Ａ．その生涯

＊　源氏は、六条辺りに住む　高貴な女性（六条御息所）の許に、忍んで　通っていた（「夕顔」）。
＊　源氏は、五条に住む病気の乳母を見舞った後、六条御息所邸を訪れる。御息所は、かって　源氏の求愛に　中々応じなかったが、現在は、源氏の夜離れに　思い悩む日々を過ごしている（「夕顔」）。
＊　六条御息所の生霊？は、源氏の愛人・夕顔を　とり殺す（「夕顔」）。
＊　源氏は、藤壷所縁の幼い若紫を　愛育することに夢中で、六条御息所邸へは、足が遠のくばかりである（「末摘花」）。
＊　六条御息所は、朱雀帝の即位によって、娘が、斎宮に選任されたのを機会に、娘と共に　伊勢へ下ってしまおうと思う（「葵」）。
＊　源氏は、正妻葵上が妊娠したこともあって、六条御息所邸への足が　ますます遠のく（「葵」）。
＊　葵祭の御禊の日、六条御息所は、賀茂の斎院に供奉する源氏の晴れ姿を　見ようと思い　出かけるが、混雑する都大路で、源氏の正妻葵上と「車争い」となり、無慚にも後方へ　押し遣られてしまう（「葵」）。
＊　六条御息所は、車争い事件によって、屈辱感に打ちのめされ、訪れた源氏と会おうともしなかったが、伊勢への下向も　躊躇っている（「葵」）。
＊　六条御息所は、葵上の妊娠を知り、物思いに沈み、祈祷をさせる（「葵」）。
＊　六条御息所は、亡き父大臣の死霊や　自らの生霊が、物怪となって、出産間近の葵上を苦しめているという　巷の噂を　伝え聞き、思い当たる節があるので、苦渋する（「葵」）。

＊　葵上に取り付いた六条御息所の生霊が、強力な加持祈祷によって、姿を現わしたので、世間の噂を聞いていた源氏は、恐れ慄く（「葵」）。
＊　六条御息所は、葵上が安産であった　という知らせに、心乱れつつも、身に染み込んだ芥子の匂いが、葵上の安産の祈祷によるものである事を知り、我ながら　不気味に思う（「葵」）。
＊　秋の除目で、源氏が　宮廷に参内している隙に、六条御息所の生霊が、産後の葵上に取り付き　急死させてしまう（「葵」）。
＊　六条御息所は、源氏と和歌を贈答した折、彼から　物怪の一件を　それとなく仄めかされ、わが身の疚しさから、堪えられないほどに　辛く思う（「葵」）。
＊　六条御息所は、精進潔斎の為に　娘の斎宮と共に、宮廷の　左衛門の司から、　嵯峨野の「野宮」へ移る（「葵」）。
＊　六条御息所は、世間では　源氏の正妻になるのでは　という噂を振り切って、伊勢下向を決意する（「賢木」）。
＊　六条御息所は、伊勢への下向が近づいた晩秋の頃、源氏の野宮への訪問を受け、歌を贈答し　伊勢下向の決意も揺らぐ（「賢木」）。
＊　六年後、六条御息所は、斎宮を退いた娘と共に、帰京する。六条の旧廷を修復、悠々自適の日を過ごす（「澪標」）。
＊　六条御息所は、重い病を得て　出家するが、見舞いに駆けつけた源氏に、娘の後見を依頼し、娘に好色めいた事をしないで欲しい　と遺言し　三十六年の　波乱に満ちた生涯を閉じる（「澪標」）。
＊　源氏は、前斎宮を　冷泉帝へ入内させるにつけて、六条御息所が、生きていたならば、どんなに喜んだことであろう　と、彼女の素晴らしさを　思い出す（「澪標」）。
＊　葵祭見物の日、源氏は、「車争い」の事件を思い出し、今では、正妻葵上の息子の夕霧が、正妻でなかった六条御息所の娘の秋好中宮に　仕えるという　地位逆転の　不思議なめぐり合わせを、紫上に語る（「藤裏葉」）。
＊　源氏は、六条御息所が、奥床しく　上品な女性であったが、気詰まりな関係から、恨まれたままに終わったこと、その愛の償いを果たそうと、娘の中宮の後見をしているので、あの世の御息所も、自分の事を、思い直してくれるであろうことなどを、紫上に語る（「若菜上」）。
＊　六条御息所の死霊は、物怪となって、紫上の危篤の場に現れ、源氏に向かって、愛執の為に　往生出来ないでいるので、　自分の罪が軽くなる為の、追善供養を営むよう、依頼する（「若菜下」）。
＊　六条御息所の死霊は、女三宮の受戒後に、物怪となって現れ、数日来　彼女に取り付いていた　と笑う（「柏木」）。
＊　秋好中宮（前斎宮）は、母、六条御息所が、愛執の為に　あの世で苦しんで、往生出来ないことを源氏に語り、彼と共に、追善供養を営む（「鈴虫」）。

B．物語における位置・準拠

六条御息所は、大臣家に生まれ、皇太子の妃となり、中宮になることも予想されていた。ただ一人生んだ姫は、後に、斎宮を経て　冷泉帝の妃（前斎宮女御・梅壷女御　後の秋好中宮）となった　斎宮女御（後の秋好中宮）である。皇太子との死別後、恋人としたのは、当代きっての美男子で、後に天下の権力を手中にする源氏であった。当時の女性としては、考え得る限り　最も華麗な履歴を持つ女性　といえるであろう。

指摘するまでもなく、後に　帝位に着いた人物のことを、「前坊」＝（先の皇太子）と呼ぶことはない。この呼び方をされるのは、皇太子の位にある時に死亡した人物か、即位することもなく　皇太子を辞任した人物に限られる。六条御息所は、その「前坊」の名で呼ばれる人物の妃であった。源氏物語執筆当時、貴族階級に属する人間は、「前坊」の称号を耳にした場合、皇太子の位にあったまま早世した　保明（やすあきら）親王を　連想するのが、常識であったらしい。ということは、六条御息所は、「保明親王の妃」のイメージを帯びて居ることになるのである。「紫明抄」は、藤原忠平の娘で、保明親王妃となった「貴子」を　六条御息所のモデルとして上げ、「大鏡」所載の　貴子に関する記事に言及する。それによると、貴子は　保明親王との死別後に、重明親王と再婚し、重明親王との間に儲けた「徽子」女王は、後に　斎宮となったという。しかし「大鏡」のこの記載は、史実と異なっている事が　確認されている。貴子は、実際には　保明との死別後　再婚しておらず、また　徽子女王の母は、貴子と同じく　忠平の娘でり、重明の妃となった　寛子だという。おそらく、貴子と寛子とを　混同して生まれた「保明との死別後　重明と結婚し、娘は斎宮となった　忠平の娘」のイメージが、ある段階までに、貴族階級に広まっていた。六条御息所の造型や、「大鏡」の誤伝は、この「混合イメージ」の影響を受けたもの　と考えられる。

他に　時平の娘で、保明親王の妃となり、娘の「熙子」女王が、朱雀帝の女御となった、「仁善子」も、六条御息所の　準拠となったと言われる（藤村潔）。また、先に触れた徽子女王は、村上帝の女御となって、規子内親王を生み、規子が　斎宮に選ばれると、これも同行して　伊勢に下った。六条御息所が、斎宮となった娘に付いて、伊勢に赴いたのは、この徽子女王の例を　踏まえたもの　と考えられる（河海抄）。

六条御息所は、源氏との　意のままにならぬ恋に苦しみ、生霊となる。その内面描写のリアルさは、源氏物語の　作中人物の中でも、群を抜いている。そんな六条御息所の「内面」の先駆けとして、社会的な境遇では、大きく隔たっているが「蜻蛉日記」の作者である「道綱の母」に、近年注目が集まっている。実際、六条御息所をめぐる物語の叙述は、表現の上からも、「蜻蛉日記」を踏まえている部分が　あるという（高田裕彦）。

ちなみに、生霊となって　産褥の葬上を襲う六条御息所は、「紫式部日記」で、「彰子」の出産の場面に現れた物怪よりも、遥かに　異様さの度合いが少ない　と指摘されている。六条御息所の生霊が、単なる　特異ではなく、「内面」の切実な表れであることを、

物語は、明確に　自覚していた証拠であろう。

C．人物評価の歴史

「無名草子」では、
「あまりにもののけに出らるるこそ、おそろしけれど、人ざまいみじく、心にはこのもしく侍るなり」
＝（余りにも　物怪として　お出になった点は、恐ろしいのですが、人柄が素晴らしく、心には　好ましい人であるようです）
と　評されている。「賢木」の帖における、源氏との最後の逢瀬の段は、「名場面」として、二度にわたって　言及されている。「無名草子」の成立当時、読者は、六条御息所に対して、意外なほどに　好意的であったことがうかがえる。
近代に於ける　六条御息所論は、物語の成立の議論と絡められて、論議されるところから始まった。源氏と　六条御息所との出会いは、源氏物語には、書かれていない。このため、現存しない欠巻部分があり、そこに　この二人の馴れ初めが書かれていたのだという説が、提唱された（高橋和夫　など）。ちなみに、近世の本居宣長は、源氏と御息所との最初の逢瀬を描いた「手枕」という　模倣作を　残している。描かれざる源氏との出会いは、時代を越えて　源氏物語読者の関心事であり続けているのである。
作者の　構想という観点から　池田亀鑑氏は、葵上を退場させ　紫上と源氏との結びつきを　容易にする為に　御息所は　物語に導入されたのだ　と論じた。池田氏によると、「若菜」帖に於ける　死霊としての再登場は、展開上の　必然性がなく　明らかな失敗であったとする。これに対し、橋本真理子氏は、「若菜」の帖で、紫上が、六条御息所の死霊によって病んだことは、御息所の死霊によって、源氏と引き離されたことになる　と指摘した。源氏と紫上を　結びつけただけでなく、離れさせた六条御息所は、物語の根幹に関わる　重要人物なのだ　と　橋本氏は　説く。
源氏物語の　成立・構想と関わる論点としては、「賢木」の帖で、明記される六条御息所の、年齢をめぐる問題がある。斎宮となった娘に付き添って　参内する場面に、「十六歳で亡き前坊の妃として入内し、二十歳で死に遅れた。今また三十歳で内裏の門をくぐった」と　書かれてあるが、この記述は　明らかに物語の他の部分と矛盾するのである。前坊＝（先の皇太子）は、桐壷帝の同母弟であり、朱雀帝が　皇太子として立つ直前の皇太子であった　と推測される。朱雀帝が　皇太子となったのは、「賢木」の帖の、この場面の　凡そ二十年前で、前坊の死の直後に　朱雀帝が皇太子に立ったとしても、計算が合わないのである。藤村潔氏は、作者が　十歳　六条御息所の年齢の計算を誤ったのだ　とした。藤村氏によると、そもそも　源氏物語は、十年単位で、構想されているため、作中人物に関する年齢上の手違いを、一度起こすと、丁度十年のずれがおきるのだという。一方、多屋頼俊氏は、朱雀帝に　皇太子を譲って退位した「前坊」のもと

に、御息所は入内したのだ　と主張する。
　六条御息所は、生霊・死霊として、祟りをした存在として、広く知られている。この「物怪化した」という問題をめぐっても、さまざまな論が展開されている。まず、この人物が、何故に　執念深く　祟るのか　に関しては、六条御息所の父と　夫である前坊とが、政治的敗北者であったことに　その理由を求める説がある。坂本共展氏は、前坊は、皇太子を　政治的圧力の為　辞任させられたのであり、それに対する怨念が　六条御息所を動かしているのだ　とする。この坂本説に対しては、増田繁夫氏が、反論を示したが、現在も　望月郁子氏などによって、前坊廃太子説は　支持されている。また　葵上に取り憑いた物怪が、「六条御息所の父大臣の霊」と　噂された　という記述が、「葵」の帖にある。三谷栄一氏は、この記事に着目し、御息所の父が　政治的不遇のうちに亡くなった可能性を　主張した。近年でも、浅尾広良氏が、御息所の父大臣と、桐壷帝の治世を取り仕切る左大臣・右大臣の年齢差などを根拠に、御息所の父は、政治的廃者であった　という説を示した。
　六条御息所の　生霊や死霊が、物語執筆当時の一般的霊魂感と　どのように関わるのか　についても　議論が多い。和泉式部の
「もの思へば沢の蛍も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」
＝（もの思いをしていると、沢を飛んでいる蛍も、私の体から抜け出した魂であるかのように　見えてくる）
　という歌が示すように、物思いが嵩じると、魂が肉体を脱け出るという発想は　ある程度　一般化していたらしい。これに対し、「紫式部集」には、物怪に取り憑かれた女の絵を見て詠んだ　という詞書が添えられた歌がある。その
　「亡き人にかごとはかえてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ」
　＝（亡くなった人を言い訳にして病気になるのも、自分の心の中の鬼のせいではないでしょうか）、
　という歌をみると、紫式部が、当時の通念から距離を保ち、物怪を、心の鬼＝良心の呵責　の産物とみていたことが　分かる。前出の　橋本氏や桑原氏は、こうした　紫式部の物怪観を出発点に、六条御息所の生霊を、源氏の「心の鬼」として見ることを提案した。これに対し、藤本勝義氏は、作者が　物怪をそのまま信じていない反面、物語の中の人物は、物怪の実在を疑わないことに　着目する。そして、六条御息所・源氏・葵上三者のそれぞれの「心の鬼」が複合して、物怪にリアリティを、生じさせている様子を、物語は見事に描き出している　と述べる。西郷信綱氏は、古代共同体が崩壊し、集団的なものとして捉えられてきた霊魂を、個人に帰属させるようになった時期が、源氏物語の時代であった　と指摘する。西郷氏によれば、六条御息所の生霊や死霊は、行き場を失った古代的な霊魂の象徴なのであった。
　六条御息所の霊に関しては、他に、「祟る対象」をめぐって、論議が重ねられてきた。坂本和子氏は、源氏に関わるさまざまな女性に　害をなす六条御息所の霊が、明石君と

その娘には崇らない事実に着目し、六条御息所と、明石一族に　血縁関係がある可能性を示した。初めて　明石君の姿を見た源氏は、六条御息所に似ているという印象を抱く場面が、「明石」の帖にあり、坂本氏の説には、無視し得ない説得力がある。この坂本氏の主張を受けて藤井貞和氏は、六条御息所の霊は、秋好中宮と、明石一族に対しては「守護霊」として、他の人物には　「怨霊」として機能していると述べた。高橋亨氏は、「若菜」の帖で、御息所の霊が、再び動き出すのは、冷泉帝が、秋好中宮との間に、男子を儲けないまま退位した結果だとした。娘である秋好中宮の子が　帝位に就くという望みを断たれ、一度は　慰撫されていた死霊が、再び怨霊化したのだ　と高橋氏は述べる。

ちなみに、夕顔をとり殺した霊も、その正体を　六条御息所の生霊と見るべきか否かについて　諸説がある。藤井氏は、夕顔の死後、源氏の夢に　夕顔を殺害した霊が、夕顔と一緒に現れていることに注目する。藤井氏によれば、既に死霊である夕顔と並んでいる霊は、同様に死霊であるはずで、この段階では、生存している　六条御息所の霊では　あり得ない。「夕顔を殺したのは、六条御息所の霊ではないが、そのように読めるようにも物語は書かれている」と藤井氏は　結論づけている。このあたりが　現段階での　標準的な解釈といえるのであろう。

ところで、六条御息所は、斎宮の母として伊勢に下る。このことから、「皇室守護の神」である伊勢神宮の巫女としての相貌を、六条御息所に認める論者がいる。生霊や死霊となる事から見ても、彼女の「巫女性」を問題にする解釈は　妥当である。先述の西郷氏は、古代的霊魂の象徴ともいうべき霊をもつ六条御息所が、　伊勢神宮と関わることの重要性を、指摘した。西郷氏によると、古代的霊魂観は、神道のそれであり、霊魂を個人に帰属させる　新しい霊魂観は、仏教のものであるという。小島菜温子氏も、仏教的なものと　伊勢の神域とを、対立関係において捉え、伊勢との繋がりの深い六条御息所は、「仏教的な罪」を背負っているとした。久富原玲氏も、アマテラスの巫女としての六条御息所を　問題にしている。

六条御息所は、現代の　特に　女性の読者から、人気が高い。高い矜持を持ちながら恋ゆえに、それを揺さぶられ苦悩すること、霊的なものと関わることなど、現代の名作といわれる少女漫画作品の主題を　この人物は体現している。そのことが　恐らく一般読者からの人気の理由なのであろう。そうした事情を踏まえた上での　近現代の女性の置かれた状況と関わらせた「六条御息所論」の誕生が　待たれるところである。

D．人物の特色

六条御息所は、物怪化するという点の他にも、謎の多い人物である。

まず　その出自が、明らかでない。大臣の娘であることは、物語に明記されているが、作中世界の他の有力者たちと、どういう繋がりがあるのかは、全く　分からない。大臣

の娘なのだから、公卿クラスの地位にある、男の兄弟がいそうなものであるが、それも描かれていないのである。また　彼女の夫であった「前坊」も、物語の叙述に矛盾がある為に　どういう経歴をたどった人物なのか読者に　きちんとした像が浮かんでこないのである。(「人物に対する評価の歴史」　参照)。源氏は、明石君との容貌の類似を感じるが、明石一族と　六条御息所が、いかなる関係にあったかについて、物語は一切言及していない。源氏物語においては、容貌の似た者同士は、血縁関係をもつのが、基本原則なのだが、六条御息所と明石君は、この原則が当てはまるのかどうか、曖昧なままになっているのである。

更に、六条御息所は、身分的には、紛れもなく「上の品＝上流階級」の出身者であるにもかかわらず、人物像としては「中の品＝中流階級」の情勢と　共通点が　多いのである。源氏物語の中でいえば、六条御息所の苦悩が、空蝉の抱えている問題と重なっていることは、既に指摘されている。即ち　内省力の強い　若くはない女が、源氏の魅力に　自制心を揺さぶられて、苦しむ　という点で。また、六条御息所の内面が、「蜻蛉日記」の作者のそれと　ダブルことも　しばしば論議されてきたが、道綱の母は、受領階級の出身者であった。あらゆる登場人物が、内省に耽りぬく「若菜」の帖以降の物語においてならともかくも、(三谷邦明氏は、「若菜」の帖、上下を、「自己意識の文学」と呼ぶ)、六条御息所生前の段階で、苦悩の胸中を、克明に描かれる「上の品」の女性は　他に存在ない。たとえば　藤壷は、源氏との密通という罪を犯したのにも関わらず、その苦悩は、殆んど具体的には　描かれない。藤壺の苦悩の深さは、心理描写によってではなく、苦悩を反映した身体的状況によって、示される（石坂品子)。

このような　六条宮御息所の特異な在りようを、理解する為には、源氏物語全体の構造を考察する必要がある。源氏物語の正編は、桐壷帝と桐壷更衣の「禁断の恋」によって生まれた源氏が、栄華を極めたその後に、若き日の罪＝藤壷との密通　その応報に苦しむ姿を描いている。そこにおいては、

Ａ.「桐壷帝によって示された「生き方の原型」(増田勝美)。を、息子の源氏がたどる」。

Ｂ.「桐壷更衣・藤壷中宮・紫上　という　容姿の類似した三人の女性が、源氏の人生を支配する」。

Ｃ.「若き日に犯した「高貴な人妻を寝取る罪…藤壷との密通…」を　女三宮と柏木が密通する事で犯し返される」。

といった　話柄が　物語を導く。これら　正編の「幹」となる話柄は、因果関係が極めて明確であり、読者は　そこで語られていることの意味を、細部にいたるまで　了解し尽くすことが出来る。

因果関係が明確で、解読が容易な物語、という特性は、文学テキストが　通俗的人気を獲得する条件として欠かせない。その条件を　源氏物語第一部は備えている。しかし、そうした特性にだけ収束する物語であったなら、源氏物語は千年の間　読み継がれてこなかったであろう。細部に至るまで、克明に解読された挙句、歴史のある時点で、「こ

れ以上新しく解釈しようのないテキスト」として、考古学的異物の扱いを受けるようになっていたに違いない。

源氏物語正編においては、源氏の栄光と因果応報を描く「幹」の物語の周辺に、「蔦」のように絡まる物語が、配されている。夕顔や　空蝉や　玉鬘の物語が、この「蔦」の物語に当たる。成立構想論が盛んであった時代に「紫上系」と称された帖が、「幹」の物語を語り、「玉鬘系」と呼ばれた帖が「蔦」の物語を担っている　と　一応はいえよう。然し、源氏の栄華と応報の道筋に　便乗するようにして、一族の復興を実現した、「明石一族の物語」は、どうであろうか。明石一族が、源氏や、「紫のゆかり」に、相対比する存在であることは、しばしば指摘される。明石一族は、因果関係の明瞭な源氏の物語に　途中から介入し　源氏を取り巻く因果の連鎖を　変えてしまっている　とはいえないであろうか。明石一族の物語は、「幹」に絡まって「幹」の方向を　曲げてしまった「蔦」なのではないだろうか。

源氏物語正編における「幹」の物語と「蔦」の物語の連関は、決して単純ではない。そして、明石一族の物語と同様に、「幹」を歪める「蔦」としてあるのが、「六条御息所の物語」なのではあるまいか。六条御息所が、物語に初めて登場するのが、「夕顔」の帖の冒頭であることは、よく知られている。六条御息所は、中の品の女の物語の添景として　つまり「蔦」の物語の　脇役として　作中に姿を見せる。しかし　やがて、葵上を生霊となって殺し、死霊となっては　紫上を発病させ　女三宮出家の原因ともなる。六条御息所は　間違いなく、「幹」の物語の展開に　影響を及ぼしているのである。六条御息所と明石君、容貌の似ているこの二人は、血縁があるか否かは別として、何よりも　物語の構造の上に占める位相において　類似しているのである。

六条御息所は、因果関係の明確な「幹」の物語の住人ではない。幹の因果を　撹乱させる人物として在る。だからこそ、系譜関係が明確でなく、「上の品」の女でありながら、「中の品」の女のように扱われる。そして、そのような存在である六条御息所は、「幹」の物語の中心にいる藤壺の、「闇の部分」を　照らし出す役目も　負っているのである。

六条御息所は、藤壷帝の同母弟である前坊の妃であり、前坊の死の直後に「内裏住み」の勧め…桐壷帝の妃になるようにという要錆…を　受けている。そして、藤壷との密通の物語的意義は、

Ａ．［父の恋人を奪う］

Ｂ．「王権を保持する者の妻を犯す」

という点にあった。源氏と六条御息所の関係も、物語の論理の上では、藤壷密通に類似した意味があるのだ　とはいえまいか。六条御息所には「もう一人の藤壷」と　いい得る側面があるのだ。

この点と関連して　見逃せないのは、藤壺もまた　死後「怨霊」となって現れているいう事実だ「朝顔」。紫上を前に、藤壷の人物像を語った夜、密通を匂わせたわけでも、

批判的な言葉を口にしたわけでもないのに、源氏の夢に　姿を見せ
「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」
＝（漏らすまいと仰ったのに、嫌な評判が立ってしまい、恥ずかしくて。その上、地獄で苦しい目に遭っているので、辛くて）
　という言葉を　殘すのである。藤壷は、紫上との会話で話題にされたというだけで、源氏を恨んでいるのである。このことから、源氏との関係をめぐり、物語に直接書かれている以上に、藤壷が　苦悩していたことが、推測されるのである。そして、藤壷と　近い境遇にあり、同じように怨霊となった六条御息所と　比較するとき、「藤壷も　実は六条御息所の如く源氏を取り巻く女たちに　嫉妬していたのではないのか」という想像へ　読者は誘われるのだ。それにしても、怨霊として現れた　藤壺の台詞は、六条御息所によって吐かれたのでは　と錯覚するほどではないか。
　六条御息所は、このように「幹」の物語を　さまざまな意味で揺るがす女君としてある。そして、続編物語のヒロインとなったのは、皇太子候補になり損ねた「八宮」…準・前坊ともいうべき存在…と、大臣の娘との間に生まれた　大君・中君の姉妹であった。続編は、新しい「幹」の物語としてではなく、「幹」の物語が生成する上で　取りこぼされた者たちによる、「蔦」の物語として　織り出されている。「幹」にとって代わった「蔦」の物語…そこに、六条御息所の家族と　境遇の類似した八宮家が、召還されて来るのは、物語構造上　必然といえるのであろう。事実、この場で　詳述することは出来ないが、六条御息所の物語は、宇治十帖と　主題的にも　関連が深いのである。
　宇治十帖で、「幹」と「蔦」の逆転現象が生じて以降、平安朝の物語史は、「幹」を提示しつつ「蔦」を描くことに　執着する物語を生み出した。父の「王権回復の欲望」を、背負いながら、源氏の宮との　不毛の恋に生きる「狭衣物語」の狭衣、父の「転生して唐土で即位する」という野望の実現に尽力する一方で、自らは　恋も権力も得ることなく、終わる「浜松中納言物語」の中納言、父によって　王権に回帰する事を禁じられ、苦渋のうち続く人生を強いられる「夜の寝覚め」のヒロイン中君など、平安朝の高貴物語は、いずれもが、「幹」の世界を生きるべく誕生しながら、「蔦」の物語に身を投じた人物を主人公にしている。「幹」を侵食する「蔦」としてある六条御息所は、源氏物語続編の宇治十帖に対してのみならず、遠く、王朝後期物語の世界の先までも、その影を伸ばしているのである。　（助川幸逸郎）

１５．葵上　あおいのうえ

A．その生涯

＊　葵上は、右大臣家から、皇太子（後の　朱雀帝）の后にと　望まれていたが、父の左大臣が、桐壷帝の寵愛する源氏と結婚させせよう　と、決めたため、源氏の正妻となる（「桐壷」）。

＊　葵上は、源氏よりも　四歳年上であることが　気にかかり、素直にうち解けるることが出来ないでいる。源氏の方も　藤壷に　心が奪われている為に　なかなか葵上の許に通うことがない（「桐壷」）。

＊　葵上は、源氏が　二条院へ、女性（若紫）を　迎えたとの噂を耳にし　心中穏やかでなく、ますます　源氏とは　疎遠になる（「紅葉賀」）。

＊　懐妊中の葵上は、葵祭りを見物に行くが、葵上の従者と、源氏の恋人六条御息所の従者とが、車を停める場所をめぐって争い、お忍びで来ていた六条御息所の姿を顕わにして、辱めてしまう。所謂「車争い」である（「葵」）。

＊　葵上に　取り憑いている物怪の正体は、六条御息所の生霊か、はたまた　六条御息所の父大臣の死霊か　と　世間で騒がれる（「葵」）。

＊　葵上は、物怪に苦しめられながらも、無事に男の子（夕霧）を出産する（「葵」）。

＊　苦しみの末に　男の子が生まれたことで、葵上と源氏は、ようやく　夫婦としての心を通わせるが、葵上は、六条御息所の物怪に襲われて　二十六歳の若さで、急死する（「葵」）。

B．物語における位置・準拠

葵上は、源氏の最初の正妻である。父の左大臣は、桐壷帝の信頼の厚い大臣で、母の北方は、桐壷帝の同腹の妹であるから、葵上は、皇女腹の姫君である。皇太子（後の朱雀帝）の後宮に入内する可能性もあったが、父左大臣と桐壷帝の　取り決めによって、源氏を婿に迎えることとなる。即ち　政略結婚であった。

葵上の結婚は、歴史的に　異例な婚姻であった。加納重文氏によれば、醍醐帝から一条帝までの御世の十二人の左大臣の正嫡の姫君は、殆んどが、皇子と結婚して、后妃となる場合が多く、臣籍に下だった皇子が、左大臣のような権門貴族と縁組することは、稀であるという。源氏と葵上との結婚は、歴史的事実を越えたところに　構想されているのである。

源氏の　元服の加冠役を務めたのが、左大臣である。その夜「添臥」として　葵上は源氏の正妻となったのである。「添臥」とは、皇太子や皇子などが、元服した夜に、選ばれた公卿の娘などが、添い寝する事である。葵上は、その役にえらばれ、そのまま、

源氏の正妻となったのである。将来は　皇太子妃となるべく、大切に育てられた葵上であったが、父左大臣は、皇太子からの要請を断ったのである。皇太子を擁する　弘徽殿女御・右大臣一族に対する　反抗・牽制が、桐壷帝と左大臣の思惑でもあったのであろう。

葵上は、血筋・身分は勿論のこと、容貌や教養の面からも、申し分のない正妻のはずであるが、四歳年上であることもあって、源氏に打ち解けない。深窓の姫君である葵上は、人一倍気位が高く、臣下であり、年若い源氏との、突然の結婚に　納得できなかったのであろう。ましてや、源氏は、母の面影を伝える藤壷を　思慕し続けており、葵上の結婚生活は、中々うまくいかず、源氏の訪れは　間遠である。それでも、舅の左大臣は、仲を取りもとうと、懸命になり、源氏を丁重にもてなし　世話を焼くのであった。「女君、例の　這ひ隠れて　とみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり」＝（女君は、何時ものように、引っ込んだままで、直ぐには姿をお見せにならなおのを、父大臣が、強いてお勧め申されるので、やっとのことで出ておいでになる）という有様であった。

「若紫」の帖で、若紫が発見され、彼女が藤壷の「ゆかり」として、源氏に引き取られた以上、いずれ　源氏と若紫が、男女の関係に移行してゆく事は、明らかである。そうなれば、正妻葵上の存在が問題となってくるのであり、事実　若紫の乳母は　その事を心配していた。葵上の　早い退場は、予定ずみであった　といえよう。

Ｃ．人物評価の歴史

葵上は、源氏の正妻でありながら、不仲が続き、結婚九年目にして懐妊し、夕霧を出産、その直後に　急逝する。鎌倉時代の物語評論「無名草子」が、「めでたき女」と評しているように、正妻としての葵上は、どの点から見ても、申し分のない女性であった。葵上は、鎌倉・室町時代には、儒教的観点から　如何にも慎ましやかな女性と見られていた。江戸時代の賀茂真渕からすると、高慢ちきな女性なのであるが、葵上像のマイナスの印象は、源氏視点で解釈したときのものであることに　注意せねばならない（伊井春樹）。

現代の読者からすれば、愛情問題の融和よりも先に、身篭るという　身体的・生理的な現実によって、源氏を受け入れることとなり、ようやく　打ち解けようとした矢先に死を迎えるという葵上には、悲劇的なイメージが強いのである。

葵上は、政治的結婚によって結ばれた源氏が　望んで　近づいた女性ではない。源氏の元服の儀で、加冠を務めた左大臣の　皇女腹の　ただ一人の姫君で、左大臣が　皇太子からの所望もあったが、躊躇していたのは、源氏に差し上げたいというつもりがあったからなのであった…と　葵上は紹介される。源氏の父の桐壷帝の内意もあった。しかるべき後見のない源氏の為に　左大臣の後ろ盾を得ようという　桐壷帝の配慮である。

皇太子妃の地位や　外戚の立場を、断念してまでも、左大臣が、源氏を婿にしたことについて、玉上琢弥氏は、「東宮を擁する右大臣への反抗」であり、「これを許した帝の判断は、正しかった、といえるかどうか　疑問」と提起した。それに対して、婚姻をいわば認可した桐壷帝の崩御後、右大臣一派によって失脚させられることになる源氏の将来を見越して森一郎氏は、「現実の政治的判断、処置としては、錯誤といわれても　いたしかたない」とする。

歴史的に見ても、この結婚は異例であった。主人公源氏の　理想性が成立させた、臣籍に下った皇子としては、破格の婚姻なのである。秋山虔氏は、「結婚を踏み切る左大臣は、具体的な帝王身分に　優位する超世間的な価値を追求したこと　明らかである」と読む。結果的に　源氏を婿とった左大臣家は、右大臣家を凌駕する勢いとなった。葵上の死後も、左大臣は、源氏の後見であり続けた。こうしてみると、源氏の須磨・明石流離という　一時的な失脚はあったが、桐壷帝の決断も　錯覚とばかりは　言い切れまい。

父親同士の決めた物語的事実としての　異例の結婚は、その当初から、うまくいかなかった。結婚した夜、葵上は、四歳年下の美少年を、

「似げなく恥づかし」

＝（似つかわしくなく、恥ずかしい）

と　感じたが、そのとまどいを、後々までひきずってしまったのか。夫婦の不仲の原因は、葵上の魅力の乏しさではないだろう。すでに　源氏の心の中には、理想の女性として　藤壷があったからであり（秋山虔）、高い教養の持ち主であるはずの葵上が、和歌を詠むことのないのにも、夫婦に精神的繋がりがない為であった　ともされる（森下幸男）。

もっとも　史実では、十一歳の一条帝に、十五歳の定子が、入内するなど、宮廷社会では、女性が男性よりも年長であることが多かった。葵上が、不器用で　端正な性格であったことも　不仲の　大きな要因の一つであろう。まだ　幼い源氏には、妻を気遣う配慮に欠けていたことに　間違いはない。

また、葵上の　実体的な生のあり方や、性格を論じる　作中人物論ではない別の角度から、葵上論を展開した吉井美弥子氏は、「政治性」から逃れることの出来ない葵上の特殊な位置づけと、源氏が　義父の左大臣に対して　常に優越した立場にあり、決して左大臣家に組み込まれることがないことを示し、源氏の超越した主人公像を論じている。そうした「政治性」は、葵上の記述が　増して行くと　希薄となり、それは　源氏の葵上に対する　意識の変化である　という（猿渡学）。

また、葵上を表わす修飾語に注目した重松信弘氏は、紫上や明石君には使われない、「うるはし」「すくすくし」「重りか」「よそほし」などが　際立ち、「おいらか」「おほどか」などは、葵上には　用いられていないことを明らかにした結果、葵上は、「重厚・端正な女の添景」であるとする。さらに「すくすくし」の語から、源氏にとって、葵上

は、やはり魅力的な女性ではなかった　ともされる（梅野きみ子）。

さらに、太田敏子氏は、従来は、否定的に解釈されてきた「絵に描きたるものの姫君のやうに」という表現に、着目した。それは、父左大臣によって、演出された姿であり、葵上が、「絵に描きたるものの姫君」のように、鎮座されている限り、源氏の求める理想の女性にはなり得ない　と指摘した。葵上の身体・振る舞いをめぐっては、葵上の「まみ」・「後目」表現が、葵上の源氏に対する精一杯の愛情表現であった　とされる（井上真弓・香川睦）。他の女性達と比較される中で、葵上の性や身体は　歪められているのである（小島菜温子）。

六条御息所に取り殺される葵上であるが、葵上も　六条御息所も　紫上の存在を押し出す機能を　共に担っている（山田利博）。とりわけ「若紫」の帖においては、源氏と葵上の不和と　紫上物語は、対比的に　語られているのである（室伏信助）。

D．人物の特色

葵上の性格や容貌に関する描写は、決して多くはない。葵上は、左大臣の　皇女腹の姫君という　高貴な生まれであり、入内も期待されていた　深窓の姫君らしい　美しさや気高さ、教養の高さなどは、おのずと　想像されてくるのである。しかし、物語において、重要な感情表現となる和歌を　葵上は　一首も残してはいない。

源氏は、藤壷を慕い続けており、その「ゆかり」である若紫の少女を　引き取って養育している。まだ　幼い若紫への執着は、葵上や藤壷といった　大人の女性との　厄介で　気詰まりな、満たされない関係と　無縁ではなかった。とりわけ、源氏と葵上との不和と、源氏と若紫との　寛いだ関係とは、対比的に　語られていた（室伏信助）。

葵上という正妻は、父の左大臣に　管理された　豪華な空間に　鎮座する「父の娘」である。娘の葵上の部屋に寄りつかない源氏を、左大臣は、「家」全体で　取り込もうと懸命になる。しかし、源氏は　そこに取り込まれることのない　超越した主人公であった。源氏は、父の兵部卿宮に先んじて、若紫を奪い、誘拐するようにして　引き取ってしまう。二条院で、擬似父娘のように　少女を教え、養育して　自ら　紫上の父となるのであった。身分的に最高の葵上が、それ故に、源氏と精神的な繋がりを持てないのに比べて、父の兵部卿宮から　疎外されて、然るべき後見もない若紫が、ただ　その美質や信頼といった精神的な繋がりにおいてのみ、源氏の心を掴んでゆくのである。

前述したように、葵上には、「うるはし」の語が　しばしば用いられる。「うるはし」は「きちんと整っている」・「端正である」・「礼儀正しく立派だ」という意味であり、見かけの様子や、態度に　欠点がない事をいう。「うるはし」は、本来は、尊敬の念を伴う用法で使われていたが、平安時代になると、整いすぎて親しみが持てない感情を伴って使われるようになってゆき、美しいが　堅苦しい感じで、誉め言葉とは　限らないのである。葵上が、その特徴的な例で、「深窓の麗人としての「うるはしさ」＝（端正さ）

が、源氏には、馴染めなかったのである（鈴木日出男）。
　また「うるはし」と　対照的な語の一つに「うつくし」がある。整った美しさを表わす「うるはし」に対して、「うつくし」は、小さなものを愛する気持ちから、愛らしい様子を表わす。「枕草子」に、「ちいさきものはみなうつくし」＝（小さいものは、すべて愛らしい）と　あり、平安時代における「うつくし」は、小さいもの、幼いものの可愛らしさに対する感動を　示すのである。この「うつくし」は、若紫に　しばしば用いられる語であり、彼女が成長して、年齢を重ねてからも　使われ続けていく。実年齢に左右されず　失われることのない愛らしさは、紫上の　特長であり、葵上とは、対照的な性質であった　と言えるであろう。
　不仲の永く続いた結婚生活であったが、源氏は　後に回想して、葵上を
「うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき」
＝（きちんとして重々しく、どこが　不足であると思わせられる点は　何もなかった）、
　あるいは
「思ふには頼もしく、みるにはわづらはしかりし人ざまになむ」
＝（思えば頼もしく、お逢いするのにも　気詰まりなお人柄であった）
　と、紫上に　語って聞かせている。正妻としての葵上は、言うまでもなく立派で、申し分のない妻であったのである。
　葵上の性質を表す「うるはし」は、葵上に四例、夕霧に六例が　用いられている。さらには、夕霧の娘の六君の　衣装やしつらいに　三例が見える。六君は、葵上の孫に当たるから、左大臣家に遺伝する性質として「うるはし」が　捉えられるのであろう。
　六君もまた、父の夕霧にかしづかれ、美しく整えられた姫君であった。六君が、藤内侍腹でありながら、落葉宮によって、六条院で養育されたのは、いずれは入内して　中宮の位を望もうとする夕霧の期待によるものであった。母の　明石中宮の　度々の説得もあって、嫌々ながら婿となった匂宮も、六君に惹かれてゆくのである。父の夕霧や兄弟たちに囲まれて、管理された六君は、やはり　葵上を連想させる姫君であった　といえよう。故八宮家の遺児である　中君は、匂宮と六君との結婚に打撃を受け、すっかり気落ちしてしまうが、傷ついた中君の可憐さこそが、匂宮を繋ぎとめることになるのである。六君の「うるはしさ」は、中君の痛々しい愛らしさには　叶わなかったのである。
　しかし　若しも　葵上が、生き続けていたらどうであったか。中々気持ちの通わない夫婦であった　源氏と葵上も、葵上の懐妊・出産をきっかけに、距離は近づいていく。源氏は、葵上をいたわり介抱し、葵上もまた　それに素直に応じたのである。時間がかかったものの、世間的にも、精神的にも　結ばれた　理想の夫婦関係を築くことも　あるいは　可能であったかもしれない。中君が　六君よりも　優位に立つ事が出来たのは、男皇子の誕生に　大きな原因があった　と考えられる。とすれば、結果的に　子を生むという世俗的な繋がりを　得ることの出来なかった紫上の立場は、葵上より　弱かったのだ、といわざるを得ないのである。

若紫が、藤壷の「ゆかり」として、源氏に引き取られた以上、いずれ　源氏と若紫が、男女の関係に　移行してゆくことは　明らかである。そうなれば、正妻葵上の存在が問題となってくるのであって、若紫の乳母は　それを心配していた。葵上の短命　即ち物語からの早すぎる退場は、予定済みの構想であった　といい得るのである。

（三村友希）

１６．朧月夜　おぼろづきよ

Ａ．その生涯

＊　南殿（紫宸殿）の　桜の宴の終わった夜、酔い心地の源氏は、藤壷のあたりを　窺い歩くが、折しも　弘徽殿の細殿の戸口が開いていたので、そこから忍びこみ、たまたま出会った　朧月夜と　契りを交わし　互いの扇を交換して　別れる（「花宴」）。

＊　朧月夜は、皇太子（後の朱雀帝）に入内する予定の身であったが、源氏との　夢のような逢瀬を思い出し　物思いに沈む（「花宴」）。

＊　三月二十日過ぎ、右大臣家で催された藤の宴に招かれた源氏は、夜更けの頃に　酔いにまぎれて　席を外し　扇の主を　探し当てる。朧月夜は　源氏と再会し、歌の交換をする（「花宴」）。

＊　朧月夜が　源氏に思いを寄せているのを知った　父右大臣は、結婚を認めてもよいと思うが、姉の弘徽殿大后は、入内させよう　と　決心を固める（「葵」）。

＊　朧月夜は、二月に内侍となり、朱雀帝から　深く寵愛されるが、源氏とも　密かに手紙の交換をする（「賢木」）。

＊　朧月夜は、五壇の御修法のはじめのころ、弘徽殿の細殿の部屋で　源氏と密かに逢う。二人の関係は、朱雀帝の耳にもはいっていたが、帝は　咎め立てもしない（賢木）。

＊　朧月夜は、わらわ病の為　退出し　里下がりしていた際に、源氏と密かに　逢瀬を重ねる。雷雨の激しい暁、父右大臣に現場を目撃され、報告を受けた弘徽殿大后は、源氏を　陥し入れようと画策する（「賢木」）。

＊　朧月夜は、源氏が　須磨へ退去する前に、無理をして　女房を介して　源氏と手紙の交換をする。その後、須磨の源氏から　手紙が届き　返事を書く（「須磨」）。

＊　七月　朧月夜は、源氏との密会が原因で、それまで、参内禁止であったが、父右大

臣や　姉弘徽殿大后の口添えで　許される。しかし、朧月夜は、朱雀帝の寵愛を受けながらも　源氏を思い続けている（「須磨」）。
＊　退位を決意した朱雀帝は、源氏への嫉妬から、朧月夜のことを愛おしく思いつつも、恨み言を言う。朧月夜は、源氏とのこれまでのことを　振り返り、後悔する（「澪標」）。
＊　明石から帰京した源氏は、朧月夜との事を、諦めきれずにいる。が、朧月夜は、過去の事件に懲りて、以前のようには　源氏の誘いに応じない（「澪標」）。
＊　雪の夜、源氏は、紫上に、朧月夜の優美な顔立ちや　利発で優れた人柄などを誉めて語る（「朝顔」）。
＊　朧月夜は、女三宮の　婿選びに困り果てている朱雀院に、甥の柏木が、結婚を希望している旨を　申し上げる（「若菜上」）。
＊　朧月夜は、出家の希望を抱いていたが、朱雀院に諌められて　少しづつ仏事の仕度などを始める（「若菜上」）。
＊　二条宮に　里下がりしていた朧月夜の許に　源氏が見舞に託けて　手紙をよこす。朧月夜は、その都度　返事だけは出していた。ある日　忍んで訪れた源氏と　十四年振りに　一夜を共にし、お互いに　昔を　思いつつ感慨に耽る（「若菜上」）。
＊　朧月夜は、念願の出家を遂げる。源氏は　彼女に　尼衣や修業の為の道具類を贈る（「若紫下」）。　（吉野・西沢）

B．物語における位置・準拠

南北朝時代の中頃、四辻善成によって書かれた源氏物語の注釈書「河海抄」の「料簡」の章には、

「五条、二条の后を薄雲女院、朧月夜の尚侍によそへ」

と　あり、「伊勢物語」に登場する人物がモデル　と見做されている。即ち　五条の后（仁明帝の妃）を　源氏物語の藤壷中宮に、二条后（藤原高子）を　朧月夜に擬えているのである。

「伊勢物語」は、登場人物や内容が、密接な関係を持つ一連の挿話が　複数収められている。その中でも　有名な「二条后章段」と呼ばれる　在原業平に仮託された主人公の　二条の后と見做される…（本文中にモデルを指摘する記述がある）…天皇に　入内予定の名門貴族の姫君との　許されぬ恋愛を描いた物語がある。伊勢物語では、主人公が、姫君を連れて逃げたり、姫君を親族に隠されたり、と　波乱があるが、結局主人公の思いは　成就しないのである。この、一連の挿話の設定が、朱雀帝に入内予定されていた　右大臣家の姫君である朧月夜と恋愛関係にいたる源氏の状況と　近似しており、源氏物語が、伊勢物語の設定を、下敷きにしたもの　と考えられているのである。

源氏物語は、源氏と朧月夜の関係以外にも、「若紫」の帖で、源氏が　まだ幼い少女の若紫を、初めて垣間見する場面などに、伊勢物語からの影響が見られ、単に設定の借

用だけではなく、主題の在り方にも関わる　影響関係が　指摘されている。その一端は、伊勢物語の主人公のもつ反権力的傾向であり、禁忌の恋愛を選択する志向である。その点で、源氏物語の主人公源氏は、伊勢物語の主人公の　正統な後継者といってもよいのであり、朧月夜も、源氏に選ばれる女性として、相応しい　属性を有しているのである。

室町時代に　三条西実隆の　源氏物語に関する講義を筆録した「細流抄」では、「朧月夜は天性歌よみ也」と記されている。これは、鎌倉時代初期に、藤原良経によって主催された「六百番歌合」の判詞で、藤原俊成が、

「花宴の巻は、ことに゛ん゛なる物なり。源氏見ざる歌よみは　遺恨の事なり」

＝（源氏物語の「花の宴」の巻は　格別にすばらしい出来栄えである。源氏物語を読まない歌人は、残念なことである）

と　述べていることによるものである。藤原俊成は、「千載和歌集」」「新古今和歌集」の選者であり、源氏物語の内容を、自作和歌に引用して、新境地を開拓したことでも　有名な歌人である。この　俊成の言葉は、「花宴」の帖の　絢爛豪華な　道具立てや措辞の用い方を言うとともに、源氏と朧月夜との　当意即妙な贈答歌の様子をも　指すものと　考えてよいのであろう。特に、右大臣家の姫君として　当代随一の好男子源氏に一歩も譲らない朧月夜の振る舞いを「河海抄」は　推奨したのである。

Ｃ．人物評価の歴史

鎌倉時代初期　俊成の女（むすめ）によって書かれた物語評論書「無名草子」で。朧月夜は、「いみじき女」の一人として、言及されている。源氏が　須磨に謫居した原因が、朧月夜にあったこと、更に、須磨にいる源氏を懐かしんで　落涙する朱雀帝と共に、涙ぐんだところ、帝に「だれの為の涙なのか」と　皮肉に言われた場面も、「いみじ」としている。「いみじ」とは、一般的には「強く印象に残る」意味と　理解される。しかし、栗原博史氏は、「無名草子」が、朧月夜と共に、取り上げる「いみじき女」が、朝顔宮・空蝉・宇治の大君・六条御息所の女房の中将　であることから、男性に対して、情けの強さを示した人、を意味しているとする。更に、朧月夜に関しては、男にもてあそばれているかに見えて、実は　男を抱擁する豊かさを、強さ　と認めてのであろうと説いている。「無名草子」では、「花宴」の帖　自体も、「いみじき」巻である　としている。

朧月夜の　古くからの人物評として、一般的なものは、池田亀鑑氏によって、概括されている。即ち　激情的・享楽的・刹那的な性格と、行動であり、肉感的で美貌・陶酔的な感情の持ち主である一方、理知的な反省が足りず、知性が欠如しているということになる。後半部は、あまりに酷な評価に傾いており、右大臣の姫君としての教養（和歌・諸道など）は、十分に身につけている　といってよい。ほかにも、情熱的（関みわを）。娼婦型（岡崎義恵）、などの評があるが、いずれも、行動によるものである。また、民

俗学の立場からは、遠来の客人を待ち歓待する「月姫」（土屋尚）、「月女」（林由孝和）とする指摘もある。

朧月夜の　大臣家の姫君という基本的な属性に関する問題点については、上野英子氏の論がある。朧月夜は、長姉の　弘徽殿女御の長男・朱雀帝との結婚が予定されていたのだが、源氏との恋愛問題が起きたことで、障害が生じた、即ち　将来　女御から皇后の位につく者として、夫である帝以外の愛人が存在したという　周知の事実は、不都合なのである。そこで、父の大臣と、姉の弘徽殿の意見が　分かれるのであった。父は、正妻葵上を失った源氏との結婚を　認めてもよい　との意向を示す。然し　姉の弘徽殿女御は、反対をし、結局は　女官としての立場で、（実質的には妻）の入内となったのである。この点については　朱雀帝には　既に　兄の藤大納言の娘「麗景殿女御」が入内しており、朧月夜が入内すれば、帝の寵愛を　争う事となる。それよりは、源氏との結婚で、協定を結んだ方が　得策である。弘徽殿女御が　朧月夜の出仕を主張するのは、源氏憎し　という感情論からなのであった。その中で、朧月夜は、源氏と　右大臣家に挟まれて　彷徨い続けるのである。

朧月夜の「尚侍」という地位についても、その歴史的意義と「巫女」性をめぐる議論がある。尚侍の皇妃的であって　皇妃ではないという　微妙な立場については、その歴史的な位置づけを踏まえた　後藤祥子氏の論がある。藤原兼家の娘以前には　尚侍は、身分高い既婚者もしくは未亡人がなる地位であり、皇妃として、入内しても　女御に昇進した者はいない。尚侍とは、宮廷女官最高の地位と、恋愛結婚の自由が残された立場である。従って、尚侍となった朧月夜が、源氏との関係を継続するのは、女御になる事はないという自由を　自覚した意識によるのである。

尚侍という地位の「巫女性」の意義については、河添房江氏が　積極的に論じている。内侍は、当時の宮廷の巫女集団であり、天皇霊の篭もる者としての　神璽の鏡剣を奉祭する存在である。その最高の地位にある尚侍・朧月夜を、実質的な皇妃とした朱雀帝は、朝顔君を斎院に　六条御息所の娘を斎宮にし、朱雀朝の巫女体制を確立して、源氏に対抗することを　可能にしたのである　とする。ただし、この説に対しては、日向一雅氏から、強力な反論が提示された。朧月夜が　朱雀帝の尚侍となったのは、女御として入内させようとした計画が　源氏によって挫折させられたからであり、尚侍の地位は、皇妃に相当するものとして　止むを得ず　選択されたのであった。朧月夜自身も、尚侍としての職掌の自覚をもっていたとは、思われないのである。源氏の　朧月夜との密会も、朱雀帝の　尚侍の巫女としての聖性を　犯したというより、后妃的地位を犯した　ということであった。すなわち　朱雀朝は　きちんとした「巫女体制」を整えていたとは　いえないのである。文徳帝以降、天皇への奏文及び天皇からの勅旨は、すべて　尚侍および典侍が握った。右大臣は、自らの　政治的地位を　磐石にする為に　娘を尚侍につけた　と　考えられるのである。

朧月夜の和歌に見える　流離と死のイメージを強調するものとして、吉野瑞恵氏の論

がある。「花宴」の帖での　逢瀬の別れの場面で、朧月夜が、「草の原」という語を含んだ和歌を詠むのだが、この語は、流離いと　異常な死のイメージを　背後にもっている。そのことから、朧月夜が、源氏に　恋死にを仄めかし　死の支配する世界へ誘っているもの　と読み取れるのである。更に、朧月夜物語は、夕顔物語の進行と、類似する点が多い。夕顔物語は、夕顔の死に終わる物語であり、朧月夜物語も、破滅に至る恋物語である。朧月夜物語は、政治的な対立を作り出して、源氏を須磨に謫居させるだけでなく、深層においては、より大きな　死のイメージが貫流していたのである。

後藤祥子氏の論によれば、互いの氏素性や社会的地位と　離れた所で、始まる恋愛としては、その浪漫性において、夕顔との関連と共に、宇治の物語の　匂宮と浮舟との関係が、その性情においては、後に登場する女三宮・浮舟らとの共通点が　指摘されている。同時に、宮廷男性社会の価値観による　積極的な源氏賛美に支えられた　自発的な恋愛である点で、それらの運命に　身を任せた女性たちの相違も、指摘されるのである。また、増田繁夫氏の論によれば、予定された后の地位を見捨てて　源氏との破局に道を進みながら、朱雀帝の言葉に涙する朧月夜のありかたに、薫と匂宮のいづれかを選ばなければならない浮舟の問題の　萌芽が見られるのである。

民俗学の立場から、土屋尚氏の論が有り、扇・藤の花・弓・催馬楽（石川）を散りばめて進行する「花宴」の帖全体が、三輪山神話や　賀茂神社の話型を　踏まえていることが、指摘されている。三輪山神話は、「古事記」崇神帝条に載る　活玉依姫（いけだまよりひめ）と蛇神美和の神による　神婚説話であり、賀茂神話も「古事記」「山城風土記」に載る　玉依姫と丹塗りの矢に変身した　火雷命（いかづちの尊）による　神婚説話である。三輪山神話は、夕顔物語の骨格を形成していることでも、よく知られている。

源氏の　須磨からの帰還以後の　朧月夜については、後藤祥子氏が論じている。
源氏帰還後、二人の仲は急速に　冷静化する。この恋愛の本質が、状況の危うさに抗する若さにあったことを語る。刃向かう権力が　なくなった今、愛を継続する意味はないのである。中納言家の弘徽殿女御と　源氏の養女斎宮女御との対立を描く、「絵合」帖で、朧月夜は、サロンの女主人に相応しい　芸術的才能を発揮して、源氏の敵役にまわる。圧倒的勝利者である源氏は、朧月夜にとって、敵にまわすに　相応しい相手なのであった。

朱雀院出家後の朧月夜についても　さまざまな評価がなされている。が、源氏との再会が、二人の関係を　どのような意味においても、進展させるべき　契機を持たないのである。後ろ向きな性質の事柄で、あることで　一致しているようである。反権力的・反現実的な志向を本質としていた　源氏と朧月夜の恋愛であったということができるのであろう。

D．人物の特色

朧月夜は、物語への　登場の仕方からして　極めて特徴的である。源氏が忍び込んだ深夜の後宮、弘徽殿小細殿を　女房も連れず　一人で　漢詩を朗詠しながら　歩いて来たのである。源氏物語の中で、立ち姿の　描かれた姫君は　僅か三名である。即ち　朧月夜・女三宮・宇治の中君　である。普通　姫君は、室内では　膝行するものであった。また、漢詩を朗読するということも、漢詩文を学ばないのが　一般的である姫君にしては、異例なことと言えるのである。ここで、興味を引くのは、朧月夜が　原句の「朧月夜にしくものはなき」を「朧月夜に似るものぞなき」と言い換えていることである。漢文調を、女らしく　和文調に直した　といわれている。因みに　当夜は、

「月いと明うさし出でをかしき」

＝（月が　たいそう明るく差し出て、風情がある）

と　記されており、朧月夜自身も　後に、「有明の君」と呼ばれている。「朧月夜」とは　読者からの呼び名であって、如何に　この登場場面が　鮮烈な印象を与えたかを物語るものである。なお、別れの場面で、女側から　和歌を詠みかけるのも、異例のことであり、…後の密会でも繰り返される…朧月夜の積極性を印象付けている。

朧月夜の基本的な属性は　大臣家の姫君という点にあり、右大臣家の六君で、末娘らしい。長姉の弘徽殿女御は、桐壷帝に入内し、東宮（後の朱雀帝）を生んでおり、姉の四君は、左大臣家の長男・頭中将と結婚している。父と弘徽殿女御は、朧月夜の　東宮妃としての入内を望んでいるのであった。当時の上級貴族の姫君に相応しく　すでに人生設計は、親によって　決められているのであった。そこに　源氏との恋愛問題が起こる。弘徽殿女御にとって、源氏は　母子共に　敵であり、朧月夜との関係は、自分乃至は右大臣家に対する当て付け　と取るのは、尤もなこと　といえよう。一方、朧月夜は、「思い悩む」とは記されながら、特に　罪の意識からの反省は描かれておらず、内侍についた後も、五壇の御修法という　宮中の重大行事で、朱雀帝が　多忙な折を狙って　密会を重ねるのである。勿論　忍んでゆくのは　源氏であるが、

「人知れぬ御心し給へば」

＝（人知れず　気持ちが通じているから）

と　記される　相思相愛ぶりであった。

結局　「賢木」の帖の巻末で、右大臣邸の朧月夜の自室に　源氏が忍んでいた現場を押さえられて、須磨へ　謫居することになるのだが、先の　五壇の御修法の場面に、直結して　源氏が　藤壷中宮に忍ぶ場面が描かれていることに、注目する必要がある。源氏の　須磨謫居は、直接的には　朧月夜との件が、弘徽殿大后の逆鱗に触れ、謀反の嫌疑をかけられそうになった為に、先手を打ったことではあるが、その深層には、藤壷中宮との密通により　誕生した　冷泉帝の即位実現の為には、「若紫」帖の夢解きにあった。「違い目」を　経験をしなければ、ならなかったという理由が存在したのである。

従って、朧月夜との事件が、注目を浴びることは、源氏と藤壷中宮との間柄を　隠蔽する役割りを　果たすことにもなったわけである。

朱雀帝・朧月夜・源氏の　三者の関係は、頗る微妙なものがある。源氏と朧月夜の関係は、もともと朱雀帝への入内が決定する以前に始まったものであるし、その関係が、周知の事実となっていたせいで、朧月夜は　女御としての入内ではなく、女官として宮中に入ることとなったのである。故に、公式には、朧月夜は　朱雀帝の妻ではないこととなり、源氏との関係が　続いていても、それ自体は、密通という罪には当たらないのである。当事者である朱雀帝も、退位を間近に控えてのことではあるが、朧月夜が　源氏の許へ　走る事を許す旨の発言をする。これは、朱雀帝が、一貫して　弟の源氏に　尊敬の念で接していたという　一見奇妙な背景が、あってのことであるが、源氏と朧月夜の関係が、朱雀帝に対する　政治的意図を　秘めたものである意味を　持ち得ない証左と考えてよいであろう。

さて　この言葉を聞いた朧月夜は、一転して　心中　悔恨と反省を見せる。歳月につれて深まる　朱雀帝の愛情を前にすると、源氏は　さほど自分を愛してはくれなかったし、今回の騒動で　自分の名誉はともかく、源氏の為にも　酷い事をひき起こしてしまった…。最後に　源氏への迷惑を思い遣るところなど、微妙な点もあるが、唐突な反省の弁という感をぬぐえない。確かに　朱雀帝の言葉は、朧月夜への深い愛情　というよりも、愛執の情に発したものであり、情にほだされるだけに　真実味をもっている。朧月夜も、ようやく真実に目が開けた　といえるのかもしれない。だが、過去に源氏が　朧月夜に対して、愛情薄い仕打ちをしたという記述は見当たらない。朱雀帝が　朧月夜を寵愛しているという記事も、源氏が　須磨へ　謫居して　初めて見出せるのである。この事実からは、源氏の帰京後は、二人の関係を絶つために　作者が　やや強引にでも事態の収束を図ったのではないか　と　考えられるのである。朧月夜は　源氏を須磨へ謫居させるに　必要な人物だったからである。源氏の帰京後、物語は　源氏と右大臣家との関係を離れた　別局面に　展開して行くことになる。

その後　二人が再会するのは、「若菜上」の帖で、朱雀院が、出家した後の事である。朱雀院が、山寺に移ったことで、朧月夜も　実家の二条宮に移る。手紙の遣り取りだけは　続けていた源氏は、この機会を　見逃さない。以前にも　手引きをした　女房中納言の兄・和泉前司をとおして、再会の手はずを取る。朧月夜は、源氏の突然の訪問を　快くは思わないし、掛け金をかけた障子越しに面会するのだが、結局は　源氏の言葉を尽くした誘いに　応じてしまうのである。一連の場面には、庭・花・鳥などの　自然描写と　和歌の引用による　纏綿たる情緒に彩られている。朧月夜の堅固な筈の拒絶の意志が崩れたのも、むべなるかな、と思わせる。だが、語り手の視線は厳しい。朧月夜は、その意志の弱さを、

「もとよりづしやかなところはおはせざりし妃」

＝（もとより　重々しいところが　なかった女性）

と　語られるのである。朧月夜個人の責任に帰さずともよいところのようにだが、登場当初に　規定された人物像は、今に至っても　崩されないのである。源氏も、帰邸後に、紫上から、

「いまめかしくもなり返る御ありさまかな」

＝（随分　若返った　振る舞いですね）

と、手厳しい指摘をされる。だが、源氏の場合は、自身で、

「若やかなる御ふるまひ」

＝（若者のような行動）

であることを、自覚し忸怩たる思いを抱いた上での　行動であった。情に流された形となった朧月夜とは、異なるのであった。

しかしながら、帰り際の源氏の姿が、中納言君の目からは　賞賛され、朧月夜の直接の賛美がない点に注目したい。朧月夜もまた、自省を失くすほどの無節操とは描かれていないのである。その点では、二人の再会は、年齢を重ねた大人同士に　相応しいものであった　と言える。勿論、これを、何ら発展性のない退嬰的な情事であった　と評することは　可能であるし、その評価に何らの誤りもない。だが、また、二人の過去を、今の自分をいとおしむ気持ちの共鳴に　嘘はないのである。たとえ　それが、人間の弱さの表明であったとしても、そこに　人生の真実が存在している事を　認めないわけにはいかないのである。

物語の発展としては、この再会場面の直後に、紫上が登場することが　重要である。源氏の　外出の口実が嘘だ　ということに　紫上は、気づいているし、先述のとおりに、帰邸後は、紫上の追求に　源氏は　結局　全てを白状せざるを得なくなるのである。その後、朧月夜が最後に登場するのは、「若菜下」の帖である。出家の本懐を遂げた　と情報が齎される。源氏の見舞いの手紙に　返事が来る。それを受けて　源氏が　紫上と懐旧談を語る場面がある。つまり　全ては　源氏・紫上夫婦の間柄の中に　回収されていく構図となっているのである。　（蛯澤隆司）。

１７．空蝉　うつせみ

A．その生涯

＊　空蝉は、方違えのため　紀伊守の別邸に　仮泊した源氏が、忍び込んできた際に、心ならずも　契りを結んでしまう（「帚木」）。
＊　源氏は、空蝉の　思慮深く、奥床いい人柄に　惹かれるが、空蝉は　娘であった若き日に　プロポーズされていたならば　と　悔やむ（「帚木」）。
＊　源氏は　小君（空蝉の弟）を使いにして　恋文を届けさせるが、空蝉は、自らの立場を考えて　返事を出さない（「帚木」）。
＊　源氏が　再び　紀伊守の邸を訪れるが、年老いた受領の妻でしかない　自分の立場を弁え、侍女の部屋に身を隠し　会おうとしない（「帚木」）。
＊　空蝉は、軒場荻と　碁を打つ姿を　源氏に垣間見される。その夜、空蝉は　寝室に源氏が忍び込むのを察知し、身を隠くす。源氏は　やむなく、空蝉の残した小袿（この帖「空蝉」の名の「ゆかり」）を　持ち帰る（「空蝉」）。
＊　空蝉は、源氏を導いた小君に　小言を言うものの、源氏の手習いの歌を見せられ、ひとり身であったならば　と　抑えられない思いを歌に詠む（「空蝉」）。
＊　空蝉は、夕顔が亡くなって、病を得た源氏に　見舞いの歌を贈り、贈答を交わす（「夕顔」）。
＊　空蝉は、夫の伊予国下向の折、源氏から　餞別を貰う。別れの　贈答歌を交わし、かって　寝室に脱ぎ捨てた小袿を返される（「夕顔」）。
＊　空蝉は、任期を終えた夫と共に　常陸国から上京する。その途路　逢坂の関で　石山寺に詣でる源氏と邂逅する。歌を詠み交わす。権勢を誇る源氏一行の様子を　目の当たりにして　感懐にふける空蝉である（「関屋」）。
＊空蝉は　夫に先立たれた後、義理の息子の河内守に、言い寄られ、宿世の身を嘆き　出家する（「関屋」）。
＊　空蝉は、源氏に引き取られ、正月用にと　源氏から　晴れ着を贈られる（「玉鬘」）。
＊　空蝉は、源氏の庇護のもと、二条東院に　末摘花と　一緒に暮らし　勤行にいそしむ毎日である（「初音」）。

B．物語に置ける位置・準拠

　空蝉は、父（中納言兼衛門督）が、空蝉を入内させようと考え、それが潰えた形で、現在の　受領（国司）の妻という境遇に収まった。そして、彼女は、与り知らぬことではあるが、「帚木」の帖の、前半にある「雨夜の品定め」を実践する形で、源氏の求愛を受けるのである。そのような事情であるから、二人の出会いは、源氏にとっては、行

きずりであったが、彼女の　強い自制と、身の処し方によって、源氏の心を捉えたのである。但し　空蝉は、「帝の御妻」藤壷の身代わりとして、源氏の意識にのぼり、藤壷との最初の逢瀬の代わりに、その交渉が描かれた　という見方もある（岡一男）なお、空蝉の　高い自意識や　末摘花との対照性が　多く描かれることから、空蝉・末摘花を、一院系の女源氏と推測し、物語に語られない没落皇族と、源氏による救済の物語　と見る論もある（坂本共展）。空蝉とその父衛門督が、入内を夢に描いたのは、醍醐帝に更衣として入内し　章明（のりあきら）親王を生んだ藤原兼輔（紫式部の曽祖父・権中納言と呼ばれた）の例の存在を指摘する論もあり（原田敦子）、空蝉の入内の可能性は、物語の準拠にも　関わりを持っているのである。

源氏との実際の関係は、「帚木」・「空蝉」の帖で終わり、「夕顔」の帖で、常陸国へ下る空蝉と源氏の　贈答が描かれて、ひとまず　この関係は　終息する。その後　空蝉は、「関屋」の帖で、源氏と再会、和歌の贈答を経て　その後　出家し、二条院の住人となる。「玉鬘」の帖での　新春用の衣装配りを　予告のようにして、「初音」の帖で、初春の挨拶を交わす場面が描かれるが、男女の関わりを持たない尼となって　ようやく　源氏と　落ち着いた対面の場が描かれることとなる。その間の　数々の帖でも、空蝉は所々に　気強く　嗜み深い女性として　源氏の意識に上るのであった。

空蝉の容貌が　地味でありはなら　源氏の心を惹きつける　という造型、誇りと自制心の豊さ、歳の離れた受領の後妻という設定などから、作者紫式部の自画像（島津久基）という説が　提唱された。また夫の死後　継子に当たる長男「藤原隆光」に　求愛され拒否したという　実体験の反映が　この人物の造型に深くかかわっているとも言われる（関一男）。但し、これも、近年設定の　素材としての紫式部の家族関係と、人物そのものとの区別を重視する「自画像否定説」（島田敦子）も　提起されている。

一方で、「空蝉」の帖の　巻末の彼女の詠歌

「空蝉の羽にをく露の木がくれてしのびしのびに濡るる袖かな」

＝（蝉の羽におく露のように、人知れず　隠れて私は　密かに涙で袖を　濡らすことです）

は、実在の歌人伊勢の家集に、入る古歌である。これについては、源氏物語の創作歌が、「伊勢集」に混入したとの説もある（高木和子）。いずれにしても、空蝉と源氏の物語は、和歌を軸とした歌物語的な要素が、濃いとされる（高木和子・吉見健夫）。そこから、「帚木」「空蝉」二つの創作方法にも　考えを広げることが出来る。「帚木三帖」といわれる物語の実質は、空蝉と夕顔の物語であるが、夕顔物語には、唐の伝奇「任氏伝」や　三輪山説話・河原院説話　といった　先行する文学作品の素材が、多用されており、空蝉物語では、古歌を利用した　新たな「歌語り」の創造が　試行されているのである。

C．人物評価の歴史

鎌倉時代成立の「無名草子」は、さまざまな物語を　批評した書である。そこには、「空蝉は　源氏にはまことに打ち解けず、うち解けたりと　とりどりに人の申すは、いかなることにか」

＝（空蝉は、源氏に　本当に　身も心も　許さなかった。いや許したとさまざまに読者が申しますのは、どちらが真実なのでしょうか）

という論議があったことが　記される。現代では、「帚木」の帖で、空蝉が、一度　思いがけなく源氏の侵入を受けたことは　自明と見えるが、「無名草子」では、続けて、「「帚木」のいう　何とてうち解けざりけり　と見えてはべるものを、悪しく心得て　さ申す人々も時々はべるなめり」

＝（「帚木の帖の本文に」どうして　私は　源氏様に　身を許さなかったのだろうかと　書いてありますものをね。それを　悪く解釈して、そのように　身を許したなどという人が　時々居りますのでしょう）

と、「男女関係なし説」を展開するのである。

しかしながら、この「何とてうち解けざりけり」という本文は、現在の写本には見えず、当時の流布本の問題もあるらしいのである。一口に源氏物語といっても、各時代で受け止められる内実は、かなり相違していたことの一端を窺わせる例である。

近世以前には、「紫式部賢女論」と並んで、「空蝉貞女論」が　盛んに論じられた。中世には、源氏物語の地位を上げるために、「教戒観」、つまり、源氏物語は、男女の恋愛の実態と苦しみをさらけ出すことで、反面教師として「清く　正しい」道徳的生き方を促す書物なのだ　という解釈が行われた。それを受けて　江戸時代には、封建道徳の締め付けから　源氏物語を擁護するために、空蝉を　源氏を拒み続けた貞女として、持ち上げる論が　主張された。例えば、幕府の儒者成島筑山が、源氏物語五十四帖を、七言絶句で　詠じた「紫史吟評」では、空蝉を

「貞の一字、古今婦人喫緊の要義なり」

＝（「貞」という一字は、古くとなく今となく、婦人としての第一の守るべき道であり、女性としての生命である）

と　評している。これに対抗した国学者たちも、「もののあはれ」を掲げた本居宣長であっても、根底では、やはり　貞女説を踏まえていた　との指摘がある（田中まゆみ）。なお　源氏物語の中でも、漢学者の関心を惹いたことで、明治時代に入ると、延べ三篇の空蝉物語の漢詩文が作られた。「中川水邸微行」・「空蝉」（菊池三渓作）。「紫史巻三　空蝉」（川合次郎作）である。これは、明治時代前半の漢文学と国文学の交渉を考える上で　興味深いこと　といえよう。

このような形で、文学以外の思惑に　翻弄された人物評価であったが、近代以降、物語に即して、空蝉を考える動きが　出てくる。紫式部の「自画像のひとつ」説（島津久

基）は、作中人物として、創作の源泉から考えた論であるが、他の人物にも、作者の自画像が　少しずつ　生かされている　ということは、逆に　空蝉や他の人物も、深層で繋がる可能性を持っている事にもなる。その後の研究では、「源氏を　拒否する女性」の中で、空蝉を捉える論（山田利博）。や、一見独立性・完結性の高い空蝉の物語が、「身」意識の強さで、他の登場人物とも　連携して行くとする論（藤田加代）など、やはり　物語全体との関連の中で、彼女を考えようとする姿勢が　見えるのである。

　また、空蝉に、話型論として、「白鳥処女」の類型をみようとする説があり（高崎正秀）、そこから進んで、藤壺・宇治の大君との繋がりと　衣を残す点での「任氏伝」・聖徳太子伝説への遡及を論じる考え（島内景一）もある。

　空蝉の入内の可能性に付いては、現実味よりも、「夢」でおわったが故に、無限の可能性を持って、彼女の自意識を支え続けたとの見方がある（原田敦子）。それはまた、空蝉が、源氏を拒否する際の　反実仮想

「いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし」

＝（本当に、こうした身分や人妻という社会的位置の決まってしまった境遇ではなくて、亡くなった親の御面影の残る生まれ育った家で、たまにでも、源氏の君の通いをお待ちするようなことならば、幸せなことだろうに）

にも共通し、夢であるからこそ、空蝉の中で、持続した恋だった　という論に続く（原田敦子）。

　ただし　この空蝉が夢見た　源氏の通い所願望は、いわゆる「葎の宿」の物語類型として、知られるものであって、荒れ果てた邸に、美しい姫君が隠れ住んで、貴公子とめぐり合うというパターンは、パロディーとして、末摘花物語に、また　北山の幼い少女へと変貌して若紫物語にと、後の物語に生かされてゆくのである。

　空蝉周辺の　伊予介一家や、小君もまた、それぞれに　源氏に関わりを持つ。伊予介の娘で「軒場荻」と呼ばれる女性は、「空蝉」の帖で、逃げ出した空蝉の身代わりに、忍んで来た　源氏の愛を受ける。その昼間　空蝉と軒場荻が碁をうつのを　垣間見た源氏は、地味で慎ましやかな空蝉と対照的に、大胆で、開放的な美しい軒場荻を　比べてみて、気品では　空蝉が勝る　と結論づけ、逢瀬の場でも　出まかせの口説で　若い彼女を丸め込んでしまう。軒場荻は、後に　蔵人少将を婿にするが、時折　源氏が　手紙などを出していた　と語られる。また　空蝉の実の弟・小君は、空蝉に下心のあった紀伊守（伊予介の息子）が、何かと目をかけていたが、やはり　空蝉への　橋渡し役に　と考えた源氏が、身近に　仕えさせる。小君も、

「あこは知らひな。その伊予の翁よりは先に見し人ぞ」

＝（お前は知らないだろうが、私は　あの伊予介の爺さんより前に、姉上（うつせみ）とは、）恋仲であったのだよ）、

　という　源氏の嘘に騙されて、空蝉との仲を　取り持とうとするのである。この　小

君は、後に　須磨に退去する失意の源氏を、見捨てた人物とされる。空蝉を取り巻く一家は、彼女に比べると、計算高い割には、源氏に騙されたり、付け入れられたりする、喜劇的な人物が多い。「関屋」の帖で、和歌だけとはいえ、大臣の高位にある源氏と　空蝉との贈答を可能にしたのは、権勢におもねった　かっての小君の　努力であった。空蝉が、身を高く持しながらも、情動につき動かされての　たまさかの贈答が、可能になったのは、逆に　こうした低俗と言ってよい　受領階級の人々の動向があったから　ということになるのである。

　空蝉が尼となって　源氏の世話を受ける晩年についても、「無名草子」は、

「空蝉もその方は、むげに人わろき。のちに尼姿にてまじらひ居たる、また心づきなし」

＝（空蝉も、強情なのは、人聞きが悪いほどですね。それでいて、後に尼姿で　源氏の二条東院の女君に立ち混じって住んでいるのは、これも、気にくわないことです）

　と、批判している。

物語の前半で、気強い拒否を通しながら、結局は源氏の庇護下に入る道を選んだことは、現代でも、「あの空蝉が、源氏の庇護に甘んじるに到る道程は、充分に納得がいかない」（後藤祥子）。という評価がある。ただし　空蝉の強い拒否が、源氏への恋着の　裏返しであったことを考えると、そのために　彼を傷つけた「報い」としての　懺悔の生活を、二条東院で送る道を選んだことも　肯ける部分がある。「初音」の帖で、現在の生活を空蝉は、

「かかるありさまを御覧じはてらるるより外の報いはいづこにかはべらん」

＝（こうしたみじめな尼姿を　あなた様に　すっかり見られてしまう以上の報いは　何処にあるのでしょうか）、

と、源氏に訴えて　泣くのである。二条東院の生活が、不満なのではない。源氏を受け入れられず、さりとて、彼の前から　姿を消しきることも出来ず、中途半端な位置で、源氏の恨みを募らせたことへの　恥ずかしさ　なのであろう。

　「拒否する女」・「靡かない女」として過ごして来た　空蝉が、尼になって、源氏の苦しみに加担した　自らのありように、目を向けた。これは、反実仮想の夢に　自分を閉じ込めていた若き日から　成長した視点でもある。「初音」の帖の彼女は、

「いにしへよりも、もの深く恥づかしげさまさりて」

＝（昔よりも、いっそう　奥床しさと、気品が勝って）、

と　源氏の目に　映ったのである。

D．人物の特色

　空蝉は　既に述べた「貞女説」は、措くとしても、「烈女伝」に記されたような、「貞女・賢女」のイメージが　色濃く投影され、「二度と過ちを犯さない　懸命さを、持った女」（鬼東隆昭）、「決して貞女とは語っていないのであるが、定説と無関係な存在で

あるとは、みられないであろう}（鬼東隆昭）、といった形の論は　根強い。もともと「帚木」の帖の、「雨夜の品定」は、一般的な女性論というよりは、理想の主婦論という趣がある。それを支える価値観には、当時の共通の教養であった　漢籍に見える儒教道徳を背景にした「烈女・賢女・貞女」が、強く影響している。

確かに、空蝉の　源氏に魅かれながらも、強い自制心と、卑下の心で、拒否する点は、理性の勝った「賢い」女性である。また「帚木」の帖で、心ならずも　源氏を受け入れた翌朝、

「常はいとすくすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方のみ思ひやられて、夢にや見ゆらむとそら恐ろしくつつまし」

＝（何時もは、愛想もなく魅力に乏しいと　見下されてばかりの、夫の伊予介のことが、無闇と思い出されて、いまごろ　あちらの夢にでも、今回の事が、つげ知らされているのではないかと、恐ろしく身が縮む）

と、気にするのである。空蝉の場合は、親の死後零落して、身分としては、家司程度の　伊予介に、後妻として据えられた身の上である。伊予介も、伊予国（愛媛県）や常陸国（茨城県）といった、上国・大国を歴任していることや、中川の邸の規模などから、受領としての手腕は　高かった　と推測されるが、空蝉からは、風流味に欠ける　と軽蔑されていた。また、源氏は、夫の主筋にあたるのであった。それでも、夫以外の男性との関係は、彼女に　身の縮む思いを与えたのであった。やはり「貞節」は、彼女の造型の素材として、生かされている　と見ることは出来よう。

その一方で、空蝉が　源氏を拒んだのは、罪悪感よりも、彼女特有の強い「身」意識である事が、先行の研究で　明らかにされている。藤田加代氏の　数量分析によると、「身」に関する言及の多い人物は、源氏と薫である。また、空蝉の場合は、「身」に対する意識は強いものの、世間の聞こえや評判を示す「世」に対する意識は、ほとんど描かれていないことも　特徴的　とされる。

空蝉の「身」の内実は、

「数ならぬわが身」

＝（人並みではないわが身）

という境遇と連動した　恒常的な身意識から　源氏との関係を通して、空蝉固有のわが身の意識が形成される　という指摘もある（倉田実）。「身のほど」を強く意識した女性としては、他に　明石君が思い浮かぶ。彼女は、世間的に低い　と断じられざるを得ない「父親が　無位無官の前国司」という身分と、「大臣家と中務宮家の血を引き、教養も嗜みも自信がある」という内心に秘めた　並々ならぬ自尊心との葛藤に悩みながらも、卑下に徹して生き　六条院に　一定の位置も占めた。明石君にとっての「身」意識は、自ら認めようとしない世間を測り、自らの努力や譲歩によって、調和しながら、一家の悲願である后と東宮を出す為の　重要な要素であったのである。

空蝉の場合も、すでに定まった受領の後妻という「身」を、守るための拒否ではあっ

たが、その地位や身分が　本人にとって、何ほどでもないことは、最初から　分かっている。また、軒場荻のように　源氏との関係を隠して、日常の生活を続けることは、源氏に多くを負う　功利的な受領の一家の中では、不可能ではなかったかも知れない。それでも、空蝉が　拒否を続けたのは、行きずりの相手には、納得出来ない　誇り高い内心と、恋着の強さ故に、人一倍　飽きられるのを恐れたことがあろう。若い源氏に　飽きられた後の　女の悲しみと恨みは、この後、六条御息所が　体現し、遂には　自ら　伊勢に下っているのである。空蝉が　最後に　二条東院に入ったことが、志を通せなかった　として近代以前から、不審の目で見られたことは　前に　紹介した。空蝉は、伊予介が老衰で死んだ後、継子の紀伊守の求愛に悩んで、出家する。その際に、紀伊守が　腹いせに「出家したところで、どうやって　生活する気か」と　言ったとある。空蝉は、生存の危機を顧みず　強い拒否として出家したのである。逆に　そのような空蝉が、暮らしの援助欲しさだけで、二条院に入る事は　考え難いのである。

　むしろ　源氏には、恋着を持ち続けていた故に、他の男には　曲げなかった節を　尼として　男女関係を斷つという　厳しい条件つきで、曲げたのだ　とも考えられるのである。

　「初音」の帖で、空蝉が、二条東院の生活を、「報い」と「懺悔」に明け暮れているというのも、源氏への拒否の根底に　恋着があることを自覚し、ある意味で　自分のことしか考えなかったことへの、「報い」であり「慙愧」なのであろう。

　空蝉については、末摘花との対照が　しばしば論じられる。「末摘花」の帖でも、その振舞や心用意が、末摘花と対照的に思い起こされ、

「げに品にもよらぬわざなりけり」

＝（ほんとうに、女の出来不出来は、身分には　関係のないことであったのだ）

　と　源氏が　改めて納得しているのである。後に「玉鬘」の帖の、衣装配りの際には、尼姿に似合う人として、「青鈍（あおにび）の細長」という衣装を贈られたが、末摘花は、其の愚昧を翻弄されるかのように、似つかわしくない鮮やかな「柳襲」の衣装を贈られる。「初音」の帖でも、末摘花の　相変わらずの　間の抜けた対応に、辟易した源氏が、次に　空蝉の尼住まいを訪ね、その落ち着いた様子や　昔にまさる奥床しさを感心しているのである。なお　この「青鈍」は、尼装束に　よく用いられる　僅かに青みを含んだ灰色で、「青鈍の細長」は　贈り物には　あまり　使われない。平安文学でも　ここの　一例だけ、また現実に　行事の際の引き出物として　史実に現れるのも、「小右記」に一例だけで、永祚元年（一九八九）十二月二十三日の条に、「青鈍綾細長」とある　との指摘もある。

　この対比から、空蝉を賜姓源氏と見る説も　前項で触れた。物語は、宮家の出という身分の高さに追いつかない　愚直な末摘花に対して、身分も庇護もない境遇で、容貌も地味な上、出家して　女性として、源氏を惹き付けることも出来ないはずの空蝉が、ここまでの待遇を源氏に促すものは、その心栄えである　ということが繰り返し描かれる。

「初音」の帖の　この場面では、源氏が
「松が浦島を　遥かに思ひてぞ　やみぬべかりける」
＝（心ばせある尼の住むという松が浦島…空蝉…に　遠くから思いを寄せるだけにしておくべきでした）
と　語りかけている。これは　古歌「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり」（後撰集・素性法師）を踏まえた表現である。尼となった人への常套句ではあるものの、源氏物語で、この表現が、印象的に使われるのは、「賢木」の帖で、考察された　両者の繋がりが、源氏の自覚の有無は別にして、ここに到るまで　意識されているといえよう。藤壺もまた、源氏との間に、子をもうけながらも、彼を　拒み通して　没するのである。
「初音」の帖の、登場を最後に、空蝉は　物語からは姿を消す。但し、源氏物語最後のヒロイン浮舟が　やはり薫を　拒み通す。「夢浮橋」の帖では、空蝉物語で用いられた歌言葉や、「紀伊守」「常陸介」といった名称が　散りばめられ、文使いの弟が、「小君」とよばれたりしている。浮舟も受領出身で、男君を拒むという設定だけでなく、物語取り＝（源氏物語の他の部分から取り込む方法）の　可能性も論じられている。
ここには、物語のパターンとしての再利用という面のほかに、空蝉の「拒絶する女」の形が、物語の奥深くに沈み　結末にまで、影響を与えた　と見ることも出来る。ちなみに、「源氏を、受け入れる」というパターンとしては、夕顔・花散里などが上げられる。空蝉は　物語を貫く大きな女性の類型の基として、重要な役割りを占めた　と纏めることが出来よう。　　（岡部明日香）

１８．夕顔　ゆうがお

Ａ．その生涯

頭の中将は、「雨夜の品定」の、女性論議の際、ある女性（夕顔）と愛し合い、娘まで儲けたが　本妻に脅迫された　彼女は、突然に　姿を消してしまった　と語る（「帚木」）。
＊　源氏は、六条の高貴な女性（六条御息所）の許に通う途中　五条に住む　病褥の乳母を見舞った夕方　白い花（夕顔）の咲く　隣家の女性（夕顔）から　白い扇を贈られ、

歌の贈答をする（「夕顔」）。
＊　源氏は　夕顔が、頭中将の愛人であったらしい　との惟光の報告を受け、たいそう興味をそそられ、身分を隠して　その家に　通い始める（「夕顔」）。
＊　八月十五夜、源氏は　夕顔の宿に泊まる。隣近所の身分の卑しい人々の生活を、もの珍しく思う。が、夕顔は　そのような　近隣の気配には　無頓着であった（「夕顔」）。
＊　源氏は翌朝　夕顔を、廃院（六条辺りの　某（なにがし）の院）に連れ出し　甘美な一日を　ゆったりと過ごすのであった。が、夕顔は　自分の身分や素性を　明かそうと　しないのである（「夕顔」）。
＊　夕顔は、宵を過ぎる頃、俄かに　物怪（六条御息所の生霊？）に襲われ、急死してしまう。十九歳の若さであった。彼女の遺骸は　惟光の手によって　東山に運ばれ　埋葬される（「夕顔」）。
＊　愛する夕顔を失った源氏は、瀕死の重病に倒れるが、その後、夕霧の侍女である右近から、夕顔は　頭中将の愛人・常夏の女であり、三歳の女の子（後の　玉鬘）がいた　という　素性を聞く。（「夕顔」）。
＊　多くの歳月が流れた。源氏は　可憐であった夕顔のことを　忘れることが出来ないでいる。その後、右近が　偶然のことに、夕顔の忘れ形見の娘・玉鬘と再会した事を知り、引き取って育てよう　と思う（「末摘花」）。
＊　源氏は　夕顔が生きていたならば、明石君と　同等の扱いをしていただろう　と当時を思い出して、紫上に語る（「玉鬘」）。

B．物語における位置・準拠

源氏物語には、帖の名と　女性の名が、結びつき、その女性を主人公とした短編的は面白さの目立つ帖が、見受けられる。「夕顔」帖は、その典型であるが、その後も　彼女の思い出は、「末摘花」「若紫」「玉鬘十帖」と、物語を繋ぐ発端になるのである。

「雨夜の品定」で、中流以下の女性に興味をおぼえた源氏が、空蝉の次ぎに交渉をもったのが「夕顔」であるが、その出会いは、偶然に満ちている。乳母の見舞いという状況でなければ、源氏が、五条辺りという　庶民に近い町に、降り立つことはなかった。夕顔も　頭中将の正妻に　迫害されての逃亡生活の中の　方違えという状況であったからこそ、源氏の乳母の隣家に　来ることもあったのである。

上流貴族の生活空間は、宮中から　一条・二条・三条近辺で、庶民の町の雰囲気が　漂い始めるのは、五条周辺からであった。帖の名と　彼女の名になっている「夕顔」は、貴族の邸宅よりも、庶民の庭先に植えられる　実用植物であった。その為　源氏は、何の花は分からず、随身との問答になったのである。ただし、五条は　源氏の乳母や右近の里もあり。貴族と無縁のところではなかった。これに対して　上京したばかりの玉鬘とその乳母一家は、九条に仮住まいをしていた。周囲は、市の人々の住処で、とても　上

流貴族への伝手はなさそうだ　と嘆いている。都の北に位置する内裏から　離れるにつれて、貴族社会からも　遠ざかってゆくことが分かる。なお、世を退いて　風雅に生きる六条御息所が住み、また、「世の決まり」を超越した源氏が、未曾有の邸宅を造営したのは、六条である。夕顔の怪死の舞台となった、「某の院」は、源融（みなもとのとおる）・（八二二～八九五）の別荘・河原院が、準拠とされる。実存の河原院も　六条にあったとされ、後には、「河原院説話」という一群の怪異譚が、　伝承されている。その為、六条は　文学上、日常を超越した「異境」のイメージが、付与されている。

こうした要素を受けて、「夕顔」の造型には、日本の　三輪山説話や　河原院説話、唐の伝奇小説「任氏伝」の影響（新間一美）、が　指摘されている。（詳しくは　次ぎの項で）。

夕顔は、三位中将の娘で、早くに親を亡くし　頭中将の正妻から、圧迫されていたが、その意味では、王朝貴族社会の厳しい現実を背負っている。しかし、源氏の

「いづれか狐なるらんな」

＝（私と貴方、どっちが狐で、騙し合っていることやら）

という言葉のように、素性のよく分からない謎めいた美女の　幻想的な恋が、興味を掻き立てる様子になって居るのである。その後、急転直下、夕顔は、連れ出されて「某の院」で、物怪に、取り殺されてしまうのである。

この　物怪の正体も、廃院に巣食う妖怪という説から、冒頭の「六条わたり」の高貴な女性の　生霊まで、見方が一定しない。六条の女性は、「葵」の帖になって、夭折した先の東宮の未亡人で、「六条御息所」と称される尊貴の女性と説明されるが、「夕顔」の帖時点では、後の行動や性格との一致は見られても、まだ　その正体は、明らかにされていないのである。人物の造型が　物語初期では、まだ固まっていなかった事を示す例として、興味深い問題である。

Ｄ．人物評価の歴史

夕顔は、特に　近代以降の研究史では、「内気な薄幸の女性」から「遊女」（円地文子）。「さすらいと巫女性」（原田文子）。「コケットリーとしたたかさ」（今井源衛）。という論まで、多様な読みを喚起する女性である。

一方、「無名草子」では、

「夕顔こそ、いといとほしけれ」

＝（夕顔こそ、とても気の毒で　哀れな女性です）

と　評価し、娘の玉鬘を、

「母にも似ずいみじげな娘」

＝（母親にも似ない、しっかりした娘）

と　言っているところからして、懸命さよりは、薄幸の哀れみが　際立つ女性、と捉

えていることが　分かる。また。「夕顔」の帖自体も、
「一筋にあはれに心苦しき巻にて侍るめり」
＝（一筋に　しみじみと、哀れさをそそられる巻のようですね）
　と　評価されている。時代は前後するが、「更級日記」でも、浮舟と並んで夕顔は　悲劇のヒロインとして、憧憬の対象になっている。
　もともと「帚木三帖」は、空蝉と夕顔の物語であるが、「拒否する女」の空蝉に対して、「変異を受け入れる女」夕顔　という対照があったことは、しばしば指摘されている（増田繁夫・他）。
　夕顔は、「雨夜の品定」では、頭中将が「常夏の女」として語っている女性である。その際、気弱さや慎ましさが、頼りがいのない女として、頭中将には　否定的に扱われたが、後の　源氏には、可憐な優しさ　として、映った　という指摘もある（森　一郎）。夕顔の死後、乳母子にあたる右近が、夕顔の素性や　五条に仮住まいするに至った経緯を　源氏に打ち明けて語るが、そこで、初めて　源氏が　正体を明かさないことを恨み悲しんで居た事が分かる。逆に源氏は、夕顔が　正体を
　「海人の子なれば」
　＝（宿の定めない　賤しい漁師の子のようなものですから）
　と言って　教えてくらなかったことを、訝しんでいたのである。
　この話にも　共通するが、自らを語らない夕顔の人物像は、ことが終わった時に　周りの者によって、さまざまに語られ、評価される面を持っている。
　また、物語の構成として、「夕顔」の帖は、さまざまな説話や唐の文学を　積極的に取り入れ、こうした複数の「プレテクスト」の集成から、結果としての夕顔の死が導かれる　との指摘もある（土方洋一）。
　他者によって語られる人物像と、　取り込まれた先行文学の要素の数だけ、夕顔の人物像は、さまざまに捉えることが　出来よう。その中でも、話の重要な部分をなす文学と、夕顔の人物像との関連にも、多くの説がある。
　即ち、日本固有の説話との関連に付いては、蛇守が、巫女である姫のもとに　姿を隠して通ったとされる「三輪山伝説」が、源氏が　正体を隠し　覆面をしたまま、夕顔と馴染み　逢瀬を重ねた　下敷きになっている、との説がある（藤井貞和）。これは、夕顔の巫女性を取る論にも繋がり　三輪山伝説で、神に交わった巫女は、男の正体を知ると　引き換えのように、横死を遂げる（箸墓伝説）との話型から、夕顔の運命もまた　その形を踏んだものとする。また　彼女の死んだ場所「某の院」にまつわる河原院伝説には、宇多上皇（八六七～九三一）が、愛妃である京極御息所と　この院に遊んだところ、源融（みなもとのとおる）の亡霊によって、御息所が気絶した　という挿話が含まれる。これは、「紫明抄」の注釈では、京極御息所は、死んでしまっことになっており、源氏物語との類似が　一層濃くなるのである。
　なお、源融は、皇族出身の左大臣であった。源氏のモデルの一人に擬されており、河

原院も　荒廃する前は、風流な　塩釜の景色の再現で知られ　六条院のモデルとも言われている。それが、融の死後、子孫によって　宇多上皇に献上されて　離宮となり、前述の挿話に繋がったのである。但し、源氏物語が書かれた十一世紀初頭には、河原院は、完全に荒廃していた　とされる。

中国文学との繋がりについては、唐の伝奇「任氏伝」が、よく指摘される（新間一美）。任氏は、狐の変化した美女であるが、街中で知り合った　鄭六という貧乏な書生に　妾として　よく仕え　不思議な能力で　彼を助ける。しかし、夫が　何気なく連れ出した小旅行の途路、馬嵬（ばかい・楊貴妃終焉の地）で、犬に追われて、狐の正体を現し、咬み殺されてしまう。この伝奇は、散文形式だけでなく、「任氏行」という　楽府体の詩文にも詠じられた、日本に伝わったのは、「任氏行」だ　ともいわれている。この「任氏行」自体は、中国でも散逸してしまったが、日本の朗詠句集「千載佳句」に、二句だけ　アンソロジー（anthology=選集・詩選集）として　残っている。

夕顔に対して　狐という言葉が　源氏によって、本文で語られる事は、既に　紹介した。夕顔の白い衣装（白き袷）と、任氏の白い装束との関連や、大都会に並存する怪異との出会いといった　構成の類似も、指摘されている。また、「任氏伝」・「夕顔」の両者に共通する、「長恨歌」との関連（土方洋一）は、源氏物語の根底に流れる「長恨歌」の　強い影響からも　重要な要素　といえよう。なお、この「任氏伝」は、浮舟との関連も指摘されている。詳しくは、浮舟の項　参照。

さらに「夕顔」に「遊女」を見ようとする背景には、女から　和歌を詠みかける、しかも、お忍び歩きの貴人に「あなたは　源氏でしょう」と、態々言うという、当時の貴族女性の　常識から逸脱した　大胆な行動がある。そのため、和歌の作者についても、夕顔自信ではなく、女房たちの　代作とする説もある（源氏物語提要）。

しかしながら、和歌の贈答の後、夕顔自身も　源氏を受け入れているのは　確かであって、そこから、巫女と遊女との歴史的な親近性、白い花への問いかけの旋頭歌が、遊女への問いかけに　容易に転ずるということなどから、遊女・娼婦・夕顔の側の　積極的な働きかけ　といった解釈が出てきた。

ただし　このような人物像の分裂に、疑問を感じ、最初の和歌は、夕顔の侍女たちが、源氏の一行を、頭中将と間違えて　女主人の居所を知らせようと送ったもので、それが源氏の手に入ったために　二人の交渉が始まったのだ　とする説（黒須重彦）がある。また、夕顔の白い扇にも、斑婕妤（はんしょうよ）の故事（斑婕妤は、漢の武帝の愛妃、才色兼備の女性として　寵愛を受けたが、後に　淫乱で美貌の趙飛燕姉妹に、その座を奪われ「秋の扇」のように、用済みになると棄てられる女の悲哀を詠じた「怨歌行」を作っ人物、を　踏まえた　とする説（黒須重彦）もあり、内気で　慎ましく、悲しみを秘めた人物像の統一を読もうとする向きもある。

また、夕霧は、「後妻（うわなり）打ち」の犠牲者であって、その物語は、かって桐壷更衣と　弘徽殿女御の物語をなぞり、夕顔を　取り殺した妖怪も、六条御息所に限ら

ず、源氏の寵愛を奪う　新しい女を怨む女達の　怨念を代表したものである　とする説（土方洋一）。土方氏は、夕顔との交渉を通して、社会的秩序に反しても、一人の更衣を愛し抜こうとした父帝の　血脈が　源氏にも、流れていることが　確認されたことを考察する。

夕顔の生涯は、「夕顔」の帖で、終わるが、娘として　玉鬘が、残り、後に　十帖に及ぶ物語「玉鬘十帖」を　繋げる。この　夕顔の娘については、「宇津保物語」の俊蔭の娘・仲忠親子の物語に基づく　とする説（村井順）がある。そこから、夕顔の帖の時点で、「玉鬘十帖」の構想まで　出来ていたとする説（高値和子・田中隆昭）も出てきた。その為、夕顔の帖を、玉鬘十帖の　序章と評価する見方（高橋和夫）、と、夕顔物語を　固有の話と認める見方（稲賀敬一）とがある。この問題は、夕顔物語の評価と位置づけにも拘わってくる。

さらに、夕顔の帖は、「帚木三帖」の閉じ目として　有名な長い草子地を置いて、二人の女性の物語を　源氏の隠し事として、語り収めるのである。とはいえ、源氏は「夕顔のつゆのゆかり」＝（儚く死んだ　夕顔を思い起こさせえる女性）を求めて、末摘花や若紫に出会うのである。空蝉物語と比べると、意識して　後々の物語の本文で、夕顔への追憶との関連に言及するのも、夕顔物語の　特徴なのである。

D．人物の特色

夕顔の人物像に対する　多様な解釈は、前項で　紹介した通りであるが、空蝉が　最初の関係は別としても、源氏を拒むことで、物語を展開させるのに対して、夕霧は、源氏を受け入れることから　物語が始まる女性である。

その内面の葛藤は、源氏や　先の恋人頭中将にも　理解されない部分が多いが、夕顔としては、主に　詠歌を通して　度々　苦衷を訴えていた、との指摘もある（吉見健夫）。それが　男に通じないことで、儚げで　理屈抜きの情の柔らかさを持った女性　と見ることが多い。

「帚木三帖」は、宮中で成人した源氏が、中川や五条・「某の院」といった場所に　行動範囲を広げてゆく物語である。夕顔物語の場合、五条という　貴族社会の近縁にある「街」に　潜む　非日常的な恋との出会いを描いている。しかし、夕顔の帖は、多くの浪漫的な要素のからみで　出来上がっているわけではなく、源氏物語全体を貫く　王朝貴族社会の現実や、男女の恋の懸隔なども、要所に書き込んでいる。

源氏は、五条の大路での、和歌の遣り取りから程なく、夕顔の許に通うようになる。手引きをしたのは、乳母の息子「乳母子（めのとご）」と　忠実な従者である惟光朝臣であった。

夕顔に出会って

「あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなくなど思ひわづらはれたまへ

ば」
＝（不思議な程に、のめりこんで、別かれた朝から　また逢うまでの昼の間だけでも、彼女と離れているのが、気が気でないな　と思っておしまいになられたので）、
　と　語られる程の惑溺をした。それにも拘わらず、彼女の許に通う時、ずっと　覆面をしていたという。本文では、
　「さまを変へ、顔をもほの見せたまはず」
　＝（身なりを何時もと変えて、顔も　ちらっともお見せにならず）
　「顔はなほ隠したまへど」
　＝（顔はまだ　隠していらっしゃったが）
　と　ある。契りを結んでも、覆面を取らず、名のりもしなかったのである。これは、前項で紹介した　「三輪山説話」や「任氏伝」の記述が、影響した為と解釈されるが、夕顔との関係からは、日常的な制約や、「しきたり」を超越した　刹那的な　情熱的な恋の様相を読むことが　出来るであろう。
　但し、夕顔は、こうした源氏の振舞に、素直に従いながらも、内心では、
「なほざりにこそ紛らはしたまふらめ」
＝（いい加減な軽い関係のつもりで、名乗りも忘れた振りをして、紛らわしておいでなのでしょう）。
　と　悲しみ、彼女なりに、男の心を測っていたことが、右近の話から　明らかになる。
　源氏の見た　非日常性や　恋愛至上といった「夢幻の恋」の要素と、夕顔が背負った現実や　内心の煩悶、和歌を通しての　届かなかった訴えとの　食い違いを底流させたまま　物語は進み、彼女の突然の横死によって、ようやく　源氏は　夕顔の煩悶を知るのである。
　源氏は、この時点までに、藤壷への恋を秘めて成人し、葵上と結婚し　六条の高貴な女性を　通い所としている。さらに　前の　空蝉の帖の　時間軸とも重なるが、空蝉とも逢っている。これらの女性達は、理性的で、容易に　源氏に全てを明け渡さない。その為　夕顔のような　気の置けない「素直な女性」に夢中になったのだ、という解釈が受け入れられている。
　しかし、源氏が、本当に　夕顔を　気の置けない関係だ　と考えていても、覆面までして通うというのは、当時の　一般的な　通い関係から見ても、異様な用心である。夕顔が　推測したように、真面目な通い所とは考えず、身分が知れることでの　煩わしさを　避ける為に　そうしていたとすれば、夕顔同様、やはりこの物語には、切っても切れない体面や　日常との関係が、描きこまれている。夕顔に溺れながらも、現実を見失わない部分は、残している。その意味では、王朝の閉鎖的な貴族社会のしがらみは、二人の生から　切り離せない、深刻なものである。先行文学作品を取り入れた「非日常性」や「虚構性」の舞台装置も、所詮は、束の間の逸脱ということになるが、それが　一番よく分かるのは、夕顔の死後から　葬送までの部分である。

夕顔の横死は、その正体が　何であるにせよ、超自然的な怪異現象によるものであった。しかしながら、その死という現実は、源氏を　醜聞によって　社会的に葬り去るに充分な危険性を持つものとして、秘密裏に処理される。源氏は　嘆き　呆然としながらも、乳母子の惟光朝臣の　指示と才覚によって、夕顔を人知れず「某の院」から運び出し、縁故を頼って　東山で、密かに荼毘にふすことに　同意するのである。生き証人の右近を、二条院に引き取り、夕顔の五条の隠れ家にも、顛末は　知らせないのであった。

なお、この間に、惟光朝臣に焦点を当てて、源氏の不幸を、無意識的に誘発し、（惟光は、夕顔と源氏との間を、事実上　取り持ち　手引きをしたが、夕顔が死ぬ時には、たまたま　源氏の側を離れていた。）それを収拾するまでを、一手に引き受けた　中心的な「中の品の男の物語」として、考える論　もある（勝間田逸郎）。

この処置が、源氏を守った　その代わりに、玉鬘の　以後二十年近くに及ぶ流離を引き起こす。その意味では、非情な処置であった。これには、実務的な手腕、それと表裏一体の　主人第一の　排他的功利主義といった　家司・受領クラスの中・下流貴族の特性が　強く描かれている。こうした点では、空蝉物語との対比も　見て取れるのである。但し　伊予介一家は、そうした部分を、一枚上手の源氏に　利用され勝ちであった。

さて、夕顔の死後　源氏は、素直な女性を

「わが心のままにとり直して見んに、なつかしくおぼゆべき」

＝（自分の思い通りに教育して、妻としたら、夫婦の情も深まるに違いない）

と、右近に述懐し　同時に　夕顔の娘（後の玉鬘）を、

「人にはさとは知らせで　我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなん」

＝（周りに　そうとは知らせないで、その子を　私のところに連れてきてくれ。跡形もなく　死んでしまった夕顔の形見として育てたら、さぞ　嬉しいことだろうから）

と、依頼しているのである。玉鬘十帖で、この約束が果たされることになるのであるが、直接的には、この後の「若紫（後の紫上）」との出会いと、引き取って　未来の妻として養育するという　発想にも　繋がるのである。

若紫（紫上）は、勿論「紫のゆかり」であり、藤壷の代わりに　源氏によって、見出された。そのきっかけは、「桐壷」の帖の　末尾で、桐壷帝のお声がかりで、修復された二条院に、源氏が

「かかる所に思ふやうならむ人を据ゑて住まばや」

＝（このような所に、（例えば　藤壷宮のような）思い通りの女性を迎えて、一緒に　暮らしたい）

と　願ったことから始まり、「帚木」の帖の、「雨夜の品定」の折の　左馬頭の発言

「ただひたぶるに児めきてやはらかならむ人をとかくひきつくろひては、などか見ざらむ」

＝（ただ一途に　無邪気で　素直な女性を、何かと教育して　欠点を直して　妻とし

たら決して　悪くはないでしょう）

　といった考えが　下敷きになって居るのである。とはいえ、玉鬘を見出す以前の　十七歳の源氏が、幼い　女児を引き取るといったことを、読者に対しても、自然に　納得させる　布石として、実現はしなかったものの、「夕顔の娘を養育する」という計画を、提示した　とも考えられるのである。

　ただし、「桐壷」・「若紫」の帖と、「帚木三帖」の成立の前後が、不明確な部分があり、必ずしも　現行の帖の順に　成立した　とは　言い切れないのである。これらの帖を繋ぐ糸として、「源氏の理想の妻（候補）探し」の物語が、散りばめられていることは、見て取れるのである。なお、「夕顔のような女性を探そう」として、なるほど、愚直なまでに素直ではあるが、醜く　滑稽で、常識外れに古めかしい女性に逢ってしまうのが「末摘花」の帖なのである。

　夕顔との出会いから死までは、独立性の高い物語ではあるが、子供の存在によって、長く大きな物語に　組み込まれてゆく仕組みが　見て取れる。

　空蝉を初めとする「拒否する女」の物語の系列と、並ぶ形になって居るのである。

（岡部明日香）

１９．明石君　あかしのきみ

Ａ．その生涯

＊　明石入道は、一族の繁栄を願い　娘（明石君）を　結婚によって　立身出世をさせようと、勤行に励む。その噂を　源氏が　耳にする（「若紫」）。

＊　明石入道は、源氏の須磨への退去が、明石君との宿縁と思い、二人の結婚を計画し、源氏を明石に　迎え入れる（「須磨」・「明石」）。

＊　明石君は、自分が　受領を父とする　地方の田舎娘に過ぎない事を自覚し、源氏との結婚は、身分不相応と思い　悲しむ（「明石」）。

＊　初夏の　夕月夜、父入道は、娘との結構・娘への期待を、源氏に　申し上げ　伝える。明石君は、源氏からの手紙に　ためらい、翌朝　返事を書くが　身分の格差を　思案する（「明石」）。

＊　八月十三夜　月明かり。父入道は、源氏を　娘の住む　岡部の邸に招く。その後　源氏は　人目を忍んで　明石君の許に　通うようになる。が、紫上への気兼ねから、明石君への訪問も　控え気味である（「明石」）。
＊　あくる年、源氏は　赦免されて　京に帰ることとなる。が、その頃　明石君は、既に　源氏の子を身篭っており、深い悲しみに沈む。別れの日、源氏と二人で、琴を弾く。形見の琴を贈られ　再会を約束する（「明石」）。
＊　明石君は、源氏が　明石の浦を去る朝、贈答の歌を詠み交わし　涙のうちに別れる。源氏は　帰京後、直ぐに　明石君へ、手紙を贈る（「明石」）。
＊　明石君は、翌年三月十六日　女の子（後の　明石中宮）を生む。その知らせを聞いた源氏は、乳母を遣わし、御佩刀や祝いの品々を贈る（「澪標」）。
＊　秋のある日、明石君は、住吉明神に参詣し、盛大な　源氏一行を　遥かに見て、身分の格差を嘆く。その日は、祓いのみにて済ませようと、浪華へ　舟を回す。一方　源氏も　明石君が　参拝に来ていた事を知り、歌の贈答をする（「澪標」）。
＊　明石君は、二条東院に、迎え入れたい　という源氏からの手紙に、心を決めかねている（「松風」）。
＊　明石君は　姫君や母の尼君と一緒に、京都嵯峨の大堰の別邸に　移り住む（「松風」）。
＊　明石君は　三年ぶりに　京都大堰の別邸で、源氏と再会する。源氏は　姫君が、美しく成長した姿を見て　大いに喜ぶ。が、嵯峨への訪問は　ままならない。嵯峨の御堂の念仏会などの機会などに　訪問するのみである（「松風」）。
＊　明石君は、姫君を　紫上の養女として　引き取りたい　という源氏の　申し出でに悩む。が、母の尼君の説得を聞き入れ、姫君を　紫上に　渡す事を決意する（「薄雲」）。
＊　明石君は、断腸の思いで、娘を　源氏に託し、彼の　折少ない訪問を　心待ちにしながら　寂しく過ごす（「薄雲」）。
＊　八月　源氏が　かねてから経営していた六条院造営が　完成する。明石君は、他の方々が　移った後、目立たぬよう　西北の町（冬の御殿）へ　入る。「乙女」）。
＊　紫上は、源氏の　明石君への　心配りや待遇が、格別である事を、快く思わずにいる（「玉鬘」）。
＊　明石君は、姫君の裳着の儀式への列席を、世間の噂への気兼ねから　辞退する（「梅枝」）。
＊　明石君は、紫上の勧めもあって、娘の入内の折の後見役となる。入内後、明石君は、娘（明石女御）と　対面し　感動の涙を　とめどなく流す「藤裏葉」）。
＊　明石君は、娘の　明石女御が、懐妊したので、六条院の東面の部屋への里下がりに同行する。出産間近の娘は、明石君の住む北の町に移される。明石君は、懸命に世話をしつつ　わが身の宿世を　しみじみ思う（「若菜上」）。
＊　三月十日過ぎに、明石女御は、皇子を　生む。明石君は　産湯の介添えなどをする。随行の　某典侍が、明石君を、気品が有り　素晴らしいお方　と　心の内に　思う（「若

菜上」)。
＊　皇子は　日増しに成長し、明石君と紫上の仲も、睦ましい。明石君の父・明石入道は、年来の望みが達成されて、奥山に入山し、最後の手紙と、住吉神社への願文とを、明石君の許に、送り届ける。明石君と尼君は、悲しみに暮れる（「若菜上」)。
＊　明石君は、娘の生んだ皇子の世話役として、自らを卑しく思う。住吉神社に願解きの為　参詣する源氏に　つき従う。後を追って車に乗った尼君に向かって　明石君は、娘明石女御が　国母となるまで、気を緩めてはならぬ　と諌める（「若菜下」)。
＊　正月二十日過ぎ、明石君は、六条院で催された「女楽」で、琵琶を　見事に演奏する。後に、源氏から、花橘の　花も実も折り取ったような美しさ　と評される（「若菜下」)。
＊　明石君は、晩年、紫上の「法華供養」に列席し、その席で　歌を詠み交わす。娘の明石女御と一緒に　病む紫上の見舞いに　訪れる（「御法」)。
＊　源氏は　最愛の女性・紫上亡き後、明石君と語り合うものの、心は慰められないでいる（「幻」)。
＊　源氏の　亡くなった後、明石君は、娘の中宮の生んだ皇子達を　育て上げ、幸せな晩年を送る（「匂宮」)。　　（吉野・西沢）

B．物語における位置・準拠

「澪標」の帖の、宿曜の占いで、源氏の子供たちが、「帝・后　並びて生まれたまふべし」と予言されていたように、明石姫君が、中宮になることは、冷泉帝実現と並んで、源氏の栄光の象徴であった。明石姫君の母の明石君は、この栄光を実現してゆく為の須磨流離譚構想に　不可欠な中心人物に他ならない。物語の長編的構想が、最初に明確に打ち出される「若紫」の帖に、一つのエピソードに過ぎないながら、彼女が登場するのも　頷けるのである。明石君の活躍の軌跡は、「若紫」以降の、所謂　長編的　各帖を中心として、源氏亡き後の「匂宮」の帖に至るまで、広範囲に亘っている。そのうち明石君に拘わる帖は、「明石」・「澪標」・「松風」・「初音」の　四つの帖に及んでおり、源氏物語に於ける　比重の大きさが窺えるのである。

当時　国内海運の　独壇場たる観を呈していた　瀬戸内海、その播磨国（兵庫県）明石浦は、淡路島を眼前にした、地の利から、　海上交通の　極めて重要な拠点の一つであった。明石浦と淡路島の間を隔てる明石海峡は　四キロにも満たない。この明石の地で、海運隆盛を約束する神としての　住吉大神が、深く信仰されていた事を考え合わせると、神の加護深き　裕福な受領の娘という　人物設定は、理解されるのである。因みに　父の為時は　紫式部誕生以前の　安和元年（九六八)、播磨権少掾に　任ぜられている。

大臣の血脈を継ぎながら、受領階級に　定着してしまった明石入道一家の歴史は、紫

式部の家系にも　通じているのである。紫式部は、摂関家を、代々継承した名門　藤原北家の出身であり、「堤中納言」と称せられた　父方の曽祖父兼輔は、「延喜の治」と称賛された　醍醐帝の御代（八九七～九三〇）における　文化隆盛の一角を担った人物である。兼輔の娘の桑子は、醍醐帝の第十三皇子である章明親王を儲けている。また、紫式部が　越前国（福井県）に　下向する　二十歳台前半まで、同じ邸内に住んでいたと思われる父方の祖母は、三条右大臣藤原定方の娘で、観修寺家（みしゅうじけ）＝（醍醐帝の生母胤子の父の藤原高藤から始まる一門）の　流れを汲んでいるのである。

明石君は、生き方においても、紫式部と通ずるところが多い。明石君の謙虚な精神は、紫式部の重んじた美徳の一つである。「紫式部日記」における　パフォーマンスの好きな清少納言への、痛烈な批判は　それを的確に物語っている。強い自制心により、忍耐と謙虚な態度を貫き通し、源氏の信頼を　かち得た　明石君の生き方は、夫の　藤原宣孝の妻の一人に過ぎず、「紫式部集」によって、垣間見られるように、夫の通いの少なさを　耐える時期もあった紫式部にとって、理想的自画像であった　といい得るのである。

Ｃ．人物評価の歴史

鎌倉時代の　物語評論「無名草子」の中で、明石君は、

「心憎く、いみじ」

＝（奥床しく、素晴らしい）

と　評されている。明石君に対する分析は、作者・紫式部の自画像としての側面からなされている。島津久基氏は、明石君を　紫上との比較において、次ぎのように捉えている。「「斯くありたき」作者自身が　紫上であるのに対して、「斯くある」作者に最も近い女性を、源氏物語の中で、私は　明石君に　見出すやうに思ふ」と。そして　明石君の内実に付いて、今井源衛氏は、「忍従と自己否定によって覆われたところの　明石君の、一種　暗鬱な人間像」であるとしている。権門との婚姻を、切に望みながらも、「召人」的な扱いを拒否し、かっての名門としての誇りを堅持する一方、源氏と自らの隔たりから　常に、「身の程」意識に苛まれる（阿部秋生）。この明石君の姿は、まさに名門藤原北家出身ながら、受領階級に沈滞してしまった紫式部、その人と酷似するのである。

こうした、受領階級としての物語に於ける、明石君の位置づけは、その呼称からも、窺える。明石君は、古来「明石上」として　親しまれているものの、物語中「上」と呼ばれた事例がなく、「明石の御方」に　留まるのである。故に、「明石上」という呼称は、正確さに欠けているとする阿部秋生氏の指摘は、最愛の娘・明石姫君を、紫上の養女とせざるを得なかった、正妻とは一線を画す　明石君の立場を　端的に　表わしているのである。「斯くありたき」作者の理想を　投影したものとも見做される紫上に対して、

明石君を、「斯くある」作者に最も近い現実的な女性として位置づける　厳しい制約・現実が　そこに見出されよう。

明石君に対する　内面的追求は、「一種暗鬱な人間像」と規定した　先の今井源衛氏の論に代表されるように、彼女の　悲観主義的傾向を照らしし出している。しかしそれは　同時に　忍従と謙虚の精神を育み　結果的に「心憎く、いみじ」（無名草子）と評された理想性も兼ね備えることとなる。彼女の強い　上昇志向の側面から、明石入道の請願（「若菜」～「明石」）・明石君の忍従（「澪標」・「松風」・「薄雲」）と、明石一門の栄華（「乙女」～「若菜上」以降）と、各帖における　それぞれの段階に応じて、如何に　両親と共に　栄華を獲得していったかを、説いた論（斉藤正昭）は、そうした彼女の理想性を　補完する一助となろう。

明石君についての考察は、おのずと明石入道へと導かれざるを得ない。入道の　特異で奇抜な前歴が、どれほどに、明石君に　大きな影響を落としているか、計り知れぬものがある（河北騰）からである。明石君において、貫かれる忍従・謙虚の姿勢も、父親の生き方の　延長線上に　生まれたものに他なるまい。物語中、

「世に似ぬ、ひが者」

＝（他者には見られぬ　偏屈者）

と　評されている明石入道の生き方は、一面、明石君にも　受け継がれ、彼女は、

「海竜王の后になるべき　いつき女」

＝（海竜王の后になるような　大切な娘）（若紫）

と、失笑を買っている。「身分の高い方は、自分のような者を、相手にすまいが、かといって、身分相応の結婚は、断固として拒否する。両親に　先立たれたならば、尼となるか　さもなくば　海の底にでもはいってしまおう」（須磨）。この自らの結婚に対する　悲壮な決意は、父入道と　彼女との願いが、当初より同じであった事を示している。しかし　その奇抜な入道像の背景には、当時の歴史的事実を踏まえた　屈折した自我構造の持ち主の　投影が窺われるのである。即ち、明石入道の個性と行動の奥底には、名門に生まれた者のみ知る　執念ともいうべきものがあり、自ら進んで播磨国（兵庫県）を志願し、そのまま　都に戻らなかったのも　彼なりの　勝算があってのことであった。安部秋生氏は、「一見しては、滑稽じみた偏屈者の背後に、やはり、平安貴族社会に、現に存在する事実を、ぎっしり　はめ込んでいたのだ、と言わねばなるまい」とし、貴種流離譚の根底にある　こうした現実的条件の設定に　着目しているのである。因みに、民俗学的観点からは、源氏の　須磨流浪を、貴種流離譚型の発想とするのに対して、明石君には、「水の女」＝（海の女）としての、形象が　読み取れる　という指摘がなされている（高崎正秀）。

この明石入道のもつリアリティは、明石君の　住吉信仰においても同様である。一家の　住吉大神への信仰は、明石浦という　地縁なくしては　あり得ない。（丸山キヨ子・秋山虔）。住吉信仰と明石浦との関係の深さは、かの「竹取物語」にも　反映されてい

る。かぐや姫をめぐる五人の求婚者の一人、大伴御行は、竜の首の玉を求めて　船出して難破するが、その漂着した先が「播磨の明石の浜」であり、「海竜王の后になるべきいつき女」と、明石君が評されていたことからも知れるように、龍神信仰でもある住吉信仰が、古来、隆盛していたことが　窺われるのである。

明石君の人物形象にも、住吉信仰の影響は大きい。明石の岡部の邸や、京の郊外に移り住んだ大堰の邸の風景、明石姫君との別れに際して　明石君の呼んだ和歌、そして、彼女が、最終的な居所とした　六条院西北の町…これら　何れの場面においても、「松」が用いられている。「松」は、明石君の　トレードマークであり、六条院における「冬の御方」という呼び名もそうした　イメージを言い換えたものと言えよう（高橋和夫）。その背景には　住吉信仰との密接な関連が、指摘し得る。住吉大神は、海神であるゆえに、浜辺の松と縁が深いことから、住吉の松は、数多く和歌に詠まれており、住吉大社の象徴的植物であった、また、風雪に耐えて　春の訪れを待つ｛松｝は、如何にも　明石君の生き方に相応しい（斉藤正昭）。

須磨流謫構想に　不可欠な中心人物である明石君は、須磨流謫以後においても、その重要性は減じておらず、二条東院構想に　大きく関与している。源氏は、二条東院造営に際して、明石君が住むことを心積もりし（「澪標」）、その完成時に、正式に転居を要請する（「松風」）。しかし　明石君は、それを拒否して、やがて新たに造営された六条院に迎えられ　結局、彼女の二条院入りは実現することなく終わる。この展開に対して、二条東院構想挫折説が唱えられ（高橋和夫）、この説は　現在も多くの人に支持されている（森藤侃子・姥沢隆司）。一方、二条東院への転居は、明石君自らの立場を不利にし、彼女の最も恐れた事態を招く危険性の高いことから、当初より　予定されていなかった　とする反論も　散見する（池田義孝・中村文美）。いずれにせよ、明石君の人物造型が、後の　六条院構想に　大きな影響をもたらす　動機となったことは　見逃すことが出来ないであろう。

Ｄ．人物の特色

源氏物語中で、玉鬘とならび　明石君の、地方育ちである女君　という設定は、特異である。

「古受領の沈める類」

＝（土着化した　元受領）、

という　ハンディは、彼女に　重く　のしかからざるを得ない。それは、結婚以前の、交渉段階において　既に始まっていた。源氏は、紫上への遠慮から　明石君のいる岡部の邸へ、自ら赴くことを渋り、逆に　彼女が　自分の許に赴くことを提案する　が、この提案が　どのような意味を持つかは、それに対する　明石君の　激しい拒絶ぶりが、何よりも　物語っているのである。即ち、その条件を飲むことは、源氏の　正式な妻と

して扱われる可能性を放棄し、一夜妻的な扱いに甘んることに　他ならないのである。結局、独り寝の寂しさに耐えかねた源氏が、岡部邸を訪れることによって、その危機は回避されるが、こうした源氏に対する危惧は、結婚以後も　絶えず　明石君を脅かすこととなるのである。それを　象徴するのが、「澪標」の帖における　住吉大社詣でであった。明石姫君誕生の年の秋、明石君の一行は　恒例の　住吉大社詣での際、同じく　住吉大社へ大願解きに参詣した　華々しい源氏の一行に遭遇する。自己の出自の低さに、強い劣等感を抱く明石君は、そこで、源氏との　身分落差を目の当たりにするにつけ、わが身の拙い運命を　一層痛感せざるを得ないのであった。

明石君の行動原理は、「ひが者」とまで呼ばれながら　一門再興に賭けた、父親の明石入道の影響下に　常にあった。上流貴族以外との結婚を拒む強い意志は、父親の意向そのものであったし、明石君が、結婚後　源氏の上京要請に対して、大堰川畔の別邸へ転居したのも、父の決断に従ったものであった。明石姫君が、三歳に成長した時点で、紫上の養女に迎える　源氏の提案には　抗しきれず、愛娘を手放すが、この決断も、明石入道の意を汲んだ　母明石尼君の助言によるところが　大きいのである。

明石君は、「うちとけぬ御有様」と評された　六条御息所と、雰囲気が似通っていた。明石君に　源氏が　抱いた　最初の印象は、

「ほのかなる気配、伊勢の御息所に　いとようおぼえたり」

＝（おぼろげに感じられる雰囲気は、六条御息所に　大層　よく似ていた）（{明石}）

と　ある。また、

「人ざま、いと、あてに、そびえて、心恥づかしき気配ぞしたる」

＝（人柄は、とても　気品があり。すっきりとした背丈で、こちらが気後れしそうな雰囲気をしていた）（「明石」）

とも　評されている。

明石君の　決して　源氏の正妻たり得ない「身のほど」＝（身分）を弁えながらも、六条御息所にも比せられる　誇り高さは、彼女の中に、深刻な葛藤を呼ぶ。最愛の娘である明石姫君との、幼少期での別れも、わが子の幸せの為ならば、あえて　忍び抜くという、したたかで　強い母性愛も、彼女の特質である。確固たる自意識をもちながら、献身と忍従とをもって、自分らの運命に　柔軟に対応してゆく彼女の生き方は、明石一門繁栄の物語に、単なる　サクセス（success=成功・立身・出世）ストーリー以上の　真実味を与えている　といってよいであろう。

物語中、明石一門が、これまでの地位を占めることになった　最大の理由は、恐らく作者紫式部個人の、明石一族への思い入れの強さ　に　求められるであろう。

明石君は、空蝉同様、紫式部の自画像に　最も近い女君である。明石君は、たとえば、「蜻蛉日記」の作者　藤原道綱の母のように、正妻時姫との対抗心を　剥き出しにするような事は、決してなかった。強い自我の持ち主でありながら、持ち前の自制心で、分を弁え、最後まで　正妻たる紫上との　良好な関係を保った結果、源氏からも、高く評

価されているのである。こうした　明石君の　妻としての有り方は、紫式部にとっても、理想的な自画像であったはずである。紫式部自身も、夫・藤原宣孝の死後、継娘との和歌の交流があることから、彼の妻たちとの関係は、おおむね円満ではあった。が、しかし　結婚当初には、他の通い所から、彼女の許に　立ち寄ろうとした夫に対して、きっぱりと拒否するという　自尊心の高さを表に出している（「紫式部集」）。家集には　また、夫の通いの少なさを訴える歌も　少なくないのである。

明石君の一門を称揚したのは、作者のみに許された特権であったといえよう。なぜなら、自己の全てを犠牲にしてまでも　一門再興を図ろうとする　明石入道父子の生き方は、同時に　紫式部の思想・人生観と　同質のものであった　と思われるからである。

紫式部の名門意識は、現実に対する　諦観・虚無感を植えつける一方、一家の繁栄を願う　強い上昇志向を生み出している。源氏物語の理念である「もののあはれ」が、この二方向の緊張感の上に基づいた　主として下降志向に即した思想・世界観である以上、上昇志向の側面が、物語の主流とはなり得ないのは、致し方あるまい。しかし、上昇志向は、下降志向に対し、ある意味で、より本質的でもある。紫式部が、夫の　藤原宣孝亡き後、彰子中宮方から　強い要請があったからとはいえ　気の進まぬ宮仕えを　最終的に決断したのも、幼い一人娘の賢子や　弟の惟規の将来の事を考えてのことが　大きかった　と推測される。彼女は、身内の人事にも　並々ならぬ関心を抱いていた。例えば、「紫式部日記」寛弘五年（一〇〇八）十月の条には、

「かねても聞かで、妬きこと多かり」

＝（事前に相談もなく、妬ましいことが多い）

という記事があり、彰子中宮の　若宮の人事に　関与出来なかったことへの　無念な思いが　読み取れるのである。

明石一門の繁栄は、そうした紫式部の　強い上昇志向の具現化であった　と考えられよう。そして、それは同時に　大局的に　紫式部と同じ精神構造を持つ　貴族社会を支える　受領階級一般の夢でもあったのである。それ故に、明石一門の繁栄の結末は、当時の読者に　特有のカタルシス（精神浄化）を齎したことであろう。

女君としての　華やかさは、紫上に一歩譲るものの、明石君　及びその一門は、源氏物語の長編的構想において、確固たる一翼を担っているのである。　（斉藤正昭）

２０．玉鬘　たまかづら

A．その生涯

＊　玉鬘は、三歳の時、母の夕顔が、行方不明となり、実は　死別した　と知らないまま、乳母とともに　筑紫（福岡県）へ　都落ちする（「玉鬘」）。
＊　玉鬘が十歳の頃、乳母の夫・太宰少弐は、何時か必ず　玉鬘を都に帰らせるようにと遺言して　他界する（「玉鬘」）。
＊　母の夕顔にも勝る美貌の持ち主である玉鬘には、求婚者も多かった。乳母は、父・内大臣の血筋を考えると、田舎者に　玉鬘を嫁がせるわけにはいかない　と考え、玉鬘を、乳母の孫と偽り　重い障害があるので、将来は　尼にさせる積もりだ　として、数ある縁談を　すべて断っていた（「玉鬘」）。
＊　玉鬘が、二十歳の頃、肥後国（熊本県）の有力者・大夫監の　強引な求婚に　進退窮まった乳母は、息子や娘と共に、玉鬘を連れて、肥前国（長崎県）を脱出し、ようやく上京し、九条の知人の家に　仮住まいする（「玉鬘」）。
＊　玉鬘一行が、長谷寺に参詣した際、夕顔と共に　行方不明になっていた右近と　偶然にも再会する。玉鬘は、右近から　母の夕顔が既に亡くなっており、源氏が　玉蔓をずっと　探し続けていたことを　聞かされる（「玉鬘」）。
＊　右近から　玉鬘発見の報告を受けた源氏は、大変喜んで、当面は　父の内大臣には知らせず、自分の娘として、六条院に　彼女を引き取ることにする（「玉鬘」）。
＊　花散里に　玉鬘の母親代わりを依頼する。玉鬘と対面した源氏は、その美しさに感動する（「玉鬘」）。
＊　源氏は、玉鬘に、蛍兵部卿宮や柏木が、強い思いを寄せているのを、面白く思いつつも、源氏自身も、才気溢れる美しい玉鬘に惹かれるのであった。時には、母夕顔の思い出を語りながら、彼女への恋心を告白して、困らせたりもする（「胡蝶」）。
＊　玉鬘は　蛍兵部卿宮が　訪問の際、源氏の　いたずらによって　放した蛍の光に姿を顕わにされ　宮の恋心を煽る結果になってしまう。さらにまた、言い寄ってくる源氏の行動を　不可解にも思うのであった（「蛍」）。
＊　源氏への感謝の気持ちから　次第に　彼を慕うようになる玉鬘は、野分の吹き荒れた翌朝、野分見舞いに訪れた夕霧に　源氏と寄り添う姿を　見られてしまう（「野分」）。
＊　玉鬘は、冷泉帝に　尚侍として出仕するよう　源氏から勧められるが、秋好中宮や、弘徽殿女御などに遠慮して　躊躇する。が、大原野行幸の際の、冷泉帝の　素晴らしい姿に　すっかり魅せられてしまった玉鬘は、心を動かされる。また　父の内大臣は、貫禄はあるものの、臣下の器である　と見てとり、更に　求婚者の一人　鬚黒は、好みではない　などと思ったりする（「行幸」）。
＊　源氏は　内大臣に　玉鬘が　彼と夕顔との間に生まれた娘である　と打ち明け、玉

鬘の裳着の際に　玉鬘（娘）と内大臣（父親）との対面が　行われる（「行幸」）。
＊　玉鬘は、冷泉帝への出仕について　報告に来た夕霧から　恋心を打ち明けられ、困惑する（「藤袴」）。
＊　鬚黒は、玉鬘に迫って、結婚を勝ち取り、天にも昇る気持ちで喜ぶが、意外な　事の成り行きに　玉鬘の嘆き悲しみは大きい（「真木柱」）。
＊　世間の人々は、鬚黒と玉鬘の結婚を　残念に思うが、内大臣は、玉鬘が出仕して、冷泉帝の寵愛を、異母姉妹の弘徽殿女御と争うよりは、将来性の豊かな　鬚黒の妻に収まってくれてよかった　と安心する（「真木柱」）。
＊　鬚黒と玉鬘との結婚により、鬚黒の北方と　長女・真木柱が、北方の実家に引き取られることになった　と聞き、玉鬘の心は、ますます沈む（「真木柱」）。
＊　玉鬘は、尚侍として出仕するが、冷泉帝に　彼女を奪われるのでは　と恐れた鬚黒は、早々に退出させ　自邸に引き取ってしまう（「真木柱」）。
＊　六条院から、玉鬘が　居なくなったことを悲しむ源氏からの手紙を読む玉鬘は、源氏恋しさに　涙するのであった（「真木柱」）。
＊　鬚黒の息子二人と、仲良くなった玉鬘は、やがて、自分も　鬚黒の子（男）を生む（「真木柱」）。
＊　玉鬘は、真木柱を　引取りたい　と望むが、北方の実家からの許しを得られない（「若菜下」）。
＊　鬚黒亡き後、玉鬘は、息子三人、娘二人と暮らしており、娘たちへの求婚者が多いので、誰と結婚させるべきか　迷っている（「竹河」）。
＊　玉鬘のことが　忘れられない冷泉帝からの申し出を受け、玉蔓は　長女を　冷泉院と結婚させる。玉鬘の長女は　女宮（冷泉院の娘）を出産するが、弘徽殿女御からの　激しい嫉妬を受ける（「竹河」）。
＊　玉鬘の長女に恋していた、蔵人少将は、残念に思い、玉鬘から　次女との結婚を勧められても　断る（「竹河」）。
＊　今上帝から　望まれて　尚侍として出仕した次女は、安穏に暮らしている（「竹河」）。
＊　玉鬘の長女は　冷泉院の男子を生んだことで、ますます　周囲から妬まれ、辛い日々を送るのであった（「竹河」）。

B．物語における位置・準拠

「玉鬘十帖」は、源氏の栄華の集大成ともいうべき六条院を舞台に　繰り広げられる物語である。源氏物語の中で、最も華麗な王朝絵巻的なこの世界は、玉鬘の結婚の行方を主軸として展開される。構想的には、玉鬘は、二条東院構想の段階で、紫上の養女
「思ふさまにかしづきたまふべき人」
＝（思うままに、大切に　育てなさるべき人）（「澪標」）

として、登場もあり得たが、頓挫した筑紫の五節の物語を　引き継ぐ形での　筑紫流浪を経て　美しく成長した後に、六条院へ迎え入れられる。これによって、より物語の求心力を高める結果となったのである。また、薄幸の夕顔の遺児が、どのような半生を辿ったか　という「帚木三帖」以来の　読者の期待に応えるものともなっているのである。源氏外伝としての役割りを担う玉鬘十帖は、所謂、紫上系に対して、単なる傍系の物語に留まらず　源氏物語の構造を　より重層的なものにしているのである。「匂宮三帖」においても、玉鬘、およびその一族の存在は、源氏亡き後の物語を　展開させる牽引力ともなっているのである。

鎌倉時代の説話集「古今著聞集」には、夕霧怪死事件のモデルともいうべき　エピソードが　残されている。ある月明かりの夜、具平親王（村上帝　第七皇子）は、寵愛の雑仕女「大顔」を、郊外へ連れ出すが、女は、物怪に襲われて急死した　とある。大顔は、具平親王との間に男児（親王の御落胤で、紫式部の叔父為頼の長男の養子となった藤原伊祐　か）を生んでおり、夕顔の遺児として登場する玉鬘との関連性が認められるのである。因みに　具平親王は、紫式部が、彰子中宮出仕後、道長から、

「そなたの心寄せのある人」

＝（具平親王家側から　贔屓のある者）（「紫式部日記」）、

として　見做されていた人物で、叔父為頼、父為時の　主家筋に当たるのである。紫式部自身も、彰子中宮出仕以前までは、この親王家に　深く関わっていた。「紫式部集」に散見する　青春期までの　彼女の交友関係を示す和歌は、そうした事実を物語っている　と思われる。

玉鬘の　筑紫下向の着想には、若き源氏所縁の女君である　筑紫五節（初登場は「花散里」）が、関連している。そして　その発想の原点には　青春時代、紫式部が、姉君と慕った女友達「筑紫へゆく人のむすめ」との友情、（「紫式部集」）の　投影があった。この女友達の下向先は、玉鬘が成長した肥前国（佐賀県・長崎県）であり、二人の贈答歌に詠まれている肥前国松浦の鏡神社（佐賀県）の名も、「玉鬘」の帖の中に、見える。また、一人の美しい女君をめぐり　展開されるという　玉鬘十帖の構成には　「竹取物語」のかぐや姫、「宇津保物語」の貴宮（あてみや）の影響が　著しい　とも言われる。

C．人物評価の歴史

鎌倉時代の物語評論「無名草子」に、玉鬘は、

「玉鬘の姫君こそ、好もしき人とも聞こえつべけれ」

＝（玉鬘の姫君こそ、好ましい方とも　申し上げるべきであろう）、

と　評されている。然し、玉鬘が、外見・容貌・人柄・気立ても、申し分ないのに加えて、実父内大臣・養父源氏と、どちらの親からも、一方ならず　大切に扱われた身の上にしては、鬚黒大将の　北方に終わったのは、

「心づきなし」
＝（気にくわない）、
とある。冷泉院に　尚侍のまま寵愛を受けるか、何年も思い続けた　蛍兵部卿宮の北方などになったならば　よかったものの、あれほど　素晴らしい源氏とも逢えなくなってしまったのは、
「いと、いぶせく心やましき」
＝（たいそう　気が滅入り　不愉快である）
と、断じているのである。さらに、あまりに自信ありげに、しっかり者で、源氏の　求愛めいた行動に対して、当惑するなどは、はかなげな夕顔の娘らしくもない。筑紫で育つのも、品がなく思われることもある。しかしながら、そういった不満な点はあるものの、大体の人柄は「好もしき人なり」と　結んでいる。
　玉鬘に対して夕霧は、
「八重山吹の咲き乱れたる盛りに霧かかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる」（「野分」）
と、彼女の明るい美しさを、五月の陽光に輝く山吹の花に比している。具体的な容貌については、目元あたりが　それほど上品にみえなかった他は、「難つくべうもあらず」（「野分」）と、品位は、そう高くはないが、その他には　難点のない女性であった。そのような豊かさを支える内面的資質は、現実的な利口さに裏付けられた　調和的な賢さである（竹村義一）。
　「玉鬘」＝（つる草類の総称）というネーミングは、母が　夕顔＝（ウリ科の一年生の　つる草植物）である親子関係を踏まえている　と思われるが、この親子の性格は、対照的でもあった。正妻右大臣の娘方の迫害に　なす術もなく　頭中将の前から　姿を消した後、非業の死を遂げる　薄幸の母夕顔は、「らうたし」と評された　典型的な没自我的な女性であった。これに対し、娘の玉鬘は、華やかな個性・堅実な身の処し方が目に着くのである。
　玉鬘の個性は、明石君との比較によって、いっそう明らかとなる。玉鬘は、明石君以上に　遠地の九州育ちであったにも拘わらず、そうした負い目を感じておらず、そこに明るく快活な性格があり、その人柄の特質がある。その快活さは、
「わららかににぎははしくもてなしたまふ本性」
＝（快活で、華やかに　身を処しなさる　本来の性格）（「真木柱」）
　に　象徴されていて、「け近し」＝（慕わしい）、{いまめきたり}＝（現代風である）、「はなやかなり」・「きらきらし」といった語も　そうした彼女の性格を　よく現している　と言えよう（重松信弘）。
　玉鬘の内面的苦悩は、源氏の栄華の集大成ともいうべき　六条院の世界の　裏側を映しだしている。玉鬘を含め　六条院の住人たちは、実は　源氏の季節享受の　媒介に過ぎない。季節に　固定的な価値差別が定め難いというのは、彼女たちが、源氏にとって、それぞれ愛玩されるべき見所を　相応に備えている　ということの同意語となるので

ある。したがって、六条院の造営について、「御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり」（「乙女」）と記されているものの、それは、真に女君たちの個性が自主的に　その位置を得ることを意味するものではない。彼女達の教養能力は、あくまで、六条院世界の、全体的調和を保つ為の　一翼たるべき存在として、要請されるのである。言い換えるならば、源氏を中心とする、一夫多妻的な関係の秩序の中で、玉鬘の美質も　光輝くのである（秋山虔一）。この立場を　更に推し進めるならば、玉鬘は、六条院の華たるべき傀儡＝（操り人形）に過ぎず（平井仁子）、源氏の意のままに存在し　行動する（姥沢隆司）といった解釈も　可能となろう。こうした　玉鬘と源氏との関係に象徴される物語の人物構図は、「若菜上」の帖以降に、展開される物語の方法の先駆け　ともなっているのである。源氏が　玉鬘に　揺れ動く　中年男性の心情は、源氏の　愛や徳の絶対性を相対化するものであって、第二部の世界へと　誘う準備をなす（後藤祥子・吉岡曠）。

源氏の支配下にありながら、玉鬘は、現実の重みを、受身で生きるよりない　という認識のもと、積極的に耐えようとしており、源氏の求愛においても、顕わな拒絶をもって応じたわけではなかった。玉鬘には、朝顔斎院のように　源氏を拒否する事によって、自らの誇りを保とうとする自尊心はなく、空蝉のような　劣等感から拒否したのでもない。ただ、養父と通じるのでは、世間の誹りを招く　という自覚・理性があったからに他ならない（石村正二）。

こうした　世間への配慮や、理想的資質を持ちながらも、あやにくな運命に翻弄される玉鬘の姿は、鬚黒大将の北方となる　という衝撃的な結末に　象徴される。「無名草子」で、「心づきなし」と　評されたこの結末には、意外性の中に　必然性が　隠されている（森一郎）とする。玉鬘の結婚相手は、条件を照らし合わせてゆくと、一人ひとり消え去り、おのずと、鬚黒大将のみが残ることとなる。即ち　冷泉院への入内は、彼女にとって　異母姉の弘徽殿女御、源氏の養女秋好中宮と　対立関係となり、それは養父源氏の　そして特に実父内大臣の　望むところではなかった。源氏との結婚の場合については　どうであろうか。まず、紫上以上の待遇はされない　という厳然たる事実があり、源氏側からしても、世の非難とともに、内大臣の娘婿になるという　不都合な状況に立たされざるを得ないのである。内大臣有利、源氏不利という観点からすれば、最有力候補と見られた　蛍兵部卿宮についても、最善の結果とはならない。内大臣は、もともと　鬚黒大将との結婚を望んでいたので、もし　玉蔓の結婚相手が　蛍兵部卿宮に決まった場合、政治的メリットは、期待すべくもなく、かつ　弟宮であることから、源氏主導の結婚とならざるを得ない。これに対して鬚黒の場合　次期政権担当を　約束された人物なのである。

意外性の中に　必然性を含ませる　といった　高度な結婚物語の手法は、源氏物語以前のさまざまな要素を暗示させる。五人の貴族たちが、かぐや姫を争う「竹取物語」の求婚譚は、その筆頭にあげられよう。玉鬘物語の発想については、「蛍」の帖で、玉鬘

自身の口から、
「かくめづらかなることは、世語のこそはなりぬべかめれ」
＝（この私のような　珍しい事例は、きっと世間の語り種（くさ）となってしまいましょう）
と　ある。その直後にも、「宇津保物語」や散佚物語である「くまののものがたり」、そして「継母の腹きたなき昔物語」といった　さまざまな物語が　引き合いに出されている。そうした　先行物語・継子いじめ譚のみならず、貴種流離譚や　神仏霊験譚などの古代の民間伝承の類の影響下において、玉鬘の人物像の造型がなされた　と考えられる（藤村潔・小林茂美・他）
　玉鬘像のモデルには、更に　紫式部自身の体験の投影も見られる。玉鬘の　筑紫下向の着想には、「紫式部集」に残されている　紫式部が　姉と慕った女友達「筑紫へゆく人のむすめ」との交流がある（岡一男・高橋和夫）。それは、紫式部が、父の為時に伴われて越前（福井県）に下向する前後、即ち　紫式部が結婚する以前の　青春時代の出来事で、この女性とはその後、死別したもののようである。その忘れ得ぬ　青春の思い出が、玉鬘に　刻印されているのである。尤も　玉鬘が、幼女の段階（帚木三帖）で、既に　この構想が　あったわけではなかろう。当初、筑紫五節という　若き源氏所縁の女性を介して　玉鬘十帖としての再登場とともに、その着想が　より壮大な物語として結実した　と見做すのが自然かと思われる。　　（斉藤正昭）。

Ｄ．人物の特色

　玉鬘の人生は、登場する帖の内容から、次ぎの三期に分けることが出来る。
＊　第一期…「帚木三帖」　頭中将・右近の口から語られる　幼女期。
＊　第二期…「玉鬘十帖」　　九州から上京後　六条院に入り　鬚黒大将の北方となるまでの　成人期。
＊　第三期…「若菜上」「若菜下」「柏木」「竹河」の各帖　　鬚黒大将の北方としての　後半生。
　第一期では、夕顔の一人娘として、その存在が明らかにされる。まだ、幼女であることから、その個性が現れるようになるまでには至っていない。が、父の頭中将よりは、夕顔との関係を結びとめる存在として「らうたし」と　、評されている。この点からすれば「らうたし」「らうたげ」の強調されている母・夕顔の子としての範囲内での造型ともいえる。
　母と異なる個性が発揮されるのは、第二期に」おいてである。玉鬘は、成長するにつれて、
「父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり」
＝（父大臣の血筋が加わったせいであろうか、品がよく、可愛らしげである）、更に、

「おほどかに　あらまほしうものしたまふ」
＝（おっとりとしていて、理想的に　あられる）、（「玉鬘」）
　となる。
都を離れ、筑紫という　一地方で育ったことは、「品くだる」＝（品が綯い）、（「無名草子」）として、本来　貶められるべき要素であった。しかし　内大臣が　父親であるという　出自の高さに加えて　忠実な乳母一家の　行き届いた養育の成果もあって、玉鬘は、理想的な女君として成長したのである。
　出自の高さのみが、その女君の評価を決定するものではないことは、源氏物語の中で、繰り返し語られるテーマである。玉鬘十帖には、同じく　内大臣の外腹の娘である　近江君が登場するが、玉鬘とは　対照的に　突飛な行動の故に、ことごとく　周囲の物笑いの種となる。家柄でも　育った環境でも　女性の真価を計ることは　難しいとすれば、玉鬘の美質を際立たせているのは、一体　何によるものなのであろうか。
　ここで、玉鬘十帖は、実質的には、帚木三帖と　密接に繋がっていることに　留意したい。「玉鬘」の帖の　巻頭は、
「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を　つゆ忘れたまはず」
＝（歳月は隔たってしまったけれど、心残りであった夕顔を、少しも　お忘れなさらずに）
　と、源氏の夕顔への追慕の念から、語り出されている。かって、若き日の源氏は、上流貴族社会の女性たちの気位の高さに疲れ、夕顔や空蝉といった女性達に　心の安らぎを求めた。そのきっかけは、「帚木」の帖の、「雨夜の品定」といわれる女性談義にあった。内大臣（当時は頭中将）が、夕顔と撫子（玉鬘）の存在を　初めて明らかにするのも、この折のことであった。世に　理想の女は　求め難いけれど、中流階級にこそ
「人の心々、おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき」
＝（女の各自が、立てた　心の傾向が見られ、優劣の区別の付き得ること
が、あれこれ多かろう）
　と　ある内大臣の言葉は、「帚木三帖」における「中の品」＝（中流階級）の女性を持ち上げる考え方を　よく物語っている。玉鬘は、特に、「おのがじしの立てたるおもむき」によって、自らの苛酷な運命に　よく対処した女性であった。
　幼くして　両親と別れ、九州で生い育った玉鬘は、そのまま　かの地に、埋もれたとしても　決して　不思議ではない。乳母一家の　献身的な犠牲によるものであったにせよ、肥後国（熊本県）の　粗暴な豪族・大夫監の求婚を、玉鬘が拒否した事は、玉鬘が、母の夕顔のように、運命に流されるだけの女性でないことを、明白に語っている。長谷寺詣でをきっかけに、源氏の許に　引取られた後の　彼女の身の処し方は、見事であった。
　源氏は、故夕顔への執心から、表向きは　養父を装いつつ、玉鬘に　求愛を繰り返す。

実父とは引き裂かれ、養父からは言い寄られる　という特異な状況を強いられた玉鬘の内面的苦痛は、察するに余りがある。しかし　彼女は、源氏の　筋違いの懸想を　時には　窘めつつ、決定的に　撥ね付けることもしないことから、両者の間には、独特な情感が漂う。源氏が、玉鬘を、強引に　我が物としないのは、内大臣の婿となることへの煩わしさ、紫上を筆頭に　六条院の女君たちとの間に　波風を立てたくない　という配慮からであった。それは　言い換えるならば、中年の打算、玉鬘に対する求婚者たちの反応を　楽しみたいという　好奇心などの為ではあるが、玉鬘自身の　聡明な振る舞いもまた　源氏の行動を抑制する一因であった　と言わねばなるまい。

源氏の　親しい異母弟・蛍兵部卿宮に対する　玉鬘の対応も　理想的であった。当代きっての風流人である蛍宮に対しては、他の求婚者たちへとは　異なる配慮があって然るべきであって、玉鬘自身　蛍宮の人柄に　惹かれたこともあって、折々の文通は、拒んでいないのである。その中でも　蛍が、美しい玉鬘の横顔を照らし出す「蛍」帖の　名場面は、二人の交流のハイライトである。源氏の舞台設定の奇抜さ、蛍宮の和歌の素晴らしさと共に、若い玉鬘の　当意即妙の受け答えは、読者に　深い印象を残す。

源氏の実子　冷泉帝に対しても同様である。帝の水際立った容姿・所作に　強い憧れを抱きつつ、玉鬘は、異母姉である　弘徽殿女御、そして　源氏の養女である秋好中宮を　憚って、その寵愛を受ける事はなかった。もとより　冷泉帝への入内が　実現しないのは、源氏の意向によるものではあったけれども、玉鬘も、己の置かれた境遇をよく認識していた　といえよう。

六条院に引き取られた当初、夕霧は、玉鬘を　異母妹であると思い、逆に　柏木は、彼女が　自分の父親内大臣の娘　即ち　自分とは　異母兄妹の関係にある事を知らない。両者と玉鬘との関係は　中々複雑であるが、聡明な彼女は　適切な距離を保つことになり、まして、その他の求婚者への　軽はずみな対応は、皆無である。それ故に、内大臣・源氏共に、

「女の御心ばへは、この君をなむ　本にすべき」

＝（女性の心構えとしては、この玉鬘を手本とすべきである）（「藤袴」）

と、玉鬘への賛辞を　惜しまないのであった。この彼女の賢明さがあってこそ、晴れて内大臣と、父子対面を果たすことも　可能となったのである。

第二期において、唯一　玉鬘にも、源氏にとっても、心外であったことは、鬚黒大将との結婚であった。この婚姻の必然性と妥当性は、第三期において　明らかとなる。

なお、玉鬘十帖では、玉鬘は、母夕顔と異なる個性が目立つが、二人には　共通点もある。謎に包まれた　玉鬘の半生が、求婚者たちの目に　神秘的に映ったことは、その正体が不明であるが故に　いっそう　夕顔に傾倒していった源氏の場合と　重ね合わされるのである。

第三期において、玉鬘は　堅実な正妻として　その後半生を歩む。当初、鬚黒大将には、長年連れ添った北方が居り、その北方の狂乱、真木柱姫君との別離といった　秘話

はあるものの、概ね平穏なものであった。鬚黒大将は、
「名に立てたるまめ人」
＝（評判の　実直な人）
　であり、皇太子の女御の兄弟として、次期政権の担当者でもある。野暮で、容貌に難があるとはいえ、実父の内大臣も、この婚姻には満足していた。一方、蛍兵部卿宮は、玉鬘との縁もあってか、真木柱の姫君を　妻として迎えるが、早逝し、遺児である宮の姫君も、不運である。また、冷泉帝も　退位後　玉鬘への執心断ち難く、彼女の娘・大君を参内させるが、予想通り　弘徽殿女御との不和を招く。源氏と結ばれた場合の悲劇は、「若菜上」の帖以降の展開を見れば、自明であり、鬚黒大将との結婚は、彼女にとって、最善の選択であったことが、立証されるである。
　しかし、鬚黒と死別した後の玉鬘は、息子たちの昇進の遅れを嘆く　中年未亡人として、物語から　去って行くのである（「竹河」）。
　玉鬘の生涯は、堅実な身の処し方、思慮深さの大切さを、説くとともに、これをも越えた宿運とも言うべき　人生の不如意を　読者に語りかけて　止まないのである。
（斉藤正昭）

２１．朝顔　あさがお

Ａ．その生涯

＊　朝顔は、従兄妹である源氏から、朝顔の花にことよせて、和歌を贈られたことがあった（「帚木」）。
＊　朝顔は、源氏の　男としての美しさは　認めているものの、六条御息所のように恋に溺れて　世間から　誹られたくはない　と思い、源氏からの文に　思い遣りのある返事は書くが、その求愛には、決して靡かない（「葵」）。
＊　朝顔は、正妻葵上を亡くし　悲しんでいる源氏と　和歌を贈答し、彼を慰める（「葵」）。
＊　朝顔は、朱雀帝の即位に伴って、賀茂の斎院となる（「賢木」）。
＊　源氏は、朧月夜との関係によって、弘徽殿大后の怒りをかったが、男性との関わり

を禁止されている斎院・朝顔と　和歌の遣り取りをしたことで、一層　窮地に立たされる（「賢木」）。
＊　朝顔は、父桃園式部卿宮の死去により、斎院の職を解かれ　再び　源氏から　結婚を申し込まれるようになる（「朝顔」）。
＊　源氏が、朝顔に　熱心に言い寄っている事が、紫上の耳に入り、正妻格である紫上は、身分の高い朝顔が、源氏の正妻になるのでは　と　悩む（「朝顔」）。
＊　朝顔は、何遍も　源氏に求婚されるが、出家を考えているので、拒み通す（「朝顔」）。
＊　父の　服喪を終えた朝顔は、同居している叔母・女五宮に　源氏との結婚を勧められるが、固辞する（「乙女」）。
＊　朝顔は、源氏と　友人としての付き合いは続ける。源氏の娘・明石姫君（後の　明石中宮）の入内に際しては、祝いの香や草子を贈る（「梅枝」）。
＊　一生涯　独身を通した朝顔は、既に　出家し　尼となっている（「若菜下」）。

B．物語における位置　準拠

朝顔姫君の初出は早く、「帚木」の帖において、源氏が「朝顔奉りたまひし」という噂話の中であった。源氏の人生と　決定的に関わり始めるのは、「賢木」の帖である。源氏と　朧月夜との件が　露見し、また　斎院となった朝顔に　源氏が和歌を贈ったという噂をもとに、右大臣と弘徽殿大后が、源氏の追放を画策するのである。源氏失脚の主因は、朧月夜との件もさることながら、斎院という　神に仕える聖なる女性への犯し、つまりは帝の権威を汚した　と考えられたのである。その後、「朝顔」の帖で、朝顔姫君は、復活する。斎院退下後、源氏の求愛を受けるのだが、心惹かれながらも、その愛を拒み通す。この姿勢は、以後、終生変わることはなかった。朝顔についての記事は「若菜下」の帖で、紫上を相手に　源氏が昔語りをするところが最後である。そこでは、出家した朝顔と朧月夜の人柄が　回想される。高貴な血筋であり、風趣を解する女性として、源氏にとって　最後まで　理想の人物であった。

父の式部卿宮の薨去に伴い、朝顔姫君は、斎院を退下して、喪に服したのであったが、彼女は、朱雀、冷泉両帝の斎院であったことになる。賀茂の斎院は、御代代わりがあっても、交代しないことが多かったのである。村上帝の皇女選子内親王は、十二歳から　五代の帝の　五十七年間にわたって、賀茂の神社に仕え　大斎院と呼ばれた。共に　高貴な出自であり、複数の帝の斎院であったこと、情趣に秀でていたことから、選子内親王を、朝顔の準拠とする考え（森本茂）もある。

退下した朝顔は、「桃園宮」に　移り住むが、初出以来　その住居について　触れる事はなかったし、父宮も　桃園式部卿宮と紹介されたこともないが、ここで、突如　桃園の住人になるのである。桃園は、実在の邸宅で、名称は「桃百株」が植えられていたことに由来する（「延喜式」）。史実として　桃園に居住したのは、宇多帝皇子敦固親王、

醍醐帝皇女宣子内親王、醍醐帝第一皇子桃園兵部卿宮克明親王などの名が上げられる。このうち　敦固親王は、桐壷帝の準拠とされる醍醐帝の兄弟にあたり、姪で斎院となった宣子内親王の　庇護者でもあった。「河海抄」は、桃園式部卿宮の準拠として、この敦固親王をあげる。一方、「桃園斎院」（拾遺集）と呼ばれた宣子内親王は、延喜二十年（九二〇）、病気により　敦固親王の桃園宮にて　薨去した。この宣子内親王を、朝顔の準拠とするのが、一般的である。桃園は、平安中期以降　貴顕の居住地として　由緒ある地であり、朝顔を　その住人とするのは、「彼女の門地の高さを　言外に　しかも強く　仄めかす」（今西裕一郎）ことになるのである。「河海抄」は、孫王（天皇の孫）が、斎院になったのは、文徳帝の孫で　中務卿惟彦親王の娘、貴子内親王の一例のみであることを　指摘する。この内親王が、朝顔の人物造型に投影しているとする説（小野寺篤子）もある。朝顔は、父が　桐壷帝の弟であり、孫王にあたる。孫王である朝顔が、斎院に立つというのは、異例の待遇といわざるを得ない。

C．人物に関評価の歴史

　現在の物語では、朝顔と源氏との交流の発端に関して、全く　触れるところがない。その失われた過去が、「河海抄」の指摘する「かがやく日の宮」などの　欠けた帖に求められたりした。更に　二人の過去における男女の契りの有無についても、問題とされるところで、これには、「朝顔」なる呼称が　関わってくるのである。朝顔は、万葉集以来　和歌に詠まれ　もともと　秋の野を彩る美しい花というイメージがあったものが、平安時代以降　変質して行くのである。朝咲いても　直ぐに萎むことから、「はかなさ」の象徴とされる一方、朝顔は、朝の顔　つまり、共寝の女性の寝起きの顔を象徴し、一夜の契りを暗示する歌語ともなってゆく。そうした花を　名に負う朝顔と　源氏の間に　一夜の契りは　想定されるのであろうか。「朝顔」の帖で、源氏は、
「見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花」
＝（昔　見た折の事が、少しも忘れられない朝顔の花）
と　詠み掛ける。あたかも　契りがあったかの如くに　戯れて詠んだ　ともとれるが、「「帚木」帖　以前に　源氏と　一度だけ　契りを交わしたことがあった」（鈴木日出男）と、考えることも出来よう。そもそも「ほかならぬ朝顔という　その呼称」が、そうした　二人の間柄を推察させる（松井健児）。物語中では、彼女は　終生　源氏を拒む態度を崩さないのであるから、「以後、二度とは契るまい　と　身を固く閉ざし続けた」（鈴木日出男）。そうした女性の人物像が　浮かび上がるのである。
　一方で、「藤袴」の帖で、夕霧が　野分の朝、垣間見た　玉鬘の顔を、「野分の朝の御朝顔」と思い出しているのは、共寝ではなく、朝方見掛けた　女性の顔を指す。また、「葵」の帖の、神斎院御禊の日に見た源氏の美貌に　朝顔が、
「ましてかうしもいかで」

＝（どうして　こうも素晴らしいお姿なのか）
と　初めて見る驚きの感情を表わしているのも、矛盾である（原岡文子）。朝顔は、玉鬘のように、若き日に　偶然　源氏に　朝の顔を垣間見られたことが　あったのではなかったか。

斎院という立場の意味も　さまざまに解釈されてきた。斎院は、平安時代の地主神、王城鎮護の神である賀茂神に奉仕する聖なる女性である。退下後も、前斎院としての立場からの制約があった。史実では、退下後の皇女が、結婚する場合、殆んどが、天皇の後宮に入っているから、「前斎院である朝顔君と、皇子といえども臣籍に降った源氏との結婚は、決して　賀茂神の許すところではない」（坂本和子）のであった。源氏の求愛に、
「誓いしことと神やいさめむ」
＝（誓いに背くことと、賀茂神は　戒めになるでしょう）（「朝顔」）
と返歌し、以後　一貫して　源氏の愛を受けいれないのは、前斎院の、臣下への降嫁をよしとしない時代性にも　一因があるのである。そこには　また、
「皇女（みこ）たちは、独りおはしますこそは例のこと」
＝（皇女様方は、独身をお通しになるのが慣わし）（「若菜上」）
という、皇女の独身を　よしとする　時代通念の投影もあるのである。

朝顔は、源氏の理想の女性であり続けた。「朝顔」の帖の時点で、三十二歳、もはや中年の域に達した源氏が、彼女を必要としたのは、その聖性に求める考え方がある。賀茂神降臨の地である北山に登場し、賀茂神の聖女という特性を持つ紫上は、源氏の正妻格であると同時に、明石姫君の養母の役割りも担った。「権勢としての立場を　絶対化する、后がね明石姫君を　後見する聖女としての役割り」（小山和彦）が、紫上、そして朝顔にも求められていた　とする指摘である。朝顔は、源氏の　栄耀栄華の世界と王権を守護する　聖なる女であったのである。

紫上との関係もまた、大きな問題である。朝顔に　熱心に言い寄る源氏に　紫上は、
「御心などうつりなば、はしたなくもあべいかな」
＝（お心が、あちらに移ってしまったならば、自分は、体裁悪いこととなろう）（「朝顔」）
と　困惑し、嫉妬しているからで
ある。朝顔は、式部卿宮の娘であったが、式部卿は、中心的な立場にある親王のみが任命され、兵部卿と並んで、最も重い官職であった。一方、紫上も　兵部卿宮の娘であり血統の優劣はないものの、源氏と正式な結婚の手続きを　踏んでいないこと、北山育ちである（ことなどから、朝顔の優位が指摘される（今西裕一郎）。その存在は、紫上の地位を脅かすこととなる。「若菜上」以降、女三宮が、紫上の正妻の座に　揺さぶりをかける。朝顔は、その先駆をなす存在として、最初に　紫上に　試練を負わせる女性なのであった。

D．人物の特色

　鎌倉時代の評論「無名草子」は、
「いみじき女」
＝（強く心惹かれる　印象的な女性）
の一人に、朝顔をあげ、
「さばかり心強き人なめり」
＝（とても　意志の強い人のようだ）
とする。朝顔が、源氏の求愛を頑なに拒み続け　受け入れなかった点をさしての謂いで、続けて「空蝉も」とし、二人に共通する　源氏を拒む女　という側面を強調する。
「葵」の帖で、源氏との関係に苦悩する六条御息所の噂に、朝顔は、
「いかで人に似じ」
＝（あの人の　二の舞は　すまい）
と　固く決心する。この部分を、「岷江入楚」（みんこうにっそ）＝室町時代の源氏評論書は、
「貞女は槿（あさがお）姫君と空蝉也」
と　評する。空蝉は　一度の契りの後は、身を固く持して　以後　源氏の求愛を　拒み続けた女性である。心では惹かれながら、それを心の内に閉じ込めてしまうという点で、朝顔の人物造型は、空蝉に共通している。
　男に求愛された女が、その愛を拒否する　という物語は、「隠（いな）み妻型の話型」とされる。「播磨風土記」賀古郡の条に記す、景行帝と印南別嬢（いなみのわきいらつめ）との結婚にまつわる話が、典型的で、帝の求愛に　驚き畏れ謹んだ娘は、南毘都麻（なびつま）の島に渡り　身を隠してしまうのである。帝の求愛をも拒んで、　結婚拒否の姿勢を貫く「竹取物語」のかぐや姫の物語も、この話型に属する。こうした物語の背景には、神に仕える女が、「神の嫁」という立場で、お告げを聞き、それを受けて　親や兄が　国を治める　という　古代における祭政一致の統治形態である「ヒメミコ制」が　根拠にある　という（折口信夫）。男の求愛を拒む女には、神の嫁が、人間の男との交渉を避け　清浄な生活を送る　という古代社会の信仰が　関わっているのである。
　朝顔は、源氏の求愛を拒む姿勢を貫くものの、交流自体を否定するわけではない。「梅枝」の帖における　源氏主催の　薫物合せにおいては、黒方を調整し　贈っているが、それは　紫上にも勝る評価を得ている。そこでは、源氏は、当代の仮名の上手も論じるが、朧月夜や紫上とともに、朝顔も名を上げられており、源氏の依頼で、入内間近の　明石姫君の為に　草子を書いたりしている。大斎院選子内親王が、定子や彰子と並んで一条帝時代の　三大サロンをなしたように、現実の歴代の斎院は、王朝文化の体現者でもあったのである。朝顔もまた、そのような文化的素養に秀でた斎院の　一人であったのである。

朝顔は、結局　終生「安息と静養の場」（原田厚子）である　桃園を出ることなく、六条院の女君たちの一人として　生きる道を、拒否したのである。先述の　薫物合せでは、春の女君紫上が、春の香である「梅花」、夏の女君花散里が　夏向きの「荷葉（かよう）」を提出し、冬の御方明石君は、季節をはずして「薫衣香」を　合わせている。冬の薫物・黒方を　合わせたのは　朝顔であったことから、彼女は　その芸術性と、高貴さからして、「六条院の四季の一角を占めるに足る女性であることが、改めて示された」のであり、冬の季節を象徴するのは、むしろ、朝顔が　相応しいのだ　という考え方もある（松井健児）。

ところで、「朝顔」の帖で、源氏の求愛に対し　朝顔は、

「年ごろ沈みつる罪うしなふばかり御行ひを」

＝（長年わびしい境遇でいた罪を　消滅させるほどに勤行を）

と、思っている。斎院にある間は、やはり　仏事から距離を置く生活であったわけで、それは　仏事からすれば、罪を得ることであった。後に「若菜下」の帖では、出家したことが記される。男を拒む女の系譜に繋がる空蝉もまた　二条東院で、仏道に専念する姿が描かれる。このように、源氏を拒否した女性たちは、出家するのである。結局　朝顔は、結婚を忌避し、仏道精進の道を選んだのであった。

朝顔は、花の名を呼称に負うものの、その登場場面において、朝顔の花は描かれない。夕顔が、その花を贈る　という場面を背景に持つのとは異なり　具体的場面を持たないまま、朝顔姫君の呼称が定着して行くのである。「朝顔」の帖の　源氏は、あるかなきかの風情で咲く　朝顔の花につけて

「花の盛りは過ぎやしぬらん」

＝（花の盛りは、過ぎてしまったのでしょうか）

と　詠みかけ、朝顔は、

「あるかなきかにうつる朝顔」

＝（あるかなきかの風情で、色あせた朝顔

）と　返している。朝顔は、歌語として、「恋を潜めたまま枯れる花」というイメージがあるのだという。（原岡文子）。彼女は、終生

源氏の求愛に靡くことはなかった。が　その事により、前斎院として、宮家の娘としての　誇り高い人生を全うしたのであった。然しそれは、源氏への愛を　自らの心の奥底に封じ込め　桃園に生を終える　という「自ら　あえなく　枯死させた」（秋山虔）女の人生であったのである。　（元吉　進）

２２．女三宮　おんなさんのみや

A．その生涯

＊　朱雀院は、念願の出家の準備を進めていたが、愛娘女三宮の将来が　悩みの種であった（「若菜上」）。
＊　朱雀院は、娘（女三宮）の婿の候補に、夕霧・蛍兵部卿宮・柏木などを　あれこれと考えるが、
苦慮の末、源氏を　後見者として　娘を託す事に決める（「若菜上」）。
＊　朱雀院は、年の暮れ　女三宮の裳着の儀式の後に　出家してしまう。女三宮の後見を　初めは辞退していた源氏ではあったが、病床の兄朱雀院を見舞った源氏は、兄の申し出を断り切れず、引き受けることとする。女三宮は、六条院に迎え入れられ、寝殿の母屋の西面に住むこととなる（「若菜上」）。
＊　源氏は、女三宮の降嫁後、三日間　一日も欠かさず彼女の許に通うが、その無邪気な幼さに落胆し、紫上の素晴らしさを　再認識する（「若菜上」）。
＊　女三宮の　求婚者の一人であった柏木は、彼女を諦め切れないで居た。ある春の一日、六条院で行われた蹴鞠の際、猫につけた首紐で、御簾が捲くれ上がった　その拍子に、彼女の立ち姿を　見てしまう（「若菜上」）。
＊　柏木は、皇太子より　女三宮が可愛がっていた　件の猫を借り受ける。それは　女三宮への　切ない恋情を慰める為であって、皇太子も女三宮も　知らぬことであった。（「若菜下」）。
＊　女三宮は、朱雀院五十の賀の催しに備えて　源氏から琴の手ほどきを受ける。女三宮は、成人したものの、相変わらず　幼く子供っぽい（「若菜下」）。
＊　六条院の女楽で、女三宮は、紫上や明石君らに加わり　琴を演奏する。彼女の演奏は、他の楽器に響きあって　幼さが見られるものの、優雅な音色である　と、源氏には思われる（「若菜下」）。
＊　女三宮の所に　源氏が訪れた夜更け　紫上は　胸の痛みを訴えて病床に伏す。祈祷も空しく　何時までも同じような病状である為に　二条院に移される。取り残された女三宮の居る六条院は、寂しいほど静かである（「若菜下」）。
＊　四月十余日、小侍従の手引きで、柏木は、六条院に忍び込み　女三宮に　恋情を訴え、恐れ慄く彼女と　強引に　契りを交わしてしまう（「若菜下」）。
＊　女三宮は、柏木との密通を　源氏に知られてしまう事を恐れ、源氏の　見舞いにも心が乱れ　沈み勝ちであった（「若菜下」）。
＊　女三宮は、五月ごろから　気分が優れず　妊娠の兆候が見え始める。彼女は、柏木と逢瀬を重ねつつも、柏木を、源氏と比較して　身分不相応な者であると、過失の大きさに苦悩する。紫上の病状は、小康状態となったが、源氏の　女三宮への訪問は、途絶

えている（「若菜下」）。
＊　源氏は、院や帝への手前もあって、病む女三宮を、放っても置けず、見舞いに訪れる。女三宮の妊娠を　侍女から知らされた源氏は、留守がちであった間の　妊娠に、喜びよりも　不思議なこと　と疑心の念を抱く（「若菜下」）。
＊　女三宮は、その軽率さから、柏木からの恋文を　源氏に発見されてしまい、驚き　悲しむ。柏木も　小侍従からの知らせで、女三宮との密通が　源氏に露見してしまった事を知り、恐怖の余り、身も凍るほどの気持ちになるのであった（「若菜下」）。
＊　朱雀院の　五十賀は、女三宮の妊娠による病の為　延期される。懐妊を知った　父朱雀院から　手紙が来る。源氏は、女三宮に　出家した父　朱雀院に、心配をかけて　将来成仏の妨げとならぬよう　やんわりと　諭すのであった（「若菜下」）。
＊　女三宮は、男子を生む。薫である。源氏が　自分や生まれたばかりの赤児に　冷淡であるが為に、将来を悲観し、出家して　尼になることを　強く願うようになる。父　朱雀院は、娘の様子を心配し　下山して　六条院を訪れる。女三宮は、父に哀願して　剃髪を受け、出家してしまう（「柏木」）。
＊　女三宮が　得度した夜、六条御息所の死霊が現れ、女三宮に取り憑いて、出家をさせたのだ　と告げる（「柏木」）。
＊　女三宮は、柏木の死の知らせに、前世からの　辛い宿世故の出来事であった　と悲しみに暮れる。薫の生後五十日の祝いが行われる。源氏から　岩根の松に薫をかけて、歌を詠みかけられるが、女三宮は、返歌も出来ず　ただうつ伏してしまうばかりであった。（「柏木」）。
＊　秋ごろ、源氏は、女三宮の為に仏道修行をする堂を建て、夕暮れ　庭に鈴虫を放したりする。女三宮は、源氏から離れて、心静かな生活をしたい　と願う（「鈴虫」）。
＊　女三宮は、源氏亡き後、三条の宮に移り、青年に成長した薫だけを頼りにしつつ、月毎の念仏や　年に二度の御八講など　仏道に精進する（「匂宮」）。
＊　浮舟が　行方不明となった頃、薫は、母の女三宮の病気が癒えるように　と、石山寺に参篭していた（「蜻蛉」）。　　（吉野・西沢）。

B．物語に置ける位置　準拠

室町時代・文明六年（一四七二）に、一条兼良（かねら）によって書かれた源氏物語の注釈書「花鳥余情」には、醍醐帝の妻・承香（じょうこう）殿女御正三位源和子の生んだ娘に、慶子・詔子・斉子の三内親王があり、女三宮は、これに　準えたか　としている。この説は「若菜上」の帖で、女三宮の母親が、「先代の源氏である　と紹介されていることによる。確かに　承香殿女御は、光孝帝の源氏ではあるが、桐壷帝に準えられる醍醐帝からは、先々代となり、女三宮は、四姉妹の三女とされていて、その点でも一致しない。次に、内親王が　臣下の者に降嫁した例として、南北朝時代の　貞治元

年（一三六一）頃、四辻善成によって書かれた、源氏物語の注釈書「河海抄」には、嵯峨帝の娘の潔姫が、藤原良房に降嫁した例と、醍醐帝の皇女康子内親王が、藤原師輔に降嫁した例をあげている。さらに、皇女の裳着を急いだ例として、「河海抄」は、村上帝の皇女昌子内親王が、父帝の病気が重く　出家した後に　裳着を行った例をあげている。いずれも、源氏物語の中での、女三宮の設定・行為の先例を探したものであって、個人的なモデルを　捜し当てたものではない。

また、「若菜下」の帖で、女三宮・柏木の密通が発覚し、「天皇の妻と密通を犯す例が、昔もあったが」と　源氏が思案する場面がある。ここに、「河海抄」は、「伊勢物語」の、在原業平と二条后の例、花山院の女御婉子（えんし）が、藤原実資や藤原道信と密通した例、三条院の麗景殿女御綏子（すいし）と、一条院承香殿女御元子が、藤原頼定と　密通した例をあげている。ただし、これは、新編日本古典文学全集「源氏物語四」に　指摘があるように、業平と二条后の例は、伝承に過ぎず、婉子の例は、花山院退位後に　二人と続けて結婚したということであり、元子の結婚も、源氏物語が書かれた以後のことである。但し　綏子に関してのみは、平安時代の　一〇〇〇年代半ばに　源氏物語作者・紫式部の　同僚であった赤染衛門によって書かれたと　推定される歴史物語「栄花物語」正編に、その記事が見えるので、事実であった　と考えてよいようである。

野村一三氏も、女三宮に当たる人物を、探索している。「栄花物語」に、「ことのほかの行いがあった」ことが　記されている事を根拠に、村上帝の皇女保子のことであるとする。同じく「栄花物語」に　藤原兼家が、女三宮を迎えたが、

「すべてことのほかにて」

＝（全く　とんでもないことがあって）

と　いうので、離別して　女三宮は　出家して亡くなった　という記事があるところから、女三宮は、某大納言と密通していたのであろう　と推測して、兼家を源氏に、女三宮はそのまま、某大納言を柏木にと、それぞれ当てはめれば「若菜下」の帖の話になるとしている。これも、事実か否かが不明であり、「栄花物語」正編は、源氏物語からの影響も考えられている作品であるから、断定するまでには　至らないもの　と思われる。

C．人物評価の歴史

鎌倉時代の初期・建仁元年（一二〇一）頃、俊成女によって書かれた、源氏物語評論の書「無草子」で、女三宮は、

「いとほしき人」

＝（可哀そうな人・気の毒な人

）の一人として言及されている。「若菜下」の帖で、源氏が　久し振りに、六条院の女三宮の許に訪れた場面である。夜になって　紫上の待つ二条院へ帰ろうとする源氏を、女三宮は、和歌を詠み掛けて　引きとめてしまう。その結果　翌朝　源氏は、女三宮が

隠した　柏木からの恋文を　発見することとなるのであった。その女三宮の行動を捉えて「無名草子」は、「言う甲斐もなく不出来なのに、色っぽいところのあるのが、気に入らない」と　指摘する。そして、女三宮のような女性は「ひたすら子供っぽく　おおらかなのが　可愛いのだ」と、述べている。結局、余計なことを言って、紛糾を招く　思慮の足りなさを、非難しているのである。また、「あはれなること」＝（感動すること）の中で、「柏木」の帖で、柏木が亡くなる時のことを、「あはれ」だ　と言っているが、柏木が贈った和歌の　返歌に添えて

「遅るべうやは」

＝（あなたに　遅れをとって、生き残ることはありません）

と　書いた　女三宮を、「憎し」＝（嫌いだ）と　感想を述べている。桑原博史氏は、源氏の妻という立場を忘れて　柏木に対している　無反省な態度を　非難したもの

と解釈している。

女三宮は、源氏物語本文中でも、「おいらか」「おほどか」「幼し」「いはけなし」「何心なし」「もの深くは見えず」「いたり少く」「心にくき所なき」「しどけなき心」「うしろめたし」「はかなげ」というような（竹内美智子）、幼稚で、未熟で、存在感のない姿で　描かれている。従って、女三宮の人物像については、「白痴的に明るい世界の住人」（今井源衛）「無性格・人間的に空虚」（野村精一）などという評がなされる。また、その「無性格」は「竹取物語」のがくや姫・「宇津保物語」のあて宮　以来の、非情なる女主人公の　系譜の到達である（野村精一）とも　言われる。更に、物語の空虚な中心故に、さまざまな主題を映し出す鏡のような存在　と規定されてきた（河添房江）とも評されるのである。

そこで　問題となるのは、女三宮のように、美質を見つけられない　不具合な人物をわざわざ創造したのは、その理由が　どこにあったのか　ということである。

女三宮は、「若菜上」の帖で、突然登場する人物であり、源氏と結婚させられる。つまり、葵上の死後　正妻をもたなかった源氏の　正妻として　降嫁する為に　登場させられた人物である。その結果として、源氏・紫上夫婦を中心とする六条院の　平穏が失われてゆく。女三宮は、実に　晩年の源氏を　悲劇的世界に突き落とし　六条院を、浄土から地獄へ　追いやる役割りを果たす為に　出現したかのようである（岡崎義恵）と言われる所以である。その「無性格」は、父朱雀院が、降嫁を実現する為に　操作するのに適していた（今井源衛）とも、父朱雀院の　受身の消極的生き方を　受け継いでいる（深沢三千夫）とも　言われる。一方で、女三宮の幼稚さは、源氏の色好みの理想性の深化を　形象化する為の媒体であった（森一郎）という積極的な受け止め方も見られる。確かに、女三宮の極端な幼稚性は、源氏の薫陶のもとで、ますます円熟味を増した紫上と　正面から対抗する意志を　最初から持ち得ない設定である。だが　何らの意志を持たない事が、また　健気に振舞う紫上への　心づかいなどもなく、六条院の女性たちのなかでの　自分の位置を測ることなど　考え付く余地もないのである（竹内美千

代)。言葉を変えて言えば、純粋無垢で、責任能力を持たない為に　引き起こされた悲劇を、女三宮のせいには出来ず、関わりあった人々が、その意味を　考えざるを得なくなることでもあるのだ（増田繁夫)。

女三宮の　人物設定は、このうえなく　作為的である。その母の女御が　先帝の更衣腹の内親王で、朱雀院の東宮時代に入内した藤壷なのである。これは　女三宮が、紫上の従姉妹に当たる　というだけでなく、その母の　宮中の局名からも　藤壷中宮を意識せざるを得ないように　設定されている　ということである。つまり、紫上という　藤壷中宮の「ゆかり」が　存在している上に　新たな「紫のゆかり」を　重ね合わせて登場させる　ということである。その点で、女三宮は、紫上の　複製または　縮小再生産であるのだが、その内親王という身分　ただ一点が、紫上の地位を脅かすのである（大朝雄二)。

女三宮の　源氏への降嫁の経緯については、父の朱雀院の決断の是非をめぐって、論争が行われた。その詳細は、「３．朱雀帝」の項に譲るが、内親王の降嫁の　歴史的意義については、今井久代氏の論がある。女三宮の降嫁は、あくまでも、皇室が愛娘の為に裁可する正式な結婚であり、単に　内親王が臣下の者と結婚した　ということでない重みのある事柄であるのだ。歴史上でも、父帝の正式な裁可を経た降嫁は、長和四年（一〇一五）の　三条帝の内親王と　藤原頼道が、最初である。

渡辺仁史氏は、女三宮の登場の意義について、理想的な女性としての紫上に対し、女三宮の高貴性を強調する事によって、その統合された女性像こそが、源氏にとって、個人的･社会的に　理想となり得ることを　示すのだ　とする。更に、自分に関係する　他者の責任をも引き受ける　皇女としての規範遵守の態度に、女三宮の美質は存在する、と指摘している。女三宮の美質について　正面から論じた点に　独自性がある。

長谷川政春氏は、女三宮の登場を、「男源氏」に対する「女源氏」の　主題化と見る。まず、女三宮の母の藤壷女御が、更衣腹であり、「世の中を恨みたるやうに」亡くなったという紹介が、源氏の母の桐壷更衣を　思わせるものがある。次ぎに、父の朱雀院の女三宮に対する偏愛が、桐壷帝の源氏への愛情を思わせる。更に、源氏が　臣籍降下されたように、女三宮も　臣下に降嫁した。即ち　大宮（左大臣の妻）…桐壷帝の女三宮（賀茂斎院）…朱雀院の女三宮という　女三代にわたる「女三宮」の系譜を受けて、「女源氏」が　主題化されたのが、女三宮の登場であったのである。

王権論の立場からは、高橋亨氏が、論じている。六条院の　神話的秩序が崩れ始めるのは、内親王との結婚によって、完成に向かうはずの　源氏の王権志向が、却って　その幻想の無効性を明らかにすることと対応する。本来　高貴さの象徴であったはずの女三宮の無性格も、人格の欠如と見做されているのは、物語が、俗化した為なのである。武者小路辰子氏も　次ぎのように捉える。女三宮の眼を通す時だけ、源氏の理想性は、効力を失う。それは、女三宮の幼稚性を保持する造型によって、初めて可能となった。六条院という　源氏の栄養栄華の世界が解体する時に、女三宮の幼稚性を　笑うべきも

のとすることは、出来なかったのである。

「若菜上」の帖から始まる　女三宮の物語は、前半の降嫁事件を中心とする物語と、後半の密通事件を中心とする物語に　二分される構造を持っている。森一郎氏は、紫上との関係を重視して、女三宮の登場の意味は、前半部にあるものとする。だが、武原弘氏は、密通事件後の　主体的で実体化した女三宮像の変化を重視し、物語の展開に即応して深まる　女三宮像の造型に、女三宮物語の　一貫した主題を見ている。確かに、出家前後から、女三宮は、以前より　主体的な行動をとり始める。しかしながら、その行動が、自分の今後のあり方を　見通した上のものであったのかは、疑問無しとしないのである。寧ろ、現状からの逃避的行動という傾きが強いように　思われるのである。女三宮物語に、女三宮独自の主題の存在が、認められるか否かは、慎重な検討を要する問題なのである。

D．人物の特色

「若菜上」の帖冒頭から　延々と繰り広げられる　朱雀院、鍾愛の女三宮の婿選びの談議には、当初、隠蔽された事実があった。父の朱雀院と、相談相手の乳母には、先刻承知のことであり、それこそが　悩みの種である　女三宮が

「片生ひ」＝（未成熟…朱雀院の言葉）

であり、

「あさましくおぼつかなく、心もとなく」

＝（呆れるほど　危なげで、気がかり…乳母の言葉）

である　ということである。朱雀院の　源氏への降嫁の意向は、夕霧を諦めた直後に、源氏が　紫上を育てあげたように、女三宮を預かってくれる人がいないか、という　間接的ではあるが、源氏より他に　候補者のあり得ない表現で、明らかにされるのである。その後は、乳母が　源氏の名を出して　周旋に動く展開となり、以後は、源氏の承引を待つだけになるのである。これも、女三宮の「片生ひ」が、前提となっているからであり、その前提は、候補者を、源氏以外に　有り得なくする役割も　果たしているのであった。

源氏側から見れば、女三宮については、内親王であること、紫上とは従姉妹の関係にあるということ、即ち　藤壺に所縁の人、などなど、「正」の情報のみを　入手することとなったのである。結果は、女三宮の対する源氏の期待が　見事に外される　という形で訪れる。源氏は、女三宮に　北山で見つけた時の　若紫（紫上）と同じような資質を持った少女の出現を　期待していた。そして、その時の自分が行ったように、女三宮を　薫育することで、若き日の自分と若紫の生活の　再現を願っていたのである　が、もとより、これは　源氏の　妄想であるに過ぎなかった。若紫は、決して　余人では　代替することの出来ない資質を備えた少女だったのであり、その若紫を　薫育した源氏も

また、二十数年前の　若かりし頃の源氏だったのである。稀有な出会いは、ただ一度限りであったからこそ　有り得たのである。

重要なのは、紫上が持つ人間的美質を　全く欠く女三宮が、紫上が持たない内親王という　女性として最高の身分を　生来有している　という事実である。紫上も、親王の娘ではあるが、内親王の身分には及ばない。なおかつ、六条院の　女主人の立場にありながらも、源氏の正妻の座を得られなかった紫上に対して、女三宮は、六条院に　源氏の正妻として　降嫁してくるのである。高貴な身分以外の何者も持たない内親王と、あらゆる美質と　源氏の深い愛情とを　手に入れながら、身分だけで負けてしまう紫上。女三宮の降嫁をめぐる物語は、紫上に試練を課し、源氏夫妻の絆を、改めて　見つめ直す働きをするのである。

降嫁した女三宮自身は、六条院で、何らの　波乱も起こさない。寧ろ、何ら　意味のある事が出来ない　といったほうが適切であろう。だから、紫上との間柄も　平穏に過ぎて行く。その女三宮に変化の現れるのは、「若菜下」の帖の　四年間の空白を経た後の事である。この四年間の空白は、既に　指摘のあるように、源氏・紫上・柏木・女三宮の　四者にとって、それぞれに意味のある歳月であった。前二者にとっては、衰えが兆す年齢になることであり、柏木にとっては、官位の昇進と共に、女三宮への執着が　さらに強まる期間であった。そして　女三宮にとっては、成長の歳月であったわけである。「片生ひ」だった女三宮も、遅ればせながら、年頃の女の魅力を備えてきており、朱雀院五十賀慶祝の為の「女楽」で　演奏する琴の稽古もこなすようになる。同時に、二品宮となって、内親王としての身分が　更に重みを増すのである。それは、源氏にとっても、これまで以上に　女三宮を　疎略には扱えなくなった　ということであった。

柏木との事件において、女三宮は、　一方的な被害者であった。柏木の　寝所への侵入を許したことについて、女三宮には　何らの落ち度はない。全ては　柏木と小侍従が周到に計画した上でのことであった。女三宮に至らぬところがあったとすれば、柏木を拒めなかったことは　さておき、その後の　柏木の懇願を　受け入れたかのような態度をとった点である。柏木が　女三宮から返答がないので、諦めて　和歌を詠みかけて帰ろうとする　その様子に、少し　ほっとした女三宮は、返歌をしてしまうのである。贈答歌の常套に従って、相手の和歌の言葉を　詠みこんだ和歌である。これでは、女三宮には、全く　その気はなくとも、形の上では、一夜を共にすごした男女の別れを惜しんで交わした「後朝（きぬぎぬ）」の和歌そのものであるのだ。たとえ　事後であっても、合意が成立したかの観がある。柏木の行為を　認めていないのであれば、女三宮は、一言も　言葉を発してはならなかったのである。

その後の　女三宮は、ひたすら　源氏を恐れ憚るばかりである。

「深き心もおはせねど、ひたおもむきにもの怖ぢしたまへる御心」

＝（深い思慮もないけれど、ただひたすらに　怯えていらっしゃるご性分）

と　語られる。だが、一方で、あるいはそういう性分だから、小侍従が取り次ぐ　柏木

からの手紙を　つき返すことが出来ないでいる。それが、源氏に　事件が発覚する原因となるのである。源氏には、打つ手がなく、世間に知れれば　醜聞であるし、兄の朱雀院から　女三宮を預かった手前、源氏の　監督不行き届き　ということでもあるから、結局は　知らぬ振りを　装うしかなかったのである。女三宮は、ひたすら　涙に暮れるばかりであった。そして、女三宮の懐妊が知れるのである。

「柏木」の帖で、小侍従の嘆願で、しぶしぶ書いた女三宮の返事を、柏木が　誤読する場面が出てくる。火葬場の煙が燻るように、貴方への思いも　絶えることがない　という柏木の贈歌に対して、女三宮は、

「たちそひてきえやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに　後るべうやは」

＝（あなたの煙と一緒に　私も　消えてしまいたい。どちらが辛い思いをしているのか比べるために。あなたに遅れを取るような　私ではありません）

と　返歌したのだが、柏木は、女三宮が、自分と　一緒に　死にたいくらいに　自分のことを思っていてくれる　と　都合のよい解釈をする。勿論、女三宮の和歌の意味は、自分のほうが　辛い思いをしている　という主張であり、柏木に対する愛情　または同情の気持ちは、全くないのである。女三宮としては、珍しく　自分の気持ちを　明確に述べているのである。

男子（薫）出産後、女三宮は、出家を望む。当然、源氏は　翻意を促すのであったが、娘からの手紙で、山を下りた父朱雀院の手によって　出家の願望を果たすこととなる。女三宮が、出家を強く望んだのは、不義の子を生んで　源氏に合わせる顔がない　その上に、今後　源氏から　冷たい扱いをされるのを　恐れた為である。産後、まずは　この序に　死んでしまいたい　と思い、更に　源氏の　赤子に対する　冷たい態度を聞いて、出家の意志を強くするが、決して　何かの成算があっての覚悟、というわけではなく、殆んど　衝撃的な思いつき　と言ってよいほどであった。それでも、出家後　源氏から　自分を見捨てないで、可哀そうだと思ってくれ　と言われると、尼の身は、情愛を知らぬものであるし、もともと　私には分からないことですから　と、見事にかわす様子が描かれている。これを　女三宮の　成長といってよいかは　微妙なところであるが、出家したことによる　一種の落ち着きを　示したたもの　とはいえるであろう。

「鈴虫」の帖の前半部は、持仏開眼供養に始まり、女三宮出家後の　尼生活が描かれる。依然、女三宮は、六条院に暮らしている。源氏との贈答歌が詠まれるが、女三宮の詠み振りは、源氏の愛情が　薄れている事実を知っている　と仄めかす体の内容である。源氏自身は、尼姿の女三宮に　未練がある　と描かれており、この和歌の詠みぶりは、女三宮からの牽制とも　取れるものである。ひたすら　怯え　沈黙するしかなかった以前の姿と比べれば　長足の進歩ということが出来るであろう。年齢と境遇を考えれば、当然のことではあるのだが。　（姥沢隆司）。

２３．末摘花　すえつむはな

A．その生涯

＊　末摘花は、父（常陸宮）亡き後、琴を相手に　寂しく暮らしていた。源氏は、乳母子の大輔命婦から、末摘花の話を聞き　興味を持つ（「末摘花」）。

＊　源氏は、大輔命婦の手引きで、十六夜の朧月夜に、末摘花の弾く　琴の音を聞き、その帰路、後をつけてきた　頭中将に見つかってしまい、忍び歩きを諌められる（「末摘花」）。

＊　源氏と頭中将の二人は、競って　末摘花に　恋文を贈るが　どちらへも　返事がなかった（「末摘花」）。

＊　八月二十日過ぎ、末摘花は、大輔命婦の　執り成しで、源氏と　一夜を過ごすが、源氏からの問いかけにも答えられず、返歌も侍女がする。源氏の　後朝の文にも、返事は　夕方　ようやく届く始末であった（「末摘花」）。

＊　行幸の準備に追われ、専ら　若紫に　熱中していた源氏は、末摘花の許への訪れが、遠のいていた。が、冬のある雪の夜、久しぶりに　彼女の邸を訪れる（「末摘花」）。

＊　翌朝になって　源氏は、末摘花の　醜い顔を　雪明りで見て　驚く。長く伸びて垂れた鼻の先は　赤く色づき　胴長で、青白い顔色であったのである。それでも、源氏は、彼女の生活の困窮に　同情し、何かと　援助を続ける（「末摘花」）。

＊　年の暮れ、末摘花は　古臭い装束に、古めかしい「唐衣（からごろも）」の歌を添えて、源氏に贈る。源氏は　思わず苦笑を漏らす（「末摘花」）。

＊　正月七日、節会のあと、源氏が　末摘花邸を訪れるが、古い道具類や　赤鼻の容貌などを見て、がっかりさせられることが　多かった。その後、源氏は　二条院で、可愛らしい若紫相手に　自分の鼻に紅をつけ　遊び戯れる（「末摘花」）。

＊　源氏が須磨退去の後、末摘花は、源氏を頼りとしていただけに、生活はますます困窮する。邸も荒廃して　狐などの住処と成り果てる。しかし　末摘花は、邸宅や道具類などを　買取りたい　という某受領の申し出を断り　古風な生活を続けるのであった（「蓬生」）。

＊　末摘花の叔母は、末摘花一族から　蔑まれた昔を恨み、彼女を　娘達の侍女にしよう　と画策していた。が、夫が　太宰大弐となった為に、末摘花に　共に九州へ　と勧める。しかし　末摘花は　叔母の勧誘に　応じようとはしない（「蓬生」）。

＊　末摘花は、再三　九州下向の誘いを拒み通したが、頼りにしていた侍従を、叔母に連れて行かれてしまい、雪に埋もれたまま　寂しい冬を過ごす（「蓬生」）。

＊　四月、花散里邸へ　赴く途中　末摘花の邸の前を通りかかった源氏は、彼女を思い出し　再会する。自分を信じて　街ち続けてくれた末積花を　手厚く　庇護するのであった（「蓬生」）。

＊　末摘花邸は、源氏によって　修復され、帰参する侍女も次第に増え　活気を取り戻す。末摘花は、二年後、二条東院に迎えられて　移り住む。正月の　多忙な数日を過ごした源氏は、二条東院の末摘花を訪れる。皮衣を　兄に返してしまい、寒そうな末摘花の様子を見かねた源氏は、絹や綾などを　プレゼントする（「行幸」）。
＊　朧月夜の許から　六条院へ帰邸した源氏は、紫上に、長く　病気の床に伏す　末摘花への見舞いも　滞り勝ちであった　と語る（「若菜上」）。

B．物語における位置　準拠

末摘花は、「故常陸の親王の御むすめ」、「常陸宮君」などと呼ばれる。常陸（茨城県）・上野（群馬県）・上総（千葉県）の三国は、淳和（じゅんな）帝の天長三年（八二六）、中納言清原夏野の奏上によって、親王任国とされ、以来　代々、親王が太守に任命される三国太守制の国であった。父宮は、常陸国太守の任を、最終官職とするが故に「常陸宮」の称があるのだが、歴代の太守で、常陸を最終官職とする親王は、一人もいないという（高橋和夫）。父宮のように、薨去後に、常陸宮の称が贈られた宮は、実在しないのである。末摘花が　身につけている「黒貂（ふるき）の皮衣」は、「古代のゆゑづきたる御装束」＝（古風で、由緒あるお衣装）とあり、父宮の遺品であった。これは　平安時代の宮廷儀礼書「江次第」に見える醍醐帝皇子重明親王の逸事に　ヒントを得たもので、常陸宮は、その兄で、常陸太守になった代明親王のこと　とする説（池田亀鑑）もあるが、確定的ではない。常陸宮の準拠は、不明とするしかないのである。

末摘花の準拠も　不明である。彼女は、父の薫陶を受けて育ち、七弦琴の名手とされる。一方で、自作の歌六首中の三首に、「唐衣」の歌語を詠みこむような、旧い教養の持ち主でもあった。「唐衣」は、「着る・裁つ・袖・袂」などを導く枕詞であるが、末摘花の場合には、「からごろも君が心のつらければ」・「きてみればうらみられけり唐衣」などと、恋の恨みや悲しみを表現する為の用語となっている。「きてみれば」の歌に　源氏は、「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかごとこそ離れねな」＝（昔風の歌詠みは、唐衣とか、袖濡るるとかの　恨み言から　離れられないのだね）（「玉鬘」）と　酷評するのである。「唐衣」により　恋の悲しみを詠む方法が　古めかしい　と考えられるようになるのは、寛弘二～四年（一〇〇五～〇七）ごろ成立した「拾遺集」以降であって、末摘花に対するこの批評は、源氏を　延喜・天暦（九〇一～九五七）の頃の人　とする時代設定に　矛盾する　という指摘（伊井春樹）がある。「唐衣」の語る　恋の悲しみの表現に　用いなくなった　作者紫式部の時代の認識が、反映されてしまった結果の、源氏の批評なのだが、末摘花準拠の　時代設定を　検討する　参考となるであろう。

「末摘花」の帖の　冒頭に、「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露」とあり、末摘花物語は、亡き夕顔追慕に始発する。この帖の　端々に、夕顔の面影が揺曳し、末摘花は、はかなげな夕顔と　対照的に描かれる。中の品（中流階級）の女への　源氏の渇望は、

常陸宮の姫君の登場によって、癒されたかに見えた。本来、常陸宮の姫君ならば、上の品（上流階級）であるはずであるが、「雨夜品定」によれば、没落した上流貴族も、中の品の扱いなのであった。「らうたげな人」を期待する源氏の意に反し、末摘花は、物語中最大の醜女であった。それは、容貌だけのレベルではなく、服装・態度・教養の全てにわたって、古めかしく、拙い女性であった。源氏の恋は　失敗に終わるのであり、末摘花は、滑稽譚の女主人公の位置にあるかに見える。しかし、物語の進行につれて、単なる滑稽な笑いの対象ではなくなる。後に　空蝉と共に、二条東院にはいり、醜女末摘花は、末永く　源氏世界と関わって行くのだが、そこには　なぜ物語に　醜女の登場が　要請されるのか、末積花の存在の意義が　さまざまな方面から検討されることとなるのである。

Ｃ．人物評価の歴史

末摘花は、短編的世界の　いわば脇役的存在ではあるものの、その醜貌や　性格の特異さから、種々の検討がなされてきた。「普賢菩薩の乗物」を思わせる長くて　先の赤い鼻に加え、「古代の故づきたる御装束」などと、「古代」なる語が　しばしば使われる。それは、古めかしい　の意であり、源氏物語では、老人について使用されるのが通例であるが、末摘花についてのみ、繰り返し　この言葉が使われる。それは、服装のみならず、調度や歌の詠みぶり、さらには　人柄そのものにまで及ぶ表現であり、「古代」は、彼女のキーワードである。古代性をおびているのは、父の薫陶に起因するのであり、常陸宮もまた　古宮であって、笑いの対象たり得るのである。こうした古宮が、権威や尊敬の対象でなくなり、笑われるべき存在に　失墜してしまったという時代相を、捉えたのが、末摘花物語である　との指摘（西郷信綱）は、先の第二次世界大戦後の　源氏物語研究において、いち早くなされたものであった。

醜女（しこめ）ということに関しては、神話や民俗学的見地からの指摘が　多くなされている。醜女には、「古事記」にみえる　黄泉醜女（よもつしこめ）が、関わっている。伊邪那岐命（イザナギのみこと）の、黄泉国（よもつくに）訪問で、登場した　妻の死体に恐れをなして　逃げ帰ろうとする命を　追いかける、死の穢れの擬人化とされる醜女である。しかし、神話において、醜（しこ）は、単に醜さだけを意味するのではなかった。醜と名の付く神や人名に注目すると、「しこ」は、異境や霊界から　立ち現れる者の意で、常人と異なる容貌故に「醜」の字を当てるようになったのだ　という（並木宏衛）。たとえば「古事記」では、根の堅州国（カタスクニ）を訪問した大穴牟遅神（おおなむじのかみ）は、「いと麗しき神」であるが、「葦原色許男命」（あしはらしこおのみこと）とも　呼ばれている。ここでの「色許男」（醜男）は、醜い男の謂いではない。根の国から見て　彼の本拠「葦原の中つ国」は、異境であり、「葦原色許男」は、異郷から訪れた男　を指すのである。「醜」は、「強く頑丈なこと」（日本国語大辞典）

であり、「異郷の　あらぶる霊力を有するもの」の意が本義であり、畏怖・畏敬されるべき存在（林田孝和）である。畏怖の面が強調されれば黄泉醜女となり、畏敬の面からすれば、葦原色許男　となるのである。末摘花は、常陸宮の姫君であった。周縁であり異境である常陸を名に負うのである、その住まい　故宮邸は、荒廃を極めるが、もともとそこは、人里離れた異境世界というのが原風景（小林茂美）であったと考えられる。末摘花は、「ひなの国から来た醜女」（高橋正秀）であったのである。

ところで、不動明王が、悪魔を調伏させる時のような憤怒の形相は、降魔の相と呼ばれるが、末摘花の醜貌は、降魔の相なのであり、魔除けの霊能を表わすものである（林田孝和）。彼女ほどではないが、空蝉も　醜に属する女である。「いとわろかりし容貌（かたち）ざま」（「末摘花」）とされる空蝉は、夫が　常陸介になった時に、共に下っていて、末摘花と同様に、常陸国に縁を持ち、両者は後に　二条東院で、末永い　源氏の庇護を受けることとなる。醜なる二人が、源氏に庇護され続けるという　一見奇妙な関係の意味に付いては、「末摘花が、二条東院の住人であったことこそが、源氏の色好みの完成には、必要であった」（長谷川政春）と　説かれる。醜女末摘花の魔除けの霊力は、色好み源氏の、栄華世界を支える存在として、大きな意義があったのである。

源氏世界にとって、末摘花の果たす役割りについては、別の方向からも　論じられてきた。「末摘花」の帖の　巻末で、源氏は　脳裏に　二人の女性を比較する。紫上の美しさに対して、末摘花の醜貌は、それとは対照的なものとして　強く印象づけられる。神話論的には、桜咲く北山で発見され　桜に譬えられる美しい紫上には、「古事記」天孫降臨神話で、邇々芸命（ににぎのみこと）と結ばれる木花之佐久夜比売（このはなさくやひめ）が　投影されていて、一方、末摘花には、醜さゆえに　命に拒絶された　姉の石長比売（いわながひめ）が　投影されているのである。邇々芸命は、姉姫を捨てたことで　長久の生命を得られなかった。源氏は　末摘花を　引取り庇護することで、命よりも大きな人間性を　付与されることとなったのであり、「生命の磐石を保証する醜女末摘花」は、栄華への予言達成を目指す源氏にとって、「不可欠の　スケープ・ゴート（scapegoat＝身代わり・生贄」（小林茂美）という　指適もある。その他、源氏が　末摘花の醜貌を　目のあたりにしたのが、雪の朝であり、その姿が「雪はづかしく白」かったり、その他の　登場場面でも、雪が、しばしば描かれることから、山の女神である雪女のイメージを持つ　とされたり（高橋正秀）、さらに、源氏の歌にも、「むむ」と笑うのみで　返事もせず、黙して語らないところに「沈黙（しじま）の女」の性格を見、こうした女が、笑いの対象にされることには、沈黙を守る冬の女神に関わる、春を呼ぶ「笑いの祭儀」である鎮魂祭が投影されている　という指摘（林田孝和）もある。民俗学的・神話論的アプローチは、多彩である。

こうした　人物造型とは別に、末摘花の人間像の変貌が、問題にされてきた。ヒロインとして登場する「末摘花」の帖と、「蓬生」の帖とでは、人物描写に相違がある。前者では赤鼻で　歌を返すどころか　言葉も出ない醜女として強調され、烏滸物語の主人

公である。後者では、亡き父宮の教えを頑なに守り、源氏の　再訪を待ちながら　貧窮のうちにも、誇りを持って生きる　孤高の人として描かれ、そこでは、醜貌に関する描写は、殆んど見られず、また　能弁で、それなりに和歌も詠むのである。源氏をして、
「昔よりはねびまさりたまへるにや」
＝（昔よりは、大人びたかな）
と、思わしめているのである。末摘花の変貌においては、和歌の詠まれ方が　大きな問題となる。そもそも　彼女と源氏は、贈答歌の礼儀を経ずして　契りを結ぶ　という異例の関係に始まり、「言葉なき女性」であることから、「性のない女性」だという　読み（藤井貞和）もあるように、末摘花における和歌は、特異なのである。その詠歌は六首に過ぎないが、「蓬生」の帖以外の三首には、全て「唐衣」なる語が詠みこまれる。先に記述したように、それは　彼女の古めかしさの象徴でもあったが、「蓬生」の帖では、全く使用されていない。昼寝の夢に　父常陸宮を見た末摘花は、
「例ならず世づきたまひて」
＝（いつになく、人並みのお気持ちになられて）
「亡き人を恋ふる袂」の歌を　独詠するが、それが　邸内に分け入った源氏の独詠を呼び起こすのであった。源氏との関係を企んだのが、故父宮の亡霊であり、そこには、歌の持つ　呪術的・神秘的なものの作用が働いている（藤井貞和）という指摘を踏まえて、「末摘花」の帖の　人物像との矛盾を読み取るのではなく「蓬生」の帖での　末摘花の背後に、潜んで動かしているものによる変貌、という読みもされている（長谷川政春）。場面や人間関係の関わり合いの中で、彼女の果たしている役割りを　読み取るという分析が　要請されるところで、作中の人物を　取り巻く場の局面や　人間関係との相関において、人物像は　変わってゆく　という考え（秋山虔）を、再確認する必要があるのであろう。変貌とその意味を説くこれらの説に対して、変貌ではなく、二つの帖には、継続して　末摘花の「つつまし」い本性があるのであって、それを　源氏が、認知出来なかったのだ　とする説（針本正行）も　提出されている。

　また、彼女は、衣に縁の深い女性でもあった。「黒貂の皮衣」を始め、登場場面の端々に、衣の話題が　散りばめられている。「唐衣」を繰り返し詠うのは、愚直なまでに不変・不動である　という意味もあり、何時も変わらぬ衣を身にまとっている姫君という意味が　篭められている　という（長谷川政春）。近年では、醜貌や衣をめぐって　身体論的アプローチから、新たな読みが　提唱されている。「玉鬘」の帖の　源氏による正月の衣配り（きぬくばり）では、一人　末摘花だけが、歌と禄とを贈り返すのである。衣配りは、天皇が　衣に霊を付与させて、臣下に分け与えることが　源泉である　とされる（折口信夫）。が、源氏のそれは、支配するもの　と　支配されるもの　という　六条院体制の　秩序確認の方法と考えられる。「唐衣」の歌で、源氏を辟易させた末摘花は、源氏とは異質の古代なる文化的背景を持っていることと併せて、源氏体制から逸脱する存在であった　とも言えるのである。末摘花という人物は、源氏を守ると共に、誰

よりも　源氏世界を脅かす　という　両義的な役割りを担っている（吉井美弥子）のである。

末摘花の人物像をめぐる論議は、多彩・多様になされている。今後も、特に　容貌に反して、髪が美しいという身体的特異さや、彼女を抱え込めない六条院世界と　源氏を相対的化する存在としての意義など、表現世界における存在意義の追求は　重要であろう。

D．人物の特色

源氏物語の中で、類まれな醜女末摘花には、容貌上　二つの美質が認められる。「色は雪はづかしく白うて」とされる顔色と、髪の美しさとである。雪をあざむく顔色は、雪女とも評される人物造型に関連するのだが、それは兎も角、髪の描写は　いわくありげである。その髪は、

「うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、袿の裾にたまりて、ひかれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ」

＝（美しく素晴らしいと思い申し上げる方々に　比べても、決して劣らぬほどで、、袿（うちぎ）の裾にたまって、その先の引きずられている部分は　一尺ばかりも　ありそうに見える）（「末摘花」）

と　描写されている。醜貌を　執拗に描写することに、さすがに、作者も　気の毒になって、この姫君に　美人の条件の一つ　髪の豊かさを　惜しみなく与えることにした（玉上琢磨）とも　取れよう。「若紫」の帖の　北山の段は、源氏が　若紫を発見する場面で、少女「若紫」の第一印象は、少女ゆえに、長くはないものの、何よりも髪であり、続く記述にも、髪の描写が　頻出する。髪は　女性の容姿を見る際に　最も興味をひく対象であり、美女の条件でもあった。末摘花の場合、この豊かに美しい髪と、それ以外の　容姿の醜怪さが、余りにも　バランスを欠き、ほの暗い雪明りの下、長い黒髪が、とぐろを巻くように、うねる様は、あたかも　ギリシヤ神話のゴルゴンを彷彿させる異様さであった。先の「若紫」の帖の段は、源氏が　生涯の伴侶となる若紫を垣間見る場面であった。垣間見が、美しい女性を発見する事によって、恋が始まるという　恋物語の常套手段である　とすれば、この北山の場面は、異例である。垣間見られるのは、髪の長い美しい美女ではなくて、振り分け髪の少女若紫と、尼剃の　その乳母なのである。末摘花のことも合わせ考えると、従来の　髪の豊かに長いのが　美女の第一条件として　定型的な表現とは異質の　源氏物語固有のありかたが、指摘される（吉井美弥子）所以である。

容貌以外でも、末摘花は、特異な面を持った女性であった。その醜貌を、象徴的に示す、先端の赤く色づいた長い鼻は、「普賢菩薩の乗物＝象」に譬えられている。その鼻は、仏教語によってかたどられこそすれ、物語において、彼女には、仏教の素養も信仰

も　全く感じられない。それどころか、「蓬生」の帖によれば、
「今の世の人のすめる、経うち読み、行ひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、（中略）数珠など取り寄せたまはず」
＝（今の人がするような誦経や勤行などは　気恥ずかしいものとして、…数珠など　手になさることもない）
というのである。「紫式部日記」は
「むかしは経よむをだに人は制しき」
＝（昔は、女が　経をよむのさえ　人は　咎めた）
という　女房の言葉を記している。真名、つまり　漢字漢文によって書かれた仏典を目にすることは、女性とって　タブーという認識はあるものの、それが禁忌されたのは、「むかし」なのである。おそらく　末摘花は、古風な父宮から　そう教育されたのであろうが、その教えを　ひたすら守る古風さが、彼女の性格なのであり、結局　彼女は　信仰心の薄い、仏教には「縁なき衆生」なのであった。

源氏に引き取られた末摘花は、後に　空蝉と共に、二条東院に暮らすこととなる。醜貌の二人は、源氏の　色好み世界を完成させるのに必要であったのだが、加えて　二人に血縁関係をみとめる説（坂本共展）が　提出されている。源氏に　末摘花の存在を伝えた　大輔命婦は、皇族の血を引く　兵部大輔の娘であったが、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」や　萩原広道の「源氏物語評釈」は、この兵部大輔は、常陸宮の子で、末摘花の兄　としている。それをもとに、末摘花も空蝉も、一院の系譜に繋がる　という指摘である。これによれば、二人は　源氏と　血縁関係にある人物として、その人生に関わっている　ということになる。

容貌と血縁という　共通項をもって、二条東院に住まう二人ではあるが、「初音」の帖に、空蝉は、
「行ひの方の人」
＝（仏道に精進する人
）と　書かれる。一方で、対照的に　末摘花は、
「仮名のよろづの草子の学問心に入れたまはむ人」
＝（仮名のさまざまな草子の学問に　熱心な人）
と、描かれる。兄は　阿闍梨であって、仏教に縁のある環境ではあるものの、末摘花は、仏教に　完全に背を向けた女であった。紫上や女三宮など、特に　晩年に　仏と縁を結ぶ女性は　少なくない。その意味では、彼女は特異である。結局、末摘花は、最終的には、源氏の文化圏に取り込まれなかった　異質の存在であり、源氏の栄華世界を異化する異境の女であったのである。

ところで、末摘花と空蝉との結びつきには、別の側面が指摘される。共に　常陸（茨城県）という地名に関わっていること、即ち　常陸宮の娘末摘花と、常陸介の後妻として、常陸国に下った経験を持つ空蝉、という在り方である。常陸は、「更級日記」の冒

頭にも引かれた　紀友則の歌

「あづまぢの道の果てなる常陸帶のかごとばかりもあひ見てしがな」

＝（東路の果て常陸に伝わる帯の鉸具（かこ）ではないが、ほんの申し訳程度（託言ばかり）でもよいから、あの方に　お会いしたいものだ）（「古今和歌六帖」）

に　詠み込まれた　帯にまつわる恋愛ロマンの伝承の地であり、旧くは「古事記」にも見える　歌垣の行われた筑波山の聳える地でもある。源氏物語では、「東屋」の帖の冒頭の、「筑波山」は、源重之の歌を介して風俗歌「筑波山」に連なっているのだし、「若紫」の帖で、心打ち解けない葵上との関係を　煩わしいと思う源氏が　口ずさむのが、やはり風俗歌「常陸」であるように、常陸という地名の齎すイメージは、古伝承や風俗歌などが、基盤にあるのである。常陸は、伝承に彩られた　古代性を帯びた地名なのであった。

古来、明石君は、作者紫式部にとって、理想的自画像であり、また　空蝉には、作者の自画像としての投影がある　というように　登場人物の造型と作者との関係が　論じられることがある。末摘花についても、「蓬生」の帖における　描かれ方には、寡婦となった後、心ならずも宮仕えに出ることとなった「作者自身の、万斛の恨みが、形を変えて込められて」おり、作者の嘆きが、末摘花の苦境への同情となって、「わが身を労わるかのように、このみずから創出した人物を　愛おしんでいる」（石川徹）とする見方もある。

末摘花の住む　故常陸宮邸は、

「親の御影とまりたる心地する古き住み処」

＝（父母の霊が　留まっている風情の　古い家）（「蓬生」）

であった。紫式部の住居については、諸説があって、確定的ではないが、曽祖父堤中納言兼輔以来、伝領された堤邸とするのが、一般的である。「紫式部集」には、自邸をしばしば「ふるさと」と詠み、そこが

「こよなう塵積もり荒れまさり」

＝（ひどく塵が積もって　荒れて行き）

「露しげき蓬」が　生い茂り、「垣は荒れ」などして、荒廃してゆくさまが詠われる。「紫式部日記」でも、自邸の

「あやしう黒みすすけたる曹子」

＝（見苦しく　黒ずんで、すすけた部屋）

の塵の積もった中で、一人　琴を弾く　作者自身の姿を描いている。末摘花も紫式部も、共に　琴をよく弾く女性であった。常陸国についてみれば、紫式部の母方の祖父藤原為信は、常陸介であったので、常陸に関する情報源を、この祖父に求めることも出来そうである。

創作である物語の人物論に　作者の実人生を持ち込むのは、慎重でなくてはならないが、末摘花の人物論に　作者の人生が　何がしか　反映されていると見ることは、可能

であろう。末摘花にも、また明石君や空蝉と同様に、作者の実人生の一部が　投影された自画像の要素があるのではないだろうか。　（元吉進）

２４．花散里　はなちるさと

Ａ．その生涯

＊　源氏は　かって宮中で、麗景殿女御の妹・花散里と逢瀬をもったことを思い出し五月雨の晴れ間に　その邸を訪れて、歌の贈答をする（「花散里」）。
＊　源氏の援助のもとに　生活していた花散里は、源氏の　須磨退去を　悲しむ。出発前の源氏は、そんな花散里を訪れ　別れを惜しむ（「須磨」）。
＊　花散里は、須磨に　わび住まいする源氏と　文の遣り取りをする。源氏帰京後、彼からは、手紙のみで、訪問のないのを　寂しく思う（「須磨」・「明石」）。
＊　源氏は、二条東院に　花散里を住まわせようと　五月雨のころ、久しぶり　花散里邸を訪れ　歌を詠み交わす（「澪標」）。
＊　花散里は、二条東院の完成によって、その西対に　迎え入れられる（「松風」）。
＊　花散里は、母葵上を失った夕霧の後見を　源氏から依頼され　快く引き受け　あたたかく　育む（「薄雲」）。
＊　花散里は、八月に完成した　六条院の東北の町に　移り住む。夏の趣を備えた町（夏の御殿）である（「乙女」）。
＊　新春、源氏は、花散里を訪問し、女の盛りは過ぎているが、上品で、好ましい彼女と　仲睦まじく語り合う（「初音」）。
＊　夕霧は、野分の翌朝、義母花散里を見舞う。更に　父源氏と共に　再訪し　彼女を慰める（「野」）。
＊　花散里の住む　東北の町で、冷泉帝主催の　源氏四十賀が行われる。花散里が、多くの装束を　整え準備した（「若菜上」）。
＊　花散里は、紫上が、大勢の孫（明石中宮の子）を　育てているのを、羨ましく思い、夕霧の子どもたちを　育てる（「若菜下」）。
＊　花散里は、裁縫が　たいそう上手で、源氏の依頼で、朧月夜の尼衣などを　仕立てる（「若菜下」）。
＊　夕霧は、朱雀院五十賀の為に、花散里の邸で、楽器演奏の稽古をする（「若菜下」）。

＊　花散里は、落葉宮との不倫に悩む夕霧に対して、養母として訓戒を垂れつつも、父親の源氏が　自分の浮気を棚上げして　息子夕霧に　忠告したりするのを　おかしく思う（「夕霧」）。
＊　花散里は、二条院で行われた　紫上の発願の法華経千部供養の法会に列席し、紫上と　歌を　詠み交わす（「御法」）。
＊　四月の夏の衣替えの頃、花散里は、従来　紫上が調整していた衣替えに衣装を、代わって整える（「幻」）。
＊　花散里は、源氏亡き後、遺産として引き継いだ二条東院に、移り住む（「匂宮」）。
（吉野・西沢）

B．物語における位置・準拠

「花散里」の帖は、桐壷院崩御に伴う　右大臣方への政権移動と　源氏追い落とし画策という　険悪な政情を　緊迫的に語る「賢木」の帖、その結果として　源氏の須磨流離を語る「須磨」の帖との間に　位置する。そこに登場する女性は、皆　物語に初出であり、しかも　源氏と彼女らとの関係が、全て過去のものとして　回想される　という特徴を持つ。そうした女性たちを　源氏が　次々と、記憶の糸を手繰るように　廻り歩く　言わば「恋の道行き」（玉上琢磨）的な構成となっている。源氏の　当初の訪問対象であった　麗景殿女御邸は、橘の花が香る中で、源氏は、和歌的風趣を感じとって　わが身を「ほととぎす」に擬えて　静かな懐旧の一時を過ごすのであった。物語本文にも、
「昔のことかく連ね思されて」
＝（昔のことを、次々に　思い出されて）、
「いにしへの忘れがたき慰め」
＝（昔の　忘れ難い嘆きの　慰め）
　などとあって、過去への回想が、この帖の　基調となっている。しかし、そうした一見　静穏な雰囲気の裏にも、源氏をめぐる政治的現実は、迫っていたわけであって、橘の花は、懐かしく匂うにも拘わらず、「花散る里」と詠い、源氏は、わが身の凋落を　陰鬱な気分で、予感していたのである。ところで、「花散里」の帖においては、花散里という人物の造型が　なされているわけではない。そもそも花散里なる呼称は、この帖においては、源氏の歌「花散る里をたづねてぞとふ」から、麗景殿女御その人、または、その邸宅を指す　と考えられる。後に、二条東院に　迎えられるに至って、その妹に　この名が固定してゆくのである。そして、源氏世界の　重要な役割りを担うことと連動して、非個性的であった彼女は、個性を帯びた人間として、描かれて行くように　変化するのである。「乙女」の帖では、夕霧の目を通した容貌が、
　「容貌（かたち）のまほならずもおはしけるかな」
　＝（容貌は　優れていらっしゃらないなあ）。

「すぐれざりける御容貌」
＝（優れていらっしゃらない　ご器量）
などと、描かれる。花散里は、醜女の側面を持つのである。また「蓬生」の帖では、花散里の不器量が、末摘花と　大差ない　と書かれている。末摘花が　再発見されるのは、花散里を訪ねる途中であったし、明石から帰京後の源氏が、花散里を訪れた場面に、「年ごろにいよいよ荒れまさり、すごげ」
＝（年頃　ますます荒れ果てて、恐ろしいほど）（「澪標」）
とあるのは、「蓬生」の帖の、末摘花邸を　連想させる。二人には、共通性が　指摘出来るのである。花散里もまた、末摘花と同様、醜女であることで、源氏世界の繁栄を保障する　という呪力が認められる　という。
「花散里」の帖は、その帖自体が、「伊勢物語」第六十段を典拠としているが、一方、第一段の影響も　指摘される。源氏が訪れるのが　女御姉妹の　寂しく住まう「花散里」であったのに対し、第一段で、男が垣間見るのは、時代から取り残されたような　奈良の京・春日の里「ふるさと」に住む「女はらから」であったのである。寂しい里に住まう姉妹を、男が訪れるという設定そのものが、「伊勢物語」第一段の影響である（丸山愉佳子）とされるのである。
花散里　その人の準拠については、不明としか言いようがない。

C．人物に関する評価の歴史

花散里は、源氏をめぐる女性たちの中では、平凡な部類に属する。際立つ個性も描かれず、性格描写も　余りなされていない。末摘花や近江君のように、特異な容貌や言動が、烏滸物語風に、強調されるわけでもない。寧ろ　目立たないのが個性　と言えるような女性である。それもあって、人物に関する研究は　決して　多いとはいえないのが、現状である。
源氏と　花散里との関係の始まりは、「花散里」の帖によれば、かって宮中で、仮初の逢瀬を交わした　とあるから、桐壷帝の在位中のことである。現在の　源氏物語には、二人の馴れ初めは　一切書かれていない。六条御息所や、朝顔姫君との関係も　同等である。こうした、いわば書かれざる歴史については、藤原定家の「源氏物語奥入」が、「かがやく日の宮」の帖をあげていることを承けて、昭和三十年代には、それが「桐壷」・「帚木」両帖の間にあったことを想定する説が　盛んに唱えられた。が、現在では　いわゆる　偽作の帖の一つに数えられている。
花散里については、まず人物像の変質が問題とされる。初出の「花散里」の帖では、厭世的気分の源氏が、過去に交渉のあった懐しい女性たちを求めて、中川あたりの女から　麗景殿女御へと、恋の道行きをするのであったが、その最後に、申し訳程度に、記されるのが、女御の妹の三宮、つまり花散里であった。源氏は、中川の女と女御とは、

歌の遣り取りまでするものの、三宮とは、歌どころか　言葉さえ交わしたようすがないのであった。この帖では。彼女は、人物描写が　なされていない　個性の描かれない女性なのである。しかし、事情は　この帖の　他の二人、中川辺りの女と麗景殿女御においても　大差はないのである。この三人については、記述が、極めて簡略であり、非個性的であって、同質と考えられ、源氏との　出会いの経緯が語られず、既知の女性とされているのであって、この帖における　花散里の特徴は、非独立性にある　とされる（小町谷照彦）。「花散里」の帖の名は、後には独立した人物としてその呼称を得ることになる花散里という人物と、直結しないしのである。初出から　しばらくは　同様で、彼女に関する記述は少なく　印象の薄い存在であり、「かくれた愛人たちの代表」（岡一男）、「取り立てて物語るに価」しない女性たちの総代（藤村潔）なのである。たとえば、「須磨」の帖で、源氏が　京の人々と　手紙の遣り取りをする所では、

「花散里も、悲しと思しけるままに、かき集めたまへる御心こころ」

＝（花散里邸でも、悲しくお思いになったままに　書き集めなさった　二人のお気持ち）

　とあって、「花散里」は、麗景殿女御の邸宅をさし、そこに住む　女御姉妹が、一組として表現されているのである。そこでの花散里は、姉女御に付随し　姉妹でひとまとめにして、源氏の庇護を受ける存在なのである。

　花散里の人物像は、「澪標」の帖あたりから　少しづつ具体的な記述がなされるようになり、「松風」の帖に至って、明確な姿を現し始めるのである。この帖は、源氏の　二条東院落成の記事から　書き起こされる。構想論的に、それは　后がねとして、明石姫君を住まわせる　という源氏の政略的な意図から　造営されたものであった。

「東の対は、明石の御方と思しおきてたり」

＝（東の対は、明石君のお住まいとお考えであった）

とあるのだが、結局　源氏の思惑は実現せず、明石の母娘が、入居する事はなかった。その課題は、六条院構想へと発展することになるわけである。源氏の　二条東院の造営には、別の意図もあった。「澪標」の帖で、東院について　初めて触れた部分には、

「花散里などやうの心苦しき人々住ませむ」

＝（花散里などのような気の毒な方々を住まわせよう）

とあって、まずは、花散里の名があげられている。そこには、須磨流離から都に復帰し内大臣となった源氏の、復帰を影で支えてくれた故桐壷院に縁の深い麗景殿女御姉妹を後見しようという気持ちも　読み取ることが出来よう。ここでの、花散里の呼称は、それ以前の、各帖が、女御あるいはその邸宅を指していたのとは違って、花散里その人を指すのである。が　女御は、「澪標」の帖の　源氏の訪問を最後に、物語から姿を消し、二条東院にも　引き取られてはいないので、この辺りで　亡くなった　という設定なのであろう。

　ともかく、花散里は、二条東院の住人となる。物語中　二条東院を指す「東の院」の用例は、十六を数えるが、彼女が、六条院に移る以前における用例は、「蓬生」の帖で、

末摘花を指す例を除けば　殆んど　花散里本人と関わって　用いられているのである。源氏の没後、花散里は、六条院を去って、二条東院に戻り、そこを分け与えられて、女主人公的な　待遇となる。「薄雲」の帖では、その人物像が、
「好ましう、あらまほしきさま」
＝（好感を持たれ、申し分のないようす）、
「御心ざまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどか」
＝（ご気分が　おっとりしていて　邪念がなく、この程度の宿縁の身なのだと、自ら　言い聞かせ、珍しいまでに不安げなところもなく、心静か）
　などと、具体的に描かれており、また「朝顔」の帖で、紫上に語った源氏の言葉にも、
「世をつつましげに思ひて」
　＝（私との仲を、遠慮がちに思って）
　とあって、穏やかで、控え目で、宿世に従順に安んじる女性として、造型されているのである。「乙女」の帖以降、花散里には、　新たな役割りが、割り当てられる。夕霧の世話を託され、親代わりに養育し、六条院の夏の町に移ってからは、玉鬘の世話も任される。裁縫や、染物の技術、香にも才があり、源氏の日常生活において、家庭経営的、実務的な役割りを担うのである。没個性的で、非独立性が特徴であった花散里が、　ここでは変質し、二条東院、六条院夏の町の女主人公として、独自の人物像を獲得しているのである。源氏夫人として、夕霧の母として、紫上の脇役としての多様な役割りを持つ（沢田正子）に至るのである。
　花散里の人物像が、「松風」の帖以降、変質するという事実に関しては、別の指摘もなされている。「花散里」の帖では、花散里姉妹は、傷心の源氏を受け入れたのに対し、同じく　昔交渉のあった中川辺りの女は、それとなく拒んだのである。前者は　変ることなく、昔の香を漂わす女性たちであり、後者は　時代の流れに従って、源氏から離れて行こうとする女性である、中川辺りの女が、その後　全く思い起こされることがないのは、そうした時流に棹さす者への　断罪の意識であり、一方、花散里が、後に重要な役割りを得ることになるのは、変らない者への評価なのであって、「勧懲風」「勧善懲悪風」の構成なのだ　という（村井利彦）。とすれば、初出の時点で、実は、花散里は、既に　長編物語中の人物という構想上の位置づけと　人物造型の下地がなされていたこととなる。姉の麗景殿女御の方は、「澪標」の帖までは　その存在が語られるものの、以降は、その名を見ないのである。この、本来は、花散里の呼称を与えられていた女性についての言及は　多くはないのであるが、例えば、源氏が　常に　姉妹の世話に心配りを怠らずに、一種　義務感めいた感情すら　感じさせるのは、姉妹と源氏の　古くからの強い絆を想定させる。物語には書かれていない昔において、女御姉妹と　その一族が、桐壷帝の依頼で　母なき源氏の　養育を任された、いわゆる母代わりの役を担ったのであって、源氏の成長と共に、妹が、その最初の妻となったのだ　とする説（坂本昇）

も　提唱されている。後に　花散里が担う　養母の役割りと　照らし合わせてみたとき、その造型は、当初から構想されていたことになる。興味深い説であり、構想論上の課題かと思われる。

六条院構想における花散里の役割りに付いて、多くの説が提唱されている。夏の町で、女主人公の役割りを与えられても、穏やかで、控え目な性格は変らず、他の町の女性たちとも、調和を保って生きて行く。六条院の源氏の夫人たちを比較した時、「おんな」や「つま」として、機能する　紫上や明石君に対し、生活の実務的面をとりしきる「雑」の部類に入る女性、つまり「主婦的」な妻としての役割りを担うのが、花散里である　とう指摘（永井和子）もある。六条院の一町を与えられた女主人公である花散里の　存在意義は　甚だ　大きいのである。

D．人物の特色

花散里の人物造型の特徴に　容貌の悪さがあった。「朝顔」の帖までは、折に触れて、源氏の心に　浮かぶが、その「心ばへ」＝（気立て）の良さが書かれてこそすれ、容貌に付いての指摘はない。「乙女」の帖に至って、容貌の悪い女性　という造型が固定する。醜女の典型である　末摘花ほどの醜貌ではないものの、やはり醜の部に属する。醜（しこ）は、否定的な意味だけでなく、尋常ならざる霊力、魔除けの呪力　という機能もあった。醜貌の花散里は、「降魔（がま）の女」なのであって、六条院の夏の町に据えられたのは、そこが、邪悪なものが出入りする鬼門に当たる丑寅（東北）に位置するからである　として、六条院の栄華世界を守護する魔除けの女として、位置づける考え（林田孝和）もある。更に　この説に基づき、六条院の　春の町と夏の町が　五行説から見て　逆転しているのは、花散里を丑寅の町に配置して、鬼門除けの守護神とする為と、最愛の紫上を　魔性が出入りする鬼門に置くことを避けた為の　構造上のゆがみなのだ　とする指摘（三苫浩輔）が　されている。

ところで、二条東院や六条院において、花散里は、裁縫や染物をはじめ、折々の衣装の手配、騎射などの行事の準備、さらには、夕霧や玉鬘のみならず　夕霧と藤典侍との子を　引き取っての養育と、細々と家庭内の実務的な仕事を任され、こなしているのである。その姿は、家庭人として　影で　源氏を支える家刀自、即ち　一家の主婦そのものである。そうした側面が　強くなるにつれて、彼女からは　女という性が希薄になってゆく。二条東院移住後、源氏との円満で、平穏な夫婦生活のさまが、折々述べられるが、それは、ある意味では、奇妙な間柄である。早く「薄雲」の帖で、

「のどかなる御暇のひまなどには、ふと這ふ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず」

＝（ゆっくりした　暇な時には、急にお越しのこともあるが、夜お泊りになるなど　わざわざとは　いらっしゃらない）

とあり、また「初音」の帖には、
「今は、あながちに　近やかなる御ありさまももてなしきこえたまはざりけり」
＝（今は、強いて　親密な人としての扱いも　なさらないのだった）
とある。さらに「蛍」の帖にも、花散里の許に、泊まった源氏との夫婦関係が、
「今はただおほかたの御睦びにて、御座なども別々（ことごと）にて大殿籠もる。……け近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れはて聞こえたまへれば」
＝（今は、もう、一通りの夫婦仲で、お床も別にして　お休みになる。…御帳台を、源氏にお譲りになり、几帳を間に立てて、お休みになる。…お側で、共寝することなどは、似つかわしくないものと、全く　諦めてしまわれて）
などとある。この部分は、「江戸時代になると、大名の奥方は「おしとねおことわり」といって、同衾しない　習慣であった」（玉上琢弥）と評されるが、まさに　床離れの状況である。こうした記述は、花散里特有のものであって、源氏の　他の夫人では　あまり例がない。そこには、花散里の容貌の悪さが　関与していることは　否定出来ないが、ともかく、二人は　実質上　夫婦でなくなったのであり、源氏の愛人の立場から　疎外された（細野はるみ）ともいえるのである。女であることを捨てることによって、花散里は、紫上や明石君など、六条院の他の女性たちの地位を　脅かすことは　なくなる。彼女は、不安定な　男女関係とは違った　家庭人の役を演ずることで、源氏との結婚生活を生きた女性なのである。こうした、辛く　侘しい関係を　あるがままに受け入れ、恥じるところがないし、その醜い容貌に関しても　意に介することはない。現実を、素直に受け入れ、飾らず生きた女性　ということになろう。
花散里の　こうした人物像については、別の見方も出来る。一体、穏やかで　控え目、時には　不思議なほどに謙虚な人柄は、現実の人間　としては、異様にも感じられる。そもそも　こうした人物評は、多くの場合、源氏や　周囲の女性たちからの「好ましう」という類のものであって、彼女自身の言動から　客観的に導かれた人物像とは、必ずしも言えないであろう。例えば、「蛍」の帖で、花散里の許に泊まった源氏は、自分の弟宮たちの人物評をし、対して彼女は、弟宮二人の　劣っている点を、手厳しく評価するのである。源氏は、
「ふと見知りたまひにけり」
＝（一目で　二人の真価を　見抜いてしまわれた）
と、彼女の　人をみる眼の確かさに　舌を巻くのである。また、「夕霧」の帖では、落葉宮との一件を弁明し、父源氏の　女性に関する訓戒について　口にする夕霧に対して、次ぎのように言う
「さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば　人しらぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば、大事と思ひて、いましめ申したまふ、後言（しるうごと）にも聞こえたまふ」
＝（面白いことに、院（源氏）は、ご自分の癖を　人が知らないかのように、少しばかり

の　あなたの浮気心を、一大事のように思われて、忠告なさり、陰口までも　お聞きになる）
と、この後は、自分のことは、棚に上げてというような口ぶりになるのだが、花散里にしては、珍しく　過激な言葉なのである。「さてをかしきこと」という口ぶりは、源氏に対する　皮肉っぽい視線が感じられる。この部分は、「源氏から　距離を保たせられた女の　冷静な観察」（新編日本古典文学全集注）なのである。

　してみると、花散里は、単に　控え目で　穏やかだけの人物ではない。その裏には、冷徹に人を見る目と、物事を見抜く心　とがあったのであるが、ただ、それを　人前では　滅多に　見せる事がなかったのである。こうした一面から　彼女を、「したたかな女」と捉える論（辻和良）が出されているが、重要な指摘である。しかし、六条院体制の中で、表向きは　花散里は、あくまでも　控え目な女性なのである。そのことによって、夏の町を司る主婦の立場が　保証されるのであり、心奥を露わにして、自己を主張し　突出させることは、六条院体制の調和を失う行為なのである。花散里は、自らの女の性と心を　封じ込め、自らに与えられた役割りをこなすことで、居場所を得た。そういう意味では、賢い女性　と言えよう。なお、穏やかで、控え目なのは、表面的であって、内部には、「精神の葛藤」を秘めている　という説（田坂憲二）も　提唱され始めている。

　さらに、最近では、フランスの女流小説家ユルスナールの「源氏の君の最後の恋」を参考に、花散里の　穏やかさは、心弱さではなく、心の中に、情熱を秘め、自立した女の強さなのだ　とする説（松原志伸）も提出されている。花散里の人物評価も、変貌しつつあるのである。

　鎌倉時代の評論書「無名草子」は、「好もしき人は、花散里」と論評する。「薄雲」の帖に於ける　源氏の　花散里評に「好ましう」とあるものと　重なる評価である。源氏は、多くの妻を抱え、それらの調和の上に　栄華世界は保たれてゆくが、その中で、　花散里の生き方は、男女の関係に動揺しない　安定した結婚生活の理想を　示しているとも言えるのである。

　その一方で、性なき女としての役割りを　強要されるという一面が　花散里にはあった。そうした　同情すべき人物として、作者紫式部は、女性の立場から、この人物を　いとおしんでいるのではないか。花散里という人物の着想は、作者の　原体験と関わっている　とする論（藤村潔）がある。花散里は、源氏誕生と共に　登場したと想定されるのであったが、源氏亡き後も、二条東院に戻って　余生を送っている事が、「匂宮」の帖に　記される。源氏世界の誕生から消滅までを、目撃した　生き証人であり、源氏の人生の全てを　見届けた女性なのである。そうした人間は、登場人物としては　他に存在しない。強いてあげれば、語り手と作者　ということになるだろうか。先述の「したたかさ」を併せ持った女性という評もあった。花散里には、作者紫式部の　批評の眼と心を、感じ取ることが出来る、と言ったら　言い過ぎであろうか。　　（元吉　進）

２５．大君　おおいきみ

Ａ．その生涯

＊　宇治の　八宮の長女である「大君」は、母が　妹の中君を産んだ際に、亡くなった為に　八宮・男手一つで　育てられた（「橋姫」）。
＊　京都にあった　八宮の邸宅が　火事で焼けた為に、大君は、八宮・中君と共に、宇治の山荘に移る（「橋姫」）。
＊　八宮を　仏教の師（法の師）と仰ぐ薫は、宇治の山荘で、八宮の留守の折に、大君と中君が、月の光のもと　楽器を合奏しているのを、垣間見る。（「橋姫」）。
＊　大君は　薫から　親しく交際を　と申し込まれるが、突然のことに、驚き　はっきりした返事が出来ないでいた。が、心のこもった返歌だけは　贈った（「橋姫」）。
＊　八宮は、自分の亡き後の　大君と中君の後見を　薫に依頼する（橋姫）。
＊　二人の噂を　薫から聞いた匂宮は、宇治に手紙を贈る。大君は　返事を書こうとしないので、中君が、返事を　書く。以後　匂宮との文通は、中君がすることとなる（「椎本」）。
＊　大君と中君は、父八宮から、不誠実な男性に騙されるくらいなら、結婚せずに　ここ宇治で　一生を終える覚悟をするよう　遺言される（「椎本」）。
＊　山篭り中であった　八宮は、突然病に倒れ、急逝してしまう。大君と中君は、父八宮の遺体に会いたい　と願うが、成仏の妨げになると、阿闍梨に阻まれて　願いは叶わなかった（「椎本」）。
＊　父八宮を失って　悲嘆に暮れる大君は、八宮の生前と変らず　世話を続けてくれる薫に感謝していたが、中君と匂宮との仲を　取り持った上で、自分が大君と結婚したいという薫のことばを聞き、彼の親切な行為には　下心があってのことであったのだ　とショックを受ける（「椎本」）。
＊　求婚し続ける薫に、大君は、自分は　父の遺言通りに、生涯　独身を通す覚悟であること、薫には　妹の中君と結婚して欲しい旨を告げる。その際　薫に　抱きしめられてしまうが、拒み通して　朝を迎えたのであった。大君の体から、薫の移り香を感じ取った　中君は、姉の大君は　薫と結ばれたのだ　と勘違いし、姉に不信感を持つ（「総角」）。
＊　女房に手引きさせた薫が、寝所に忍んで来たことを　察知した大君は、部屋から逃げ出したが、自分の身代わりに　薫と契りを交わすことになるであろう　中君のことを思い　断腸の思いである（「総角」）。
＊　薫と中君は　契った　と勘違いをした大君だったが、再度　薫から求婚され、更に中君の許に　忍び込んだのは、匂宮であったのだ　と聞き、嘆き悲しむ（「総角」）。
＊　突然のことに　泣く中君を、大君は　あれこれ慰める。このようになっては、中君

と匂宮との結婚を認めざるを得ない　と思う（「総角」）。
＊　匂宮が、中君の許に　なかなか通うことの出来ないことに　絶望した大君は、結婚不信となり、ますます　独身を貫く覚悟を固くする（「総角」）。
＊　大君は　不実な匂宮と結婚した中君の将来を憂い　その余りに　発病してしまう。薫の　親身の看病も空しく　大君は、はかなく　あの世へと　旅だってしまった（「総角」）。

B．物語における位置・準拠

大君は、「宇治十帖」の前半の「橋姫」「椎本」「総角」の三帖に、薫の相手の女主人公として登場する。その歴史的な準拠としては、花山院の皇女を指摘することが出来る。

紫式部の父・為時は、慶滋保胤（よししげやすたね）と同じく、菅原輔正を援けて、尚復文章生をつとめ、花山帝の即位と同時に　蔵人式部丞として、内御書所に　勤仕している。然し、寛和二年（九八六）、花山帝の突然の出家という劇的な退位により、為時は、官位を失い　以後　十年もの長い間、散位（無職）のまま　放置された。三十台の働き盛りの為時にとって、花山院の出家・退位は、痛恨の出来事であった　であろうし、それは　そのまま　十七歳（今井原衛説）の紫式部に、深刻な運命の影を投げかけたであろうことは、想像に難くない。

花山院の出家を　手引きしたのは、厳久（ごんく）で、横川の僧都源信とともに、勧学会の発展的継承である「二十五三昧会」の　中心的人物であった。寛弘五年（一〇〇八）の少し前、寛弘元年（一〇〇四）前後に、保胤を中心に、為時も、関係のあった勧学会が、創始以来の結衆の　高階積善（たかはしもりよし）・藤原在国らによって　洛中の法興院において　再興される。

また、源信により、霊仙院（りょうぜんいん）に「釋迦講」が　開かれる。寛弘四年、（一〇〇七）七月から、一年前の過去帳には、源信ら二十五三昧会の人々をはじめ、彰子・倫子・資子内親王・公季（きんすえ）・為時の従兄弟の大蔵権大輔藤原義理（よしさと）の名もある。それらの人々とから、源信の　最近の動向も　知る事ができたであろう。

そういうわけで、花山院の亡くなる前後には、作者紫式部にとって、何か　花山朝の最後を想起させる　状況が　醸成されつつあった。その花山院の最期について、「栄花物語」は、奇怪な伝承を　記している。

花山院には、この女と　その女親と、その両方に、沢山の御子がいた。それぞれに　女宮が、二人ずついらっしゃった。「私が死ぬものなら、まずこの女宮たちを、中陰の間に、皆　あの世に連れて行く」と　仰せになるので、御匣殿も　その女も、さまざまに涙を流された。そして、事実、中陰の間に、この兵部命婦が養育される女宮を除き、ほかの女宮たちは、引き続き　皆お亡くなりになった……

宇治の阿闍梨や八宮・薫の仏道修行が、「厭離穢土、欣求浄土」を志す　二十五三昧会のもので、八宮の準拠は、花山院で、大君の準拠は、院の死後、忌みが明ける間もなく亡くなって評判になった女宮のお一人である　と考えられる。

藤岡作太郎氏は、「竹取物語」の姫との類似を　指摘している。また、薫の　大君・中君の垣間見（端姫）をきっかけにして、薫が大君を恋し、また　大君を失って　その妹の中君を形代として、中君に　大君との類似を認めながら　恋して行く構図には、「姉妹連帯婚」（松村武雄）の構図が、埋め込まれている　とも言われる（「中君」の項　参照）。

Ｃ．人物評価の歴史

大君は、薫に　好意を寄せながらも、彼の愛を拒み続け　病没してしまう。そのことについて、「無名草子」には、

「返す返すいみじけれ」

＝（本当に　印象深い）、

とし、また

「宇治の姉宮の失せこそ、あはれに悲しけれ」

＝（宇治の姉君の亡くなったのこそ、しみじみと悲しいことですよ）

と、書かれている。

近代・現代の　大君をめぐっての研究も、彼女自身が、薫に　好意を抱いていながら、なぜ　その愛を受け入れることが　出来なかったのか、という　大君結婚拒否の論理が中心である。

大君の性格と体験から、結婚拒否に至った　とする説に、田中常正氏のものがある。氏は、大君が　薫を拒否する理由として、

１．後見が居ないこと…経済的不如意。

２．鄙びた環境に支配されて世間に疎い自分を卑下していること。

３．父親の遺言に　忠実であろうと　志向したこと。

４．中君の不幸な結婚体験による　結婚拒否の志向の強化。

５．潔癖な理想的な愛情を求めた為。

６．不信・懐疑の心境に陥った為に、人を頼む心を失っていること。

７．薫の性格が、余りに厳格であったこと　などをあげ、１．家名・家系。２．経済力・後見。３．恋愛・人情世情。４．狭義の環境（大君の生活環境）。５．体験に伴う　知的認識による観念化。６．その観念化を助長せしめた　父八宮の遺言の力。７．信用を持ち得なくなった大君の心。８．死を望む心。以上八つの点に　分けて考える。そして、「大君の厭世的思考は、先天的性質に基づくものと　後天的に助長せられたものがあった。それは中君の苦しみを、身近に体験するに及んで、それを契機として、一瞬に観念

を強化していった　現世厭離・人間不信・特に　男性の愛情の不信を　企画したもの」であり、そこに示される　停滞的境地は、「紫式部日記」の「としも暮れて　自らの老いとともに、この夜更けの風の音を聞いていると、わが身の行く末がつくづくと思われて、まことに荒涼としてさびしく思われる」という紫式部の心境と　通じるものがある。それは、紫式部の　先天的な　知的・感性的に鋭い傾向と、幾分　偏狭な性格が、結婚生活の不幸と　孤独や　毀誉褒貶に、精神を摺り減らされる　煩わしい女房生活が、世間に対する味気なさと、それを基調とした厭世観・無常観を　決定的なものにして行ったのである。大君の世界は、こういう過程で、現実と宗教世界の中に　彷徨い、その方向性を与えよう　と　意図する心理作用が　創作心理として　作者を駆り立てたのだという。

清水好子氏の視点も、大君の人格を問題にし、おかれた情況によって培われた大君の性格に注目する。

大君が、あえて　女主人公としての役割りを果たそうとする時、彼女は　世間に直面する。大君には、朝廷の庇護や、社会的名声・財産・子供はなく、彼女は、おのずから、自他の力の差を知り、父を敗北させた権力の強大さを　知ったであろうし、少しでも早く　物心つく姉は、早くから　父の悲しみが分かり、その分だけ　妹は庇われ、姉は傍らに立つ　のであった。世間から　冷たくされるものは、家族同志で　労わりあうものである。大君が、本来持つ　女らしい思い遣りと優しさは、その境遇の為に、いっそう鋭敏となり、尽きぬものとなる。すると、それが　いっそう彼女を　思慮深くするのである。聡明さは、思い遣りによって養われるのである。それが、結婚拒否の姿勢を生んだのである　とする。

秋山虔氏は、「大君の姿勢は、八宮に訓戒を残させた女の宿運についての　作者の　厳しい省察を　基盤としている。源氏の半世紀にわたる世界を描くこと、それは　女が女であるが故に　甘受を余儀なくされる　悲しい宿命を掘り起こし　直視する営為でもあった。そして、それと共に生きた作者は、如何に生きようとしても、生きることが出来ぬ　女の生命の恨みに堪えなかったのであり、このような彼女が、いま大君の生き方を生きるとき、薫に身を委ねることに、絶望しないではいられなかったのだ」という。

千原美沙子氏は、「大君を通して描かれたのは、単純な女性の受難でも、女であることの生き難さを、語り続けることだけでもない。自らを、生き難い状態に　追い込んでいく何者かが　自己の中に宿り、自らが、加害者であり、被害者でもあるような、自殺的道を、歩まざるを得ない女の心理のからくりを、追求していくところに、その価値がある」と　いう。

千原氏は、八宮の遺戒が、薫との愛のブレーキにはなっていない　という。「臨終のときに、残した大君最後の言葉

「このとまりたまはむ人を、おなじことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからまほしと、これのみなむ恨めしきふしにてと

まりぬべうおぼえはべる」
＝（この後に　お残りになる人を、この私を同じように、思ってくださいましと、それとなくお願い申し上げましたのに、もし　その通りにしてくださいましたなら、私も安心して　旅立つことが出来ましたでしょうに、そのことだけが、恨めしく　この世に執着が残りそうでございます）（「総角」）

という一節は、姉妹の　一人が　薫と結婚する事は、姉妹の将来を安定させる鍵である　と考えていた八宮の意向を　大君が完全に理解していたことを　示している。薫の無礼な手を逃れたときも、「はひ入りて、さすがに入りも果て」ず、と　きっぱり拒絶出来ない　思い切りの悪さは、「愛」とよぶべきなのであろう。肉体的に　結婚するのは　中君であっても、精神的には、大君も　薫と結婚しよう　という。これは代筆の恋文に　自らの愛と生命を込めた　シラノ・ド・ベルジュラックの　女性版である。シラノのブレーキは、醜い容貌であったが、大君の場合は、愛に対する　漠とした不安と、誇りの高さの　裏返しである劣等感などである。大君には、妹思いの姉　という美徳と、愛の危険を避けつつ　その美酒を味わおう　とする身勝手さが同居しているのである。結婚によって汚されずに　しかも男の心に永遠に生き続けたい　と願う大君の死は、自己愛の祭壇に捧げられた生贄であった。そして　その上に、薫の苦悩を注ぎ出すことに、何の気の毒さも感じないばかりか、それあってこそ、初めて、生贄は　完璧なのであった。「大君の　結婚生活拒否に、女性の自己愛・残酷さを見る事が　出来るのである」と　する。

また、大君の物語は、伝承的説話・伝統的文学表現の方法を　極度に拒絶しながら、ひたぶるに、進められている。愛を痛切に深く考えるが故に、そこには、彼女が敬愛する薫にも、想像する事の出来ない　思想の深淵が　生じている。どんなに、愛する者も、覗き込むことが出来ない「個」の魂の聳立がある　という（益田勝美）。

それに対して、久富原木玲氏は、逆に　伝統的文学手段、先行物語の枠組みとして、「竹取物語」を取上げ、新たな物語の構造を　指摘する。話型に添って　比較して見ると

「竹取物語」	「大君物語」	正編「紫上物語」
１．発見。	１．垣間見。	１．垣間見。
２．養育。	２．八宮の死後の後見。	２．二条院に引き取る。
３．求婚（帝・五人の貴公子）。	３．求婚（薫）。	３．養育。
４．拒否。	４．拒否。	４．なし。
５．昇天。	５．死。	５．死。

以上のように、対応する　という。また　正編の紫上物語でも、話型の比較をしてみると、「竹取物語」との対比は、指摘できるが、紫上と大君との　態度の差は　明確で、正編においては、男性の論理としての形代の方法と、女性の論理としての結婚拒否とは、別々の次元で　進行し、前者が、物語の流れを決定づけてきたのだが、宇治十帖では、

むしろ傍流に過ぎなかった拒否の論理の方が、前面に押し出され、遂には、浮舟の場合に見られるように、形代の方法を相対化していくのである。拒否の論理が、このような機能を果たし、存在感を持ち始めたのは、「竹取物語」世界の引用に負うところが大きい　という。

しかし、いずれも、大君の結婚拒否の物語は、晩年の　紫上の苦悩を　引き継いでいる　と考えることでは　一致しているのである。

D．人物の特色

「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」
＝（その頃、世間から　忘れられていらっしゃる古い宮様がおありであった）（「橋姫」）と　始まる物語の場面は、宇治であった。宇治の八宮一家の　失意と没落の生活が　物語では　初めて意味のある物として描かれていることに、まず注目しなければならない。

宇治には、道長の別荘があって、遊宴の為の宇治行きが「御堂関白日記」などでも、確認できる。貴族たちが、春日神社に詣でる途中など、宇治で饗宴が設けられることも多く、匂宮が、紅葉狩に託けて、中君に会いに来るのも、そういう　背景があっての事である。

また　そこには、道長の建立した「木幡浄妙寺（こわたじょうみょうじ）」があり、寛弘元年（一〇〇四）には、「三昧堂」が建立されている。そこには、藤原基経によって、　藤原氏の墓所と定められていて、時平・忠平・実頼や　藤原氏出身の皇妃・道長の父兼家・母の時姫、姉の三条院詮子も　ここに葬られている。柏木は、藤原氏の氏の長者の頭中将（後の　内大臣）の長男であったから、薫が弁尼を通じて　自らの出生の秘密を知る場としては　相応しい（中島朋恵）。

また　八宮が行じた仏道は、慶滋保胤や源信、花山の僧正勝久らの、「二十五三昧会」で行われていた修行で、「臨終の正念」を　何よりも重んじるものであったから、思想的にも　場面が　宇治に　選び取られたことは、納得できるのである。

藤原摂関時代の、一夫多妻制の中で、女性が　結婚の幸福を　女性として、また人間としての幸福を　生きてゆくことの困難さを、登場人物と共に　生きて行くことを通して、物語作者は、思い知ることとなる。ことに、紫上の至りついた
「女ばかり身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし
」＝（女ほど、身の処し方が　窮屈で、痛ましいものは、ほかにはない）

という　人間や人生に対する認識は、物語作者の人生や世界に対する　認識であったのであろう。そういう作者が、新しい物語の枠組みとしての準拠を、源信らの　念仏結社の「二十五三昧会」に　求めたのであった。薫と大君との恋については、その三昧会を　念頭において　考えなければならないのである。

大君は、

「心ばせ静かによしある方にて、見る目もてなしも、気高くこころにくきさま」
＝（ご気性が　しとやかで、深みのあるお人柄で、見た目や物腰も　気品高く、奥床しい様子）
　で、
「らうらうじく、深く重りか」
＝（気品高く、嗜みがあり、思慮深く　重々しい）
　であって、薫が　初めて姉妹を垣間見する場面でも、中君よりは、
　「いますこし重りかによしづき」
　＝（もう少し　重々しく、嗜みの深そうな）
　風情に見えた（「橋姫」）。そういう大君が、その死後、中君によって、大君は、父に似、中君自身は母に似ていた　と、回想されているのである。父八宮の死後は、父宮に代わって　宮家としての責任と、誇りを担っているのみならず、貴族社会の政争に利用され、世の中から捨てられ「俗聖」という存在者として、三昧会の思想を修道していた父宮の精神性をも　継承していた　と思われるのである。
　父源氏に先立たれて、この世を　悲しいものと知ってから、官位とか、世間の栄誉とかには、関心が持てなくなったといいう　薫の精神性は、源氏の　晩年のものを受け継いでいると同時に、大君の担っている思想性・精神性（それは、物語の　思想性・精神性　と考えてよい）から、逆に設定されたものである　とも言えるのである。大君物語について考えるとき、大君についても、薫についても、後の　浮舟物語は、まだ　存在しないものと　考えねばならない。
　二十五三昧会の「定起請」（起請第十二箇条）の、結衆は、ともに　長く父母兄弟の思いをなせ　という第五条の細則に、「長い一生の間　共に三昧を修し、たとい　此岸と彼岸とは、はるかに遠く隔たっていようとも、九品蓮台（浄土）への道をのぼらなくともよいものだろうか。父母・兄弟の契りを結んで、父母には孝養を尽くし、兄弟には友愛の誠をささげ、生前は、共に愛し合う気持ちを　忘れずに、死後は、共に　真如（悟り）の世界に到達するべきである」と説いている。そういう三昧会の規定から、みるとき、八宮の薫への　後見の依頼は、成り行きとしては、極めて　自然なものであった。薫との結婚についても、千原氏の指摘のように、父宮の意向は、大君には　充分に理解されていたのである。また　宮家への　圧倒的な物質的な援助についても、薫の意識としては、当然そうしなくてはならないものであって、大君物語に限っては、薫の　俗物性として、批判さるべきものではあるまい。（「薫」の項　参照）。
　薫は、官位とか、世間の栄誉には　関心を持てない。八宮の死に接して、更に　この世の無情を　思い知った　と言いながら、大君に　恋心を訴え、京都近郊の山里の別荘に　迎えることを　申し出る。後に　女二宮を迎えることにはなってもこの段階では、薫は　権門の女性には　近づこうとは、していない。「匂宮」の帖では、三条の宮に詰める「召人」は　描かれるが、別段　それらの女性の為に　仰々しい扱いはしていない

という。社会的地位ということでは、零落の八宮家の大君は、「召人的」な扱いが　妥当ということかもしれない。けれど、姉妹を　京都近郊の別邸に迎えよう　ということは、薫としては、正妻でもない、かといって　召人でもない、関係を求めていたのではないだろうか。大君の視点で言い換えれば、大君にとって　薫は　充分すぎるほどの理想的男性であったのであり、「天台浄土」という「　宗教的な雰囲気の中で、大君にとって、そういう理想的な男性であれば、身を任せることが　出来る　という試みの物語であったのである。そして、大君は、それでも、生きて薫に身を委ねることは出来なかった　ということなのである。

薫が、大君の為に　と行動することの　一つ一つが、薫の意に反して、大君を傷つけ、追い詰めて行く。そういう文体のうねり、思考のうねりに、大君の生命を　自らの生として生きる作者の「ナルシシズム（自己陶酔）」を　見ることが出来よう。中君の　匂宮との結婚が、宇治を出て、貴族社会の中に置かれた時、結婚生活が、如何に、不安定なものであるかを、知ることとなって、大君は、薫との将来に　希望を持つ事が出来なくなったのである。そのことが、大君が　自分自身を　死へと追い詰めていく　一番の理由なのであった。

病床を見守る薫を　懐かしくも思い、死後の思い出にと、避けることをしない大君は、薫を　拒否しながらも、その薫を　最も愛していたのだ　と思われるのである。

作者は　正編には描かれなかった　全く新しい男女関係の　可能性を　模索していたのである。　（中　哲裕）。

２６．中君　なかのきみ

A．その生涯

＊　誕生の際に、母親を亡くした中君は、姉の大君と共に、父八宮の男手一つに　愛されて　育った（「橋姫」）。

＊　京都の八宮邸が　焼失した後、中君は、父八宮　姉大君と共に、宇治の山荘に　移住した（「橋姫」）

＊　信仰心から、八宮と親交を深めていた薫は、たまたま、八宮の留守中に　中君と大

君が、月光のもとに、楽器を演奏しているところを、垣間見てしまう（「橋姫」）。
＊　八宮は、薫に対して、自分の亡き後の、中君と大君　二人の後見を依頼し、薫は　快く引き受ける（「橋姫」）。
＊　薫から、宇治の　中君と大君姉妹の美しさを聞いた匂宮は、大いに興味を抱き、姉妹にあて　和歌を贈る。返事は　中君が認め　以後　文通の交際が始まる（「椎本」）。
＊　中君は、姉の大君と共に、父八宮から、不実な男性の　甘い誘いに乗って結婚し、宇治を出てはならない　と、遺言される（「椎本」）。
＊　山に籠もり　修行していた八宮が　急死した　との知らせを受けた、中君と大君は、せめて　亡骸にお目にかかりたい　と望むが、八宮の成仏の妨げと　なってはならないと、山の阿闍梨に　諌められる（「椎本」）。
＊　中君は、父八宮を失った悲しみの余り　匂宮からの弔問の手紙にも、返事が書けないでいる。（「椎本」）。
＊　中君は、薫との対面から　戻ってきた大君から、薫の移り香を感じ取り、大君が薫と　契りを交わしたのでは　と大いに驚く（「総角」）。
＊　大君から、薫との結婚を勧められた中君であったが、何時までも　姉と一緒に　宇治に暮らしたいと思い、結婚話を　断る（「総角」）。
＊　契りを交わそう　と忍んで来た薫の気配を察した大君は、そっと逃れる。後に残された中君は、薫と一夜を　語り明かし、姉大君が、自分と薫とを　無理やりに結び付けようと　企んだのだ　と　誤解して　姉を恨めしく思う（「総角」）。
＊　中君は　就寝中、突然　匂宮に踏み込まれ、否応なく　契りを交わしてしまう（「総角」）。
＊　結婚　三日目の夜、中々訪れのなかった匂宮が、夜更けに　ようやく訪れる。安堵した中君であったが、浮気性と噂される匂宮との結婚に　不安を抱かざるを得ない（「総角」）。
＊　匂宮の訪問の　途絶えがちなのを、悩む中君であったが、紅葉狩りで、山荘の近くに来た際も、顔も見せずに　京に戻ってしまった匂宮を、恨めしく辛く思うものの、恋い慕う気持ちも　ようやく　強くなって行くのであった（「総角」）。
＊　中君は、匂宮と　夕霧の娘・六君との結婚話があることを聞き、嘆き悲しむ（「総角」）。
＊　中君は、自分と匂宮との結婚後の　将来を悲観して　病気になってしまった姉大君の看病に尽くすが、親身の介抱の甲斐もなく　大君は　とうとう亡くなってしまう（「総角」）。
＊　中君は、匂宮の妻として、二条院に迎え入れられることになる。が、住み慣れた宇治を去ることに、一抹の不安を感じずにはいられない（「早蕨」）。
＊　匂宮と六君との婚約が整ったことを聞き　中君は、悲しく思いながらも、宮の子を身篭っていることで、宇治に帰ることも　諦めざるを得ない（「宿木」）。

＊　中君は、宇治に帰って　静養したい旨　薫に相談した際に、思いがけなく　恋心をうち明けられるのであった　が、薫が、中君の　妊娠の腹帯を見て　自制したので、危機を　逃れることが出来た。中君には、その際の　薫の移り香が消えなかった為に、匂宮に、薫と　あやまちがあったのでは　と　責められるが、必死に否定し　ようやく信じてもらう事が出来た（「宿木」）。
＊　中君は、薫の　恋心を　自分から逸らしたい　と思う一心から、大君に瓜二つという異母妹・浮舟の存在を、薫に　語る（「宿木」）。
＊　中君は、匂宮の長男を　出産する。世人は　彼女を「幸い人」と羨む（「宿木」）。
＊　中君は、結婚話の中断から　沈む浮舟を、二条院で　預かって欲しい　と願う浮舟の母・中将君の申し出を　快く　承諾する。その上で　浮舟の世話をしたい　という薫の意向を　中将君に伝える（「東屋」）。
＊　匂宮が、二条院に匿われた浮舟を　偶然見つけ、彼女の袖を放さなかった　という事件を聞いた中君は、大いに怯えてしまった浮舟を慰めるのであったが、浮舟が、匂宮と過ちでも起こしたならば、中君に顔向け出来ないこととなる　と心配した母親中将君に、引き取られた浮舟は、二条院を去る（「東屋」）。
＊　中君は、彼女が　浮舟を　どこぞに隠したのであろう　と　匂宮に　恨み言を言われる（「浮舟」）。
＊　浮舟の死を知らされた中君は、匂宮から、浮舟と　契りを交わしたことを　告白される（「蜻蛉」）。　　（上田尾・西沢）

B．物語における位置・準拠

中君は、「橋姫」の帖で、姉「大君」と共に　登場する。「椎本」「総角」の帖までは、薫と大君との物語の影となっている。大君死後、薫は、大君の形代として、中君にその面影を求め、思慕の情を寄せてくるが、中君から　大君によく似た異母妹の浮舟を紹介されて、薫の関心が　中君から浮舟に移り、中君は　物語の正面からは　退くこととなる。その中君が、物語に再登場するのは、「蜻蛉」の帖で、浮舟の四十九日に、読経供養をするのが最後で、そういう意味では、相当に長く　物語に関わってくる女君ではある。しかし　大君と浮舟の間（はざま）で、中君は　それなりの主題を担ってはいるのだが、人物としては、比較的　影の薄い人物となっている。

中君個人に関しての準拠　ということでは、特定の人物を　指摘することは、大君同様　甚だ困難である。ただ、薫が、晩秋の宇治を訪れた時の　初めての　大君・中君の垣間見をきっかけとして、薫が　大君に恋し、またその大君を失って、妹の中君を　大君の形代として、中君の大君との類似を認めながら　恋してゆく構図には、「姉妹連体婚」（松村武雄の用語）の構図が　埋め込まれている。それは、ある女性を妻とすることが、その女性の妹たちを妻とする権利、もしくは義務につながるものをいい、一種の

集団婚の習俗として、一般的に行われていたという。降臨した　瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に　大山津見が、磐長姫と木花開耶姫の姉妹を献上した例や、史実としては、男子が　天皇や上位の皇子であることが多く、中大兄王と、蘇我倉山田石川麻呂の二人の姫の例、村上帝の後宮への　藤原師輔（もろすけ）の娘の安子と登子　二人の入内の例などがある。

色好みの英雄の物語では、男主人公が、姉妹を同時に愛する　という説話的な「型」としてもあり得た。そういうものとしては、例えば　中国では、「史記」の献公が、驪姫（りき）と　その妹を愛した例などがある。八世紀に渡来した伝奇小説（不思議な空想的なことを書いた小説）の「遊仙窟」には、主人公の張が、十娘（十じょう）と五嫂（ごそう）の姉妹を垣間見て　惑乱する場面がある。源氏物語以前の物語では、「伊勢物語」、初冠（ういこうぶり）の段で、主人公が、奈良京・春日里に　所領の縁があって、狩に出かけ　その里の美しい姉妹を垣間見て、姉妹の　どちらともなく、歌を詠み贈った　というのには、色好みの神話としての性格が　読み取れるのである。

源氏物語の中では、薫の実父柏木が、女二宮を得ていながら、六条院での蹴鞠の折に女三宮の姿を　垣間見て、再び彼女への戀の虜となる。また「紅梅」の帖では、大納言の　大君と中君という姉妹が描かれ、大君は東宮の後宮に参ることとなり、中君を匂宮へと　話は進む。また、「竹河」の帖では、玉鬘の大君と中君の姉妹は、蔵人少将という男性を軸にした　三角の対の構図を構成し、宇治の大君と中君の前例　と考えることが出来る。特に　姉妹で　碁を打っていろところを、少将に　垣間見られる風景は、「橋姫」の帖の　垣間見の場面と　明らかに　響き合っている。「橋姫」の帖の垣間見は、いわゆる「源氏物語による源氏物語取り」がなされているということであろう（土方洋一・藤本勝美など）。

また、中君の準拠として、指摘出来る　花山帝の皇女があった可能性もある。（「大君」の項　参照）

C．人物評価の歴史

大君に比べて　中君についての　人物批評は　少ない。「無名草子」の中では、「大変かわいそうな女」の中に　取上げられている。

藤村潔氏は、中君の結婚生活の描写は、絢爛としてはいたが、もの思いの尽きない紫上の結婚生活の要約である　とする。作者にとって、「もし大君が結婚していたら」という、問題を取り上げて、大君が　薫の求婚を拒否したことの正しさを、物語の展開の上で　実証して見せることが　必要であった。「橋姫」の帖の、執筆の時には、浮舟という人物は、具体的には　作者の構想になかった。八宮の　厳しい遺言は、大君・中君に対して　遺されたものであり、浮舟には　関係ないのである。その遺言に、背いたのは、大君ではなく、中君なのであった。中君の結婚は、「よそのもどき」＝（世間の批

判）を受けなかったし、両親の名を辱める結果にもならなかったばかりか、「幸い人」＝（幸運な人）として　羨まれさえしたのである。遺言の　厳しさ、仰々しさに比べ、その物語的効果は　薄弱でさえある。中君の運命の悲劇的部分は、作者の手によって、浮舟に　移し換えられた　と推測出来るのである。さらに、「宿木」の帖以前の、中君の性格は、大君よりも　浮舟に近い。中君が、薫と添い寝した関係は、匂宮と浮舟との初めての添い伏しの関係に、さらに　中君が匂宮の北方でありながら、「宿木」の帖で、薫が近づくのは、浮舟が　薫の監督下にありながら、匂宮が　近づくところと、対照し得る。中君が、悲劇の淵の手前で留まったのは、中君の懐妊による。そして　その時には、新しい悲劇の担い手として、浮舟が　準備されていたのである。

入水の可能性について、構想論上から　検討したものもある。

中君が登場してから、多元的・動的な大君物語の展開を、可能にする役割りを果たしているのは、明らかである。が、その情況の質に注目する時、その形式的役割りの内実を充填し　それに生命を吹き込んでいる中君は、受動的情況を抱え込み　結婚前　大君とすれ違って、物語を哀切にしながら、結婚後その情況の説得力によって、共通し一致する大君のそれを、根拠づけて導く。「総角」の帖の　紅葉狩り以降は、中君が、経験の意味を　十全に受け止め、それをもとに、以後は　積極的行動を齎す情況を持つことは、不可能であるが、その造型は、厳しい現実を認識し、入水という行動を選んで行く造型ではない。中君の役割りは、大君の死去以後、入水するという構想が　発想され得ないところに　あったのであり、その為の造型を施され続けているのである（(後藤幸良)。

このように、中君は、大君から浮舟へと、橋渡し的存在としてしか　見られないことが多かったのだが、独自な個性や主題を　担っている　として　論じるものも出てきている。

藤本勝義氏は、当初、宇治の物語は、古代伝承に即して、薫が、たとえば　玉鬘の大君や、今上帝の一宮などの、叶えられぬ美姫の代償として、宇治の中君のような美女を見出す　といった話、つまり、宇治の弟姫物語であった　と推定され、原「橋姫」の帖や、原「椎本」の帖の　段階で、現存する大君物語の着想により、中君のヒロイン的俗性は、匂宮の第一男子を生む「幸ひ人」として　相応しく生かされていった　という。

源氏物語では、「幸い」「幸ひ人」という言葉が、栄華を極めた源氏をはじめ、男君には、原則として　使用されず、女君にのみ　用例は集中している。女君でも、然るべき身分を背景に、源氏の正妻格として導入された「葵上」や「女三宮」には　使用されず、明石君や、紫上、中君など、「本来　そうなるはずがない」稀有な生の状態を　言い表している言葉として、「幸福」というよりも「幸運」という言葉に近いのである。「幸い」「幸い人」をめぐる翳りは、外側の目が、意外な幸運　と捉えるものと、危うい幸運を支える「幸い人」の内実との　乖離に関わっているのである。薫に　女二宮の降嫁が決定し、それと並行して　匂宮と　夕霧の六君との結婚も決まる。六君との結婚は、匂宮

の婀娜心というよりは、第一級の宮廷貴公子をめぐる　世俗の秩序の問題でもあった。万事に思うことの多い日を重ねて、さりげない自制の中に、もの思いを包みこみながら、匂宮を、六君の許に見送り、「涙の浮きぬべき心地」に沈む中君は、今なお、大君を追慕する薫に　少しずつ心を寄せて行くのである（「早蕨」「宿木」）。匂宮だけが、唯一の寄る辺でありながら、匂宮との生活は、どれほどの積み重ねもない　という深刻な情況と、中君の苦悩を描きながら、彼女の嘆きは　理由の無いことである　と、語り手は　批判する。事実、東宮候補の匂宮が、一人の妻だけを守るということは、あり得ない。その一方で、八宮の姫君が、匂宮の母の言う「召人」待遇を越えて、二条院に引き取られ、懐妊している。まめ人薫の　中君への思慕が、逆に　匂宮と中君の　夫婦の絆を強くすることになるのだが、そういう危うささえも、女房達によって「幸い人」として　確認されるのである。語り手の視座と、世俗・現実の常識を語る女房達の視点は　一致するのである。「宿木」の帖は、語り手と女房とが、一体となって、現実の論理を物語内にもちこんでいて、宇治の世界を相対化するのである。明石君や、紫上の物語を負いつつ、外側の目と、「幸ひ人」の内なる苦悩という問題が、語り手の批評の取り込みによって、鮮やかに、浮き彫りにされて来る　という（原岡文子・篠原昭二）。

Ｄ．人物の特色

「無名草子」の中の、中君について言及しているところに

「兵部卿宮、まめ人（夕霧）の婿になりて、もの思はしげなるが、いとほしきなり。まして、「かばかりにてやかけ離れなむ」など言へるところは、見るたびに涙もとまらずこそおぼゆれ」

＝（夫の匂宮が、正式に　夕霧の娘と結婚して、その為に　もの思わしげな様子でいるのが、可哀そうなのです。ましてや　薫との間を匂宮に疑われ「移り香だなんて、これほどのことで、夫婦仲が　駄目になってしまうのでしょうか」などと　言っている場面は、読む度に　涙も止まらないほどに　思われる）

とある。中君が、二条院に　引き取られ　懐妊までもしていながら、夫匂宮が、しっかりとした権力者の夕霧を　父にもつ女性（六姫）と　結婚してしまうこと、また　大君の懐しい思い出を共有する薫との　危うい関係に　言及しているのである。その独自な生き方を生きる中君が、宇治の物語の主題に、密接にかかわっている　と思われるのは、大君の死後、浮舟登場以前の、この場面において（「宿木」）である。

源氏物語の正編で描かれる「幸ひ人」の一人明石君は、元大臣家の家柄といはいいながらも、今は　一介の受領にすぎなかった　父明石入道の娘であり、源氏からすれば、関係はしても、正式な結婚相手とは言い難い「召人」として、待遇されるはずの人である。それが、源氏との間に娘をもうけ（「澪標」）、六条院の一画を、居所として与えられ（「乙女」）、後に　その姫君が　皇太子の後宮に入り（「藤裏葉」）、皇太子を生んで、

（「若菜上」）源氏の血統が　皇統に組み込まれていく、そういう　明石一族の栄華は、ひたすら　彼女の忍耐によって　実現されてゆくということは、物語には、たびたび触れられている。また、紫上は、源氏によって、父の兵部卿宮にさえ知られることなく、引き取られ（「若紫」）、葵上の死後、正式な結婚をしたわけではなくて、源氏の妻としての地位を、努力と、人間としての聡明さとによって獲得して行く（「葵」から「藤裏葉」まで）。そして、朱雀陰という強力な父を持つ女三宮の、六条院への降嫁に際しては、味わわなければならなかった　彼女の苦悩と孤独についても、物語には、余す所なく　描写されている。（「若菜上」）。

しかし、匂宮の　夜離れをめぐって、中君以上に　深刻に苦しみ、ますます薫に対して、心を閉ざしてゆく大君（「総角」）、に比べ、中君は、嘆きながらも、なお男の言葉を信じ、それに縋って生きて行こうとし、ただ　悩み反省しているだけではなく、もの思いの絶えない　匂宮との生活を通して、人間的にも成長し、紫上や大君とは違った生き方を探り当てて行く。それは、「世の中」の　儚さや　移ろい易さを、知り尽し、源氏への愛着を絶って、仏道へと志向していく紫上の　生き方（「若菜上」から「御法」）とは　異なるのである。また、匂宮との結婚生活の不安や憂鬱を　充分に知り尽し、冷静に知的に見通して、女性としては、決して　安定した幸福を齎すものではない　世の中を、感知しながら、それはそれとして、諦めて生きて行こうとしているのである。それは、「世の中」を、直接経験することなく、その本質を見通し、強く拒絶する大君の生き方とは、対照的なものである（山上義実）。

また。中君は、他人には見せることのない深い「憂し」に　苛まれながらも、浮舟のように、入水や出家の方法は選ばず、「世の中」に　生きき続けて行くべく、

「あるにまかせておひらかならん」

＝（情況にまかせて、鷹揚に　生きて行く）、

という道を　選択するのである。これは、

「らうらうじ」

＝（思慮が深く、心の働きが優れている）

という資質を　否定された浮舟には、選べなかった生き方である　という（小国美弥子）。

作者紫式部は、その日記の中で、和泉式部や赤染衛門、清少納言について、言及した後で、わが身を振り返る。別に　気おくれしているわけではないが、人から、批判されないように、

「呆け痴れたる人」

＝（耄碌した　ぼんやり者）

になりきって、人から

「おいらか者」

＝（おっとりした人）

と、見下げられてしまった　とは思うけれど、ただ　自分の意志として、進んで　そのように　振舞い慣らしている　という。口さがない周囲の人々の多い　彰子の後宮での　宮仕えの生活を、「ほけしれたる人」として「おいらか」に　振舞うことで、なんとか、無事に生きることが　出来たらしいのである。

中君の生き方は、紫式部日記に書かれた作者の様子に　通じるものがあり、ある意味では、現実的で、見ようによっては「したたか」な　選択ではあったろう。しかし、物語を書くことを通して、結婚や　男女関係について、女性として、人間としての、「本当の幸福」を　追求した作者の、究極的に、これを「良し」として　至りついた人間認識・人生認識とは、言い難いのである。

浮舟物語では、浮舟をめぐって、薫と匂宮との　危うい三角関係が描かれ、浮舟の入水の後、匂宮は、浮舟との関わりを、中君に告白する（「蜻蛉」）が、少なくとも、外見上は、安定した中君の結婚生活は、もはや物語の主題を担いきることは　出来ないのである。二条院に引き取られた中君の　貴族社会での情況を描くことを通じて、中君の結婚の物語は、大君の世界を　相対化する物語であると同時に、もはや　主題を担いきれなくなった京都の貴族社会が、新しく　構想されつつあった浮舟の物語に対して、逆に相対化される物語でもあったのである。　　（中　哲裕）

２７．浮舟　うきふね

Ａ．　その生涯

＊　妻を亡くした八宮は、寂しさ故に　中将君に　情けをかけた。その結果　三女の浮舟をもうける。父・八宮に　認知されなかった浮舟は、中将君が　受領の後家となった為に、皇族の血筋から、受領の継娘として、陸奥（みちのく・東北）や常陸国（茨城県）を、流離いながら　育った（「宿木」）。

＊　京都に戻った浮舟が　初瀬詣での帰りに、宇治に立ち寄った際に、薫は、彼女を垣間見し、異母姉大君と　瓜二つであることに、驚く（宿木）。

＊　浮舟は、母中将君の意向で、左近少将と結婚することが　決まっていたが、浮舟の養父の財力が目当てだった　右近少将は、浮舟が、継娘であることを知り、婚約を破棄

し、浮舟の養父の　実子に乗り換えてしまう。実父には　認知されず、養父には　厄介者扱いされて育った浮舟は、不幸な　わが身の運命を悲しむ（「東屋」）。
＊　中将君は，薫から、浮舟との交際を　申し込まれるが、自分の経験から、身分違いの結婚を、浮舟に勧めることが出来ない。しかし、破談に落ち込む浮舟の　気分転換の為に、異母姉・中君を頼って、二条院を訪ねた際、薫の　凛々しい　美しい姿を見て、浮舟を　薫のお側に置いて欲しい　と思い直す（「東屋」）。
＊　二条院に　滞在していた浮舟は、好色な匂宮に発見され、言い寄られるが、浮舟の乳母が見張っていたのと、運よく　彼の母・明石中宮から　匂宮への呼び出しがあった為に、危機を逃れることが出来た（「東屋」）。
＊　浮舟が　匂宮に　手をつけられそうになった事件を聞いた　母親の中将君は、浮舟と匂宮が　通じるようなことがあったならば、姉の中君に　合わせる顔がないし、薫と浮舟との縁談も　当然無くなってしまうことでもあるから、と　浮舟を　三条の隠れ家に移してしまう（「東屋」）。
＊　浮舟は、ある夜　突然に　忍びこんで来た薫と、契りを交わし、翌日、薫によって、宇治の　故八宮の山荘に　移住させられる（「東屋」）。
＊　宇治で、薫の　少ない訪問を待つ　という　寂しい生活を送っていた浮舟は、匂宮に見つけ出され　強引に　契らされてしまう。薫や中君に　申し訳ない　と思いつつも、情熱的な匂宮に　惹かれる気持ちを　とめることは出来なかった（「浮舟」）。
＊　浮舟は、薫に会った際、匂宮と通じたことを、後悔するが、匂宮のことも忘れられず　思い悩む（「浮舟」）。
＊　浮舟は、雪の中　匂宮の訪問を受け、橘の小島の常盤木に寄せて、永遠の愛を誓われ、更に　宇治川の対岸にある小家で　二日間を過ごす（「浮舟」）。
＊　薫と匂宮の双方から、京に迎える準備をしていることを　聞かされた浮舟は、男性二人の　板ばさみに　悶え苦しむ（「浮舟」）。
＊　母親の中将君が、若し　浮舟が　匂宮と　過ちを犯すようなことがあったならば、母娘の縁を切る覚悟をしている　と聞いた浮舟は、死を考えるようになる（「浮舟」）。
＊　薫と匂宮の使者が　鉢合わせしたことから、匂宮と浮舟の密会を知った薫から、恨みの手紙が届き、浮舟は　入水の決意を固める（「浮舟」）。
＊　宇治川に身を投げる直前の浮舟は、匂宮に　最後の和歌を贈り、母へも　先立つ不幸を許して欲しい　と願いながら　最後の手紙を書く（「浮舟」）。
＊　浮舟が失踪したことで、宇治の山荘は大騒ぎとなり、浮舟辞世の歌から、入水自殺したと推測されたので、遺体のないまま　葬式が行われる（「蜻蛉」）。
＊　実は　浮舟は、宇治院の木の下で　倒れているところを、横川の僧都の一行に保護され、比叡山の麓の里で、亡き娘の生まれ変わりと信ずる　横川の僧都の妹尼に　手厚く　保護されている（「手習」）。
＊　妹尼の娘婿だった中将が、浮舟を垣間見して　求婚する。が、再び愛執の苦悩を味

わいたくない　と思う浮舟は、決して　応じない（「手習」）。
＊　浮舟は、横川の僧都に懇願して　出家する（「手習」）。
＊　浮舟が　生きていたことを知った薫の　使者として　浮舟の異母弟・小君が、浮舟のところに遣わされるが、浮舟は、母中将君の消息を聞きたい衝動にかられつつも、自制し、小君にも会おうともせず、薫からの手紙に　返事を書くこともせず、人違い　と言って泣くばかりであった（「夢浮橋」）。

B．物語における位置・準拠

浮舟は、宇治八宮の庶子である。その母の中将君は、北方の姪で、北方が、中君を生んで亡くなり、八宮が　宇治に居を移すまでの間に、召人として、浮舟を身篭った　という。「宿木」の帖で、大君の「形代」が欲しい　と訴える薫に、中君が答えて　その存在に言及した場面は、象徴的である。しかし、こうしてみると、その母も、また北方の死後　身代わりとして、八宮に遇され、宮が都を捨てる頃、用済みとして、追われるように宮家を出て　東国に　流離したことになる。

ところが、物語の前半では　その存在に言及されていない。また、浮舟母子を冷たく見捨てた　という八宮の人物像と「橋姫」の帖　冒頭で、紹介された人物像との違和感も、指摘されてきた。そこで、当初、匂宮・薫との愛情の果てに　入水の運命をたどるはずだったのは中君で、それが「幸ひ人」へと変化するとともに、悲願を背負う三人目の女君の浮舟が、決定された　との説もある（藤村潔）。

こうした構想上の疑問もあって、浮舟ついては、歴史的な準拠よりも、漢の武帝の故事や、大祓で、穢れを移されて河海に流される「形代」の女神「ハヤサスラヒメ」の役割りと運命への　重ね合わせ（高橋亨）が、早くから論じられてきた。

また、実際の登場が、宇治橋を渡って姿を現し、都と鄙・聖と俗　といった　二つの世界の狭間で、どちらにも属する場所を持たず　苦悩するところから、「橋」と結びつく「境界の女君」という考え方もある（原岡文子）。

浮舟は、当初　薫や母君の思惑によって動かされ、主体性もないまま　宇治に据えられた、先に、二条院で、匂宮の侵入をうけた時、恐れと共に、宮の美しさへの　微かな「ときめき」をも　感じていた。これが　やがて　宇治での　匂宮との密会の予兆となるのである。この事件は、匂宮の強引な求愛によって起きたことで、浮舟には　防ぎようのないことであった。が、やがて、宮との官能に溺れて行く。そこには、薫が　あからさまに　浮舟を　身分の低い女として　遇したことからくる　対等な愛情を交わせない懸隔もあったのであろう。とはいえ、一方で、長く頼みとする薫への慙愧に　浮舟は　苦しむのである。やがて、従者同士の繋がりから、薫に密通を知られ、苦悩の果てに　入水を決意して、闇夜に彷徨い出る。

その後の　都での　薫や母君、匂宮といった人々の　悲嘆をよそに、浮舟は、横川僧

都の一行に救われるが、この横川僧都は、「往生要集」を著した浄土教の高僧　源信を準拠として　造型された　と　古くから指摘され、以後の物語の展開にも　深く関わる。浮舟は、紆余曲折の後　この僧都のもとで、出家得度するが、薫に見つけられ　薫から失踪の、経過を聞いた僧都からも、研究上「還俗勧奨」とも　そうでないとも　解釈の分かれる書状を受け取る。そして、薫の使者として、訪れた異父弟・小君にも会わず、拒否を通す。が、この結末の文章表現や、小君の存在には、空蝉物語との　源氏物語の内部からの影響も　指摘される（吉井美弥子）。

C．人物評価の歴史

古くは「更級日記」にも夕顔と並んで、浮舟の悲劇が、夢見がちな受領の娘であった菅原孝標（たかすえ）の娘の憧れ　として描かれている。この時点では、身分違いの貴公子に　ひっそりと　山里に匿われる　薄幸のヒロインとして、見られていた。「無名草子」では、二人の貴公子を相手としたことは、

「憎きもの＝（憎らしい人）

であるが、入水（未遂）に踏み切って　姿を消したことを

「いとほし」

＝（気の毒だ）

と　評価し、薫から　密通を難じる手紙を受け取って　気強く、「宛先が違う」と　言い通して　突き返した振る舞いには、

「心まさりすれ」

＝（しっかりした気性だ）

と　賞賛している。このように、近代以降は、彼女の悲劇性に共感するか、女性としての　身の処し方に目を向けるかする論が多かった。

浮舟は、人物の描写として　白い扇（「東屋」）、白い衣装に　赤い袴（「手習」）といった表現や、「手習」の帖では、はじめ「狐の変化」かと疑われたこと、その儚い運命から、夕顔との類似が、指摘される。両者の根底には、唐の伝奇「任氏伝」の女主人公、狐の妖怪任氏の影響がある　と言われる（新間一美）。「手習」の帖では、かぐや姫にも擬えられて、周囲の尼たちは、その美貌と数奇な出現に　感嘆するのである。かぐや姫との　重ね合わせは、宇治の大君の場合にも見られるが、浮舟は　最後まで　地上を離れることはなく、それ故の苦悩が、物語の主体となっているが特徴なのである。このように、古い物語や、源氏物語で登場した人物との、重ね合わせも　特徴であるが、彼女の個性は、特に　その蘇生後に　現れてくるのである。

浮舟は、多くの独詠歌を詠み、「手習」の帖では、それを、一人書き付ける「手習い」という行為を続ける。そのため、彼女は、源氏物語の古注釈書では、別名として「手習いの君」と　呼ばれるほどである。彼女の手習いは、周りに理解者もなく、素性を打ち明けて　理解を求めることも出来ない状態の中で、唯一　心情を表出する　孤独な営みとされる。

また、浮舟の最後の運命は、源氏物語の結末とも重なるために、関心を集めてきた。彼女は、「夢浮橋」の帖で、正体を隠し　薫からの復縁を拒絶し、薫は　浮舟の道心を納得せず、隠し男の存在を疑う。このような結末を　不満に思った後代の読者が、「山路の露」で、薫に答える浮舟を描き、また「異本巣守物語」では、還俗して　薫の側室「三条上」となり、後に惜しまれながら　薫に先立って人生を終える浮舟を　描く。これらは、本編とは別の物語であるが、浮舟を　薫と結ばせたい、俗世で　女としての幸せを全うさせたい　という読者の願望が　生み出したものである。然しながら、源氏物語の中での浮舟は、薫だけではなく、使者としてやって来た　異父弟の恩愛も、横川の妹尼君の愛情も、俗世に戻る　全ての可能性と　労わりも、拒絶して、「この世にはあらぬ所」を求めるのである。

近世以降の研究で、浮舟の結末については、前項であげた構想上の問題から、「形代」としての役割りが、何処まで彼女の物語を規制するか　ということが考察され、さらには、このようにして　出家した彼女の救済は　遂げられるのかどうか　が論じられている。特に　出家が救済に向かう　というよりは、浮舟の悲劇的な　永遠の流離を決定づけるものとして、解釈する論が多いのである。

源氏物語で、出家する女性は多いが、その人々の極楽往生は、確認されておらず、藤壺のように、理想的な人物であっても、死後に、悲しみと苦しみを訴える例もある。こうした点から見ても、浮舟の　救済の可能性は、物語の中では薄い　と見られる。ただし、女三宮と浮舟に対しては、「法華経」の女人往生譚「竜女成仏」に関する表現が用いられる　ということが、他の出家者たちとの相違で、これに　注目する論もある（小林正明）。

まわりが、どれほど悲観的な予測をしたり、皮肉なうがった見方をしようとも、浮舟自身は、悩み迷いながらも、自らの道を歩もうとするところで、物語は終わっており、それ以上の　救済・往生といった終末は　必要なかったのだ　と見ることも出来る。

Ｄ．人物の特色

浮舟は、前項でも紹介したように、物語の要請から　新たに構想された人物らしい点もあるが、東国育ちという要素が、本人も認識しないところで、思わぬ行動力を喚起するようである。母親・中将君は、浮舟を、他の兄弟姉妹とは、別格に扱い、高貴に育てようとしたが、大君への追慕にひたる薫の目には、教養も　嗜みも劣る　田舎育ちの

受領の娘であった。特に　音楽に関する劣等感は　繰り返し　言及されている。
　「東屋」の帖では、継父の常陸介が、実の娘に　音楽を習わせようとしたが、よい師の基準が分からず、内教坊の妓女（宴席に奉仕する舞姫・歌姫）を　師に迎えて、品のない流行曲などを　習い取らせては、得意になっている　と語られる。浮舟の場合、東国をめぐる中では、納得するよい師にも　めぐりあえなかったであろう。その為、同じ「東屋」の帖では、薫から　音楽の才のなさを　慨嘆されて　恥じ入るのである。薫の慨嘆は、亡き八宮一家の　音楽に堪能であった思い出から、
「昔、誰も誰もおはせし世に、ここに生ひ出でたまへらましかば」
＝（昔　宮様も、大君も、在世の頃に、この宇治の邸で　貴女が、お育ちになったのでしたら）
　という、どうしようもない願いに　繋がって行くのである。浮舟にとっては、八宮が、娘と　認めなかったことが、全ての始まりであるから、残酷な言葉なのであった。「手習」の帖でも、横川僧都の母「大尼君」や妹尼君、もと女房で、今は尼となって仕えている人々が、琴の合奏などをする場面でも、演奏の出来ない様子を、大尼君から揶揄されているのである。この　辛辣なまでの追求は、浮舟が、上流貴族の社会とも　宇治の八宮家とも、あい容れない存在であることを、再三にわたって　証し立てているようである。
　しかし、物語の前半では、落ち度として見られた　このような貴族的な面が、蘇生後の生きる力　貴族の精神の枠にとらわれない　自立性を喚起する。小野では　その美しさが愛でられ、囲碁の名手という　新しい特技も　明らかとなる。囲碁の場面描写は、彼女が、新しい運命を　自ら　切り開く力を得たことの象徴、と捉える見方もある（松井健児）。
　横川僧都の妹尼君は、善意から浮舟を養女として、亡き娘の婿（中将）と　結婚させようとする。また、浮舟の幸福を願って、初瀬の観音に　詣でるのである。玉鬘の　思いがけない鬚黒大将との結婚も、かって　初瀬の観音の導き　と語られた。この浮舟も、観音の守護は、「手習」の帖の冒頭で、示されている。しかし、浮舟は、その結婚を承諾しない。妹尼君の留守中に　大尼君を通して　横川僧都に　出家を願い出て、ためらう僧都を　説得して、　得度してしまうのである。その強さは、今までの、流がされるだけの浮舟とは　異なった行動力である。また、貴族社会で、強く信じられ、源氏物語でも、繰り返された　観音利生譚の形式を、自ら壊しているのである。
　更に　出家後の様子を見に来た僧都が、彼女を唐の詩人　白居易の新楽府「陵園妾」に出て来る、若くして　皇帝の陵墓の墓守に　終身を閉じ込められた女官に　擬えた僧都は、その詩の一節「松門に　暁到りて　月徘徊す」＝（御陵の松に囲まれた門にも、暁がやってきて　残月が　名残惜しげに、空をめぐっているように見える）を　朗詠し、寂しく　風の強い小野の風景に
「あはれ山伏は、かかる日にぞ音には泣かるなるかし」

＝（ああ山篭りを常とする修行者であっても、さすがに　こんな日には、　寂しさに声を上げて　泣かずには　居られないだろうに）

と、感慨を示めすのであったが、浮舟は、その悲劇を文字通り受け取らず、

「我も山伏ぞかし。ことはりにとまらぬ涙なりけり」

＝（この私も　修行者だったのだわ。だから、今　涙がとまらないのも、当然なのだったわ）

と、悲しい中にも、修行者の自覚を見出しているのである。僧都の朗詠は、そののまま　浮舟の「あわれな」出家生活の象徴と見る解釈が行われてきたが、彼女は　その詩句の由来を　充分に理解しないが故に、却って　自由に自らの位置を　見つめているのである。

「夢浮橋」の帖の　末尾でも、浮舟の拒絶を　薫は、

「人の隠しすゑたるにやあらん」

＝（誰か　別の男が、彼女を隠し　据えて　恋人にしているのではないか）

と　疑っている。彼女は、確かに、最後まで、理解されなかったが、それ故に　既存の「往生」や「救済」の限界を　抜け出す可能性を秘めている　とみることも出来よう。

（岡部明日香）

源氏物語作中主要人物の紹介　終

２０１２．１０．１０　終了
１３．　５．　１　一次校正
１３．１２．２７　二次校正